

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集

つち だ 遺 跡
土 田 遺 跡

1987

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

正誤表

頁 行	誤	正
2 下6行	旧可道	旧河道
2 下2行	可道	河道
6 上5行	消平	削平
11上5行	旧可道	旧河道
13下11行	指適	指摘
22上1行	各時間	各時期
29上11行	14世期	14世紀
32上11行	~8)	~10)
40下9行	抑制済	抑制剂
46上5行	消略	省略
71注6)	春日市	春日井市
104注8)	SX81	SX80
函版11	SZ01	SZ10

序 文

名古屋環状2号線(一般国道302号)建設予定地に所在する土田遺跡は、昭和56年度から昭和61年度まで、6年間にわたって発掘調査を実施してまいりました。その結果特に中世期に関する重要な遺構・遺物が確認され、尾張平野における中世集落の基礎的資料を得ることができました。それは同時に五条川下流域にあたる当地の開発の嚆矢をなすものであり、私たちの祖先の事業・足跡を垣間見ることができたのであります。これらの歴史的遺産を今日に受け継いでゆくことは、私たちに課せられた重要な任務といえるのでありまして、本書は、その一助となることを主要な目的とするものであります。

発掘調査につきましては、各方面の方々に御配慮を賜わり、関係機関及び関係者の御指導と御協力をいただいたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

昭和62年3月

財団法人愛知県埋蔵文化センター理事長

小 金 深

例 言

- 1 本書は愛知県西春日井郡清洲町大字土田に所在する土田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は名古屋環状2号線(一般国道302号)建設に伴う事前調査として実施し、愛知県教育委員会を通じての委託事業として、昭和56年4月～60年3月までを財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部が、昭和60年4月～61年5月までを財団法人愛知県埋蔵文化財センターが行った。
- 3 調査に当たっては、次の各関係機関の御協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課、愛知県清洲貝殻山貝塚資料館、清洲町教育委員会、建設省愛知国道工事事務所、日本道路公団名古屋建設局
- 4 報告書をまとめるにあたり次の方がたに御教示・御協力を賜った。
加藤安信、柴垣勇夫、岩野見司、宮石宗弘、藤澤良祐、中野晴久、江崎武、高橋信明、赤羽一郎、遠藤才文、斎藤孝正(敬称略)
- 5 注は各章ごとにまとめて章末に記載した。ただし第V章は原則として各節末にまとめた。
- 6 本書は第V章3を永金千佳、第V章4を赤塚美智代が、その他は赤塚次郎が分担執筆した。
- 7 遺物整理は赤塚美智代、永金千佳、亀井けい子(以上調査補助員)、及び牛田長子、小島洋子、柴山英子、杉山美智子、戸川真理、田中由紀子の諸氏の協力を得た。
- 8 編集は赤塚が担当した。

目 次

第I章 調査概要	1
第II章 層位と遺構	6
第III章 遺 物	22
第IV章 自然科学的分析	33
1 土器胎土重鉱物分析	33
2 珪藻分析	37
3 リン・カルシウム分析	40
4 小 結	42
第V章 考 察	44
1 土師器	44
2 灰釉系陶器	50
3 墨書陶器	72
4 加工円盤	77
5 遺構の変遷	92
6 方形土壇	98
7 まとめにかえて	106
別 表	111

図 版 目 次

- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1 主要遺構と周辺地図 | 29 実測図 00 SD42 |
| 2 遺構図 (1) | 30 実測図 09 SX80 SX55 SX06 SX21 |
| 3 遺構図 (2) | SX159 SX90 SX44 |
| 4 遺構図 (3) | 31 土田遺跡基本器種の変遷 |
| 5 遺構図 (4) | 32 61調査区 |
| 6 実測図 (1) 弥生土器 | 33 60C・60E区 |
| 7 実測図 (2) 弥生土器 | 34 59A区 |
| 8 実測図 (3) 弥生土器 | 35 59B C区 |
| 9 実測図 (4) 弥生土器 | 36 59E区 |
| 10 実測図 (5) 弥生土器 | 37 59F区 |
| 11 実測図 (6) 須恵器他 | 38 59D・59H I・59K区 |
| 12 実測図 (7) SK05 SE07 | 39 墳丘墓 |
| 13 実測図 (8) SE01 SE02 SE03 | 40 井戸 |
| 14 実測図 (9) SE05 SE14 SE08 | 41 方形土壇 |
| 15 実測図 00 SE11 | 42 弥生土器 (1) |
| 16 実測図 01 SK24 | 43 弥生土器 (2) |
| 17 実測図 02 SD55 SD61 | 44 弥生土器 (3) |
| 18 実測図 03 SE16 SK45 | 45 須恵器・灰釉系陶器 |
| 19 実測図 04 SE20 | 46 灰釉系陶器 (1) |
| 20 実測図 05 SE12 SB01 SK75 SX81 | 47 灰釉系陶器 (2) |
| SX85 SK44 | 48 灰釉系陶器 (3) 土師器 |
| 21 実測図 06 SE10 | 49 灰釉系陶器 (4) |
| 22 実測図 07 SK31 SK67 SD64 SD68 | 50 灰釉系陶器 (5) 施釉陶器 |
| SK63 | 51 製作技法 |
| 23 実測図 08 SD64 SE21 | 52 墨書陶器 |
| 24 実測図 09 SD27 | 53 加工円盤 (1) |
| 25 実測図 00 SD27 | 54 加工円盤 (2) |
| 26 実測図 01 SD41 | 55 加工円盤 (3) |
| 27 実測図 02 SD41 | 56 加工円盤 (4) その他の遺物 |
| 28 実測図 03 SD42 | |

挿 図 目 次

第1図 調査区位置図……………3	第24図 法量別形態の比率(第I期)……57
第2図 地形復原図……………4	第25図 法量別形態の比率(第II期)……58
第3図 土層図……………6	第26図 法量別形態の比率(第III期)……59
第4図 墳丘基配置図……………8	第27図 法量別形態の比率(第IV期)……61
第5図 SD42断面図……………11	第28図 器種別比率……………62
第6図 井戸実測図1……………14	第29図 碗・皿の法量……………63
第7図 井戸実測図2……………15	第30図 碗・皿底部拓影……………67
第8図 SK63断面図……………16	第31図 数字を表わす墨書陶器……………72
第9図 SX49・50実測図……………18	第32図 墨書陶器出土地点……………73
第10図 SX41断面図……………18	第33図 文字・その他を表わす 墨書陶器……………73
第11図 B期主要遺構配置図……………19	第34図 加工円盤法量(前期)……………78
第12図 土器分類(A期)……………23	第35図 加工円盤法量(後期)……………78
第13図 土器出土地点……………25	第36図 加工円盤分布図(前期)……………79
第14図 土器の種類……………26	第37図 加工円盤(1)……………83
第15図 陶器の種類……………27	第38図 加工円盤(2)……………85
第16図 瓦・銭貨等出土地点……………31	第39図 加工円盤(3)……………87
第17図 銭貨拓影……………31	第40図 加工円盤(4)……………89
第18図 瓦・土鍾・墓石……………31	第41図 加工円盤(5)・陶丸……………91
第19図 重鉱物組成……………35	第42図 A期遺構変遷図……………93
第20図 方形土壌試料 リン・カルシウム含量……………41	等43図 B期遺構変遷図……………96
第21図 土器実測図……………48	第44図 長軸の方位……………99
第22図 土器変遷図……………49	第45図 規模分布と分類……………100
第23図 碗・皿の変化……………54・55	第46図 土壌分布……………105

目 次

第1表 調査進行表……………	1	第15表 鉢の分類……………	68
第2表 主要遺構時期区分……………	21	第16表 壺の分類……………	68
第3表 重鉾物組成……………	34	第17表 時期・内容別出土数……………	73
第4表 胎土分析試料……………	36	第18表 分類別変化……………	81
第5表 珪藻分析結果……………	38	第19表 加工円盤一覧表(1)……………	82
第6表 珪藻化石群集変遷……………	39	第20表 加工円盤一覧表(2)……………	84
第7表 リン・カルシウム分析結果……………	41	第21表 加工円盤一覧表(3)……………	86
第8表 鍋A分類……………	45	第22表 加工円盤一覧表(4)……………	88
第9表 計測値……………	45	第23表 加工円盤・陶丸一覧表(5)……………	90
第10表 皿の分量……………	47	第24表 主要遺構存続期間……………	94
第11表 皿の分類……………	47	第25表 土壌の重複関係(重複区) ……	102
第12表 編年対比……………	51	第26表 方形土壌出土遺物 ……	103
第13表 柄・皿個体数とその比率……………	63	第27表 器種構成表 ……	107
第14表 釜の分類……………	67		

調 査 体 制

職名等は当時のものを用いた。

昭和56年度

財団法人愛知教育サービスセンター埋蔵文化財調査部

調査部長 丹羽 功

庶務補佐 水谷 良夫

発掘調査所長 高澤 茂樹

主 査 松原 広治

主 事	松田 定次	菅沼真四郎	榊原 芳久	横山 昌宏	中村 美規
	田中 信夫	服部 良夫	竹島 真澄	片山 正己	石黒 立人
	赤塚 次郎				

〈調査指導委員〉 澄田 正一(愛知学院大学教授) 井関弘太郎(名古屋大学教授)

大参 義一(富州大学教授) 伊藤 秋男(南山大学教授)

〈特別指導員〉 立松 彰(東海市平洲記念館学芸員)

昭和57年度

00愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部

調査部長 丹羽 功
 庶務補佐 水谷 良夫
 発掘調査所長 高澤 茂樹
 主 査 松原 広治
 主 事 松田 定次 菅沼真四郎 遠藤 才文 中村 美規 田中 信夫
 服部 良夫 竹島 真澄 片山 正己 福岡 晃彦 石黒 立人
 赤塚 次郎
 〈調査指導委員〉 渡田 正一（愛知学院大学教授） 井関弘太郎（名古屋大学教授）
 大参 義一（信州大学教授） 伊藤 秋男（南山大学教授）
 〈特別指導員〉 立松 彰（東海市平洲記念館学芸員）

昭和58年度

00愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部

調査部長 中林 茂
 庶務補佐 水谷 良夫
 発掘調査所長 高澤 茂樹
 主 査 稲垣 隆一
 主 事 松田 定次 伊藤 義幸 遠藤 才文 中村 美規 田中 信夫
 服部 良夫 金原 宏 上部 肇 福岡 晃彦 石黒 立人
 赤塚 次郎
 〈調査指導委員〉 渡田 正一（愛知学院大学教授） 井関弘太郎（名古屋大学教授）
 大参 義一（信州大学教授） 伊藤 秋男（南山大学教授）
 〈特別指導員〉 立松 彰（東海市平洲記念館学芸員）

昭和59年度

00愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部

調査部長 中林 茂
 調査所長 橋本 雅司
 主 事 遠藤 才文 竹内 尚武 清水雷太郎 福岡 晃彦 金原 宏
 上部 肇 梅村 清春 梅本 博志 佐藤 公保 石黒 立人
 赤塚 次郎
 嘱 託 小澤 一弘 丹羽 博 服部 哲也 安藤 義弘 宮腰 健司
 長島 広
 〈調査指導委員〉 渡田 正一（愛知学院大学教授） 井関弘太郎（名古屋大学教授）
 大参 義一（信州大学教授） 伊藤 秋男（南山大学教授）
 〈特別指導員〉 立松 彰（東海市平洲記念館学芸員）
 管理課長 斎藤 樹三
 主 査 稲垣 隆一
 主 事 伊藤 義幸 森 信孔

昭和60年度

愛知県埋蔵文化財センター

〈理事長〉 奥田 信之 (県教育長)

〈常務理事〉 中林 茂 (兼事務局長)

〈理事〉 井岡弘太郎 (名古屋大学教授)

大参 義一 (信州大学教授)

楢崎 彰一 (名古屋大学教授)

花木 篤雄 (都市教育長協議会会長)

大橋 雄六 (県土木部長)

林 正治 (清洲貝殻山貝塚資料館長)

〈監事〉 本田 辰郎 (県出納事務局長)

〈専門委員〉 考古学

楢崎 彰一 (名古屋大学教授)

文献史学 早川 庄八 (名古屋大学教授)

地理学 井岡弘太郎 (名古屋大学教授)

建築史学 浅野 清 (愛知工業大学教授)

動・植物学 渡辺 誠 (名古屋大学助教授)

形質人類学 池田 次郎 (京都大学教授)

保存科学 江本 義理 (東京国立文化財研究所保存科学部長)

〈調査課〉

課長 橋本 雅司 (課長補佐兼主任)

遠藤 才文 主事 鷺野 勉

主事 佐藤 公保 嘱託 丹羽 博 嘱託 安藤 義弘

主査 金原 安 主事 石黒 立人 主査 竹内 尚武

主事 小澤 一弘 主事 梅本 博志 嘱託 松原 隆治

嘱託 長島 広 (課長補佐兼主任)

清水雷太郎 主事 平野 清

主事 細野 正俊 主事 赤塚 次郎

嘱託 松田 訓 (10月1日採用) 服部 哲也 (9月17日退職)

主査 梅村 清春 主事 山田 耕治 主事 宮腰 健司

主事 池本 正明

嘱託 中野 良法 (10月1日採用) 竹内 宇智 (9月17日退職)

主査 上部 肇 主事 浅井 和宏 主事 酒井 俊彦

〈管理課〉

課長 斎藤 樹三 主査 稲垣 隆一 主事 伊藤 義幸

主事 森 信孔 主事 小倉 晴美

昭和61年度

愛知県埋蔵文化財センター

〈理事長〉 小金 潔 (県教育長)

〈常務理事〉 中林 茂 (兼事務局長)

〈理事〉 井岡弘太郎 (名古屋大学教授)

伊藤 秋男 (南山大学教授)

大参 義一 (信州大学教授)

坪井 清足 (助大蔵文化財センター理事長)

楢崎 彰一 (名古屋大学教授)

三浦 小春 (中日新聞嘱託)

花木 篤雄 (都市教育長協議会会長)

伊藤 芳 (町村教育長協議会会長) 6月30日辞任

栗木 茂一 (町村教育長協議会会長) 7月1日就任・11月30日辞任

大橋 雄六 (町村教育長協議会会長) 12月1日就任

大橋 雄六 (県土木部長)

中神 秀雄 (県教育委員会社会教育部長)

林 正治 (清洲貝殻山貝塚資料館長)

日下 英之 (県陶磁資料館館長)

〈監事〉 石原 坂男 (県出納事務局長)

田中 隆三 (県教育委員会総務課長)

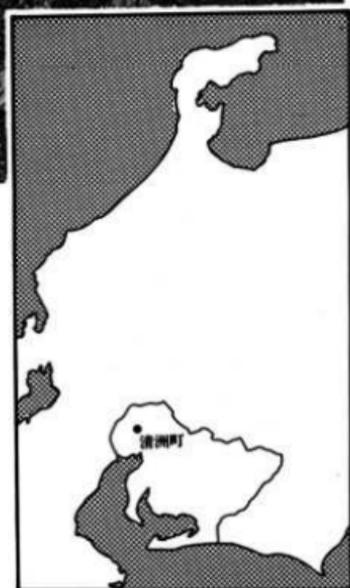
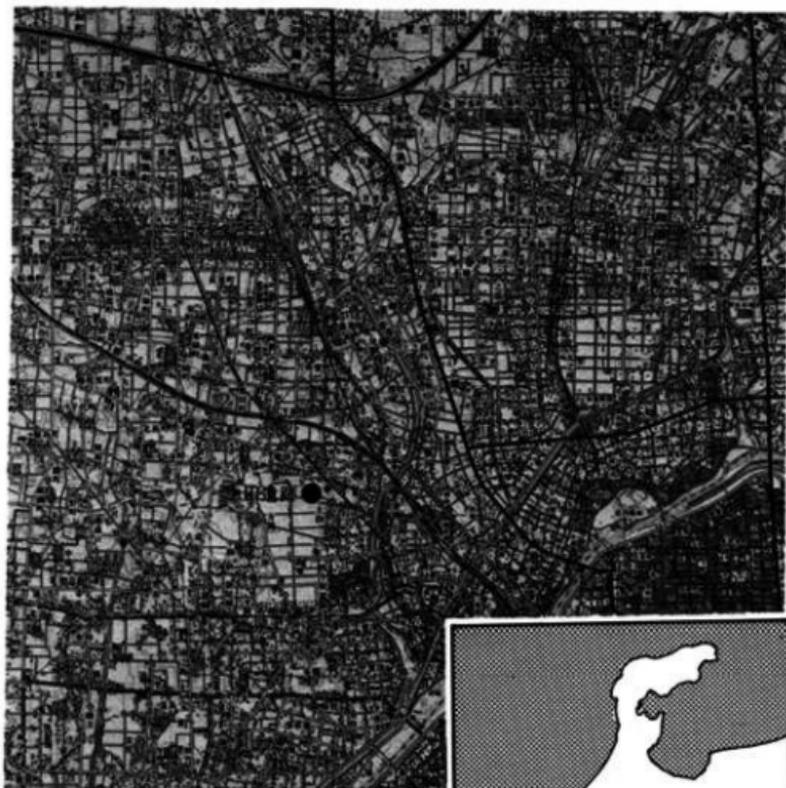
〈専門委員〉	考古学	楢崎 彰一 (名古屋大学教授)	文献史学	早川 庄八 (名古屋大学教授)		
	地理学	井岡弘太郎 (名古屋大学教授)	建築史学	浅野 清 (愛知工業大学教授)		
	動・植物学	渡辺 誠 (名古屋大学助教授)	木材組織学	木方 洋二 (名古屋大学教授)		
	形質人類学	池田 次郎 (岡山理科大学教授)				
	保存科学	江本 義理 (東京国立文化財研究所保存科学部長)				
	岩石学	諏訪 兼位 (名古屋大学教授)				
〈調査課〉	課長	橋本 雅司	課長補佐 兼主査	佐々木 竹内 尚武	主 事	浅井 和宏
	主 事	菅沼 良則	主 査	梅本 博志	主 事	小澤 一弘
	主 査	水谷 朋和	主 事	細野 正俊	嘱 託	中野 良法
	主 事	山田 耕治	主 事	平田 睦美	主 事	酒井 俊彦
	主 事	池本 正明	嘱 託	長島 広	課長補佐 兼主査	清水雷太郎
	主 事	赤塚 次郎	嘱 託	松原 陸治	主 査	鷺野 勉
	主 事	土屋 利男	主 事	石黒 立人	主 事	佐藤 公保
	嘱 託	丹羽 博	主 査	梅村 清春	主 事	平野 清
	主 事	宮腰 健司	嘱 託	松田 訓		
〈管理課〉	課長	斎藤 樹三	主 査	青山 光一	主 事	森 信孔
	主 事	田上 堅三	主 査	小倉 晴美		

土田遺跡 調査区別担当者

年度	調査区	担 当 者	年度	調査区	担 当 者
56	A	中村英規・竹島真澄・石黒立人・赤塚次郎	59	A	石黒立人・安藤義弘
	B	田中悟夫・赤塚次郎		B・C	赤塚次郎
	C	石黒立人・竹島真澄		D	上部 肇
	D	石黒立人		E	上部 肇
	E	田中悟夫・赤塚次郎		F	上部 肇
	F	石黒立人		G	小澤一弘・丹羽 博
	G	石黒立人		H・I	服部哲也・佐藤公保
57	A	遠藤才文・服部良夫・片山正巳	J	金原 安	
	B	遠藤才文・服部良夫・片山正巳	K(M・N)	丹羽 博・小澤一弘	
	C	遠藤才文・服部良夫・片山正巳	L	佐藤公保・服部哲也	
	D	遠藤才文・服部良夫・片山正巳	O	竹内尚武・清水雷太郎	
58	A	遠藤才文・服部良夫・金原 安	60	P	竹内尚武・清水雷太郎
	B	遠藤才文・服部良夫・金原 安		C	清水雷太郎・服部哲也
	C	遠藤才文・服部良夫・金原 安		D	竹内尚武・平野 清
	D	遠藤才文・服部良夫・金原 安		E	金原 安
	E	遠藤才文		61	

参考文献

「土田遺跡」[環状2号線関係発掘調査中間概報]	朝愛知果教育サービスセンター	1982
「土田遺跡」朝日遺跡群発掘調査団		1982
「土田遺跡II」朝日遺跡群発掘調査団		1983
「土田遺跡」[環状2号線関係埋蔵文化財発掘調査年報II]	朝愛知果教育サービスセンター	1984
「土田遺跡II」[埋蔵文化財発掘調査年報III]	朝愛知果教育サービスセンター	1985
「土田遺跡範囲確認試掘調査」	土田遺跡等試掘調査会	1986
「土田・期間遺跡」[年報昭和60年度]	朝愛知果埋蔵文化財センター	1986



土田遺跡位置図 1/100,000

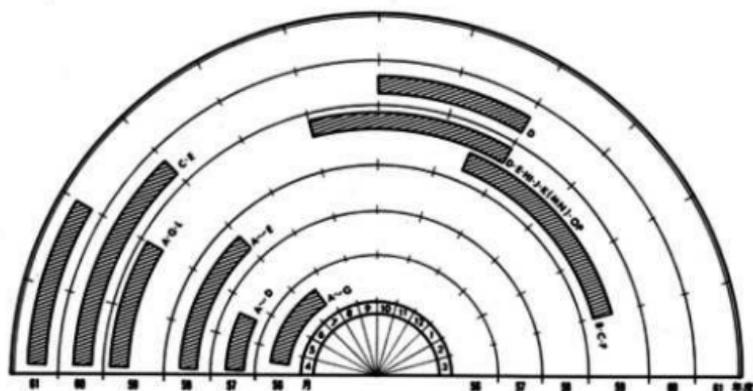
第I章 調査概要

経 緯

土田遺跡は(遺跡番号21005¹⁾北緯35°13′ 東経136°50′)愛知県西春日井郡清洲町大字土田字九反田、小松野、角田、五反地、江之相、丁長にかけて存在する。昭和56年度、中世陶器の散布地としてその存在が確認され、同時に名古屋環状2号線建設に伴う事前調査として発掘調査が開始された。昭和56年度より昭和59年度までは財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部により土田遺跡の発掘調査が実施されたが、昭和60年度にいたり、これらの事業が財団法人愛知県埋蔵文化財センターに継承され、昭和61年度の調査をもって建設予定地内の全調査が終了した。その間、朝日遺跡群発掘調査団²⁾、土田遺跡等試掘調査会³⁾による発掘調査が進み、その成果を加えることができた。現在土田遺跡の性格とその範囲をはば確定しえる状況に致っている。

なお発掘調査の進行に伴い、逐次現地説明会・展示会を開催し、作業員、地元住民に調査への御理解と御協力をお願いするとともに、埋蔵文化財保護の啓発・普及に努めた。

第1表 調査進行表



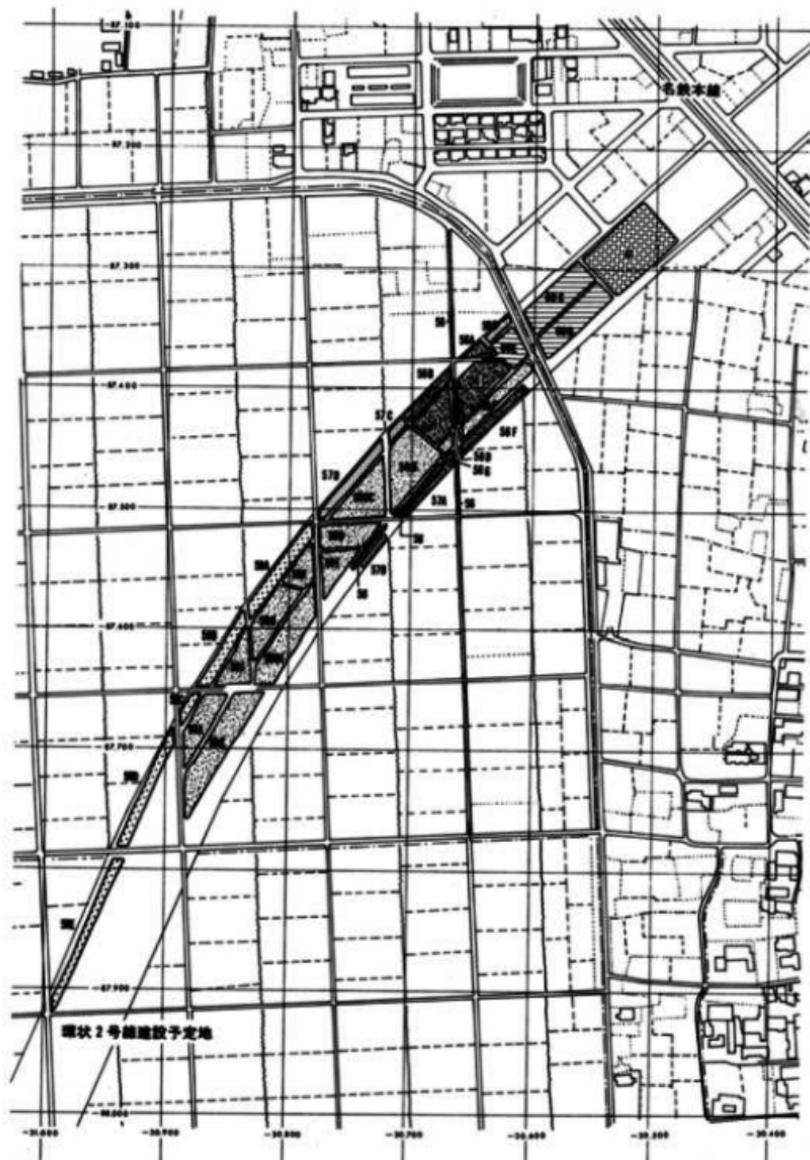
調査の概略

6年間にわたる土田遺跡の調査成果は、すでに勸学知果教育サービスセンター中間概報⁴⁾、年報II⁵⁾、III⁶⁾で各々の調査区についての概要は報告されている。また各調査団(会)の概報⁷⁾も同様に公表されており、土田遺跡の概略はこれらにより把握することができる。これらを総合すると土田遺跡とは弥生時代末～古墳時代にかけての墳丘墓を中核とする「墓域」形成期と、平安時代末～室町時代にかけての中世期を中心とする集落遺跡とに区分される内容をもち、特に後者の遺構、遺物が主体的な位置を占める。発掘調査は56年度7調査区、57年度4調査区、58年度5調査区、59年度10調査区、60年度4調査区、61年度1調査区を設定し、特に59年度の調査によってほぼ土田遺跡の全体像を把握する基礎的な資料を得ることができた。

遺跡の周辺は現在海拔3・4mの水田耕作地となっており、耕作の関係から調査は4・5月と10月に降に集中して行うことになった。また当地は「旧空港跡地」でその建設のおり包含層を含めて「島畑」状の高まりは大きく削平をうけている。したがって、遺構の残存状況は悪く、検出した遺構のほとんどが溝、井戸といったものに限定される。加えて検出面が砂層あるいはシルト層といった軟弱層であり、かつ湧水対策とあいまって56、57年度の調査は遺構検出作業に不安定な部分が認められた。しかし当初予想もつかなかった弥生時代の墳丘墓の発見は、その後土田遺跡の性格と大きくかわりをもつとともに、遺跡としての広がりをも問題としていく中で「廻間遺跡」⁸⁾の発見に連続していったのである。

環 境

土田遺跡は現在海拔3・4mの濃尾平野低湿地に所属し、五条川下流域の自然堤防帯に展開する微高地上に立地している。第2図は古墳時代初頭における周辺地形を発掘調査の成果及び地籍図を基に復原した旧地形であり、これに基づけば五条川は現在よりさらに西側を南流し、その東には湿地帯を形成していたものと思われる。五条川西側では自然堤防状の高まりが東西方向に展開し、やや複雑な地形を形成していたものと推測できる。土田遺跡は流路のさだまらない五条川、あるいはその支流の旧可道及びその微高地上に立地しており、現状では第2図のごとく南北に細長い微高地上に存在する。その周辺には弥生時代末～古墳時代前期の集落遺跡である廻間遺跡が存在するが、当遺跡とは湿地帯をはさんで対峙する関係となる。廻間遺跡の北には東西にのびる埋積浅谷が存在し、これにより大きく分断され可道をはさんで北側には弥生時代中期の集落遺跡と考えられる松の木遺跡が立地する微高地が東西に展開している。古代末期になると微高地以外の部分が水没し、帯



现状2号隧道设计定地

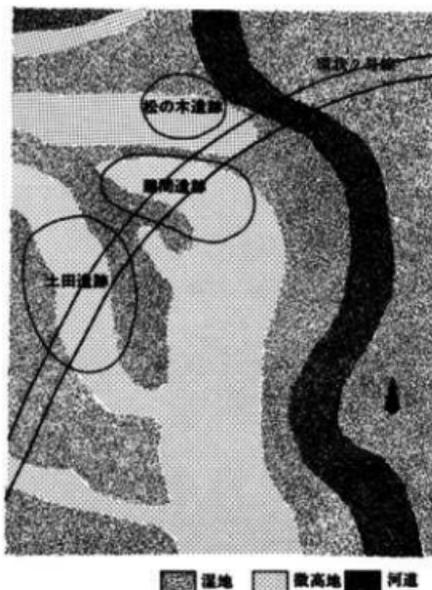


第1图 调查区位置图

水が長く続く状況が出現した。そして粘土が安定して堆積する止水的環境下の基で土田遺跡東西の湿地帯がしだいに埋めたてられてゆく。こうした中で凹凸した当地の環境がほぼ現在の地形的状况に近づくとともに、土田遺跡と廻間遺跡の間の窪地が完全に埋没する。

古代末期の堆積環境の変化は、同時に五条川水系での大規模な自然堤防の発達をもたらしている。例えば五条川本流の東への移動とともに東側の自然堤防の形成もさかんに行われ、その一端を朝日西遺跡の調査で確認することができた⁹⁾。また五条川西岸の散高地は安定した陸路として開発され、古代末～中世期にかけての主要道路として発達していったものと推定できる¹⁰⁾。

土田遺跡は16世紀をまたぎ消失している。それはおそらく当地での大規模再開発「清洲城下町」形成と大きくかわりをもつものと推定され、遺跡の北西端はまさに清洲城外郭と近接する。この激動する戦国時代を経て当調査区は田畑化が進行した。そして近代の「空港」建設の後、現在の水田地帯と変貌していったのである。



第2図 地形復原因（古墳時代）

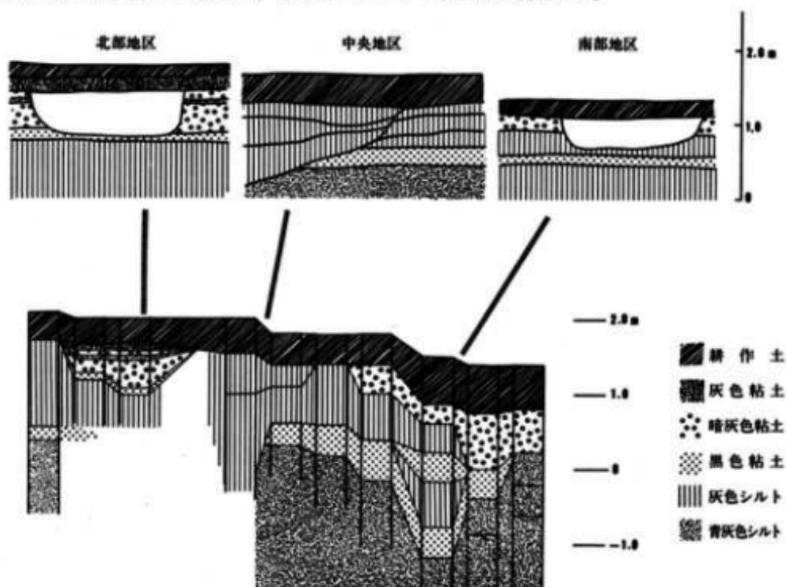
【注】

- 1) 『愛知県遺跡分布図(1)尾張地区』愛知県教育委員会1986
- 2) 『土田遺跡』朝日遺跡群発掘調査団1982
『土田遺跡II』朝日遺跡群発掘調査団1983
- 3) 『土田遺跡範囲確認試掘調査』土田遺跡等試掘調査会1986
- 4) 『土田遺跡』(『環状2号線関係発掘調査中間概報I』財団法人愛知県教育サービスセンター1982)
- 5) 『土田遺跡』(『環状2号線関係埋蔵文化財発掘調査年報II』財団法人愛知県教育サービスセンター1984)
- 6) 『土田遺跡II』(『埋蔵文化財発掘調査年報III』財団法人愛知県教育サービスセンター1985)
- 7) 注(2)・(3)に同じ
- 8) 『土田・廻間遺跡』(『年報昭和60年度』財団法人愛知県埋蔵文化センター1986)
- 9) 『朝日西遺跡II』(『埋蔵文化財発掘調査年報III』財団法人愛知県教育サービスセンター1985)
- 10) 所謂「鎌倉街道」については、中世期には萱津から「土田村」八幡社が立地する微高地上を經由し国府に至る陸路を推定できよう。

第II章 層位と遺構

層位

調査当時の地表は、61年度調査区（第1図）標高2.0~1.8m、59K区で1.2~1.0mを測り、現状では南にわずかに傾斜する地形が認められる。土壌堆積は低湿地における河川氾濫原特有の不連続な状況が見られ、当地では基盤層の起伏に加えて旧河道が複雑に錯綜しており、安定し連続する水平堆積層が見出しにくい。したがって検出面の土壌は地点によりまったく異なっている。また前述のごとく後世の消平により包含層が消失し、現在の耕作土・床土の下位が基本的な遺構検出面となる。調査区は旧地形復原に基づき、凡そ3つの地区に区別しうる。61年度調査区及び60年度C、D、E区さらに56年度A、C、D区を中心とする北部地区。56年度E区、59年度A、B、C、D、E区の中央地区。59年度F区以南の南部地区と3分割し、以下各々についての層位を概説する。



第3図 土層図

北部地区 基本層序は上位から第Ⅰ層耕土層、第Ⅱ層灰色粘土層、第Ⅲ層淡褐色粘土層、第Ⅳ層暗褐色粘質土層、第Ⅴ層暗灰色粘土層、第Ⅵ層黒色粘土層、第Ⅶ層青灰色シルト層と堆積する。第Ⅰ層は現代の耕作土で近世後半期の遺物も出土し、江戸時代から現代にいたる土層と考えられる。第Ⅱ層は中世期の遺物が包含され、遺構はこの層内より掘削される。第Ⅲ層～第Ⅴ層は基本的に遺物・遺構が認められないが近接する廻間遺跡の状況から第Ⅵ層は奈良、平安時代の層と確認しえる。同様に第Ⅵ層の黒色粘土層は弥生時代末～古墳時代前半の堆積と推測できる。北部地区は前述のごとく廻間遺跡と土田遺跡の間に存在する窪地状の地形であり、その窪地を埋めるごとく止水的環境下で粘土層が古代を通じ堆積していったことが想定でき、その間一時湿原あるいは干潟状の環境が出現し、それが第Ⅵ層を形成したものと考える。中世期にはこの窪地がほぼ埋めつくされ、その後遺構（主に土墳）が掘削されたことが観察できる。

中央地区 基本層序は上位から第Ⅰ層耕土層、第Ⅱ層砂層あるいは砂質の強いシルト層が堆積する。中央地区は前述のごとき敬高地上に立地し、その後削平が進行したため、砂層に掘削された遺構として弥生時代末期の墳丘墓と、中世期の溝、井戸が同一検出面で捉えられる状況となっている。第3図上位中央の断面図から敬高地が旧河道と大きく関係があり、その形成が河道及びその西側に氾濫した砂質層により産み出された高まりであることが推察される。複雑に錯綜する砂層・シルト層の下部は灰色粘土（第Ⅳ層）、黒色粘土（第Ⅴ層）、青灰色シルト（第Ⅵ層）が堆積する。灰色粘土（第Ⅳ層）より弥生後期の遺物が出土し、第Ⅴ層の堆積は弥生中期を中心とするものと考えられる。したがって敬高地を形成した旧河道の埋没は弥生時代中期末～後期を中心とし、弥生時代末期にはその上部に墳丘墓が造営されたことになる。

南部地区 基本的には第Ⅰ層耕土層、第Ⅱ層淡黄灰色シルト層、第Ⅲ層灰色シルト層、第Ⅳ層黒色粘土層と堆積する。第Ⅱ・Ⅲ層は河川の氾濫による砂混入シルト層で中世期の遺構は第Ⅱ層上位から掘削されている。

以上まとめてみると中央地区下部の弥生時代中・後期の基盤層（上部砂層¹¹）の起伏に河道が形成され、その大規模な氾濫と砂層の堆積が中央地区の敬高地を形成すると同時に東・西の窪地あるいは湿地帯を形作っていったものと推定できる。

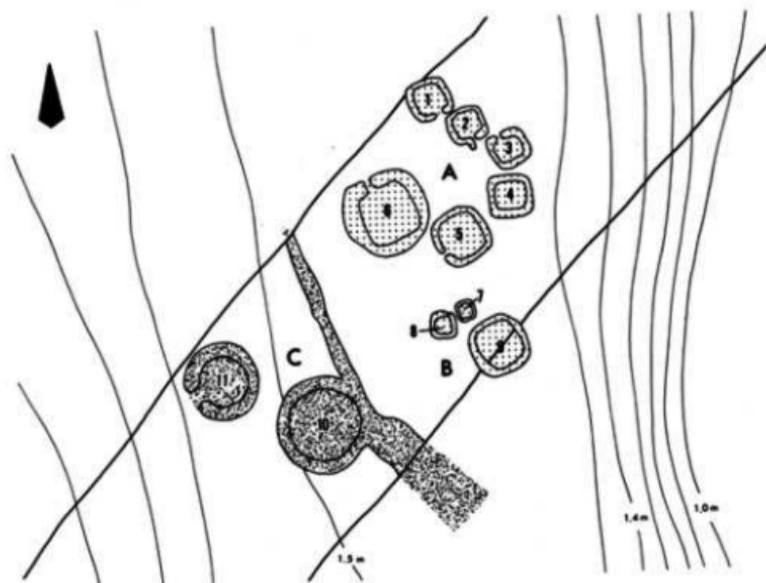
遺 構

土田遺跡より検出しえた遺構は大きく2つの時期に区分することができる。一つは弥生時代末期～古墳時代、今一つは平安時代後期～室町時代である。前者はA期、後者をB期として以下記述する。その他の遺構として奈良・平安時代及び江戸時代以降のものが認められるが、これらは後に一括して略述する。

ここでは各主要遺構を各々記述することに留め、時期別の変遷等は第V章で改めて後述する。

弥生時代末期～古墳時代（A期）

中央地区微高地上で検出できた遺構群で、墳丘墓（SZ）を中心とし、墓域を形成している。これらは後世の閉墾、耕作により著しく削平をうけ、周溝のみしか検出できえていない。墳丘墓群はA・B・Cの3つのブロックに区分できる。（第4図）A・B群は「欠山期」（弥生時代末期）、C群は6世紀中葉を中心とする築造であり、2つの時期に細分できる。墳丘墓11墓、土坑4墓、溝1条が所属する。



第4図 墳丘墓配置図

- SZ01 56B区中央で検出。9×10m, 溝幅1.3~1.6m, 深0.15~0.2mを測る。南溝のはぼ中央に開口部を持つ。壺2点(4, 7)溝内(西・東溝)より出土。
- SZ02 56E区。9.5×9mの方形部から南に西溝が複雑に屈曲し, 2mほど伸び開口部を意識する。溝幅0.9~1.4m, 深0.2mを測る。南西隅より壺1点(14), 南溝より壺2点(10, 12)出土。
- SZ03 56E・56D区。方9m(推定), 溝幅1.5m, 深0.15~0.2mを測る。北溝のはぼ中央に開口部を想定。南西隅より壺3点(5, 6, 17)出土。
- SZ04 56E・C・D区に広がる。方11m(推定), 溝幅1.9m, 深0.5mを測る。北溝より壺1点(25), 南溝より壺1点(16), 西溝隅(推定)より壺2点, 壺1点(9, 13, 23)出土。
- SZ05 56E区, 13×13.5m, 溝幅2m, 深0.2mを測る。西溝中央南よりに開口部が存在する。北溝より壺1点(2), 北西隅より壺・高杯(26)各々1点, 南溝より壺底部片出土。
- SZ06 56E, 57C, 59A区に広がる。13×14m, 溝幅2~5m, 深0.2~0.3mを測る。北溝中央に開口部が存在し, 溝幅若干拡張する。西溝より赤彩の施された広口壺片, 北隅より壺1点(3), 器台1点(27)出土。
- SZ07 59A区南。3.6×3.6m, 溝幅1~0.5m, 深0.1mを測る。南西隅で壺1点(28)出土。
- SZ08 59A区南。5×4m, 溝幅0.5~1.2m, 深0.15mを測る。北東隅に開口部が存在する。東溝より壺1点(8), 南溝より壺1点(24)出土。
- SZ09 56G区。方9m(推定), 溝幅1.5~1.8m, 深0.1~0.15mを測る。南側1/2を調査区外に置く。北溝より壺1点(11)出土。
- SZ10 59A・B・C区。径18.5mの円形を呈し, 溝幅1.5~3m, 深0.1~0.6mを測る。東側でSD30と重複する。東側溝内より須恵器壺3点(29~31), 西側で土師器甕(33), 石製紡錘車(32)各1点出土。
- SZ11 59B・C・57D区。径18mの円形を呈し, 溝幅2.5~3m, 深0.2mを測る。西側で開口部が存在する。北偏溝内より須恵器杯身1点(35)出土。

その他土坑 SK11, SK14, SK71, SK72 (図版 3) が存在し、その内 SK11, 14, 72 は A 群中央部に集中し各々壺 (SK14 はさらに高杯 1 点) の出土が認められた。(1, 15, 21, 22) SD30 は調査区を南北に縦断する大溝 (幅 3 m, 深 0.2 m) で南端で流路を拡散する。古墳時代後期の遺物が若干出土している。

平安時代末期～室町時代 (B 期)

平安時代後期～室町時代にわたっての遺構 (B 期) は溝 77 条, 土坑 74 基, 井戸 21 基, 土壇 179 基を数え, 以下その主要な遺構について記述する。なお時期については第三章に準ずる。

溝

- SD20 (図版 3) 56C 区で検出された南北溝で, 南端で L 字状に屈曲し, 3 m 西へ伸び終息する。SD 27 と平行し一つの区画を形成する。少量ではあるが 12 世紀の遺物の出土が見られる。南北 36 m, 溝幅 0.5~0.8 m, 深 0.1 m を測る。N-6'-W
- SD27 (図版 3) 56B・E 区。L 字状に大きく屈曲する溝で, 南北溝はさらに北側, 調査区外に延張するが, 東西溝は調査区西端で漸移的に終息する。屈曲部を中心に多くの遺物 (図版 24・25) が出土するとともに区画内西側に井戸が集中し, 一つの居住基本単位が推定できる。12~13 世紀を中心とする遺物が出土する。東西 30 m, 溝幅 1.2~1.6 m, 深 0.4 m を測り, 2 段掘りの掘形をもち溝内には暗褐色粘質土が堆積する。
- SD35 (図版 4) 59B・C 区。南北に伸びる溝であるが調査区内で完結する。途中 2 回大きく屈曲し, 溝南端で西に 90° 屈曲気味に終息する。第 II 期 (13 世紀) の遺物を若干出土し, ほぼ同時期の溝 SD34 より早く埋没する。溝幅 0.5 m, 深 0.1 m で茶褐色粘質土が堆積する。屈曲部を堺に北 14 m (SD34 まで) 南 13.5 m を測り, ほぼ 2 分する状況が認められる。
- SD41・42 (図版 4) 59B・C 区を中心として検出された L 字状に大きく屈曲した大溝。SD41 は南北溝で主軸をほぼ真北方向に置き, 中央部に (SD41 以降) 存在する SX83 付近がやや深く, 遺物も集中して出土している。溝幅 1.5~1.8 m, 深 0.4 m を測り, SD34 と SD42 に挟まれた部分で 53

mを測る。

SD42 は東西溝で、SD43 が北側に平行して存在する。SD41 とSD42 の接点は溝深が浅くなるとともに（屈曲部）SD43、SK74 が複雑に重複し、かつ土塊群が集中する。SD42 は大きく蛇行する溝であり、ほぼ旧可道の上部に位置し、自然発生的に整えられた溝の可能性が強い。溝幅2.8～3.2m、深0.5mで茶褐色粘質土・暗灰色粘土が堆積する。（第5図）なおSD42は調査区外さらに東へ50m延長することが確認されており²⁾、土田遺跡中央部に位置する重要な施設と考えることができる。SD42 は広範囲にわたり第II期～III期（13～14世紀）の遺物が多量に出土し、SD41（第I～II期）が埋没した後も、長く存続していたことが理解できる。

SD54・55・62

（図版4）

59E区で検出できた一つの区画を形成する溝群である。SD54 は東西溝で、西端で屈曲を意識して終息。溝幅1.3m、深0.3mを測る。SD55 は南北溝で長さ33m、溝幅1.8～2.0m、深0.3～0.4mを測り、南端で幅を拡張（2.7m）すると同時に深さを増し（0.9m）、土塊状の施設をもつ。SD62 はSD55 の中央より東西に伸びる溝で、長さ11m、幅1.8～1.9m、深0.4mで調査区内で完結する。3条とも第II期の遺物の出土が見られ、特にSD55 南側で集中している。



第5図 SD42 断面図 1/50

- SD56・59
60・61
(図版4)
- 59E区で検出した溝群で、SD59はL字状に屈曲する溝で、南北4m、東西12m、溝幅1.3~1.5m、深0.3mを測る。近接して南北溝SD60が掘削される。長さ4.2m、溝幅1.6m、深0.6m。SD61は鈍角に屈曲する溝で東西溝は若干北側に彎曲する。溝幅0.7~1.6m、深0.6mを測る。南端はSD64により破壊。SD61東西溝に連続する形でSD56が存在しゆるやかに彎曲しながら調査区外に伸びる。溝幅1.1m、深0.2m。出土遺物より第III期を中心とする時期の存続が考えられる。
- SD64 (図版4)
- 南北溝SD68と連続すると考えられる東西溝で接続部はSK62が重複。第IV期の遺物が出土。(図版23)溝幅1.6~1.7m、深0.3~0.4mを測り調査区外に至る。
- SD68 (図版4)
- 南北溝で北端でL字状に3m屈曲し消滅。溝幅1.9~2.0m、深0.4~0.5mで、調査区内で南北52mを測る。

井 戸

調査区内で2基、調査区外で1基を確認。土坑との差違性を明確にするため、以下の2つの条件を基本に井戸の認定を行なった。内部構造物が残存するもの。ある一定の平面規格と掘形を持ち、湧水層まで確実に掘削されているもの。以上確認しえた井戸の全てが素掘りの井戸で、平面形と掘形の状況から2つに大別できる。A類とは長軸と短軸の差が大きい不整円(方)形状のプランをもち、掘形はゆるやかな傾斜面をもつSE05・06・07・12をその典型とするもの。B類とは、長軸・短軸の差が少なく、比較的小規模なプランをもち、掘形は垂直に近い状況を呈するもの。SE02, 10に代表される。時間的にはA類からB類への変化が窺える。その他第I~II期(12~13世紀)に所属する井戸には必ずといってよいほど、井戸機能消失後上層に一定の遺物廃棄及び炭化物を多量に含む土層が存在し注目される。(以下「廃棄層」と呼ぶ)

- SE01 (図版3)
- 56A・60E区に重複し検出した井戸で、検出面で径2.4m、深1mを測り、内部構造物は認められなかったが、上層に廃棄層が見られる。(第6図)第I期の遺物とその廃棄層より出土。(図版13)
- SE02 (図版3)
- 59P区。径1.6m、深1mでB類の井戸。廃絶に伴う土層は認められない。第III期の遺物が出土。(図版13)
- SE05 (図版3)
- 56B区にて検出でき、北側の一部を調査区外に置く。4.0×3.4mで深0.8mを測る。(A類)3段の掘形をもち、下段では径0.8m。内部には曲物1段と井戸枠の一部と思われる板材を確認。(第6図)上層

- に廃棄層が認められ、第Ⅰ期の遺物が出土している。(図版14)
- SE06 (図版3) 56E区。3.0×2.5mで不整形円形、深1.5m。(A類)内部構造が良好な状況で残存した唯一の例であり、長方形板の横組3段の井戸神(仕口を柄組にして保持)がみられ、その内部に曲物7段を確認。(第6図)第Ⅰ期に所属。
- SE10 (図版3) 59A区。平面形状は2.5m×2.2mの不整形円形で、2段(下段径1.4m)の掘形をもち、比較的垂直に近く掘削する。(B類)深1.2mで曲物2段が残存する。(第6図)曲物内基底部に土器片、丸石が配置され、湧水による砂の吹き上げを防止する工夫が認められる。第Ⅲ期の遺物が出土する。(図版21)
- SE11 (図版3) 59A区、SD30に重複する井戸で、5.3m×4.0mの楕円形状の掘形をもち、深0.7mを測る。(A類)下部に径2~3cm、長さ5~15cmの数本の竹を確認し、上層には廃棄層が認められ、第Ⅱ期に所属する多量の遺物が出土している。(図版15)

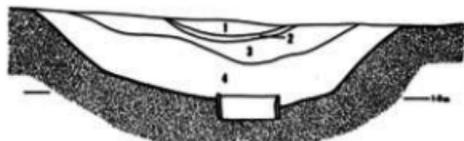
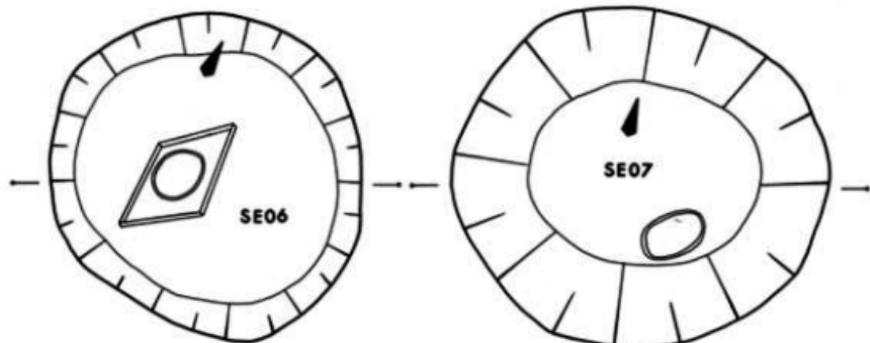
その他調査区外ではあるが木組方形横棧型井側(1辺0.5cm)をもつSE21(図版4)の存在を確認している⁹⁾。

土 坑

土坑として確認したものは74基である。形状等の差において数種のまとまりを指適でき、その内特色のある2つの種類(A・B)を特に取り上げておく。

土坑A 掘形の径が1.5~2.0mで深0.4mのほぼ円形の土坑で、埋土は均一な褐色粘質土が堆積し、内より若干の遺物の出土が認められる。また土坑Aは、複数、近接して設けられる傾向が見られるとともに、井戸に近接して築かれることが多い。例えばSK05とSE05、SK57とSE17、SK49とSE16。各々近接する場合としてはSK46・45、SK15・16、SK49・53等が存在する。

土坑B 不整形の大型土坑で、土坑内には2~3層の層位堆積が認められるもの。深さは0.6~1.0mと比較的深く、掘形はゆるやかな傾斜をもち掘削されている。SK61・62・63の3基が存在する。他の遺構との重複関係から第Ⅳ期、土田遺跡終末期に所属するものと考えられる。

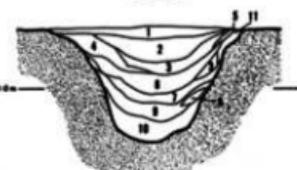
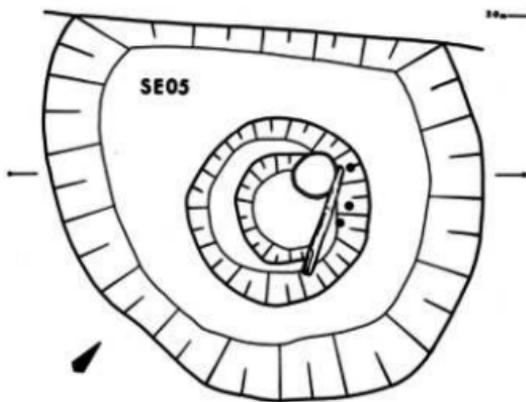


- 1 褐色砂質土 2 暗灰色粘質土 (遺物含) 3 淡褐色砂質土 4 暗青灰色粘質土

SE01



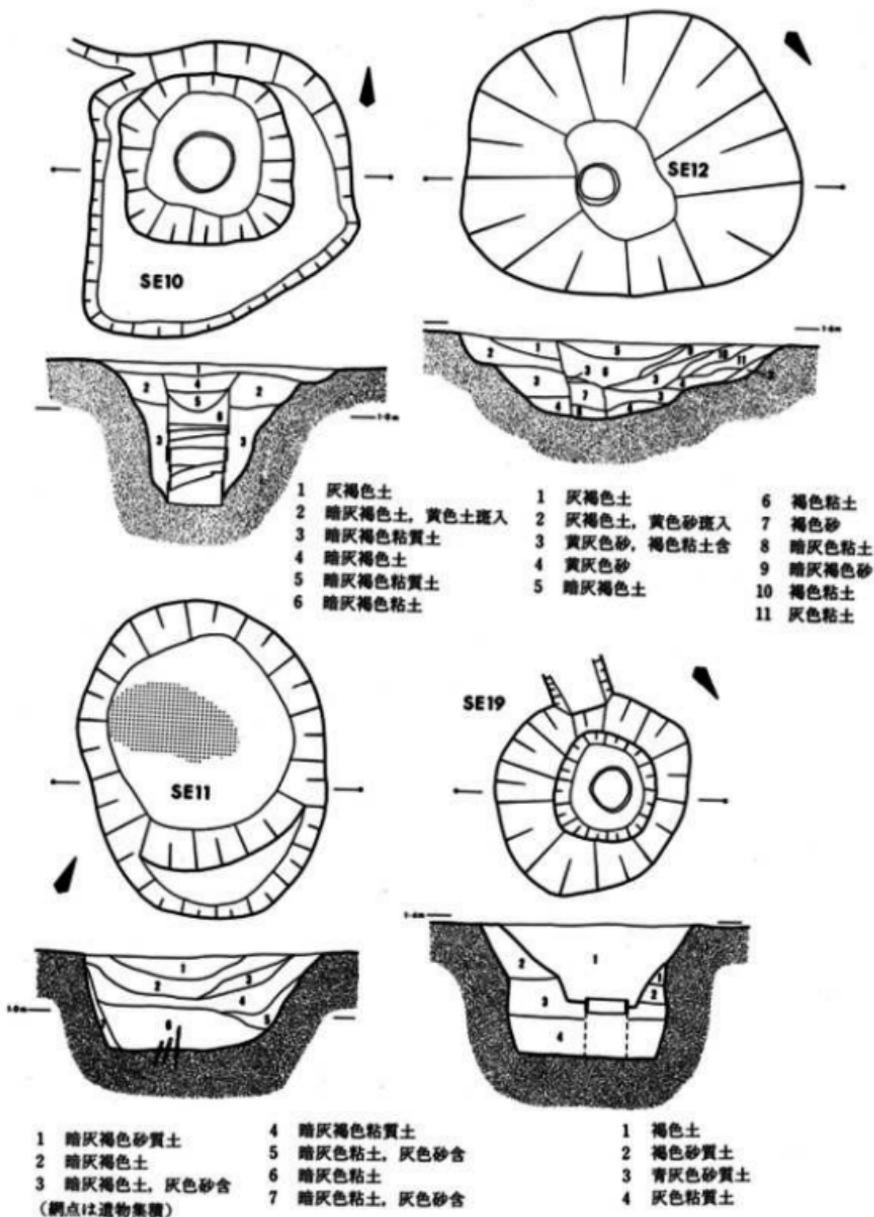
- 1 耕作土 2 灰色粘土 3 暗灰褐色土 4 暗灰色粘質土 (遺物含) 5 灰褐色砂質土 6 暗灰色粘質土 7 暗灰色粘質土, 砂混



- 1 淡褐色砂質土 2 褐色砂質土 3 茶褐色砂質土 4 暗茶褐色砂質土 5 灰茶褐色砂質土 6 淡茶褐色粘質土 7 褐色粘質土 8 灰色粘質土 9 暗灰白色砂質土 10 灰白色砂質土 11 暗褐色砂質土

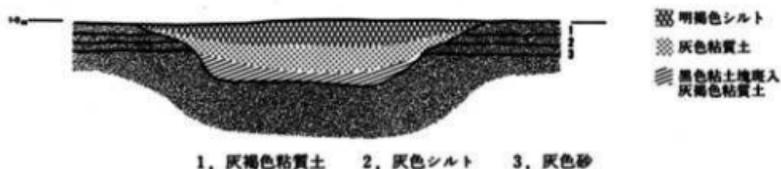
- 1 灰褐色砂質土, 褐色粘土混入
2 灰褐色砂質土
3 暗灰色粘質土
4 灰色粘質土
5 暗灰褐色粘質土, 砂混

第6圖 井戸実測図1 1/50



第7圖 井戸実測図2 1/50

- SK05 (図版 3) 56B区 SE05 の南に位置し掘形は径2.4mの円形で、深0.47mを測り、若干傾斜をもち掘削されている。(土坑A)淡茶褐色粘質土が堆積し、第I期の遺物が出土している。(図版12)
- SK24 (図版 3) SZ06 北溝内にこれを破壊する形で築かれた土坑で、径0.7mの正円形を呈し、深さ0.5mを測る。内部には炭化物が充満し、灰軸系陶器(羽釜・椀)河原石が出土している。その内羽釜型陶器(図版16)は3個体で、いずれも体部下位を欠損し、井戸枠として使用していた可能性が高く、井戸廃絶後土坑内に一括投棄されたものと考えられる。
- SK61 (図版 4) SZ11に近接し、その南に掘削された大型の不整形土坑。長軸9.6m、短軸5.5mで深さ0.7mを測り、坑内には3層の堆積が見られた。(土坑B)上から茶褐色粘質土・灰白色粘質土・褐色粘質土で、茶褐色粘質土下位には炭化物が堆積し、若干の灰軸系陶器片が出土している。
- SK62 (図版 4) SD68 と SD64 が接続する位置に、これらを破壊する形で掘削された不整形土坑。(土坑B)長軸8.0m、短軸4.0mで深さ0.6mを測る。上より明褐色シルト・黒色及び青灰色粘土塊斑入灰色粘質土・黒色粘土塊斑入明褐色シルトが堆積する。第IV期に所属する遺物が少量出土する。
- SK63 (図版 4) SK62の南に近接して築かれた不整形土坑。(土坑B)6.2×5.5m、深1.0mを測り、上から明褐色シルト・灰色粘質土・黒色粘土塊斑入灰褐色粘質土が堆積する。第IV期の遺物が出土。(図版22)
- SK74(図版 4) SD44・42に重複する形で掘削された大型の不整形な溝状を呈する土坑。掘形の掘削はゆるやかな傾斜面をもち、長軸24m、短軸3m、深0.57mを測る。坑内には灰色粘土・褐色粘質土塊及び砂が混入する暗灰色粘質土が見られ人為的な埋戻しが想定できる。多量の細片化した遺物(中世～近世)が出土する。



第8図 SK63 断面図 1/100

方形土壇

調査区内でその状況・形状において一つのまとまりのある特色ある遺構を抽出することができる。これらの遺構は特に調査区北・南端で集中して存在する。今これら一群のものを方形土壇(SX)として総合する。

まず所属時期であるが、第1に土層図により明らかなごとく(第10図)中世遺物を包含する灰色粘土層より掘削されており、それ以降(近世～現代)の可能性は考えられない。第2にSX06・55・21・90・159より伴出した遺物は前述のB期(平安末～室町時代)に所属する。第3にB期の溝・井戸の配置と密接な関係をもつ(後述)。以上から遺物がほとんど出土しないこれらの遺構はすべて土田遺跡B期、おおむね中世期に所属するものと考えることができよう。

次にその特色をまとめて述べておく。1. 方向性を保有し、南北・東西付近に主軸を置く。2. 層位堆積をもたず、斑土が充填され人為的埋戻し作業が想定できる。3. 掘削場所がある特定の原則に基づいており、結果的に群集する傾向をもつ。4. 円形プランをもたない。掘削上面では第9図のごとく隅丸長方形が一般的で、ほぼ垂直に近い状態で掘削し、基底部は舟底状を呈する場合が多い。なお詳細は改めて後述する。

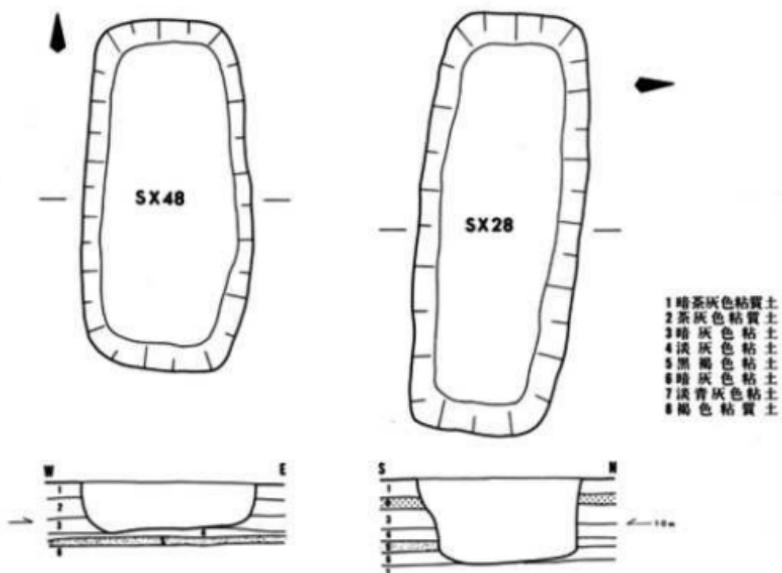
SX55(図版3) 60E区で検出した長大な土壇、長軸8.9m、短軸1.6m、深さ0.77mで重複関係は見出しえない。明灰色粘質土・暗灰褐色粘質土・黒色粘土塊斑入灰褐色粘質土が埋まり、下位から腕と皿が(図版30)各1点重ねた状況で出土している。(図版41-18)

SX80(図版3) SD27に平行し、これに先行する形で掘削された土壇で、北端を調査区外に置く。現状では長軸9.0m、短軸1.7mを測るが、深さ0.7-0.9mと段を持つ。2-3基が重複するものと推定でき、その基底部に遺物と石の集積が点在した形で検出されている。(図版30・41)

建物・櫓列

SB01(図版3) SD20により区画された空間内部で検出された掘立柱建物(2×1間)。南東隅柱穴は検出できえていない。柱間南北2.6-2.4m、東西3.6m。西柱穴列北より第1・2柱穴から遺物が出土し、第II期に所属する。(図版20)

SA01(図版3) SD19とSD17の間を仕切る形で6ヶ所の柱穴群を確認した。SD17・19、SX70以後に設けられ、柱間不揃いで、西から1.1-0.8-1.5-0.7-2.0-1.4m。(計7.5m)

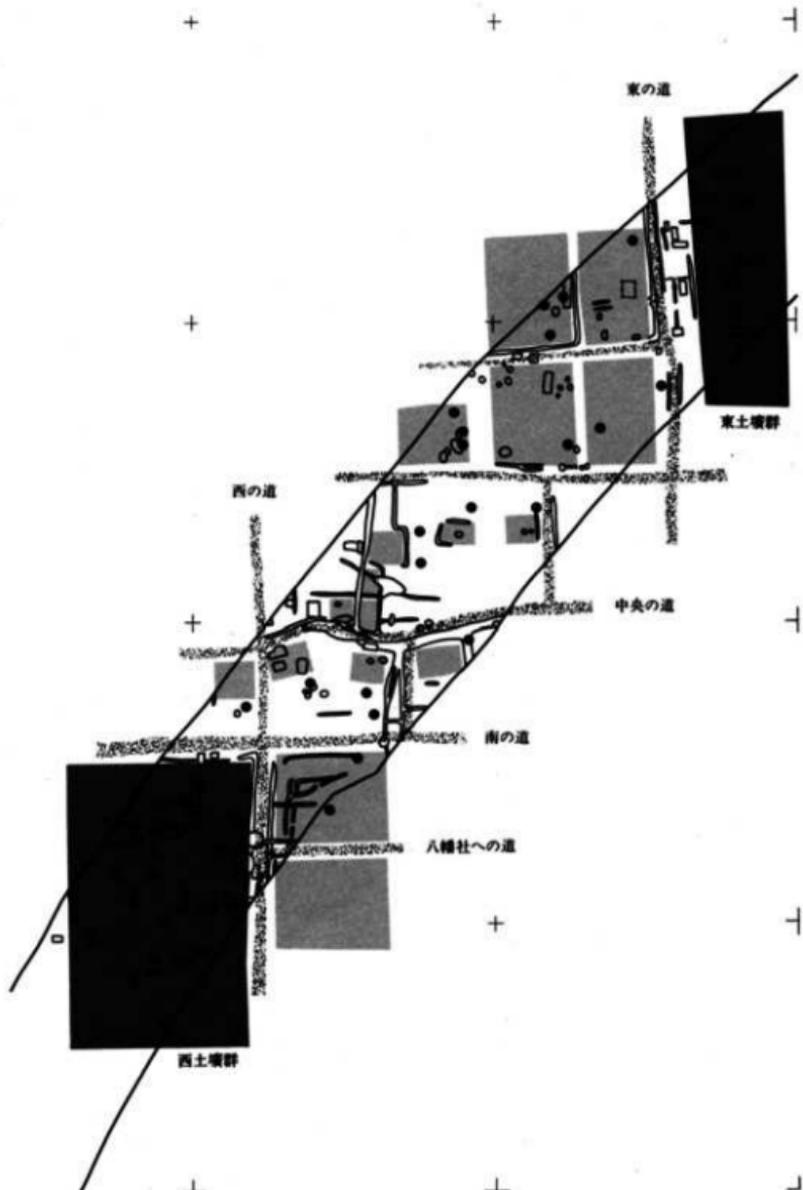


第9圖 SX28・48 突測圖 1/50

- | | | |
|---------|------------|------------|
| 1. 瘠土 | 6. 暗茶灰色粘質土 | 11. 淡青灰色粘土 |
| 2. 耕作土 | 7. 暗灰色粘土 | 12. 黑色粘土 |
| 3. 黃褐色土 | 8. 淡灰色粘土 | 13. 灰色粘土 |
| 4. 茶灰色土 | 9. 黑褐色粘土 | 14. 褐色粘質土 |
| 5. 褐色土 | 10. 暗灰色粘土 | |



第10圖 SX41 断面圖 1/50



第11図 B期主要遺構配置図（黒点は井戸・網点10%は屋敷地・建物）

その他の時代

耕土・包含層より少量の奈良・平安時代の遺物が出土しているが、遺構に伴う形ではほとんど存在していない。ただ遺物の比較的集中するのは微高地西・東端。また江戸以降の遺物も若干みられ、旧福田川の河道跡が58D南端で確認されている⁴⁾。

59A南端、SD30 におおむね重複する状況で奈良・平安時代の須恵器片が出土する窪地（あるいは自然流路）が存在する。

SK34（図版3） 56D区 SE03 の南で検出された不整形の土坑で深さ0.15と浅く、須恵器杯身1点（44）が出土している。

〔注〕

- 1) 井岡弘太郎「弥生時代以降の環境」（岩波講座『日本考古学』2 1985）
- 2) 『土田遺跡』朝日遺跡群発掘調査団1982
- 3) 『土田遺跡II』朝日遺跡群発掘調査団1983
- 4) 井戸出土遺物の多くはこの廃棄層より出土し、14世紀以降はこの層堆積はみられない。SE07 出土底部穿孔（焼成後）碗（59）の出土が象徴的な遺物出土状況といえよう。
- 5) 注3) に同じ
- 6) 『土田遺跡』（『環状2号線関係埋蔵文化財発掘調査年報II』財団法人愛知県教育サービスセンター1984）

第2表 主要遺構時期区分

第2表 主要遺構時期区分

時期	墳 丘 墓	土 坑	そ の 他
A	I S Z 01 S Z 08 S Z 02 S Z 09 S Z 03 S Z 04 S Z 05 S Z 06 S Z 07	S K 11 S K 14 S K 71 S K 72	
	II S Z 10 S Z 11	S K 33	S D 30

時期	溝	井 戸	土 坑	その他
B	I S D 55 S D 62	S E 07 S E 01 S E 03 S E 05 S E 14 S E 12	S K 05 S K 24 S K 18	S X 80 S X 85
	II S D 35 S D 38 S D 51	S E 01 S E 11 S E 16	S K 45 S K 75 S K 44 S K 15 S K 16	S B 01 S X 81 S X 90
	III S D 61 S D 65	S E 02 S E 08 S E 20 S E 10	S K 31 S K 67	S X 55 S X 06 S X 155
	IV S D 68 S D 64	S E 21	S K 61 S K 62 S K 63	S X 44 S X 21

第三章 遺 物

調査により出土した遺物は、各時間にわたり散見できる。しかし遺構に伴出し、かつあるまとまりをもつ遺物群として取り上げられるものは、前述したA・B期とした2時期に限定でき、特に後者である平安時代末～室町時代（B期）に所属するものが大多数を占める。ここでは遺構伴出資料を中心に記述し、遺物の分析は第V章で行う。

弥生時代末期～古墳時代（A期）

墳丘墓出土遺物を中心に、弥生時代末期の土器と古墳時代後期の遺物に大別できる。A-I期とA-II期とする。

I期

出土した遺物は壺形土器を中心に数十点と限られた量である。そのほとんどが「久山期」に所属するものと考えられる。

1) 器 種

壺 広口壺、短頸壺、直口壺の3つの形式に分類でき、各々諸特色によりさらに細分する。

〈広口壺〉 体部から広く比較的短い頸部と、大きく外反する口縁部を有する壺。ここでは装飾性を重視し、3つに区分する。

A 口縁端部に数条の凹線文をもち、口縁内面に幅広い文様面が見られる。体部はその上半に直線文と刺突文を組合せた文様帯を構成する。また赤彩がある原則に基づき施される。

B 口縁端部に刺突文、体部上半に直線文と刺突文を組合せるが、赤彩は見られない。

C 体部から強く外反あるいは外傾する口頸部をもつ一般的な広口壺の一群。施文は見られない。

〈短頸壺〉 体部から短く、やや直口ぎみに口頸部を有する壺。3種ある。

広口壺



短頸壺



直口壺



高杯



広口壺	A	1, 2
	B	3, 4, 8
	C	12, 13, 14, 15, 16
短頸壺	A	9, 10, 11
	B	5, 7
	C	6
直口壺	A	21, 24, 28
	B	25

(番号は図版と同じ)

第12図 土器分類 (A期)

- A 体部上半と頸部に明瞭なくびれが見られ、口縁端部はつまみ上げ状となる。
- B 体部から頸部はゆるやかに移行し、口縁端部は比較的丸くおさめる。
- C 内彎する口頸部をもち、端部は丸く整える。
- 〈直口壺〉 体部から大きく直口する口頸部をもつ壺で2種ある。
- A 口頸部は大きく、口縁端部付近は内彎し端部は面を持つ。
- B 口頸部は短く、内彎し、端部付近では外反し、斜面を持つ。
- 〈高杯〉 A 大きく広く外傾する杯部に、内彎円錐状の脚部を持つもの。
- B 短く半球状の杯部をもつもの。

その他受口状口縁台付甕(23)と口縁部に凹線文をもつ器台(27)が認められる。

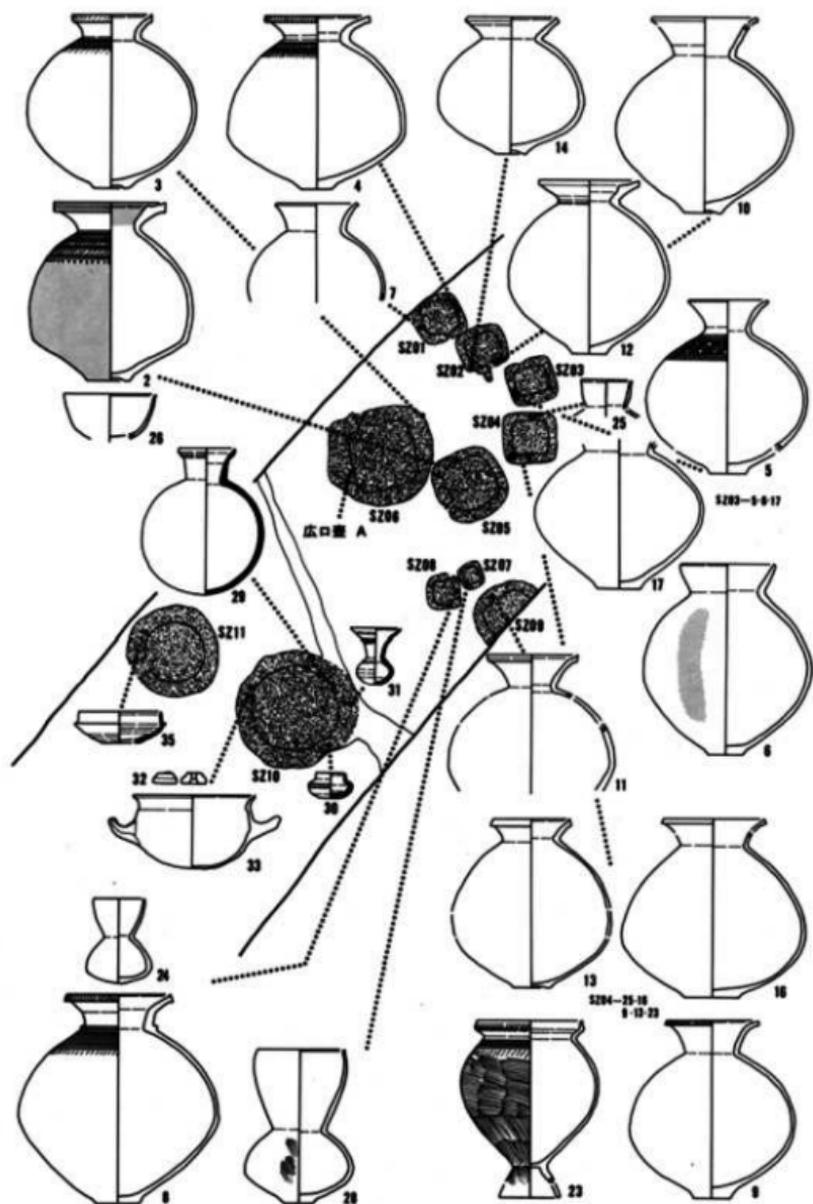
2) 状 況

出土地点については第13図のごとくであり、遺物の出土は墳丘墓9基と土坑3基に限定できる。墳丘墓ではSZ04の受口状口縁台付甕(23)とSZ06の器台(27)を除いて、総て壺に限られる。その内の多くは広口壺と短頸壺であり、直口壺の墳丘墓からの出土はB群に限定され、広口壺AはSZ05及び測図はできないがSZ06西溝より出土しており、A群、特にその内でもより大型の墓に限定できる使用状況を見せている。

II期

SZ10・11を中心に須恵器の出土が見られる。おおむね田辺彌年MT15・TK10型式に併行するものと考えられる。

- 〈須恵器〉 (29~31)はSZ10より出土し、(29)は大型の提瓶で口縁は有段状に稜を持つ。(30)は小型の短頸壺で、(31)は小型の甕であるが、底部の状況より装飾壺の一部である可能性が高い。(34~38)は杯身で、(34)・(35)・(38)は底部に明瞭な平坦面を持つ。(39)は有蓋高杯、(40)は台付短頸壺の蓋と思われる。
- 〈その他〉 (32・33)はSZ10より近接して出土し、(32)は滑石製紡錘車で、側面及び底に刻線の鋸歯文が施され、外面及び孔には使用痕が著しい。(33)は把手付土師器甕で、内外面ハケメ、つまみ上げ状の口縁部が見られる。その他埴輪片が数点出土している¹⁾。



第13圖 土器出土地点

平安時代末期～室町時代（B期）

1 土器と陶磁器

種類と器種

種類としては土器（土師器）と陶磁器があり、後者は灰釉陶器から連続する灰釉系陶器。灰釉陶器を継承し、釉薬を施す施釉陶器。そして中国製陶磁器。と3区分する。

器種は基本的に第14・15図のように分類し、名称は通例に従い、碗・皿・壺・鉢・釜・鍋等を用いる。なお灰釉系陶器碗は、所謂「山茶碗」の範疇に属し、特に改めて記述しない限り無釉碗を意味する。各器種の分類は第V章に基づく。

遺構内出土遺物

平安時代末期から室町時代にかけての遺物の内、大多数を占めるのは灰釉系陶器であり、これらの分析は第V章に譲り、ここでは主要遺構内出土遺物の概説を行なう。

SK05（図版12-48-54）

灰釉系陶器碗・皿の（第I期）の組合せが見

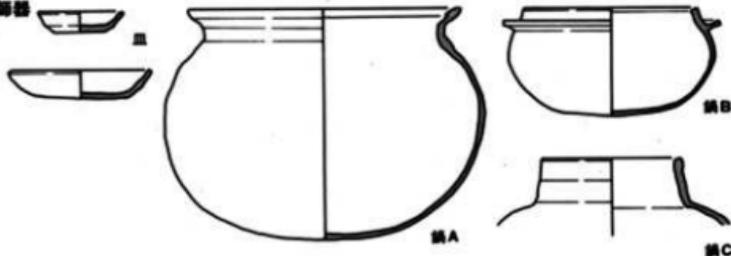
られるもので、皿はすべて高台が製作されている。碗は器高が低く、碗（48）のような口縁部を大きくヨコナゲし外反する特色ある器形が見られる。その他図示できないが土師器鍋Aの口縁部細片（分類B）が共存している。

SE07（図版12-55-72）

土田遺跡第I期の遺物組成を示す一括資料で

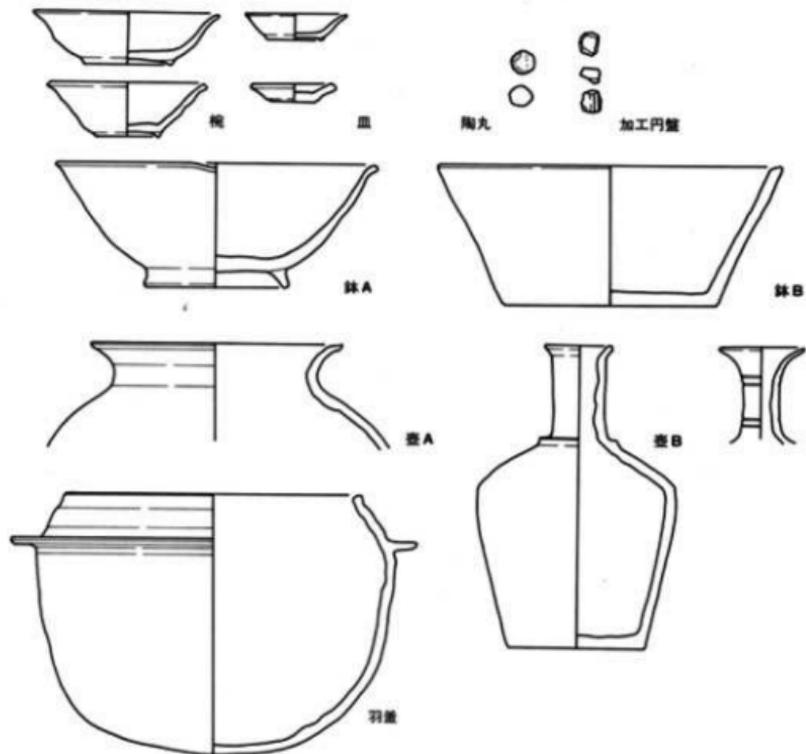
あり、井戸廃棄層より出土している。碗（59）は底部が大きく穿孔（碗成後）されており、廃棄における目的的な使用を表示する。（61）は口縁端内部に一条の沈線が見られ、端部は丸く厚く整えられる。皿はすべて高台を有する。碗・皿類は常滑産と考えられるが、口縁端部がわずかに外反する鉢（69）は常滑地区における鉢の様相と若干異なる。（70）は鍋Aの口縁部（分類B）で、（72）は砂岩製砥石。砥石は斜面に特に使用痕が著しい。（71）

土師器

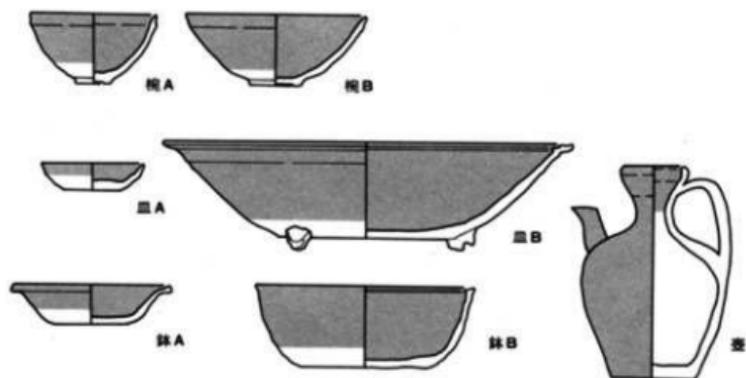


第14図 土器の種類

灰釉系陶器



施釉陶器



第15図 陶器の種類

は碗高台部を利用した加工円盤（分類 A₁）。

SE01（図版13—73—90） 碗は（73）・（75）・（78）のように口縁部を大きくヨコナデし、外反するもの他、（79）のように口縁端部外面に面を持つものが見られる。皿は高台の有無が見られる。（88・89）は土師器鍋A（分類B）で、口縁部は短く外反する。端部は幅狭く肥厚し面を形成する。（90）は玉縁口縁をもつ中国製陶磁器碗。

SE05（図版14—104—118） 土田遺跡第I期の遺物が出土し、碗はすべて口縁端部が鋭利に整えられる。皿は高台が作製されるものに限定される。（113）は土師器皿（皿D）で底部は突出し糸切が見られる。赤褐色を呈する。（109）は玉縁口縁をもつ中国製陶磁器碗。（114）は小壺で糸切底。（115）は砂岩製砥石で、一面が欠損する。（116—118）は碗高台部を利用した加工円盤。

SE11（図版15—131—157） 土田遺跡第II期の良好な資料で、碗は口縁端部に面、あるいは面を意識する形状のものが主体を占める。高台は大きく潰れるものがあり、切痕が著しい。底部は糸切痕を残すものが多い。皿は高台が欠損するも器高は比較的高いものが多く、底径は小さいものが多数を占める。底部はナデ調整が見られ、（142）はケズリが施されている。（152—154）は羽釜型陶器で、（152）は口縁端部がヨコナデにより丸く整えられ、（152）（154）は体部の器壁が薄い。（153）は口縁端部に面取りを施し、器壁は比較的手厚。（155—158）は碗高台部利用の加工円盤（A₁類）。出土遺物はすべて常滑窯産である。

SK24（図版16—158—161） （158—160）は常滑窯産の羽釜型陶器で、いずれも底部欠損する。（158・159）は同一手法で製作されたものと考えられ、口縁端部はヨコナデにより若干つまみ上げ状に直立する。形態は球形状を呈し、内面は板ナデを施す。

（160）は他に比べ器壁が厚く、口縁端部に幅広い面をもつ。体部の形状は直立し、球形を消失している。体部内面はヘラケズリ。

SD61（図版17—172—188） 土田遺跡第III期に所属し、碗は口縁端部が肥厚する形状のものが主体を占める。底部は底径が小さく、糸切はナデ消す。瀬戸窯産で、藤澤編年第6型式に相当する。皿は（182）が精製品で、他は口縁部が肥厚し、大きく面を持つもの多く見られる。（183・184）は羽釜型陶器でSD61上層より出土。（185・186）は壺Aの大小であり、端部は面を構成し、ややつまみ上げ状になる。（187）は土師器で糸切底、口縁部整形痕が表面に残る。（188）は碗高台部利用の加工円盤。

SE16 (図版18-189-210)

碗は口縁端部に面を持つものが主体を占め、

(198)は底部外面に「五」の墨書が見られる。皿は高台が見られないが、口縁端部はヨコナデで整え、器台が比較的高い。(209)は短頸壺で、外面に軸の痕跡が認められる。(210)は壺Aで、口縁端部は斜面を持つ。(204・205)は腕高台部利用の加工円盤。全体に常滑窯産と考えられ、中野編年 KN2-FS33 に比定できる。

SE20 (図版19-216-251)

碗は口縁端部が肥厚するものが主体を占める。

(226-229)は精製品で、(228)と(229)は碗の大・小を表示している。これらの精製品は田口編年第三期のもので美濃窯「均質手山茶碗」。(220)は底部高台が剥落し瀬戸窯産、藤澤編年第8型式に所属。皿は(244・250・251)が精製品。(231)は壺Aで口縁端部は上下に拡張し、幅広い面を構成、体部には押印が見られる。常滑窯赤羽編年第三期後半に位置づけられ、14世期代のものである。(233)は鉢Aで口縁端部は肥厚し、ナデる。(230)は重量感のある小壺で体部中位に一条の沈線を施し、下半は手動のヘラケズリが見られる。(232)は土師器鍋Aで、口縁端部は折り返す。(分類 D₁) (231)の壺及び土師器以外は美濃・瀬戸窯と考えられる。

SE10 (図版21-279-298)

土田遺跡第三期でも新しい様相を見せるもので、

碗の(279・280)及び皿の(289)という精製品を含み、碗(281)は高台が剥落し、口縁部にはヨコナデが見られず、工具による整形痕が端部まで明瞭に残る。(291)は瀬戸産鉢Aで口縁端部は外方へ拡張し、その上部に一条の沈線が施されている。(292)は鉢Bで口縁部は外傾し、端部には鋭い面取りが見られる。(293)は施釉陶器水注の口頸部で一部に把手の痕跡が残る、古瀬戸前期。(297・298)は常滑産壺Aで同一個体の可能性が高いもので、口縁はN字状に屈曲し、第IV期前半。(294)は陶丸で(295・296)は加工円盤。

SD64 (図版23-327-344)

土田遺跡第四期の遺物が出土した。碗(327-332)

は器高が4cm前後、口径12cmのもので精製品、美濃窯第四期に所属する。皿(333・334)はきわめて器壁が薄く、糸切の回転が強い精製品。(335-341,343-344)は施釉陶器で、古瀬戸中期末-後期初にかけてのものである。(335-337)は碗Aで所謂「天目茶碗」。(335)はケズリ出し高台で糸切痕が残る。(338)は底部に「七」の墨書が見られ、(339)は底内面に「オロシ目」を施す。

SD27 (図版24・25-350-413)

碗では口縁端部に面を持つ形状のものが主体

を占め、(362)は体部に「上」の墨書が2ヶ所認められる。皿は高台をもつ(374・375)から(369)のような精製品まで含んでいる。しかし(370-373)のような口縁部が肥厚しない形状のものが多くを占める。(383)(402)は常滑窯壺Bで頸部と体部との接点に刻目をもつ凸帯が見られる。(398-400)は同じく常滑窯壺Aで、口縁端部は面取りを施す。

土師器では(377)・(403)の皿類、(384)・(401)の鍋類が見られる。(377)は糸切底が見られる皿C。(384)は鍋Bで小型の粗製品。(401)は鍋Aで折返し口縁が見られる。(378~382)(404~413)は加工円盤で、多くは碗を利用して製作している。

SD41(図版26・27-414~458) 碗は底径が大きく、器高が低い形状のものが多い。その内やや形態の異なる(414)は瀬戸窯産で、また(423)はSD41最下部より出土している。

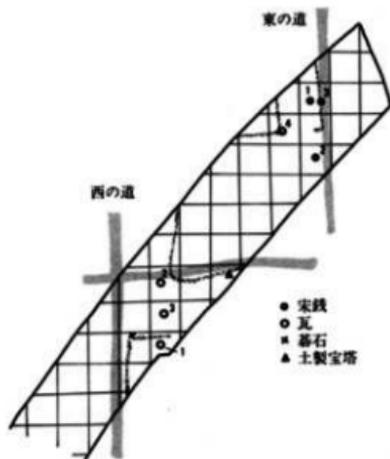
皿は高台の有無が認められるものの、器高が高い。(452)は短頸壺。(453・454)は羽釜型陶器で、(454)は厚手で、体部の形状は垂直に近い。(455)は壺Bの口縁部で、(456~458)は加工円盤。

SD42(図版28・29-459~536) 碗は口縁端部に面を持つもの、肥厚するものが多く見られる。その内(486・487)は精製品。皿は高台が欠損し、さらに口縁端部が肥厚し、幅広い面を持つものも含まれている。(527)は底部に数字を表示する墨書が見られ、(528)は底部糸切、分量が他のものと大きく異なる、(508・509)は精製品。(488)は中国製陶磁器碗底部。(532)は短頸壺で、施釉。(533)は羽釜型陶器、(534・535)は鉢Aで、口縁部は肥厚する。(536)は鉢Aの底部であるが、各破面に使用痕が認められ、研磨具として転用している。(529~531)は土師器で、(529)は折り返し口縁を持つ鍋A。(531)は鍋Bで精製品。

2 その他の遺物

瓦(第18図、1~4) 4点出土しており全て丸瓦の破片と考えられる。(4)はやや軟質で、凸面はヘラナゲ調整でワタタキの痕跡がわずかに残る。瓦当に接合された丸瓦部と思われる。(1~3)は灰白色硬質の丸瓦で、凸面ヘラナゲ。(2)は粘土板接合痕が見られる。その内(3)は玉縁付丸瓦で、玉縁部との接合部は刻線を入れて補強している。(1~3)は12世紀代鎌倉産の可能性が強く、(4)は清洲城下町遺跡出土品と酷似し、16世紀の作品と思われる。第16図のごとく、(1~3)は出土位置が近接し、「土製宝塔」の出土から特殊な建物の存在が推定できよう。

土製宝塔²⁾ 屋蓋部で(16.9×16.3cm、高さ5cm)、平面形は正方形を呈し、檼は型作りで造り出している。SD42とSD50が接合する地点より出土している。

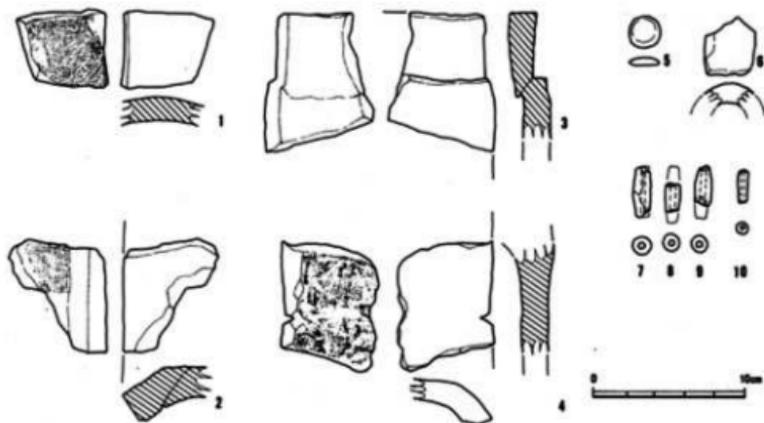


第16図
瓦・銭貨等出土地点



1 2 3

第17図 銭貨拓影



第18図 瓦・土鍾・基石

砥石

SE07(図版12-72)及びSE05(図版14-115)

より砂岩製の砥石が出土し、遺構からの砥石の伴出は土田遺跡第I期に限定できる。特にSE07, SE05では廃棄層より見つかっており、その関係が興味深い。両者は岩質が脆以し、(72)は台形で両斜面を特に研磨面とする。(115)は立方体を呈し、一面が大きく剝離しているが、一側面を除き研磨面としている。

銭貨(第17図 1-3)

調査区内より3点出土しているが、いずれも

遺構に伴っていない。第17図の(1)は元豊通宝(宋・鑄造年代1078)、(2)は熙寧元宝(宋・1068)、(3)は宣和通宝(宋・1119)で、11世紀後半~12世紀前半にかけての宋銭である。第16図からその出土が「東の道」浜いに集中することが認められる。

その他

第18図(6-10)は土鏝。(6)は大型品で(7

~8)は小型品。(5)は黒色を呈する偏平な石で、墓石の可能性が高い。また馬歯が59P区・SD27・SD41より出土している。

その他の時期(図版11)

奈良・平安時代の遺物も若干出土しているが、遺構に共伴しているものは(44)の須恵器杯(SK34)のみである。その他(41~43)の土師器甕口縁部と、(45~47)の須恵器杯が見られる。(45)・(47)は底部に糸切底を残すが、(46)はヘラケズリ。なお(45)は底部に「万」の墨書が見られる。

[注]

- 1) 埴輪片は8点出土しており、全て軟質密実焼成で淡青灰色を呈するものである。円筒形埴輪片と思われ、内外面はヨコハケを施す。当地域特有の埴輪で6世紀前半のものと考えられる。「土田遺跡」(『環状2号線関係埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』財団法人愛知県教育サービスセンター1984)50頁。
- 「土田遺跡Ⅱ」(『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』財団法人愛知県教育サービスセンター1985)88頁。
- 2) 「土田遺跡Ⅱ」朝日遺跡群発掘調査団1983。

第IV章 自然科学的分析

土田遺跡に関連して試料の微化石分析を、バリノ、サーヴェイ株式会社に依頼し、実施した。ここではその結果を受けて、土器胎土重鉱物分析、珪藻分析、リン・カルシウム分析の順に以下報告する。各々の報告は上記の依頼報告書に基づいたが、一部組替・変更を行い第4節を加筆した。その責はすべて編者にある。

1 土器胎土重鉱物分析

試料 土田遺跡B期（平安時代末～室町時代）に所属する土器（鍋A、鍋B、皿）及びそれに関連して、周辺の遺跡出土遺物を対象にした。試料名及び表面観察の結果は第4表に示す。

分析方法 土器片約10gを粉碎し、水を加え超音波洗浄装置により分散#250の分析篩を用いて水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後篩別に得られた径1/4～1/8mmの粒子をテトラプロモエタン（比重約2.96）により重液分離、重鉱物のプレパレート作製、偏光顕微鏡下にて同定した。不透明鉱物については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものをA、それ以外をBとした。表中の「その他」は変質等で同定不能の粒である。

同定鉱物粒数は250個を目標としたが、プレパレート全面でも100個に満たないものがあり、これらの試料の組成は、正しい値を示しているとはいえないが、参考としてグラフに載せた。「他の角閃石」としたものは、光学的性質からカミングトン角閃石である。

胎土の分類 土器に含まれる重鉱物珪藻の組成を手掛かりとして土器胎土の分類を行う。まず重鉱物組成の類似から、試料のグループ分けを試みた。

Aグループ (No 7, 3, 42, 43, 11, 17, 4, 12) 黒雲母の量比が多いことで特徴づけられる。

Bグループ (No 6, 15, 16, 22) 斜方輝石の量比が多いことで特徴づけられる。斜方輝石の他に角閃石が20%前後、単斜輝石が10%前後含まれる。

Cグループ (No 1, 19, 20, 21) 不透明鉱物A・B合わせて80%以上を占める。他に斜方輝石、角閃石、ジルコンを少量含む。ただし

試料Na19は不透明鉱物のAを含まず、また粉砕前の色調も他の試料が淡褐色、にぶい橙色であるのに対し、灰白色を示す。

Dグループ (Na 5, 8, 18) 不透明鉱物が最も多く、次に角閃石が多い。他に少量の斜方輝石、単斜輝石、黒雲母、ジルコン、ゼタロ石等を含む。Na18はカンラン石を含む。

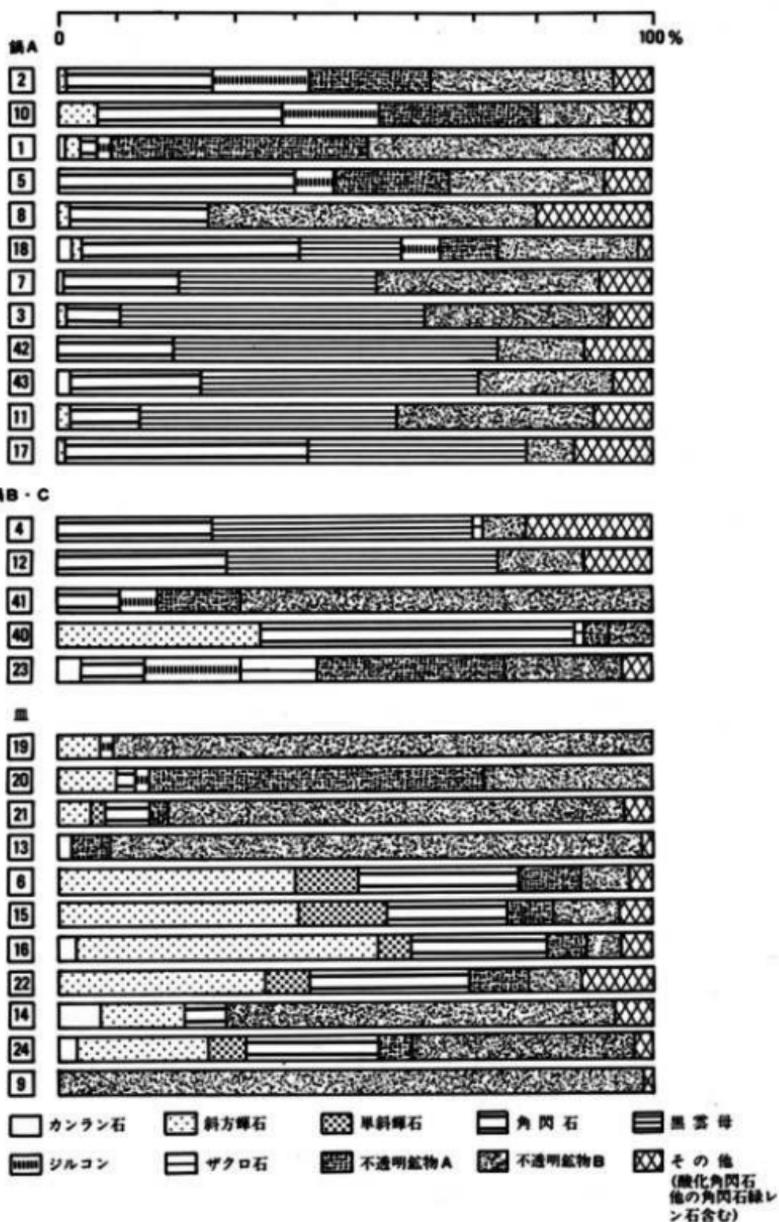
Eグループ (Na 2, 10) ジルコンの量比が比較的多いことで特徴づけられる。

Fグループ (Na40) 角閃石と斜方輝石の量比が他のグループには見られない。単斜輝石が非常に少ない。

同定鉱物粒数が100個にみたなかった試料については、重鉱物組成から見た試料の特徴を表わしていないものであり、グループ分けから除いた。今回の分析は、土器中に含まれている径1/4～1/8mmの重鉱物組成という胎土に関する情報の一部によるグループ分けであるが、同一グループ内の試料の粉砕前の色調及び表面の様子などは、ほぼ類似の傾向を示すことから、胎土全体の違いによるグループ分けを表わしていると考えられる。

第3表 重 鉱 物 組 成

試料番号	重 鉱 物 組 成											その他	同定鉱物粒数		
	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石		酸化角閃石	他の角閃石	黒雲母	緑レン石	ジルコン	ゼタロ石			鉱物不透明	
				緑石	褐色									A	B
2		3		66					4	43	1	54	82	15	268
10		9		42						22		35	5	5	134
1	2	4		5			4			4		72	67	6	165
5		2		107					5	4		54	71	18	274
8	1	4		60		3			4	1		153	49	277	
18	7	4	2	90		6		44	2	16		27	60	5	261
7	2			51		2		86	1	4		4	99	23	272
3		3	1	22		1		129					78	19	253
42		1		48				136	1		1	1	37	28	253
43		3	2	56				118		1	1	1	57	16	255
11		1	4	28		2		106		2			79	25	247
17	1	2	1	108		2		94		1	1	2	18	34	263
4			2	59	2		3	104	6	1	2	1	16	43	239
12		2	1	70	2			116	1		1	3	36	30	262
41				7								9	45		65
40	1	84		132						4	3	10	20	1	253
23	2		1	6					1	9	7	17	11	2	55
19		14		2						3			188	1	208
20	1	22		8						6		137	68	2	244
21		16		18								7	198	13	256
13			6									3	41	1	46
6	1	73	19	45	2					1		19	15	8	182
15		108	39	47	3	1					1	17	30	15	261
16	7	114	13	47	3				1			12	15	13	226
22	1	54	11	42		1						14	14	9	156
14	1	2				1							9	1	14
24	1	7	2	7								2	12	1	32
9				1	3								255		259



第19図 重 鉱 物 組 成

第4表 胎土分析試料

鍋A

試料番号	出土地点	色調(表・裏)	表面観察
2	土田中央区西 SE005	明褐灰・同	φ1mmの長石多し、石英混じる。
10	朝日西 59E SD01	明褐・灰褐	φ0.2~0.5mmの石英多し、黒色斑品少量あり。
1	土田 M7	淡褐・灰褐	φ0.5~1mmの石英・長石粒多し、チャート少量混じる。
5	土田北区 SD001	灰褐・同	φ0.5~1mmの石英・長石含む。
8	土田 59A SD01	灰褐・同	φ0.5~1mmの長石・石英多し。
18	朝日西 SD09北	明灰褐・同	φ0.2mmの石英・長石非常に多し。
7	土田 59B・C 粗堀	灰白・同	φ0.5mmの長石含む。黒色斑品微量あり。
3	土田 59A・SK13	灰褐・同	φ0.5mmの長石・石英多し、チャート少料あり、雲母片微量あり。
42	阿弥陀寺 61 SD03	灰褐・同	φ0.5~1mmの石英・長石・岩片多し。
43	阿弥陀寺 61 SD03	灰褐・同	φ0.1mmの長石・石英多し、雲母少量あり。
11	朝日西 59E SD01	灰褐・暗褐灰	φ0.5~1mmの長石・石英含む。
17	朝日西 SD09上	灰褐・同	φ0.5~1mmの長石・石英多し、チャート斑品あり、バブルウォール型火山ガラスふくむ。

鍋B・C

4	土田北区 SD001	灰褐・同	φ0.5~1mmの長石・石英多し、チャートの円礫あり。
12	朝日西 59E SD01	灰褐・同	φ0.5~1mmの長石・石英多し、雲母少量含む。
41	土田 M7	灰白・同	φ0.5mmの長石・石英・チャート少量あり。
40	土田 60C SK03	褐灰・同	極細粒の雲母片多し。
23	清洲城下町 60F SD03	褐灰・同	φ0.5~1mmの石英・長石少量あり。

皿

19	朝日西 SD09北下	灰白・同	φ0.5mmの石英微量あり。
20	朝日西 SD09中	にぶい橙・同	φ0.2~0.5mmの長石・石英多し。
21	朝日西 SD09中	灰褐・褐灰	砂粒はほとんど見られず。
13	朝日西 59E SD01	灰白・同	φ0.2mmの石英少量あり。
6	土田北区 SD001	灰白・同	φ0.5mmの長石・石英少量あり。
15	朝日西 59E SD01	灰褐・同	φ0.5mmの長石・石英多し、雲母少量含む。
16	朝日西 59E SD01	灰褐・同	φ0.5~1mmの長石・石英多し、チャート含む、雲母微量あり。
22	清洲町下町60F, SD03	灰褐・褐灰	φ0.5mmの石英微量あり。
14	朝日西 59E SD01	灰白・同	砂礫はほとんど見られず。
24	清洲城下町60F, SD03	灰白・同	φ0.5mmの石英少量あり。
9	土田 82 M7	にぶい橙・同	φ0.5mmの長石少量あり。

2 珪藻分析

試料 古墳時代前期に所属すると考えられる小溝群の内、SD13 (試料 No 1), 14 (試料 No 3) 溝内試料及びその間の基礎土壌 (試料 No 2) の3点について実施。
(図版 2)

分析方法 珪藻化石の抽出は以下に示す方法で行なった。秤量(10~15g秤量)→過酸化水素水処理→粘土分の除去→L字形管分離→散布→封入→検鏡。検鏡は、①珪藻殻の算定は、Xカニカルステージを用い縦線に沿って移動させ任意に出現する。珪藻200個体以上になるまで行なう(尚、珪藻の非常に少ない試料はこの限りでない)。②半分以上破損したものや溶解したものは1個体として数えなかった。また、細長い針状形の珪藻は先端が2個検出された時、1個体として数えた。またハイフォンで結んだ分類群は双方の区別が明確でないものである。

分析結果 各試料から検出された珪藻は、塩分濃度に対する適応性 (Halobion rate) を基準として真塩性 (海水生), 半塩性 (=汽水生), 貧塩性 (淡水生) に分類し, 貧塩性についてはさらに、塩分・水素イオン濃度 (pH), 水の流動性 (Current rate) の各生態区分も行ない第6表にまとめた。

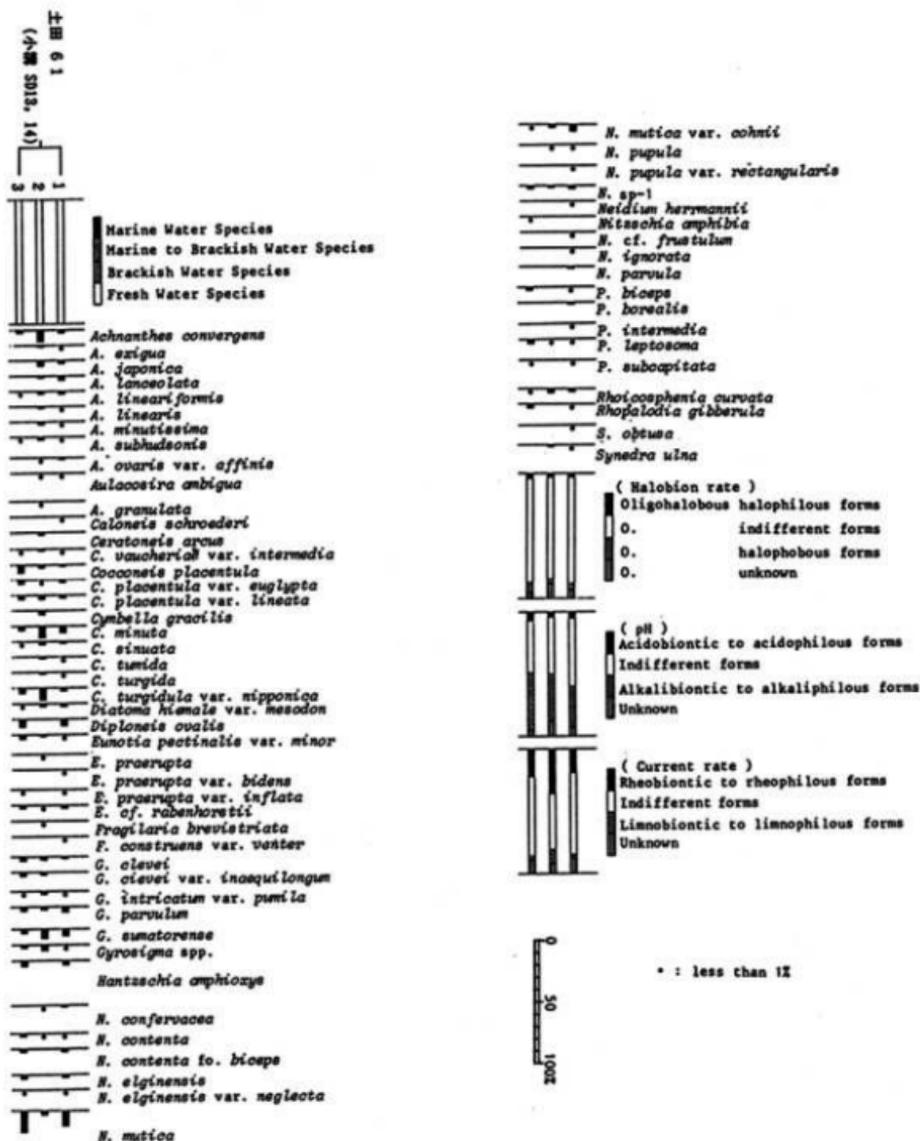
産出頻度の高い種については、全体を基数とする比率の珪藻化石群集変遷を第6表に示した (図中の帯グラフの内、最初に書かれた海水・海水・汽水・汽水・淡水の比率は全体基数, 最後に書かれた淡水生種の各生態性の比率は、淡水生種の合計を基数としている。なお、両帯グラフは100個体以上検出された試料について記してある)。

No 1・3 試料 No 1, No 3の珪藻群集は酷似しており、流水に対する適応性は、流水にも止水にも普通に出現する流水不定種と、流水に特徴的に出現する好流水種によって占められ、池沼などの止水域に多い好止水種は少なかった。また、水素イオン濃度 (pH) に対する適応性は、pH 7.0付近で最もよく生育する pH 不定種と、pH 7.0付近及びそれ以上で最もよく生育する好アルカリ性種がほぼ同率で、pH 7.0及びそれ以下で生育する好酸性種は少なかった。

多産種は、貧塩不定・pH 不定・流水不定の、Navicula mutica, Diploneis ovalis, Cymbella minuta, Gomphonema sumatrense, Hantzschia amphioxys, 貧塩不定・好アルカリ性・流水不定の Cocconeis placentula, C. placentula var. englypta, C. placetula var. lineata 及び、好流水性の Gomphonema parvulum, Cymbella turgidula var. nipponica, Achnanthes convergens, Gomphonema clevei, Navicula elginensis などである。

第5表 硅藻分析結果

Species Name	Ecology			L.R. (%) (100 SD13, 14)			Species Name	Ecology			L.R. (%) (100 SD13, 14)		
	S.R.	pH	C.R.	1	2	3		S.R.	pH	C.R.	1	2	3
<i>Desmodesmus salinarum</i> (Kütz.) Griff	Sub			-	1	-	<i>Gomphonema parvum</i> var. <i>virgatum</i> (Kütz.) Cleve	Oph-ted	ted	ted	1	-	-
<i>Achnanthes coarctata</i> H.Kohout	Oph-ted	ted	rph	5	26	2	<i>Gomphonema acuminatum</i> Fricke	Oph-ted	ted	ted	15	21	4
<i>Achnanthes salinarum</i> Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-	<i>Gomphonema sp.</i>	Oph-ted	td	td	1	11	2
<i>Achnanthes inflexa</i> Kasting	Oph-ted	td	rph	-	1	1	<i>Stenotela amplipennis</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	9	-	5
<i>Achnanthes japonica</i> H.Kohout	Oph-ted	td	rph	7	11	-	<i>Nitzschia coarctata</i> Grunow	Oph-ted	td	td	rph	1	-
<i>Achnanthes laevigata</i> (Detl.) Grunow	Oph-ted	td	rph	9	4	-	<i>Nitzschia amplipennis</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	ted	ted	4	1	-
<i>Achnanthes laevigata</i> Grunow	Oph-ted	td	td	-	1	-	<i>Nitzschia coarctata</i> Grunow	Oph-ted	td	ted	1	1	2
<i>Achnanthes laevigata</i> H.Kohout	Oph-ted	td	td	7	7	1	<i>Nitzschia coarctata</i> J. Nees (Arnold) Grunow	Oph-ted	td	td	7	2	-
<i>Achnanthes laevigata</i> Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-	<i>Nitzschia cyrtocapsula</i> Kasting	Oph-ted	td	td	1	-	-
<i>Achnanthes minutula</i> Kasting	Oph-ted	td	td	3	9	-	<i>Nitzschia cyrtocapsula</i> var. <i>ovata</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	-	-
<i>Achnanthes cf. minutula</i> Grunow	Oph-ted	td	td	-	1	-	<i>Nitzschia alpinensis</i> (Gr.) Griff	Oph-ted	td	rph	6	3	-
<i>Achnanthes sublaevigata</i> Grunow	Oph-ted	td	rph	1	5	1	<i>Nitzschia alpinensis</i> var. <i>neglecta</i> (Kütz.) Patrick	Oph-ted	td	rph	1	1	-
<i>Achnanthes sublaevigata</i> Grunow	Oph-ted	td	td	-	1	-	<i>Nitzschia media</i> Kasting	Oph-ted	ted	ted	27	9	28
<i>Achnanthes sublaevigata</i> Grunow	Oph-ted	td	td	-	2	1	<i>Nitzschia media</i> var. <i>colida</i> (Detl.) Grunow	Oph-ted	ted	ted	15	4	1
<i>Achnanthes sp.</i>	Oph-ted	td	td	1	-	-	<i>Nitzschia papillosa</i> Grunow	Oph-ted	ted	td	2	-	-
<i>Amphioxys salina</i> var. <i>affinis</i> (Kütz.) J. Nees	Oph-ted	td	td	4	1	-	<i>Nitzschia papillosa</i> Kasting	Oph-ted	ted	td	1	1	-
<i>Amphioxys salina</i> var. <i>parvula</i> Kasting	Oph-ted	td	td	1	1	-	<i>Nitzschia papillosa</i> var. <i>reticulata</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	ted	ted	2	-	-
<i>Amphioxys papillosa</i> Grunow	Oph-ted	td	td	-	1	-	<i>Nitzschia sp.?</i>	Oph-ted	td	td	5	3	2
<i>Amphioxys salina</i> var. <i>laevigata</i> (Detl.) Cleve	Oph-ted	td	rph	-	1	-	<i>Nitzschia sp.</i>	Oph-ted	td	td	td	-	-
<i>Amphioxys salina</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	rph	2	1	-	<i>Nitzschia affinis</i> var. <i>laevigata</i> (Gr.) Cleve	Oph-ted	td	rph	1	-	-
<i>Amphioxys parvula</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	rph	-	1	-	<i>Nitzschia karwinskii</i> Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-
<i>Caloneis bellii</i> (Gr.) Cleve	Oph-ted	td	td	1	1	-	<i>Nitzschia amplipennis</i> Grunow	Oph-ted	td	td	-	-	1
<i>Caloneis bellii</i> Grunow	Oph-ted	ted	td	-	2	-	<i>Nitzschia cf. frustulum</i> Kasting	Oph-ted	td	td	1	1	-
<i>Caloneis subrotunda</i> Grunow	Oph-ted	ted	td	3	-	-	<i>Nitzschia japonica</i> Grunow	Oph-ted	td	td	td	-	-
<i>Caloneis subrotunda</i> var. <i>nitens</i> Grunow	Oph-ted	td	td	-	1	-	<i>Nitzschia japonica</i> Grunow	Oph-ted	td	td	4	-	-
<i>Caloneis ovata</i> Kasting	Oph-ted	td	rph	-	4	-	<i>Pseudonitzschia salina</i> Grunow	Oph-ted	td	td	1	2	-
<i>Caloneis sauerbii</i> var. <i>intermedia</i> (Gr.) J. Nees	Oph-ted	td	rph	2	2	1	<i>Pseudonitzschia salina</i> Grunow	Oph-ted	ted	ted	4	-	-
<i>Caloneis sauerbii</i> Grunow	Oph-ted	td	td	-	1	-	<i>Pseudonitzschia salina</i> var. <i>diversa</i> Grunow	Oph-ted	ted	ted	2	-	-
<i>Caloneis sauerbii</i> Grunow	Oph-ted	td	td	4	2	2	<i>Pseudonitzschia gracilissima</i> Grunow	Oph-ted	td	td	td	-	-
<i>Caloneis pleurota</i> var. <i>neglecta</i> (Gr.) Cleve	Oph-ted	td	td	5	1	4	<i>Pseudonitzschia intermedia</i> (Lagard.) Cleve	Oph-ted	td	td	2	-	-
<i>Caloneis pleurota</i> var. <i>intermedia</i> (Gr.) Cleve	Oph-ted	td	td	5	9	4	<i>Pseudonitzschia japonica</i> H.Kohout	Oph-ted	td	td	td	-	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Detl.) Cleve	Oph-ted	td	rph	-	9	-	<i>Pseudonitzschia japonica</i> Grunow	Oph-ted	td	td	2	2	-
<i>Caloneis japonica</i> Grunow	Oph-ted	td	td	-	1	-	<i>Pseudonitzschia salina</i> Grunow	Oph-ted	ted	ted	2	-	-
<i>Caloneis japonica</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	-	1	-	<i>Pseudonitzschia subcapitata</i> Grunow	Oph-ted	td	td	3	2	-
<i>Caloneis minima</i> Grunow	Oph-ted	td	td	15	26	4	<i>Rhaphidocapsa coarctata</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	5	9	1
<i>Caloneis pleurota</i> A.Cleve	Oph-ted	td	rph	-	2	1	<i>Rhaphidocapsa sp.</i>	Oph-ted	td	td	2	-	-
<i>Caloneis pleurota</i> Grunow	Oph-ted	ted	td	4	7	1	<i>Rhaphidocapsa pleurota</i> (Gr.) O.Müller	Oph-ted	td	td	2	4	-
<i>Caloneis pleurota</i> var. <i>ovata</i> Grunow	Oph-ted	td	td	-	1	-	<i>Stauroneis acuminata</i> var. <i>inflata</i> H.Kütz. and K.Ard.	Oph-ted	ted	ted	-	1	-
<i>Caloneis pleurota</i> var. <i>parvula</i> Grunow	Oph-ted	td	rph	1	4	-	<i>Stauroneis ovata</i> Grunow	Oph-ted	td	td	1	-	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Cleve	Oph-ted	td	rph	-	1	-	<i>Stauroneis salina</i> Lagard	Oph-ted	ted	ted	1	-	-
<i>Caloneis pleurota</i> var. <i>affinis</i> Grunow	Oph-ted	td	rph	6	27	5	<i>Stauroneis pleurota</i> var. <i>laevigata</i> Grunow	Oph-ted	ted	ted	1	-	-
<i>Caloneis pleurota</i> var. <i>ovata</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	rph	5	7	1	<i>Stauroneis sp.</i>	Oph-ted	td	td	td	-	-
<i>Caloneis pleurota</i> (W.Smith) Grunow	Oph-ted	td	td	-	1	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Cleve	Oph-ted	ted	td	15	-	2	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	-	1	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> var. <i>ovata</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	rph	-	1	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted	td	td	1	3	-
<i>Caloneis pleurota</i> (Gr.) Grunow	Oph-ted	td	td	2	-	-	<i>Stauroneis salina</i> (Kütz.) Grunow	Oph-ted</					



したがって、No 1 (SD13), No 3 (SD14), の小溝試料は、流水の影響が推定され、水質的には中性～弱アルカリ性を呈していたと考えられる。

No 2 試料 流水に対する適応性は、前述の小溝試料に比較して、好流水種の割合が増加しているが、pH に対しては変わらない。また、好止水種も僅かに増加する。

多産種は、好流水性の Achnanthes convergens, Cymbella turgidula var. nipponica, 流水不定種の Cymbella minuta, Gomphonema sumatrense であり、Achnanthes japonica Gomphonema clevei, G. clevei var. inacquilongum, Diatoma hiemale var. mesodon, Gomphonema parvulum などの好流水種や、Cocconeis placentula var. lineata, Rhoicosphenia curvata, Cymbella sinuata などの流水不定種、Cymbella gracilis, C. tumida, C. turgida などの好止水種を伴なう。

したがって、No 2 試料は、No 1・3 と同様、流水の影響が推定され、水質的には中性～弱アルカリ性であったと考えられる。

小溝内試料 No 1, No 3 はともに流水の環境が推定され、当時は水の流れる小川のような環境であったと考えられる。しかしこのような環境は、溝以外の No 2 試料においても認められ、溝及び周囲の環境を問わず、広範囲に流水の影響を受けた水域の環境であったと考えられる。

3 リン、カルシウム分析

試料 土田遺跡 SX23 (図版 2) と大淵遺跡 60L 区 SK11¹⁾ の方形土壌 (中世期に所屬) 内・外から採取した試料の分析を実施した。

分析方法 ①試料は風乾して 0.5mm の篩を全通させて供試した。②水分は過熱減量法により測定。③一定量 (0.5g) を採取し、はじめに HNO₃ により、つぎに HClO₄ により過熱分解。④分解液の一定量を採取し、発色液を加えて比色法により全リン酸を測定。⑤別に分解液の一定量を採取し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光度法によりカルシウムを測定した。

簡別した試料は、過塩酸分解を行った後、リンについてはバナドモリブデン酸法により全リン酸 (T-P₂O₅) を、また原子吸光度法により全カルシウム (T-CaO) をそれぞれ測定した。

分析結果 土田遺跡 SX23 (試料 No 4, 5, 6) は土壌内より採取したもので、No 7 は掘形基盤層から採取したものである。結果は各試料ともにリン、カルシウム含量はきわめて低く近似した値を示している。

大淵遺跡 60L 区 SK11 (試料 No 2, 5, 6, 8, 9, 23, 24, 27) はすべて土壌内より

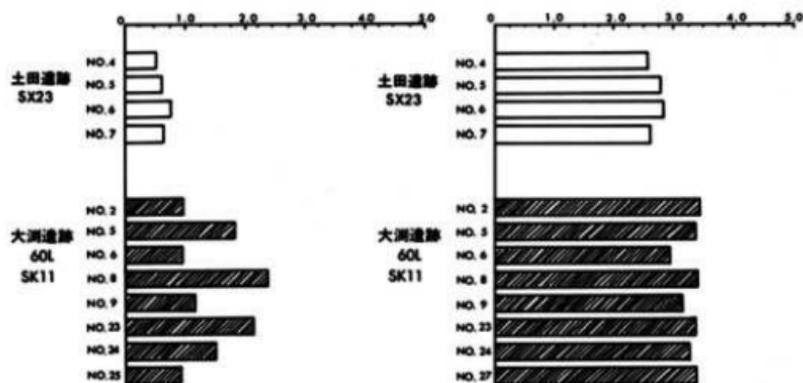
第7表 リン・カルシウム分析結果

注：リン・カルシウム含量は乾土1g
あたりのmgで表わす。

土 壌	試料番号	T-P ₂ O ₅ mg	T-CaOmg
土田遺跡 SX23	4	0.53	2.57
	5	0.63	2.79
	6	0.78	2.84
	7	0.66	2.62
大洲遺跡 60L区 SK11	2	0.98	3.45
	5	1.83	3.38
	6	0.96	2.94
	8	2.37	3.40
	9	1.17	3.14
	23	2.14	3.37
	24	1.51	3.28
	27	0.93	3.39

リン含量 (P₂O₅mg/g 乾土)

カルシウム含量 (CaOmg/g 乾土)



第20図 方形土塊試料リン・カルシウム含量

採取したもので、SX23 No.7のような標準的試料はない。結果はNo.2, 6, 27, できわめて低いリン含量を示しているのに対して、No.8, 23では若干高い傾向が認められる。カルシウム含量については、各試料とも高い含量とはいえないが、SX23より若干高い傾向が認められる。また、試料間では近似した値を示している。

以上の結果から土田遺跡 SX23 と大洲遺跡 SK11 とでは、リン、カルシウム含量に差が認められ、両土壌の内容物による区別ができる。土田遺跡 SX23 は標準試料 No.7 と他の試料とに差が見られず、近似した低い値を示していることから土壌内での内容物による影響は考えにくい。大洲遺跡 SK11 はリン含量をみる限り内容物の影響が考えられるものの、

標準試料による比較がない限り断定できない。また両試料に内容物の影響があるにしても目的とする内容物の影響によるリン、カルシウム含量とは考えにくい。したがって両土壌についても墓墳の可能性は低いと言える。

4 小 結

ここでは特に土器胎土分析について、その結果を踏まえて類推できる所をまとめてみる。土器胎土重鉍分析は中世期を中心とする鍋、皿について実施したが、分析試料の絶対量不足は否定できないため、きわめて概観的な問題にのみ言及することになる。

鍋 A 分析結果を基にすると、2つに試料を大別することが可能である。すなわち試料番号(2), 00, (1), 50, 08のまとまり (I類) と、(7), (3), (4), (4), 01, 07のまとまり (II類) である。後者は分析のAグループに全て所属し、その特色は黒雲母の比率にある。前者は分析のD・Eグループになり、凡そジルコンと角閃石の比率が目立つことになろう。鍋A (伊勢型鍋) の分類 (第V章) でいくと、B~D類がI類に所属し、E類はII類に限定できる。鍋Aの胎土変化は、口縁部分類でのE類の中で開始されることになる。E類はB~D類に比べ器壁がきわめて薄く「器壁の薄化」と「胎土変化」は相関関係を持つことが推測されよう。土田遺跡ではSE10 (試料No 3) 出土品 (図版21-290) がここで言うII類に含まれ、この時期を堺に胎土変化 (黒雲母の比率の増大) が推定できる。またSE07 (試料No 2) 出土品 (図版12-70) は胎土分析のEグループに所属し、ジルコンの比量が最も多く、ジルコンの比量が時期的な変化と同一歩調をとる可能性が考えられる。また産地同定の目安ともなろう。

鍋 B・C 鍋B (所謂鈔付土釜・羽釜) は2群に分けられる。まず試料番号(4) 02と(1) 02である。前者は胎土分析のAグループに所属し、すなわち黒雲母の比率によって特色づけられる一群である。後者は鉍物の粒数が少ないという共通性があり、つまり胎土に含まれる砂粒がほとんど見られない精製品と言えよう。前者と後者では砂粒の絶対量に大きな差があり、粗製、精製品の区別と重複する。土田遺跡では試料No 4はSD27 (図版24-384) 出土品で粗製の小型品。No 41はSD42 (図版29-531) 出土品で精製の「土釜」である。ここで注目すべきは鍋AのII類と鍋Bの「前者」とした粗製品が黒雲母の比量に特色される同一のグループである点にある。

試料No 40は鍋CでSX44 (図版30-560) 出土品であり、分析結果からも特異な比率 (輝石と角閃石が多く) を示す。したがって鍋Cは胎土分析結果より、鍋A・Bという伊勢型鍋・鈔付土釜の胎土変化とは、まったく異質な系統で生み出されてきた可能性が類推できる。

皿

2大別できる。一つは試料番号09002103と今一つは(6)0906220020である。前者は胎土分析のCグループに所属し、不透明鉱物が多くを占める一群になる。後者は同様に、Bグループに所属し、輝石の量比が多く、続いて角閃石が多くを占めるという特色が見られる。すなわち輝石と角閃石の量比により時期差を想定²⁾でき、胎土変化を設定できよう。

以上まとめてみると、鍋AとB(伊勢型鍋と鈎付土釜)の胎土変化は基本的に同調する動きと考えることができる。すなわち黒雲母の量比が多くなる時期をもって一つの画期を考えることができよう。鍋AのIとII類の胎土変化がこれに相当する。また鍋Bでみてきた粗製、精製の変化を加味すると、鍋の胎土変化に3つの段階を推定することが可能である。

- 第1段階 シルコンの量比が目立ち、不透明鉱物が多い。
- 第2段階 黒雲母の量比が圧倒的に多い。
- 第3段階 緻密、鉱物量が激減。

次に皿で見えてみると、やはり、不透明鉱物が多い一群から一変して輝石、角閃石の量比が多くを占める一群に大きく変化している。これらの変化は、鍋でみた第1段階と第2段階の変化とはほぼ同調する動きと考えてよい。すると第2段階の変化とはきわめて大きな意味をもってくるのであり、一つの画期を設定できる。土田遺跡では第2段階の鍋の変化は第III期に相当する。すなわち13世紀末～14世紀での画期を胎土変化から類推できることになる。なお第3段階の変化は粗製から精製品への変化であり、これらの変化が14世紀末～15世紀にかけて実施されてゆくことが理解される。加えて鍋Cのような新型器種が、単線的な鍋類の変化の中では把握できないことが、異質な胎土を保有する点からも推察できる。

その他胎土分析から、鍋と皿は同一、類似する胎土を使用するのではないという点が明確になり、各々異質の混合物をもつ。これは土師器生産に言及できる一つの手掛りを提供したことになる。土師器鍋、皿は各々の消費地独自の産物という観点では理解しがたく、一つの流通過程を経て一定の範囲に拡散するモノ³⁾である可能性が強く指摘できる。そしてそれは13世紀末～14世紀にいたり大きくその枠組が変動していくことが、胎土分析より想定されるのである。

[注]

- 1) 愛知県海部郡菖目寺町大河に所在する弥生時代と古代～中世期にかけての集落遺跡。大河遺跡の概要は財団法人愛知県教育サービスセンター年報II・IIIに記載。
- 2) 試料番号0900は朝日西遺跡(西春日井郡清洲町、年報II・III)SD09出土品で0900は同じく朝日西遺跡SD01出土品。前者から後者へは灰輪承陶器の編年から土田遺跡第II期とIII期にほぼ相当し(第V章)、輝石、角閃石が多いSD01出土品から、土田第III期に胎土変化を推定できる。
- 3) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」(『文化財論叢』1982)

第V章 考 察

1 土 師 器

土田遺跡における平安時代末期～室町時代にわたる「土師器」の出土量は、同時期の灰軸系陶器に比べ比較にならないほど少ない。凡そ皿と鍋類の2つの形態が見られる。

1) 鍋

本調査区では鍋類はA～Cの3つの形(第三章)が認められた。その内鍋Aとした「伊勢型鍋」が量的にも多くを占め、また変化を把握する状況が認められるため以下鍋Aを中心に記述する。

鍋A

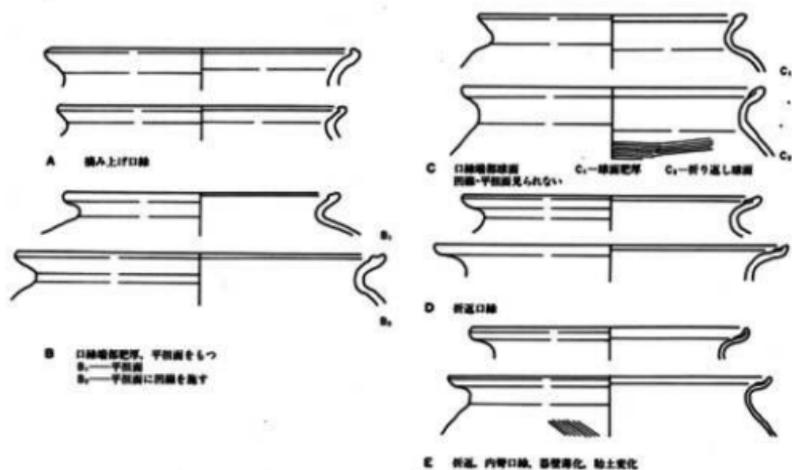
鍋Aとしたものは所謂「伊勢型鍋¹⁾」の範疇に含まれるものであり、その独特な形状から容易に識別が可能である。鍋Aを規定する最大の要素は、口縁部の特色と考えられ、その変化をもって時間の流れを推測することができる²⁾。

分類 第8表のようにA～E類に区分できる。これらの分類は、全体の形状について言及できる資料をもちあわせていないため、口縁部の分類を基軸とし、計測値、胎土等の特色を加えることにより実施した。A類は新田分類1, 2類, B・C類は3, 4類, D類は5類, E類は6類にはほぼ相当するものと思われる。

計測値 口縁部を中心に、特色ある部分の数値を、上記の分類を基にまとめたものが、第9表である。

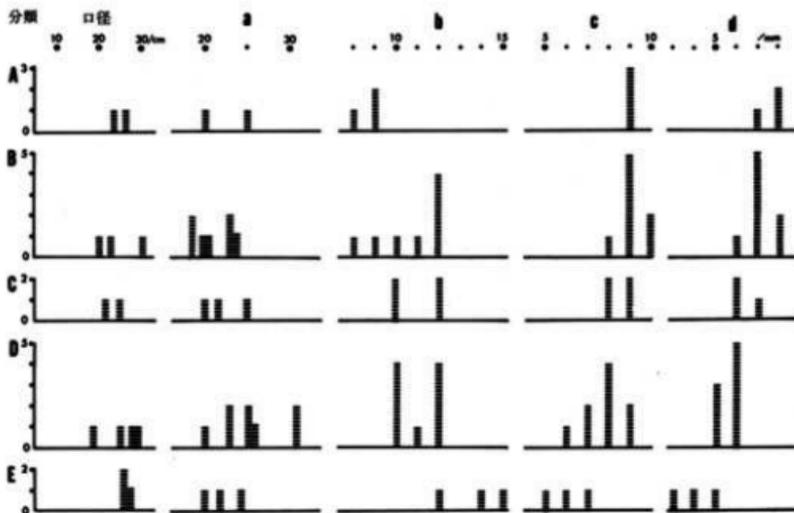
まず口径は24～28cmに集中し、伊勢地方で見られる大、中、小の法量分化は当地では見られず、中型品に限定される³⁾。口縁部の長はほぼ一定であるがD類の段階にのみ3cmを超すものが出現する。端部の把厚、折返し幅はA・B₁類が8～9mm, B₂～D類までが10～12mm, E類は12mm以上となり、変化の一つの目安となる。厚さはE類以降急速に薄化が進むことが窺える。なお胎土は同様にE類以降0.5～1mmの大粒子を含むものがほとんど見られなくなり、雲母の量比が増加(第四章小結)する。

第8表 鋼A分類



第9表 計測値

縦軸は個体数を表わす。



変化の3段階

A類においては土田遺跡で共伴関係は見られず、例えば尾張国府跡SK131⁴⁾出土品のように灰軸碗と共伴していることが知られている。B類ではSE07(図版12-70)出土品からB₂類が高台を有する皿と共伴し、SE01(図版13-88, 89)の在り方を加えれば、皿の高台製作の消略とB類からの脱却はほぼ同調する動きと考えられよう。C類についてはSK75(図版20-259)SX80(図版30-544)からB₂類と重複しつつ、SK75のように、折返し口縁に明確に移行した段階ではむしろD類と共伴するものと考えられる。D類の折返し口縁の明確化・視覚化は、B₂類の肥厚口縁における凹線の拡大と、C類の折り返し手法の積極的な表現との融合において出現してゆくものと推測される。E類はSE10(図版21-290)の資料より、精製碗、皿類の共伴に特色づけられる。D類からE類への変化の中で口縁折返しと、端部のつまみ上げ手法と器壁の均一化が加速される。以上を総合すると、3つの段階を設定することができる。

第1段階 肥厚口縁をもつB類の出現。高台付皿と共伴

第2段階 折返し口縁をもつD類の出現。

第3段階 胎土変化と薄化をとまなうE類の登場、灰軸系陶器精製碗、皿との共伴

鍋B～D

鍋Bは所謂「鈔付土釜、羽釜」類であり、厚手粗製品Aと薄手精製品Bに大別できる。鍋Cは口縁部が直口する茶釜型「土釜」で、すべて精製品。第21図(20・21)のように2つの形状が見られる。その他第21図(19)のような口縁部が著しく肥厚し、上方へ突出する形態が見られる。これらは「清郷型⁵⁾」鍋(鍋D)の範疇に含まれるものであり、各地の状況から鍋AのA類と主体的に共伴するものと考えられよう⁶⁾。

2) 皿

口縁部の形態、技法、法量により5類に分類する。A～C類は内型成形、D・E類はロクロ成型品である。

分類

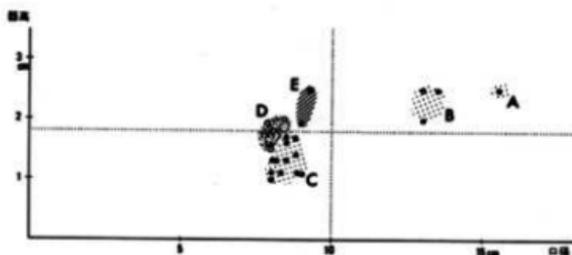
Aは口径15.5cm、器高2.2cmで器壁が厚く、緻密の大皿。Bは口径13cm、器高2～2.5cm。Cは口径8～9cmで器高1～2cmの小皿で、口縁は丸く仕上げ、ヨコナデにより稜を持つものと、指頭圧痕を明確に留める(第21図-3・4)ものがある。Dは口径8cm前後で、器高1.5～2cm、Eは口径9cm、器高1.8～2.5cmで底径が小さく、器

関係

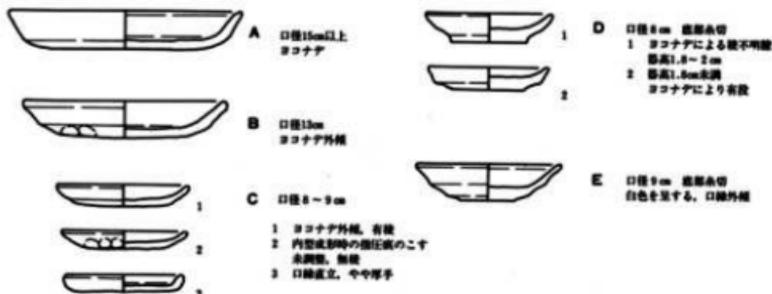
高が高く、白色を呈する土器。

皿D類はSE05(図版14-113)出土品の組成から鍋Aの第1段階とほぼ重複すると考えられる。その内(113)のような口縁ヨコナデで明確な稜をもたず、底部が突出し、底径の小さい形状のものと、第21図(13)のように有段化の体部と底径の大きい形状とが見られ、前者から後者へ漸次移行してゆくものと思われるが、後者はSX81(図版20-265)より高台の欠損する皿との共伴が推測され、鍋でいう第2段階まで残存する可能性が高い。皿D及びEというロクロ成形品は、鍋の第3段階には確実に共伴関係が認められず、第2段階の中で消滅し、その後は内型成形品のみが見られる状況が推定できよう。第2段階以降の皿はほぼ大・小という2つの量量に分化した形状が存在し、本調査区では第3段階以降、基本的には小型品(皿C)が唯一の器形としてわずかに存続するものと考えられる。なおこれら口径8~9cmという皿Cは口径の定量化に比べ器高のみが変化してゆくことが第10表から窺われる⁷⁾。

第10表
皿の量量



第11表 皿分類

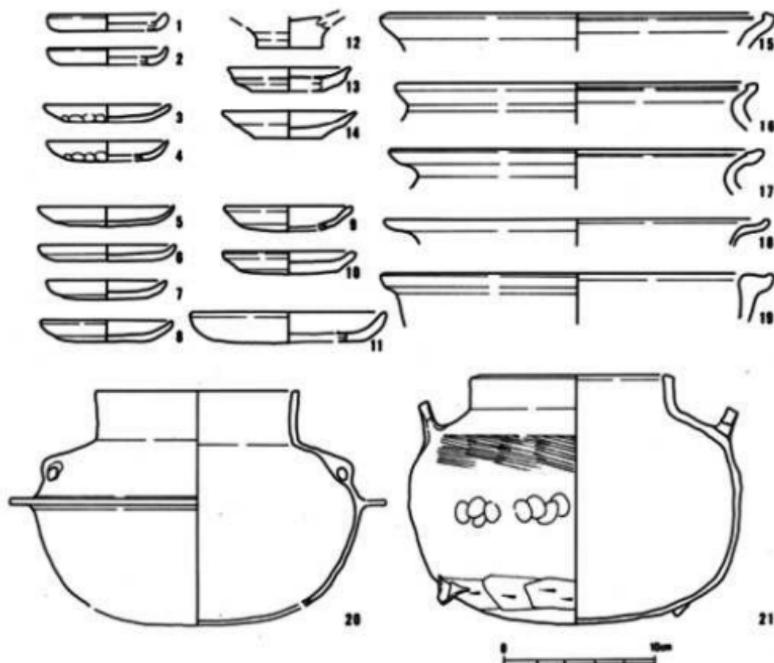


3) 土田第I~IV期の設定

鍋Aでみた第1~3段階の変化を基軸に、皿の変化を重ね合わせることで、土師器における器種、技法、法量の変化をI~IV期に区分し捉え直すことができる。

第I期は鍋AのB類の出現。すなわち「伊勢型鍋」肥厚口縁を主体とし、皿ではD類としたロクロ成形品が見られる。第II期は鍋AのD類、つまり折返し口縁が視覚化し、皿ではD類が器高底化と、体部有段化、底径は拡大する。現状では皿Eは第II期に限って認められる。第III期は鍋AではE類への移行、それに伴い器壁の薄化と胎土変化(第IV章)が見られる。また鍋Bが登場し、皿ではロクロ成形品がほとんど姿を消す。皿B、Cが主体を占める。第IV期は鍋Aが見られなくなり、鍋Bは粗製から精製へ変化する。

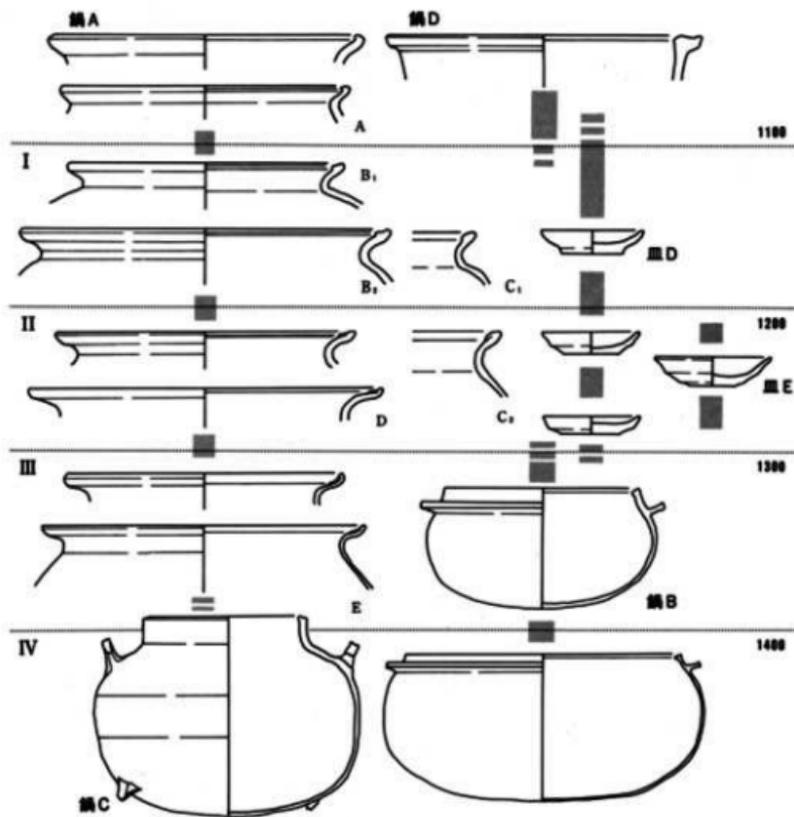
また鍋Cという新しい器種が加わってくる。以上まとめてみると、第I~II期へは、鍋Aを中心に、ロクロ成形品皿類を加えた時代。第III~IV期へは鍋類の胎土変化と新しい煮沸具の登場、そしてやがて粗製から精製へと大きく変わってゆく時代。以上2つの時代に大別できるのであり、その変換期である第III期に土師の最大の画期を求めることができる。



第21図 土器実測図

【注】

- 1) 新田洋「伊勢型鍋に関する若干の覚書」(『三重考古学研究』1 1985)。
- 2) 注1)と同じ。
- 3) 尾張地域では、管見による所中型品が多く認められ大型品、小型品は現状では搬入されていないようである。また新田分類7類以降の器形は当地域へ流入されていない。
- 4) 稲沢市文化財調査報告XⅧ「尾張国府跡発掘調査報告書」V 1983。
- 5) 岩野見可、大参義一「清郷遺跡」(『新編一宮市史』資料編4 1974) 21—34頁。
- 6) 「清郷型」鍋(D)は広義の折戸53号窯式の灰輪軸と共存することが知られており、現状では遺物集年VI期に主体的に存在する煮沸具といえよう。
- 7) 「皿C」についての用途を表示するものは見つからない。燈明皿としての使用痕は認められなかった。



第22図 土器変遷図

2 灰釉系陶器

灰釉系陶器は出土遺物の中で、最も多量に出土し、その変化をたどりえることができる資料である。そこでここでの目的を第1に器種の変化と共伴資料による様式の設定。第2に特に碗・皿の個体数の算出とその動態を把握することにおく。その方法としてまず口縁部に注目し、その変化と分類を手掛りにする。個体数の算出は口縁部計測法¹⁾を採用した。対象とする資料は遺構内資料を重視し、包含層遺物については第1義的に排除する方向で整理を実施した。なお本調査での碗・皿類口縁部破片総数は8335点であり、底部破片総数は7003点となる。

1) 灰釉系陶器とは

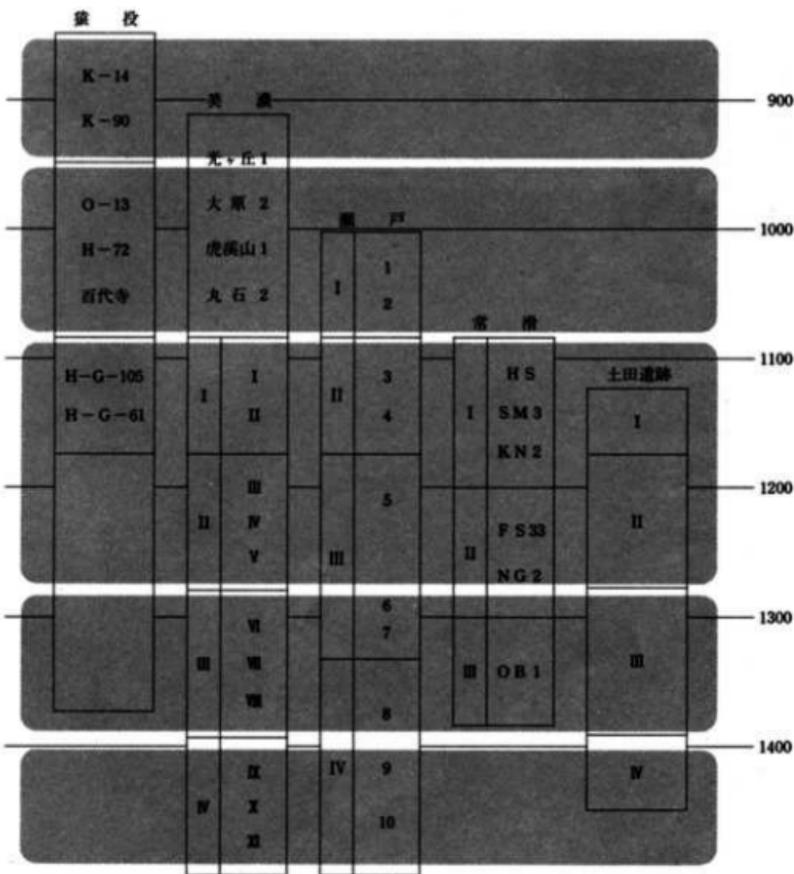
東海地域に古代～中世にかけて特色ある陶器生産が行なわれてきた。「灰釉碗」あるいはその生産から抜け出し独特な変化をたどってきた「山茶碗」と呼称される一群の器物を中心とする陶器類。この時代の主要な器種としての碗・皿は「灰釉碗」から「山茶碗」へと変化し、その変遷は、藤澤²⁾や前川³⁾が見通したように「灰釉碗」の継起的な変化の中で創出されてきたのである。

ここではこれらの研究成果を踏まえて、「灰釉陶器」及びその延長上に位置づけられてきた無釉の陶器類をも含めて、とりあえず「灰釉系陶器」と総称しておくことにする。灰釉系陶器についてはすでに生産地を中心に編年作業が進められ一定の方向が確立している。そこでここではこれらの研究を基に斎藤論文⁴⁾で明らかとなった法量分化及び変化を中心に大づかみな変遷をとりあえず確認すれば良い。すなわち基本器種「碗」を基軸にK-14・K-90段階では碗は、大・中・小の3つの器種が存在する。ところが0-53段階になると中型品を中心に法量が集中し、H-72・百代寺段階ではさらに細分化・複雑化という混沌とした状況が生じてくる。その中で「小型品」が新たに登場してくるという新たな動きもみられる。そして次のH-G-105段階では「大型」・「小型」の碗に明確に分化し、以降その延長の中で、各々器高・口径の一定の関係が生まれ、一つの方角（一定の原則に基づき）に法量が各々変化してゆく。（後述）そしてやがて一定の原則を基に法量が変わってきた関係が崩れ、やや混沌とした段階を経て新たな「碗」の法量が規定される。この段階は精製碗の中で生まれてくる変化であり、田口編年⁵⁾第IV期以降の器形がそれに相当するものと考え、基本的に「ミズビキ」技法と、この法量変化を同調させて考えることができる。（後述）

以上「法量」の分化及び変化の傾向により灰釉系陶器を5つに区分できるのである。す

なわち第Ⅰ期は碗の大・中・小による各々の法量変化を見るK-14・K-90段階。第Ⅱ期は法量変化の傾向が大きく崩れ、なお研究の余地が残るも比較的集中した法量が認められる0-53・百代寺段階。そしてこの混沌とした時期を経て碗の「大」・「小」が規格化する第Ⅲ期が出現する。この第Ⅲ期をもって「灰釉碗」から「無釉碗」へ100%移行する。土田遺跡で見られる碗の変化は第Ⅲ期～Ⅴ期にかけてであり、以下その変遷を具体的に記述することになる。

第12表 編年対比

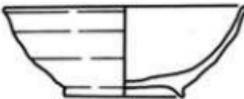
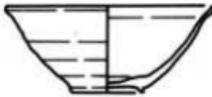


2) 碗・皿

分類

体部から口縁部に至る形状を基本に分類を行った。

碗

- A**  **A類**
体部内寄、口縁部丸く巻える。
- B**  **B類**
体部内寄し、口縁部外反
B₁ 口縁部細く丸利
B₂ 口縁部丸く巻える
B₃ 口縁部高取
- C**  **C類**
体部、口縁にいたるも変化なく外反。
C₁ 口縁部細く丸利
C₂ 口縁部丸く巻える
C₃ 口縁部高取
- D**  **D類**
体部外面の凹凸が著しい
口縁部肥厚
底径小さい。
D₁ 体部内寄傾向
D₂ 体部外反
- E**  **E類**
体部深く、器高指数45-49と最も高い。器影の深い碗。
精製品
- F**  **F類**
器型は均一化した精製品
体部は大きくひらき、口縁部は小さく高取る。
F₁ 体部外反
F₂ 体部内寄

皿

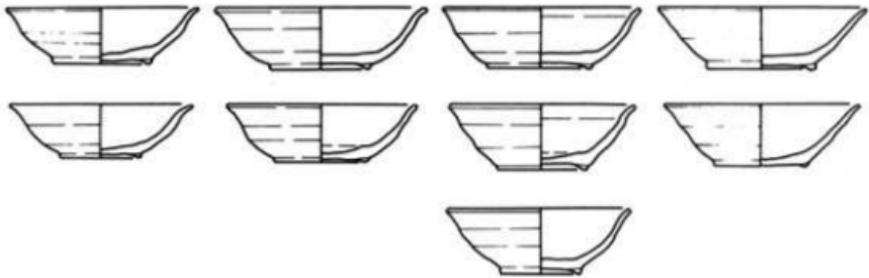
- A**
- 
- A₁**
 体部内等し、口縁部外反
 口縁端部は強く反り
- A₂**
 体部は口縁に向って外傾
 あるいは外反
- A類**
 高点を有する
-
- B**
- 
- B₁**
 底径が小さく、やや突出
 する
- B₂**
 体部外傾、外反
- B₃**
 体部内等傾向
- B類**
 高点を欠落するも、器高は比
 例的高い。
 ヲコナデにより体部が2段構
 成になるものが多い。
-
- C**
- 
- C₁**
 口縁外反
- C₂**
 口縁内等
- C類**
 口縁端部に突起、幅広い面を
 もつ
 器型は均一化
-
- D**
- 
- D₁**
 口縁外反
- D₂**
 口縁内等
- D類**
 E類に比べ器壁が若干厚い。
 増製品
-
- E**
- 
- E類**
 器壁が著しく薄い
 増製品
 器高1cm以下

椀

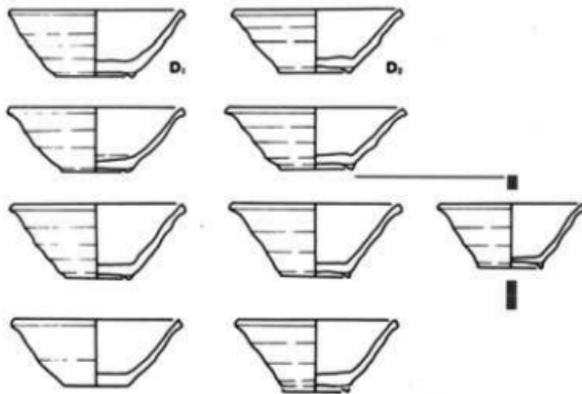
I



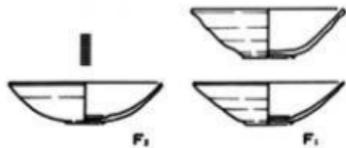
II



III

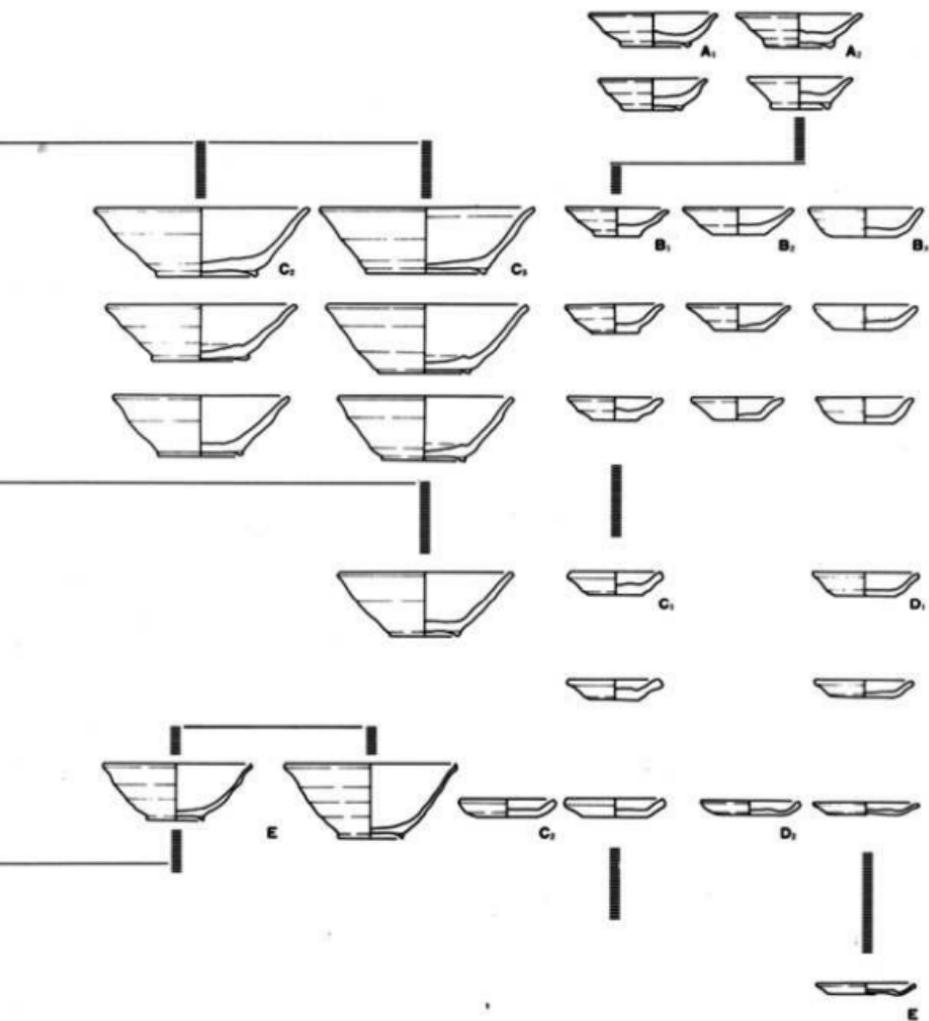


IV



第23図 椀・皿の変化

III

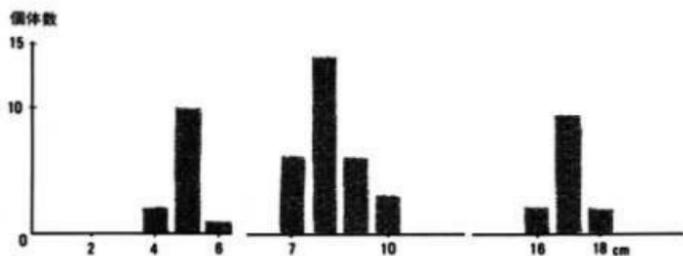


時期区分と法量

前記した土器器による時期区分を基に、遺構の重複関係を加えながら本遺跡の遺構内出土遺物を第Ⅰ～Ⅳ期に区分する。その代表的資料は、第Ⅰ期 SK05・SE05・SE07、第Ⅱ期 SE11・SE16、第Ⅲ期 SD61、SD65・SK67・SE10・SE20、第Ⅳ期 SD24・SE21 出土遺物である。以下これらの資料を中心に話を進める。

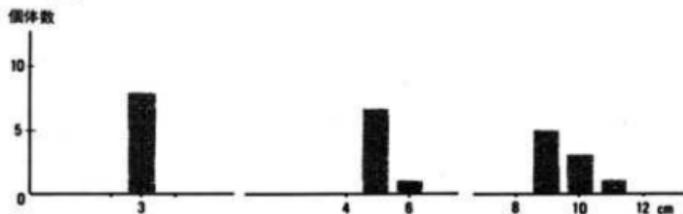
- 第Ⅰ期 SK05・SE05・SE07 出土遺物の碗については、第24図のごとく、口径17cm、器高5cm、底径8cmに中心を置き、口縁の分類では B₁類(29%)と C₁類(43%)が主体を占めることが理解できる。その内でも B₁類が口径18・17cmであるのに比べ、C₁類が18～16cmとなり、C₂類での16cmを考慮に入れると、C類に口径の縮小化が窺える。皿はA類に限定でき、A₂類の比率が78%と高い。口径9～10cm、器高3cm、底径5cmに中心を置くが、その内 A₂類は口径9cmを中心とする。A₁から A₂類への変化を口径の縮小化から類推でき、同様のことが底径の変化からも窺い知れる。
- 第Ⅱ期 SE01・SE16 出土碗類は、口径15～16cm、器高5cm、底径7～8cmに中心を置く。第Ⅰ期と異なり、B₂類・C₃類という口縁端部に面を持つタイプの碗が主体を占め(各々40%)基本的な形態となる。また B₂類 C₃類には器高の増加、C₃類では底径の縮小化が見られる。皿はA類にかわって高台が存在しないB類に限定される。その内 B₁類とした底径の比較的小さいものが全体の50%を占める。口径8cm、器高2cm、底径4～5cm。底径では B₂・B₃類が5cmに集中するのに比べて、B₁類は4cmと小さく一定の大きさを保有する。口径は B₁類に多様化ばらつきが見られ、縮小化が B₁類を中心に始まっていることが推測される。
- 第Ⅲ期 SD65・SK67・SD61・SE10・SE20 出土の碗をみても、口径14cm、器高5～6cm、底径6cmの数値に中心が認められる。B・C類がほぼ姿を消すが、C₃類のみ残存する。(21%)D類が58%と大多数を占め、口縁肥厚が基本的な形態といえよう。また新たにE類が登場する。口径では全体に縮小化が見られ、特にE類で顕著となる。器高は D₂・E類に増大傾向が見られ、底径は変ってD・E類に縮小化が認められる。皿は口径8cm、器高1～2cm、底径4～5cmとなり、特に口径は8

椀



口径 cm	器 高				底 径					口 径					合 計
	4	5	6	7	6	7	8	9	10	15	16	17	18	19	
A		10										10			7
B ₁		30					40					30	50		29
B ₂		10						25				10			7
B ₃			100				10					10			7
C ₁	100	40					40	75			50	40	50		43
C ₂		10					10				50				7
計	15	77	8				67	33			14	72	14		

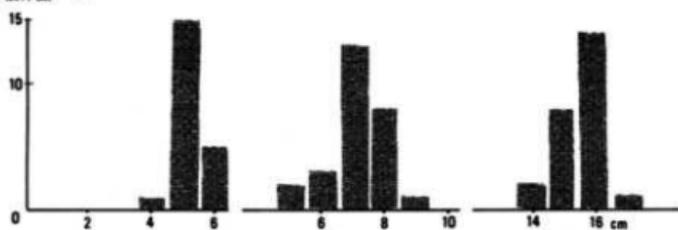
皿



口径 cm	1				2					3					合 計
	1	2	3	4	4	5	6	7	8	8	9	10	11	12	
A ₁			25			14	100					33	100		22
A ₂			75			86					100	67			76
計			100			90	10				56	33	11		

第24図 法量別形態の比率（第I期）

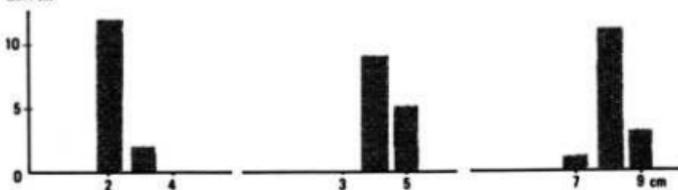
個体数 椀



口径 \ 器高	器 高				底 径					口 径					合 計
	4	5	6	7	5	6	7	8	9	13	14	15	16	17	
B ₁	100						10					13			4
B ₂		13						33					14		8
B ₃		47	40				50	50	100			62	38		40
C ₁															
C ₂		13			50		10						14		8
C ₃		27	80		50	100	30	17			100	25	38	100	40
計	5	71	24		10	10	48	29	3		8	32	56	4	

皿

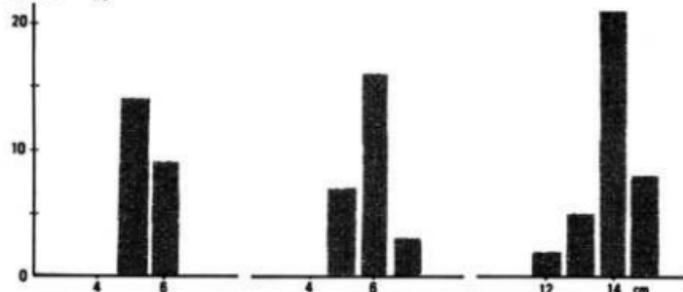
個体数



口径 \ 器高	0	1	2	3	2	3	4	5	6	6	7	8	9	10	合 計
	B ₁			50	50			70				100	45	50	
B ₂			42				30	50				45			38
B ₃			8	50				50				10	50		14
計			88	14			71	29			7	79	14		

第25図 法量別形態の比率 (第II期)

個体数 椀



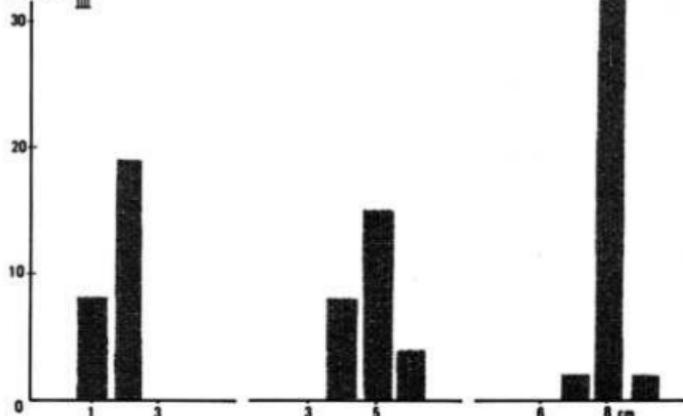
口径 (cm)	高			
	3	4	5	6
C ₂			14	10
D ₁			43	
D ₂			29	45
E			14	45
計			60	40

口径 (cm)	径				
	3	4	5	6	7
				18	
			14	29	
			28	40	
			58	13	
			29	71	

口径 (cm)	径				
	12	13	14	15	16
			40	10	40
				53	10
			60	21	25
	100		16	25	
	5	11	58	25	

合計
21
29
29
21

個体数 皿



口径 (cm)	径			
	1	2	3	4
B ₁	13	14		
B ₂		6		
B ₃		6		
C ₁	50	58		
C ₂				
D ₁	37	10		
D ₂		6		
計	30	70		

口径 (cm)	径				
	3	4	5	6	7
			37	6	
			13		
			6		
			25	76	50
			25	6	50
			6		
			30	58	14

口径 (cm)	径				
	5	6	7	8	9
				58	12
				4	
				8	
				50	60
					12
					100
				4	
				7	88

14
4
5
55
17
5

第26図 法量別形態の比率 (第III期)

cmに限定してよいほどの規格化が進む。器種はC類が50%を占め、その他D₁類(17%)・B₁類(14%)が続く。器高はC・D類に縮小化が著しく、底径は逆にC・D類に拡大化が見られる。

碗と皿の底径が近似的な大きさまでに接近する。

第IV期

SD64・SE21 出土遺物での碗・皿類は、個体数が少なく一つの傾向を示すに留まる。

碗はF類に限定され、他の器種はすでに消滅したものと考えられる。口径12cm、器高4cm、底径4cm。F₂類は各計測値にばらつきが見られ、器高・底径に縮小化が認められることにより、変化を内包した器種(次期へ発展)である可能性が考えられる。

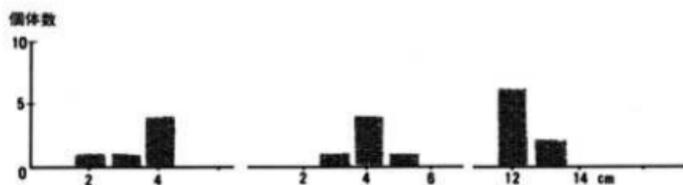
皿はほとんど、それ自身が消滅する傾向にあり、わずかにE類が見られるにすぎない。口径8cmとIII期から変化しないが、器壁は薄くなり、器高は1cm未満となる。底径5～6cm。底径における大きさまで碗と皿が逆転する。

比率

第I～IV期までの碗・皿分類の構成をまとめたものが第28図である。第I期は碗B₁・C₁類が主体を占め、皿はA類との組合せ。第II期はB₂・C₂類が主体を占め、皿ではB₁・B₂類。第III期になるとD類が多く見られ、これにE類が加わる。皿ではC類が中心でD類が加わる。第IV期になるとほとんどの器種が消失し碗F・皿E類に限定される。

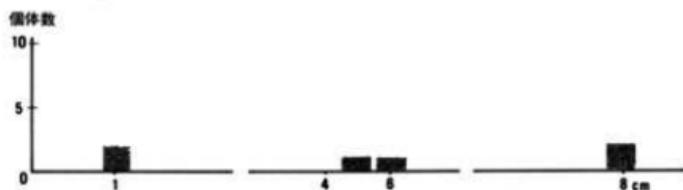
以上の基本器種の変遷を基に、法量の変化を見てみると、法量に変化する器種は各時期ある特定のものに限定でき、その変化から次の時期を代表する器種が見い出されていく傾向が認められる。例えば碗ではD類に見られる口縁部の肥厚は、C₂類においてその指向が窺える。皿ではC類に見られる口縁の面取りはB₁類の内に見い出されるのであり、B₁類の法量変化からC類が産みだされてゆく過程が推測されよう。しかしこれらの変遷に非連続性が見い出させる場合もある。例えば碗E・F類、皿D・E類の登場である。これについては生産地との関係を重視しなくてはならない。

椀



器 高					底 径					口 径					合 計
口径 cm	1	2	3	4	1	2	3	4	5	11	12	13	14	15	
F ₁			100	75				100				67			50
F ₂		100		25			100		100			33	100		50
計		17	17	66			17	66	17			75	25		

皿



口径 1				口径 4			口径 6			口径 8			合 計
口径 cm	1	2	3	4	5	6	5	6	7	8	9		
E	100					100	100				100	100	
計	100					50	50				100		

第27図 法量別形態の比率（第IV期）

碗

	A	B			C			D		E	F	
		B ₁	B ₂	B ₃	C ₁	C ₂	C ₃	D ₁	D ₂		F ₁	F ₂
I	●	■	●	■	■	●						
II		●	●	■		●	■					
III							●	■	■	●		
IV											○	

皿

	A		B			C		D		E	50%以上	25-50	10-25	10%	未測
	A ₁	A ₂	B ₁	B ₂	B ₃	C ₁	C ₂	D ₁	D ₂						
I	○	○													
II			○	■	●										
III			○	●	●	○	●	●	●						
IV														○	

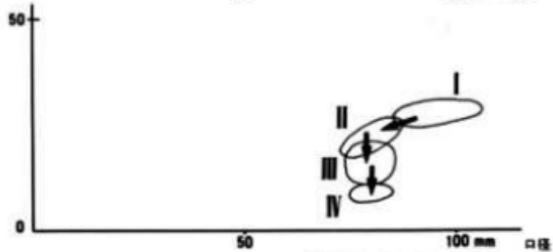
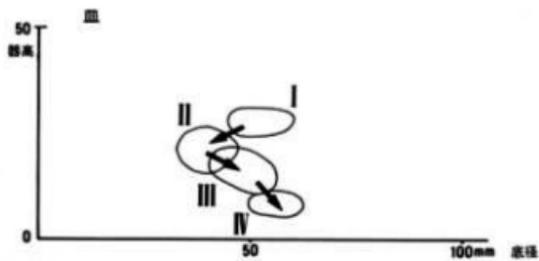
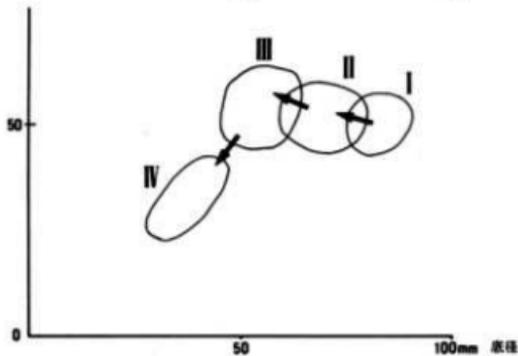
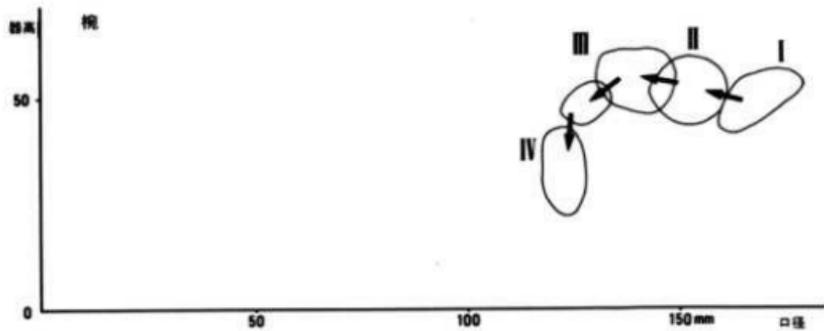
第28図 器種別比率

法量の傾向変化

第29図は碗・皿の器高・口径及び器高・底径の時期別推移グラフである。まず碗では器高・口径でI～III期とIV期の間に大きな変化が認められる。I～III期では口径は一定の割合で縮小し器高はむしろ一定の割合で増大している。そしてIII期で最大となり、III期内部で器高の縮小と口径の縮小が進む。IV期になると口径が一定化し、器高だけが一定の割合で低下している。第III期の口径・器高の同時縮小化現象に法量変化の一つの法則が隠されているように思われる。底径はI～IV期一定の割合で縮小しているものであり、そこに何らの変化は認められない。つまり「底径」の「大きさ」が一つの時期決定の目安となることが読みとれるのである。

皿では第I～II期の間に変化を見出しえる。すなわちI期では一定の割合で口径の縮小化、器高の縮小化が進み、それが第II期に受け継がれ、その内部で一定の口径の大きさが規格化される。したがってII～IV期へは器高のみが一定の割合で減少するのみという傾向が見い出される。底径も同様にI～II期の間に画期が見られ、I期では底径が一定の割合で減少し、II期内で底径が最小になり、それ以後逆に一定の割合で拡大する傾向が確立する。

以上を総合すると、碗ではIII～IV期に、皿ではI～II期に一つの法量変化での画期を、設定できる。前者を「碗の傾向変化」、後者を「皿の傾向変化」とする。



第29図 椀・皿の法量

法量分化的現象

第29図から明らかのように基本的に、腕・皿とも法量分化が見られない。ある時期一定の数値を保有する形状のみが生産されたにすぎない。しかし一見強固に見えるこの法量の規格化は、詳細に見てゆくことにより一つの異様な現象が浮びあがってくる。それは腕の器高・口径の表の中に表われた第三期内での変化に見られる。具体的に見てゆく。腕 D₁類の SK67 (図版22) (304) と (307) の関係。あるいは腕 E 類の SE20 (図版19) の (228) と (229) の関係である。腕の「大」・「小」の関係が存在する。まさに法量分化的な現象である。腕 E 類の在り方は生産地においても同一の窯内⁴⁾で発見されるのであり、ある時期腕の「大」・「小」が併存することは確実である。ところがこの腕の大・小はそれ以降・明確な形で存続することは全く認められないのであり、きわめて単発的な、特異な現象といわざるをえない。そこでこの現象をさきほどの「腕の傾向変化」という視点より捉え直すと、この法量分化的現象は、以下のように理解される。すなわち第三期内において一定の割合で口径の縮少と器高の増大が進み、一つの到達点を迎えると、その後そのカタチを相対的に縮少する方向において、新しい法量変化の傾向を見い出そうとした軌跡と考えられる。一見法量分化的な現象を生み出すことにより、新しいカタチを創出する手段と理解しえる。同様なことが皿においても見い出せるのであり、I～II期の「皿の傾向変化」も、法量的には、法量分化的、相対変化において新しい形、B類を出現させたものと考えられる。この点においては皿のA類とB類との間で「小腕」から「皿」へ呼称を変更させることに同意できる⁷⁾

腕・皿ともに法量分化的現象を一つの契機として新しいカタチを創出した。

腕と皿の関係

本調査区において、腕・皿がどのような比率で使用されていたのかを考えてみる必要がある。第13表は前述した第I～IVの基準資料に、多くの遺物が出土した溝状遺構の資料を加えたもので、口縁部計測法により算出した個体数である。話を進める前に第IV期の資料は除外することをことわっておく。理由は、第1に個体数が著しく少ない。第2に「皿」自体の消滅という特色的な現象が見られる点にあり、したがって有効性がないと判断するからである。

第I～III期の総個体数を算出し、腕を1とした時の皿の比率を算出することを主眼におく。第13表の結果より、まず基準資料においては腕1に対し皿0.9・溝では腕1に対し皿は0.9あるいは0.99という数値を得た。合計腕1に対し皿0.92となり、腕は10個に対し皿9個の組合せが推測される。統計処理上の誤差、遺構の在り方を加味し、単純化を恐れず提示すれば腕1に対し皿1が対応することになる。

第13表 腕・皿個体数とその比率

腕

分類 時期	A	B	C	D	E	F	合計
I	0.13	3.92	2.45				6.50
II		8.16	4.59				12.75
III			2.17	9.96	4.00		16.13
IV						1.84	1.84
S D41	0.67	8.96	3.34				12.97
S D42		0.96	2.29	3.62	0.42		7.29
S D27		1.37	6.05	1.17			8.59
合計	0.80	23.37	20.89	14.75	4.42	1.84	66.07

皿

A	B	C	D	E	合計
5.83					5.83
	10.62				10.62
	3.17	8.67	3.54		15.38
				0.21	0.21
1.29	4.33				5.62
	5.79	6.63	0.58		13.00
0.46	4.42	2.67	0.96		8.51
7.58	28.33	17.97	5.08	0.21	59.17

	腕	皿	比率
I～III	35.38	31.83	1 : 0.90
S D41・42	20.26	18.62	1 : 0.92
S D27	8.59	8.51	1 : 0.99
合計	64.23	58.96	1 : 0.92

土田遺跡においては椀・皿の用途問題を排除しても、1:1の組合せが一般的な関係であったと推定する。

技法と道具

椀の製作技法について大きく2種ある。技法Aは、基本的に須恵器技法を踏襲する、粘土紐積み上げ、ロクロ回転整形の手法を持つもので、技法Bは、ロクロミズビキ技法を意味する。本調査区出土遺物の大半は技法Aに基づく製作であることは、各部所で確認される粘土紐の痕跡から明白である。この点はすでに中野⁹⁾が指摘している。

そこで技法Aについて今少し詳細に見てゆく必要がある。この成形技法は第1～3工程に大別され、第1工程は粘土紐積み上げ¹⁰⁾後手動による整形という素形作り工程。第2工程はロクロの回転力を使用した整形工程で、形状の再生を意味し、製作者のイメージがカタチとしての特色を志向する段階であり、同時に道具を使用し鋭利さを追求する。(工具整形)その後口縁部を調整(多くはヨコナデ手法)し、ロクロ上部の粘土塊からの切断を行う。(糸切技法)第3工程は糸切により単独化した個体を改めて整える段階で、一定の小乾燥を必要とする。底部の調整と高台製作、そして高台製作に伴う体部下半外面のミダレ¹¹⁾を調整(外面調整)し終了する。第1～第3工程後乾燥工程へと連続する。

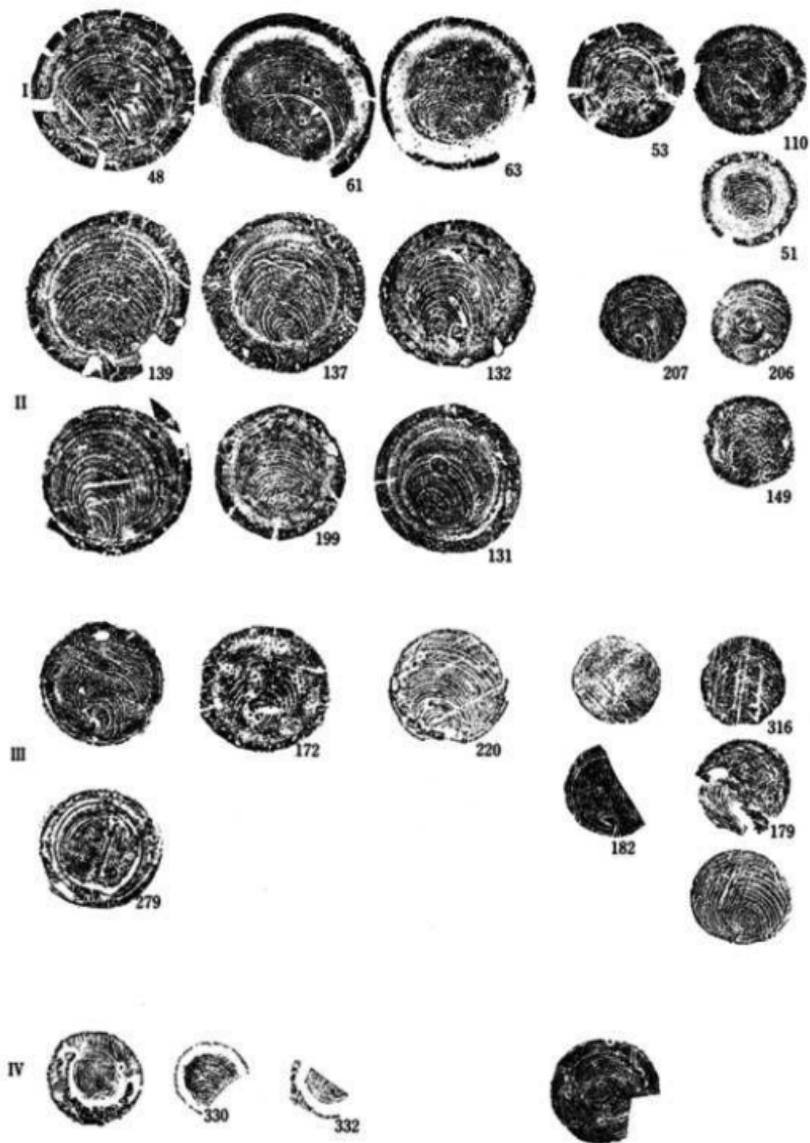
さて第1～第3工程内には各々様々な手順が見られる。これらの手順の変化が各時期の器形の特色を導き出している。そこで次に手順を単純化し、第I～IV期の製作に言及する。

- 手順——A 第2工程において、工具整形がきわめて入念に実施され、したがって体部から口縁部へ向けて器壁の薄さと、平滑さを表現する。第3工程の高台製作と外面調整は同様に実施される。
- 手順——B 第2工程において、工具整形が体部と底部に分離し、しだいに底部での整形が粗雑化する。と同時に底部内面中央に出現した工具離脱痕を指で調整(指頭調整)することが多く見られる。やがて指頭調整に別の意味が付加され独立する¹²⁾。第3工程の外面調整は早くも省略し、外面に泥漿化が目立つ。
- 手順——C 第2工程での工具整形が特に体部を中心にのみ施され、その後口縁部の調整(ヨコナデ)も省略される。第3工程はほとんど意味をなくし¹³⁾、最終的には省略される。

ロクロ回転力の利用と、工具整形による素形変化という2つの観点から手順A～Cを捉え直してみると、以下の3つの点が注目される。1、第I期～第III期への器形変化の中で体部の彎曲から直線化への動きが認められる。2、第30図から明らかなように、底部糸切痕に見られる回転力利用が減少する。3、体部の泥漿化が著しくなる。以上の諸点を

(II)

(III)



第30图 壳·皿底部拓影 1/3

総合すると、粘土紐積み上げ技法による、直接的な素形が、すなわち碗の「カタチ」であるという方向に進んでいることが認められよう。つまり手順Aでのカタチの「再生」は徐々に後退し、手順B～Cへは素形そのものが碗の形として理解され、ロクロ使用は単に回転台としての役割へ転化していったものと推測される。無軸碗は各種の手順を省略しやがて第3工程をも省略しようとした手順Cにおいてカタチとしての限界が決定的となっていたのである。

第I期の碗は手順Aが主体をなし、第II期になると手順Bが多く使用され、第III期後半にいたると手順Cが登場してくる。

ところで第30図の糸切痕の拓影から興味深い変化が見られる。すなわち第IV期にいたるとロクロ回転が再び圧的に強くなる点である。これは第I～III期へのロクロ回転惰力の消極的使用方向とはまるで異なる状況といえる。第IV期といえは、碗は「傾向変化」が成功した段階に相当し、F類の登場が見られた。F類は器高が底く、器壁の薄化、均一化が見られるのであり、ロクロ回転力の積極的使用を加味すれば、技法Bによる成形を推定できるものと考えられる。すなわちロクロミズビキ技法の採用である。するとF類とは技法自体に大きな画期を設定できるのであり、碗は基本的にA～E類の技法Aと、F類の技法Bに大別され、そこに非連続的状況を想定する。「碗の傾向変化」とはこの間の断絶に至る道程と位置づけられよう。

年 代

前川論文¹⁴⁾の中で広義の折戸53号窯式を10世紀～11世紀末に位置づけている。灰軸碗から転化した無軸碗は平安京白河北殿北辺 SE25 において瓦器(橋本編年I-9期)と共伴¹⁵⁾し、土師器では平安京III期新と共伴することが指摘され、11世紀末(瓦器I期の中で)には出現していることが確認されている。また同じ平安京で瓦器III期¹⁶⁾に共伴するものは、本調査区でのB・C類の3段階の器形にはほぼ相当するものと考えられる。ところで皿のA～B類への変化については、皿A類と平安京IV期古段階の土師器とが共伴し、12世紀前半代まではA類が主体であると推測できよう。藤澤¹⁷⁾、中野¹⁸⁾も高台付皿の欠損を12世紀後半の中においており、皿の高台の消失については各方面ではほとんど一致を見ているものと思われる。上記した平安京での在り方に東大寺旧境内¹⁹⁾の状況を考え合わせると、土田遺跡第II期～第III期への移行を13世紀末に位置づけられるものと推定する。以上まとめてみると土田第I期は12世紀前半を中心とし、第II期は12世紀末～13世紀、第III期は13世紀末～14世紀に比定できる。また第IV期はSD64出土遺物に見られるように、古瀬戸後期及び美濃窯第IV期に所属するものが出土していることにより、15世紀前半に中心をおくものと思われる。

3) 鉢・壺・釜

鉢

鉢の形態は大きくA・Bの2者が認められる。その内比較的量が多いA形態について言及し、第I～IV期との対応を考える。

口縁部による分類では第15表のようにA～Dの4類に区分できる。A類はSE07(図版12-69)において第I期に所属し、B類はSE20(図版19-233)、SD42(図版29-534・535)の状況から口縁端が著しく肥厚するB₁類が第III期に伴うことが理解できる。C類はSE10(図版21-291)より出土し、第III期後半に位置づけられよう。D類はSE21(図版23-345)から第IV期に所属する。当調査区では鉢類は基本的にB～D類は瀬戸窯産と考えられ、第III期以降鉢・碗とも瀬戸窯を中心に搬入されて行くことが推測される。なお碗及び鉢の口縁肥厚は同調する動きであり、したがってB₁類²⁰⁾は第II期に含めて考えることができる。なお鉢B形式は土田第III期より出現してくる。

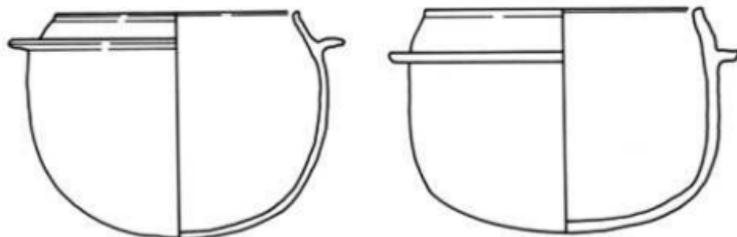
壺

壺Aは常滑窯産であり口縁部の分類から第15表のように3つに分けて考える。遺構での共件から凡そA類は第I～II期にかけて、B類は第II～III期にかけて、C類はIII期後半には確実に出現しているものと考えられる。常滑窯赤羽編年²¹⁾ではC類、すなわち面からN字口縁への移行を常滑窯III～VI期の変化に置き、14世紀前半には登場するとしている。土田遺跡第III期(13世紀末～14世紀)の中でN字口縁が共件する点において一致を見る。

釜

常滑窯産の羽釜型陶器は本調査区では土田第II～III期にかけて出土し、特に第II期に集中する傾向が見られる。SE11(図版15-152～154)の状況(A類に限定)よりB類の出現を第II～III期に移行する段階と推定できよう²²⁾。

第14表 釜の分類

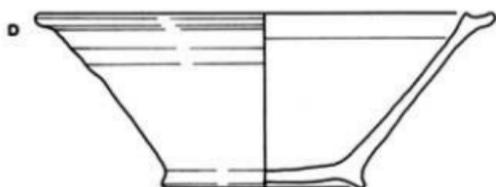
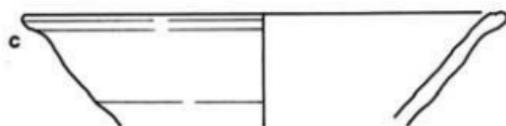
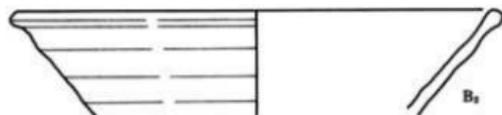
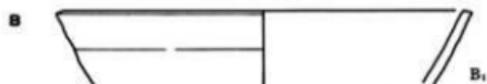
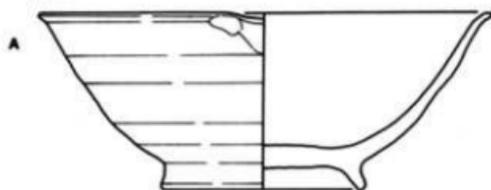


A 外部球形、器壁薄く内面ココヘケズリが多く見られる。増縁ココナテ、丸く整えるもの、円縁を築すもの、面取りを施すものあり。

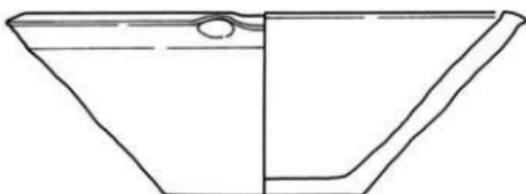
B 縁部U字形、器壁厚く、内面ナゲル。増縁は幅広い面取りを施す。

第15表 鉢の形式と分類

鉢A



鉢B



鉢A

A類 体部内傾，端部外反
細く鋭利

B類 体部外傾

B₁ 口縁端部面取

B₂ 口縁端部肥厚

C類 体部外傾

端部外方へ若干突出
上面に沈線

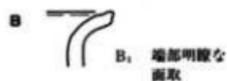
D類 端部外方へ大きく突出
し凹面を構成

第16表 壺Aの分類

壺A



端部細く鋭利



B₁ 端部明瞭な
面取



B₂ 上・下方に
肥厚



端部鋭曲

〔注〕

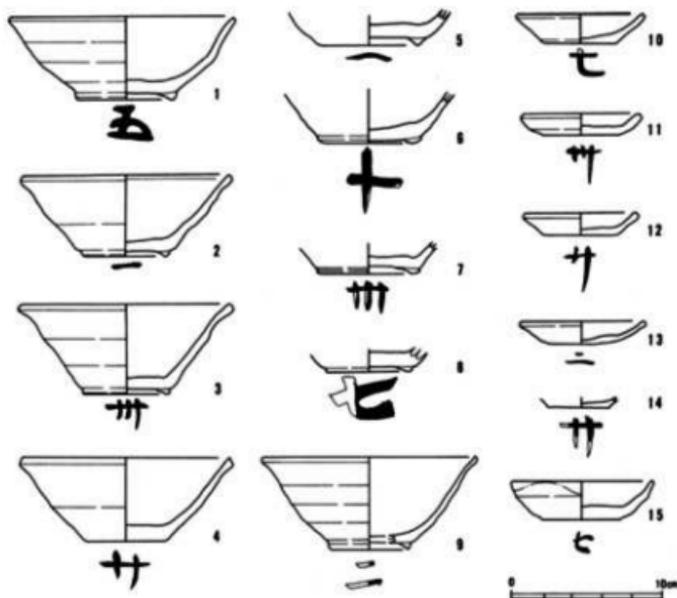
- 1) 宇野隆夫「考察の方法」(『京都大学埋蔵文化財調査報告—白河北殿北辺の調査—』II 京都大学埋蔵文化財研究センター1981) 61—62頁。
- 2) 藤澤良祐「瀬戸古窯址群 I」(『研究紀要』I 瀬戸歴史民俗資料館1982)。
- 3) 前川要「猿投窯における灰軸陶器生産最末期の諸様相」(『研究紀要』III 瀬戸市歴史民俗資料館1984)。
- 4) 斎藤孝正「灰軸陶器の研究 I」(『名古屋大学文学部研究論集』XCV1986)。
- 5) 田口昭二「山茶碗」(『美濃碗』考古学ライブラリー17, 1983)。
- 6) 例えば春日市内津1号窯(『春日井市遺跡発掘調査報告』第7集春日井市教育委員会1981)。
- 7) 注2)と同じ。
- 8) 中野晴久「知多古窯址群における山茶碗の研究」(『研究紀要』I 常滑市民俗資料館1983) 14頁。
- 9) 古墳時代の須恵器成形技法との異差はロクロ盤上におかれる粘土塊の存在であろう。糸切技法から類推して粘土塊上部に足掛かり的な部分を製作し、その後粘土紐を積み上げるものと推定する。この手法は奈良時代まで開るかもしれない。
- 10) 粘土紐積み上げによる素形が、碗の形状と一致するのではなく、この素形を基本にロクロ回転力を利用して、器形を形作るものを意味する。灰軸碗はすべてこの技法によるものであろう。
- 11) 高台製作は体部下平に(貼り付け位置は時期が新しくなると底部に移行)粘土紐を貼り付けることにより開始されるが、その調整のための付近が泥漿化する。特に手からの水滴のためか体部下平に目立つ。これを再調整する必要があった。
- 12) 「亀裂防止のための見込みの指圧痕」(注2)として一般的に理解されているもの。
- 13) 最終的に高台を製作しないものになるが、第3工程にいたる小乾燥がいちちはやく消略、あるいは簡略される方向にあった。
- 14) 注3)と同じ。
- 15) 注1)と同じ。
- 16) 注1)によるとSD11上、中層よりそれぞれIII-1, III-2の瓦器と共伴し、13世紀前—中葉の年代を与えられている。その他東大寺旧境内SK02(『東大寺旧境内発掘調査報告』『奈良市埋蔵文化財調査報告書』1981)より13世紀後半—14世紀の瓦器碗と土田第III期の法量をもつ碗が共伴する。
- 17) 注2)と同じ。
- 18) 注8)と同じ。
- 19) 注16)と同じ。
- 20) B類は他の共伴遺物とともに見つからないが瀬戸窯で同様な手法が確認され、おおむね藤澤のいう小碗から皿へ移行した段階に認められる。
- 21) 赤羽一郎「常滑窯」(『常滑碗』考古学ライブラリー23 1984)。
- 22) 常滑窯では羽釜は「12世紀代に集中的に生産された器種」(中野晴久「鎌場、御林古窯址群の編年の研究」『知多古文化研究』2 1986)としているが、当調査区ではむしろ13世紀に多く見られる。鎌場、御林古窯B3号窯よりここでいうB類が出土しており14世紀初頭までその生産が行われていたことが推測されよう。

3 墨書陶器

墨書陶器とは、土器の体部や底部に文字や記号・絵画等を墨書きしたもので、それ等を読みとることにより当時の人間の意識や、出土遺跡、遺物の性格を知り得る貴重な資料の1つであると言えよう。今回土田遺跡から出土した墨書陶器はわずか32点に過ぎないが、以下その特徴をまとめてみることにする。

出土地点

はじめに墨書陶器の出土地点をみてみると、32点のうち溝より10点、井戸より7点、土坑から7点、その他遺構外より8点が出土している。井戸から出土した7点のうち4点がSE20に集中している。これらの出土地点を20m平方単位で落としたものが第32図である。この図を見てもわかるように墨書陶器は主に屋敷地を区画する溝内、およびその屋敷地内から集中して出土している。墨書された陶器の大多数が碗・皿類であり、遠隔地への移動の可能性も少く、こうした屋敷地周辺に集中して出土する事実を考え合わせれば、墨書陶器がその使用者の生活と密着した形で消費され、廃棄されたものと推察されよう。



第31図 数字を表わす墨書陶器

形 態

出土した墨書陶器の形態を分類すると、灰釉系陶器の碗—20点(63.5%)、皿—11点(34%)、施釉陶器では、灰釉皿(皿A)—1点(3%)のみである。以上の様に、当時の代表的器形と考えられる灰釉系陶器の碗・皿が出土遺物の多数を占めるのに対応して、墨書陶器もその大多数が碗・皿となっている。

部 位

次に墨書された土器の部位についてみると、32点のうちで31点までが底部外面に墨書されており、1点のみ体部外面に認められる(第33図—16 これには「上」が約120度の間隔を持って2ヶ所記されている)。この様に当遺跡においては底部外面に墨書される点数が圧倒的に多数を占めるわけであるが、こうして底部に書かれることの意味を、単に形態上の特質のみでなく碗・皿の生産から消費、更に廃棄に至る経過の中で捉える必要があろう。つまり碗・皿の底部を上に向けて識別する場として、少なくとも供膳においてはその必要性に欠け、消費者の非使用時における管理・保管形態として考えることが妥当であろう。また生産者より消費者へ碗・皿が流通する過程においても、底部外面への墨書の意味が図られるが、共に墨書の内容と係ってくるため次の内容の所で述べることにする。

内 容

それでは実際にどの様な内容が墨書され、それ等が持つ意味を具体的に検討していくことにする。

大きく分類して、①数字を表記するもの、②文字を表記するもの、③その他の三種類が考えられる。更に②文字を表記したものは、1文字のものと2文字以上表記したものに区別されよう。

まず数字を表記すると思われる墨書陶器は15点出土しており、全体の約半数を占める。数字は具体的に「一」2点(第31図—2, 5)、「二」2点(9, 13)、「五」1点(1)、「七」3点(8, 10, 15)、「十」2点(6, *)、「廿」3点(4, 12, 14)、「卅」3点(3, 7, 11)である。

次に文字を表記する墨書陶器の中で1文字で記されているものは、「大」2点(17, 18)、「上」2点(16, 23)、「田」2点(24, 26)、「之」(20)、「丞」(27)が各々1点、判読不明なものが4点ある(19, 25, 28, * *)、2文字以上で表示されたものには、「進上」1点(21)、判読不明なものが1点(22)ある。

その他の墨書には「○」(29)、「☆」(30)のように文字以外の記号と考えられるものが2点出土している。

墨書陶器の意味を考える場合、その墨書が生産者側で為されたものか消費者側で為されたものかその出土状況からも判然とし得ないのであるが、部位のところでも述べたように

ま と め

以上土田遺跡出土の墨書陶器の特徴をまとめると、墨書陶器は主に屋敷地周辺より集中して出土し、そのほとんどが灰軸系の碗・皿の底部外面に墨書が施されている。その内容は約半数が数を示すものであり、文字を表記したものは意味解釈が困難なものが多いが、これらは生産から廃棄に至るまでの経過の中で管理上の必要性より墨書された可能性が考えられよう。時期別にみると第Ⅲ期に集中し、土田遺跡の最盛期との間に時期差が認められる。今回は中世土田遺跡出土の墨書陶器についてその事実報告のみに留まったが、今後墨書陶器との共伴遺物の検討、周辺遺跡出土の墨書陶器との比較検討を行い、墨書陶器の示す歴史的意味や、更に墨書陶器を通じての遺跡・遺構の性格の解明が必要となってくるであろう。

第18表 墨書陶器一覧表

遺物番号	釈文	器種	墨書部位	時期分	出土地点	分類
1	五	碗	底部外面	Ⅱ	S E 16	碗 B ₁ 類
2	一	〃	〃	Ⅲ	59 E	D ₂
3	卅	〃	〃	Ⅲ	S K 67	D ₂
4	廿	〃	〃	Ⅲ	S E 20	D ₂
5	一	〃	〃	Ⅱ	S D 27	
6	十	〃	〃	Ⅲ	S D 65	
7	卅	〃	〃	Ⅲ	S D 64	
8	七	〃	〃	Ⅲ	S E 10	
9	二	〃	〃	Ⅲ	S E 20	E
*	十	〃	〃	Ⅲ	S E 20	E
10	七	皿	〃	Ⅱ	56 C 包含層	B ₂
11	卅	〃	〃	Ⅲ	S D 42	C ₂
12	廿	〃	〃	Ⅲ	S D 60	C ₁
13	二	〃	〃	Ⅲ	60 C	D ₁
14	廿	〃	〃	Ⅳ	S K 62	E
15	七	〃	〃	Ⅳ	S D 64	施軸陶皿 A
16	上	碗	体部外面 2ヶ所	Ⅱ	S D 27	C ₂
17	大	〃	底部外面	Ⅱ	S D 41	C ₂
18	大	〃	〃	Ⅱ	S X 81	
19	〃	〃	〃	Ⅲ	S E 01	E
20	之	〃	〃	Ⅲ	59 B C	
21	運	〃	〃	Ⅱ	S K 74	
22	上	〃	〃	Ⅱ	56 C 包含層	
23	上	〃	〃	Ⅳ	56 C 包含層	E
24	田	〃	〃	Ⅳ	S K 63	F
25	〃	〃	〃	Ⅳ	59 E	F
26	田	皿	〃	Ⅳ	S K 62	E
27	冬	〃	〃	Ⅲ	S K 64	D ₂
28	〃	〃	〃	Ⅱ	S K 32	
**	〃	〃	〃	Ⅲ	S D 65	E
29	〇	皿	〃	Ⅲ	S E 20	D ₁
30	〇	〃	〃	Ⅱ	S D 27	B ₁

4 加工円盤

本調査区内より出土した遺物の中に小型の加工された陶片が多く出土している。これらは陶器片の周囲を円盤状に二次的に加工したものであり、以下これを「加工円盤」と総称しその分析を行う。

分類

総数306点の加工円盤を材質・加工技法の2要素を基に分類する¹⁾。

A類 灰釉系陶器の碗・皿を素材にしたもので、高台部を使用したA₁と、胴部や高台のない底部を使用したA₂に分かれる。いずれも打製加工である。

B類 碗・皿類以外の灰釉系陶器を使用したもの。打製加工品。

C類 施釉陶器を素材にしたもので、さらに製作技法において2つに分けることができる。C₁は打製加工。C₂はさらに側面を研磨するもの。

各出土点数は、A₁が160点(全体の52%)、A₂が67点(22%)、Bが21点(7%)、C₁が48点(16%)、C₂が10点(3%)で圧倒的にA類(74%)が多い。B・C類は比較的少量であるが、特にC₂の点数は少ない。

長さと重さ

加工円盤の形状は不定形を呈するものが多くみられ、長軸と短軸が存在する。長軸を基に、小型(17~21mm)、中型(22~28mm)、大型(29~39mm)の3つに区分することができる。(第34・35図)

全体的には22~28mmの中型品に集中する傾向があり、なかでもB類はすべて中型品である。C₂類は大型品が多く、他と比べて大型化の傾向が認められる。

重量についてみていくと、A₁が平均8.5g、A₂6.6g、B8.6g、C₁7.4g、C₂13.7gとなる。A₁とBは非常に近似的であり、全体ではA₁~C₁がまとまり、C₂が他と著しく異なる。

なお島根県富田川河床遺跡の加工円盤(17世紀)は2~9cmのものがみられ、そのうち5cm(平均38.9g)のものが最も多い。また草戸干軒町遺跡(13~17世紀)では3~5cmのものが最も多く出土している。これらに比べると本遺跡の加工円盤は「小型」である。

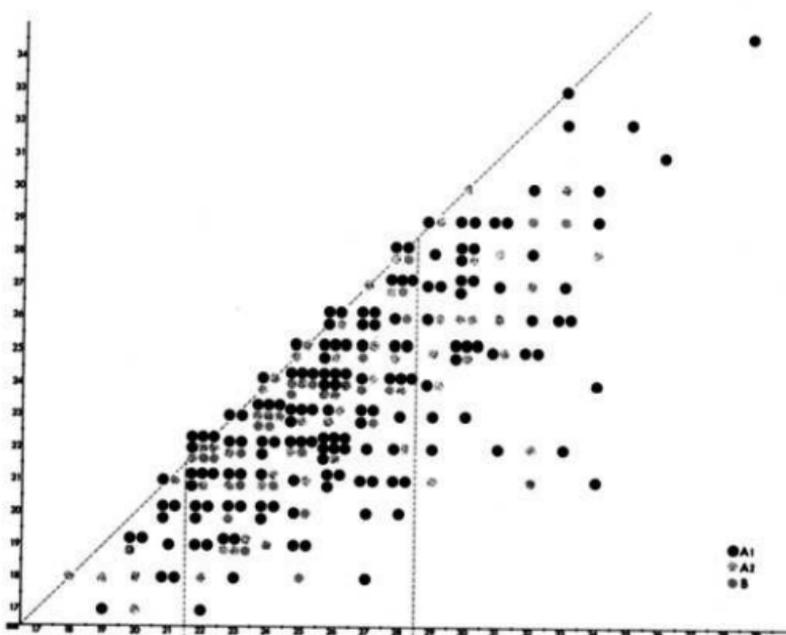
時期的変化

大きく前期と後期の2つに分けて考えることができる。

前期は本遺跡時期区分でいうところの第I・II期すなわち12・13世紀にあたる。(加工円盤図版番号1~248)

後期は「大窯」以降幕末までの時期。(図版番号249~306)したがって空白の14・15世紀をはさんで前期と後期に分かれることになる。なおこの点については後述する。

前・後期の変化として加工円盤の数の減少化があげられる³⁾が、加えて大型化するという特色がある。この例として摺鉢を素材にしたものをとり上げると、「大窯」製品利用のもの(図版番号249, 250, 253, 258)に比べ、「連房」製品利用のもの(図版番号251, 252, 254, 255, 256, 257)は明らかに大型化している。



第34図 加工円盤法量(前期)



第35図 加工円盤法量(後期)

出土状況

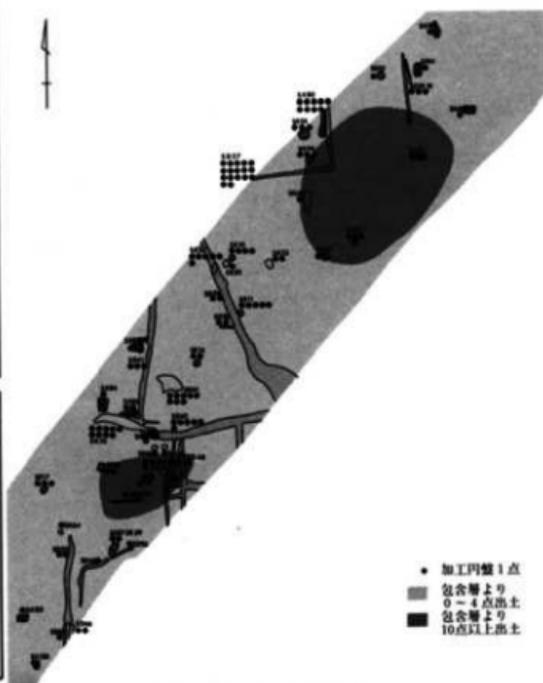
前期(12・13世紀)の加工円盤248点の出土状況をみてる。

SD27は土田遺跡第I・II期に所属する屋敷地を区画する溝である。またSD27の内部には第I期のSX80, SE05, 06などの加工円盤を出土した遺構が存在する。これらの4遺構で合計42点の加工円盤が出土した。これは前期の総数の $\frac{1}{3}$ を占めることになる。またSD27の東側には第I・II期の大形屋敷地跡と思われる区画があるが(第43図), その包含層中より33点出土している。また同様に, 調査区中央のSD42, 46付近より, 合計22点出土し, さらにその西側に広がるII期建物群(第43図)の包含層中より22点出土している。上記SD27と東側の屋敷地を含めた4地点で合計すると119点になり, これは前期の総数のほぼ $\frac{1}{2}$ という数になる。

その他の遺構については, 4点以上出土する遺構が4ヶ所, それ以外は1~3点と極少量出土しているにすぎない。

SD(溝)		SE(井戸)	
遺構番号	数量	遺構番号	数量
SD18・19	3	SE01	1
SD27	17	SE03	3
SD30	2	SE05	3
SD41	3	SE06	3
SD42	6	SE07	1
SD46	6	SE10	4
SD47	1	SE11	5
SD48	1	SE14	2
SD55	2	SE16	2
SD56	1	SE17	3
SD57・58・59	2	SE18	1
SD61	1		
SD66	2		
SD67	1		
SD74	2		
SD79	2		

SK(土坑)		SX(方形土溝)	
遺構番号	数量	遺構番号	数量
SK23	2	SX58	1
SK30	1	SX61	1
SK32	6	SX65	1
SK45	1	SX71	1
SK46	1	SX80	9
SK61	8	SX81	2
SK64	1	SX84	1
SK69	1	SX85	2
SK74	9	SX87	1
		SX125	1
		SX130	1



第36図 加工円盤分布図(前期)

遺構別の出土状況をみると、溝は全体で79条存在するがそのうち加工円盤を出土する溝は16条でこれは溝全体の20%である。同様に井戸21基のうち11基より出土がみられ52%を占める。土坑74基のうち9基より出土し12%、方形土壇179基のうち11基出土で6%を占める(第36図)。井戸からの出土割合が最も高く、方形土壇からは殆んど出土しない。

前期の加工円盤248点のうち遺構より出土したものは131点であるが、次に遺構別出土点数を比較すると、溝より合計52点、井戸より28点、土坑より30点、方形土壇より21点と溝からの出土点数が最も多い(第36図)。

ま と め

これまで加工円盤の用途説には、呪術具、冥銭、遊具、飛礮説などがある³⁾が今だ定説はなく、その本格的な研究はなされていないのが現状である。ここでは上記の分析をもとに土田遺跡の加工円盤の特徴及びその用途を考えまとめとする。

土田遺跡の加工円盤は、素材・形態に特徴がある。素材は灰軸系陶器碗・皿の底部高台部を使用しているものが多くを占める。灰軸系陶器を使用するのはこの地方で普遍的に生産・消費される最も身近な素材であると同時にその硬質性も必要であったためと思われる。また底部を使用するのは胴部と比べ厚みがあること、底部の中でも高台部を使用するのはおそらく打製加工時大きく破損することなく円形に割ることができたためと思われる。一方では、高台部が「投げる」、何かを「結わいつける」などの行為の目的で利用された可能性もある。その大きさは2～3cmのものが多く、他の出土例と比べても比較的小型である。

土田遺跡は第I期から第IV期(12～15世紀)まで遺構・遺物ともに存続しているが、加工円盤は第I・II期に最も多く出土し、III・IV期には殆んど出土していない。ただIII・IV期に陶製の丸玉である陶丸(図版番号307～321)が出土する。形態的にも製作技法的(加工円盤は二次的加工品、陶丸は製品)にも若干異質であるが、重さ・大きさなど近い点もあり、何よりも加工円盤の空白期間に入れ変わるように陶丸が出現してくることが興味深い。(第18表)なお土田遺跡とは直接関係がないのであるが15世紀以降(後期)の加工円盤も少量出土している。前期の加工円盤に比べ出土量はかなり少量であり、素材も施軸陶器であるが、さまざまな器種のもが使用されている。特にC₂類は製作技法的にも形態的にも他の類とかなりの差異がみられ、用途の差をあらわしているものと思われる。

次に出土状況から考えてみると、加工円盤は井戸や特定の住居及びその付近で多く出土する。対して方形土壇からは殆んど出土しない。出土しても居住域付近の方形土壇からである。このことから生活の場で多く使用されたものと考えてよいだろう。と同時に墓であるとする方形土壇からは出土が稀であることから冥銭説は否定的と考える⁴⁾。

土田遺跡の加工円盤についてまとめると

- 1 土田遺跡Ⅰ・Ⅱ期すなわち12・13世紀に多量に製作され以後殆んど使用されない。
- 2 灰釉系陶器碗・皿を特にその素材として使用する。
- 3 高台部を利用するものが多くを占める（A₁類）。
- 4 2～3cmの大きさをもつものが多い。
- 5 居住域を中心として出土する。

さて、最も出土したA類についてであるが、その用途として考えられるものに、民衆の中で中世盛んに行なわれた「飛礮」がある。飛礮つまり物を投げるといふ行為は人間の本能ともいえる行為であるが、古代の日本、特に中世前期までは飛礮の行為が邪気を払う一種の神がもたらす行為として信仰的な意味をもっていたようである。それが中世後期つまり南北朝頃を境にして次第に日常生活から遠ざかり、年中行事等（節分・五月の節句など）の中にとりこまれ今日に至るのである⁹⁾。土田遺跡の加工円盤A類が消失する時期はまさに、この飛礮の転換期にあたり、これらの変容を示す傍証といえるのではないかと思われる。

〔注〕

- 1) 他の分類の例には加工円盤の最大径による分類、材質による分類などがある。
・内田律雄「円盤状土製品」『富田川』鳥根県教育委員会 1984。
・小田原昭嗣「草戸千軒町遺跡出土の円板状土製品」『草戸千軒』No.142広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1985。
- 2) 草戸千軒町遺跡の場合、鎌倉時代を中心とする時期が最も多く、鎌倉後半～南北朝、室町中頃～後半と数は減少する。
- 3) 兼康保明「小型円板」『日本仏教民俗基礎資料集成』第4巻 中央公論美術出版 1977。
- 4) 図版番号232、233は同一個体から製作されたもので、未使用のまま方形土壇SX80へ放棄されたと思われる、特異な事例である。
- 5) 中沢厚『つぶて』法政大学出版局 1981。
網野善彦『異形の王権』平凡社 1986。

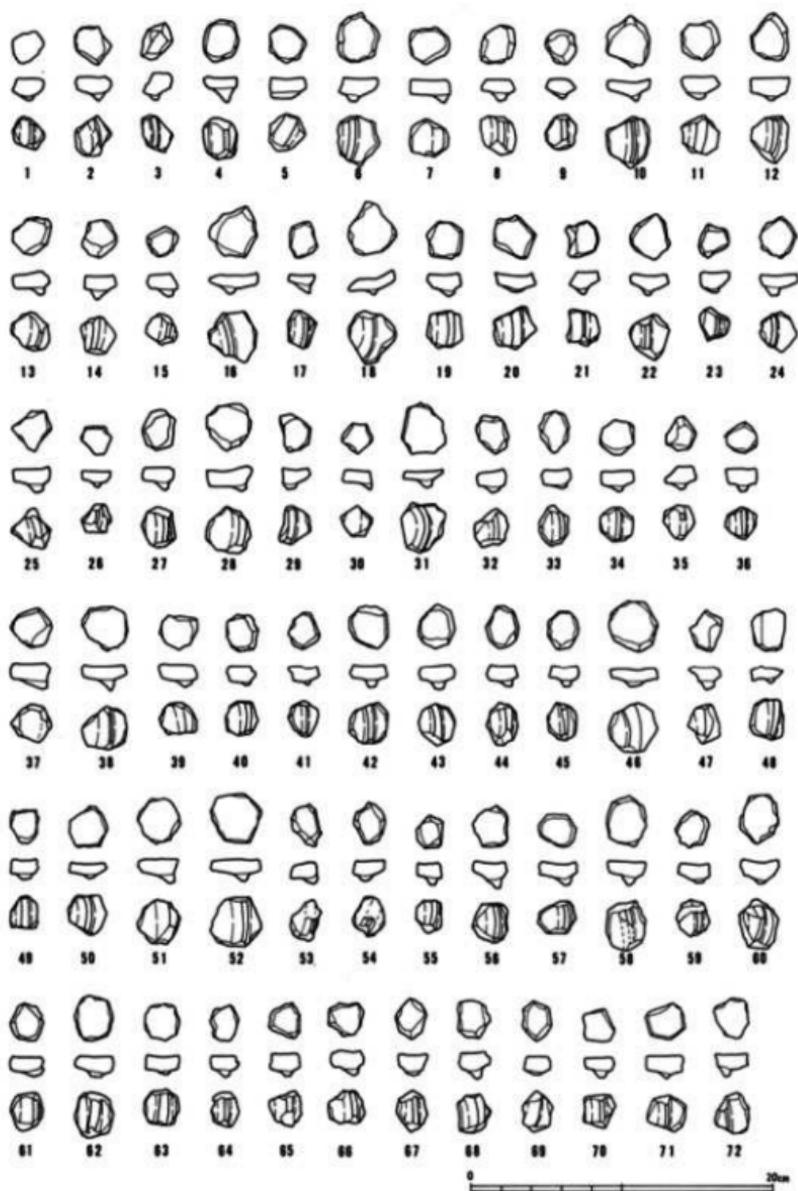
第18表 分類別変化

	A	B	C	陶丸
I	■	■		
II	■	■		■
III				■
IV				■
V			■	■
VI				
VII			■	

I—土田Ⅰ期 II期—土田Ⅱ期
 III—土田Ⅲ期 IV—土田Ⅳ期
 V—15後半～16世紀 VI—17世紀
 VII—18～19世紀

第19表 加工円盤一覧表 (1)

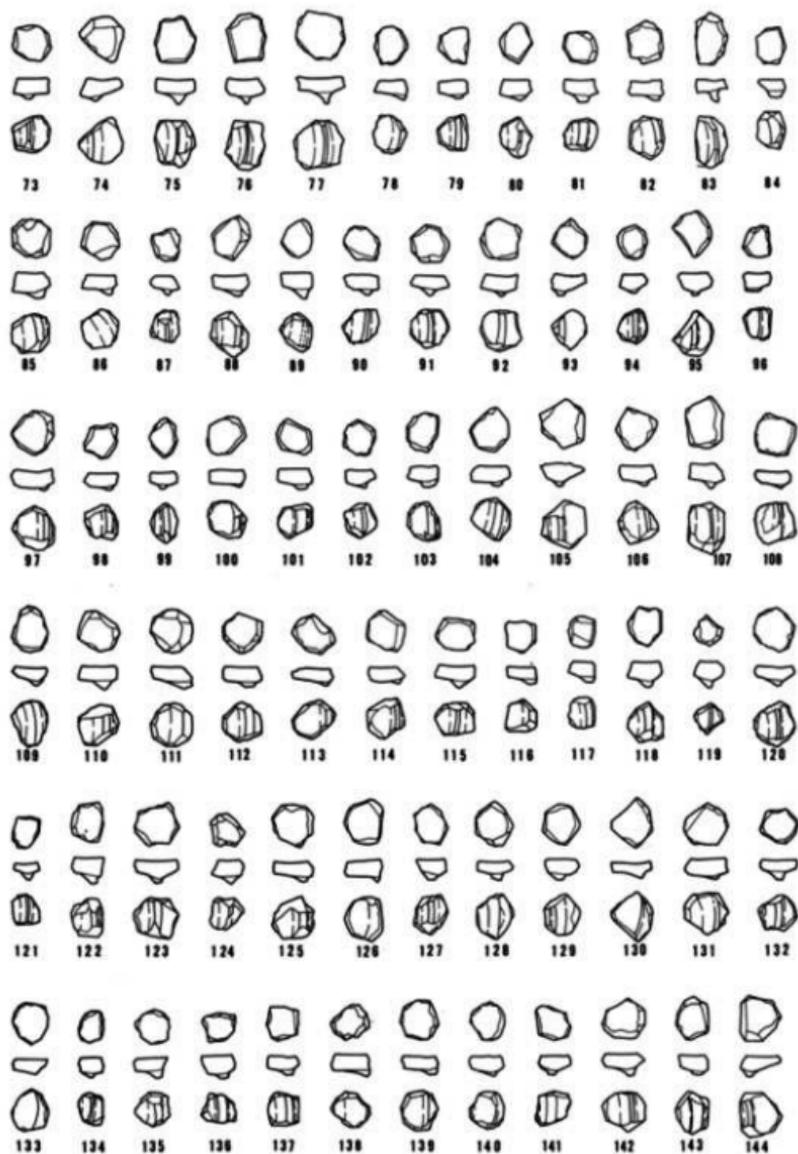
No.	分組	外径×厚み (mm)	重量 (g)	造機番号	備 考	No.	分組	外径×厚み (mm)	重量 (g)	造機番号	備 考
1	A ₁	22 × 21	6.6		廻開	37	A ₁	27 × 26	10.4	56B	
2	A ₁	26 × 24	7.7	SD18・19		38	A ₁	30 × 29	13.4	56D	
3	A ₁	24 × 20	8.5	*		39	A ₁	25 × 22	8.5	*	
4	A ₁	28 × 23	10.1	SE01		40	A ₁	22 × 21	7.5	*	
5	A ₁	25 × 24	9.1	SD27		41	A ₁	24 × 20	6.0	56C	
6	A ₁	32 × 28	12.9	*		42	A ₁	28 × 25	10.4	*	
7	A ₁	26 × 25	8.8	*		43	A ₁	28 × 24	10.0	*	
8	A ₁	25 × 23	7.2	*		44	A ₁	28 × 21	9.3	*	
9	A ₁	23 × 21	5.2	*		45	A ₁	25 × 20	7.5	*	
10	A ₁	34 × 29	11.3	*		46	A ₁	33 × 32	10.4	*	
11	A ₁	26 × 25	9.0	*		47	A ₁	26 × 21	7.8	*	
12	A ₁	32 × 25	11.8	*		48	A ₁	27 × 22	6.3	*	
13	A ₁	25 × 24	8.7	*		49	A ₁	22 × 19	5.8	*	
14	A ₁	25 × 23	7.9	*		50	A ₁	26 × 24	7.0	*	
15	A ₁	21 × 20	5.5	*		51	A ₁	29 × 29	11.6	*	
16	A ₁	35 × 32	10.8	*		52	A ₁	33 × 33	15.4	*	
17	A ₁	25 × 19	5.1	*		53	A ₁	28 × 21	8.6	*	
18	A ₁	36 × 31	11.5	SX80		54	A ₁	27 × 21	7.2	*	
19	A ₁	25 × 23	8.9	*		55	A ₁	22 × 17	6.5	*	
20	A ₁	28 × 28	9.1	*		56	A ₁	27 × 24	10.1	56E	
21	A ₁	24 × 22	6.9	*		57	A ₁	26 × 21	8.2	*	
22	A ₁	31 × 27	8.8	*		58	A ₁	33 × 30	11.4	*	
23	A ₁	29 × 20	5.7	*		59	A ₁	22 × 22	6.6	*	
24	A ₁	27 × 25	7.5	SZ01内歯加工		60	A ₁	32 × 28	13.8	*	
25	A ₁	27 × 26	8.5	*		61	A ₁	25 × 22	7.6	*	
26	A ₁	20 × 19	3.8	*		62	A ₁	30 × 25	12.1	56	
27	A ₁	28 × 22	8.2	SE05		63	A ₁	24 × 23	8.6	*	
28	A ₁	31 × 29	13.4	*		64	A ₁	23 × 19	6.4	*	
29	A ₁	26 × 22	6.1	*		65	A ₁	24 × 21	7.8	*	
30	A ₁	21 × 20	4.3	SE07		66	A ₁	23 × 22	7.4	*	
31	A ₁	34 × 30	9.1	SE03		67	A ₁	27 × 21	7.4	*	
32	A ₁	26 × 22	7.6	*		68	A ₁	25 × 21	9.5	*	
33	A ₁	28 × 20	7.6	*		69	A ₁	27 × 20	6.2	59P	
34	A ₁	23 × 22	7.1	SX71		70	A ₁	22 × 20	6.1	*	
35	A ₁	23 × 21	5.8	SX65		71	A ₁	26 × 25	9.3	*	
36	A ₁	21 × 21	6.1	56A		72	A ₁	27 × 23	9.0	*	



第37图 加工円盤(1) 1/4

第20表 加工円盤一覧表 (2)

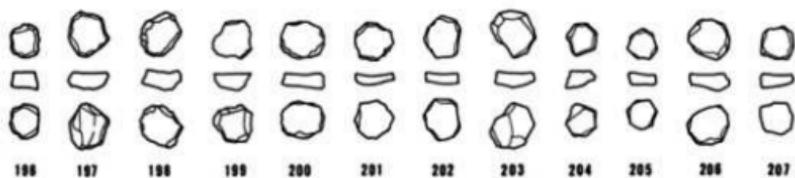
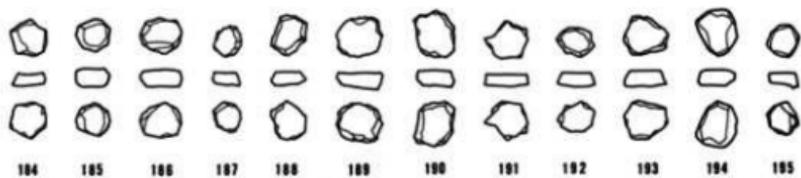
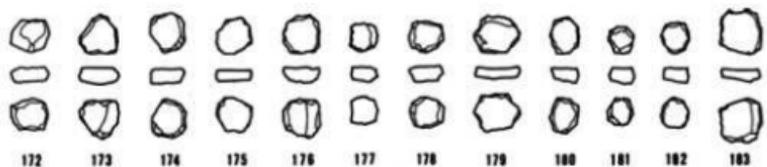
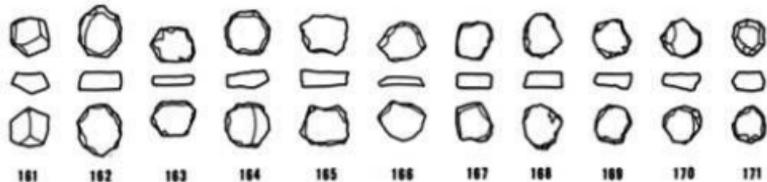
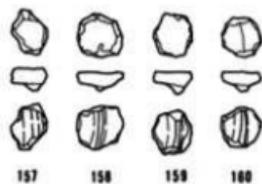
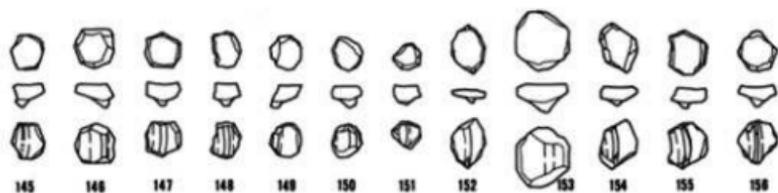
No.	分類	外径×内径 (mm)	厚さ (mm)	造機番号	備 考	No.	分類	外径×内径 (mm)	厚さ (mm)	造機番号	備 考
73	A ₁	25 × 24	9.0	59P		109	A ₁	31 × 25	8.4	*	
74	A ₁	31 × 29	8.6	*	半分欠損	110	Ar	28 × 27	8.4	*	
75	A ₁	31 × 22	14.3	*		111	A ₁	29 × 28	10.2	*	
76	A ₁	33 × 26	15.8	*		112	A ₁	27 × 26	8.9	*	
77	A ₁	33 × 27	19.8	*		113	A ₁	29 × 27	7.9	SX04	
78	A ₁	25 × 22	6.2	S7A新巻位上		114	A ₁	28 × 25	7.5	SX07	
79	A ₁	24 × 20	7.3	SD42		115	A ₁	26 × 22	8.2	SX05	
80	A ₁	26 × 22	7.0	*		116	A ₁	22 × 22	5.2	*	
81	A ₁	22 × 22	8.2	S7AB		117	A ₁	21 × 18	4.6	SX01	
82	A ₁	29 × 23	10.8	S5CD		118	A ₁	27 × 23	10.4	SE14	
83	A ₁	34 × 21	10.9	SD42		119	A ₁	22 × 20	6.3	*	
84	A ₁	25 × 19	5.8	SD30		120	A ₁	30 × 27	8.9	S98C	
85	A ₁	26 × 25	15.4	SD74		121	A ₁	20 × 19	3.8	*	
86	A ₁	26 × 24	7.8	*		122	A ₁	26 × 21	9.7	*	
87	A ₁	21 × 20	5.3	SK30		123	A ₁	30 × 28	11.6	SD46	
88	A ₁	30 × 25	9.8	SK32		124	A ₁	22 × 21	5.8	SD55	
89	A ₁	26 × 22	7.7	*		125	A ₁	28 × 28	9.2	*	
90	A ₁	24 × 23	6.7	*		126	A ₁	30 × 25	10.5	SD61	
91	A ₁	25 × 25	8.7	SK23		127	A ₁	27 × 23	8.0	SD46	
92	A ₁	28 × 27	11.4	SE10		128	A ₁	29 × 24	8.0	*	
93	A ₁	26 × 23	6.5	*		129	A ₁	28 × 24	7.8	*	
94	A ₁	23 × 20	5.8	SE11		130	A ₁	33 × (27)	13.1	*	製作段階上
95	A ₁	(30) × (26)	9.3	*	製作段階上	131	A ₁	30 × 28	9.9	SD68	
96	A ₁	22 × 19	6.0	*		132	A ₁	26 × 24	7.8	99D-2世造機	
97	A ₁	30 × 28	10.8	S6A		133	A ₁	28 × 24	6.5	SD79	
98	A ₁	22 × 22	6.3	*		134	A ₁	26 × 22	5.6	99D-3世造機	
99	A ₁	27 × 18	5.5	*		135	A ₁	23 × 23	7.2	SE16	
100	A ₁	26 × 26	6.9	SD41		136	A ₁	23 × 19	7.0	*	
101	A ₁	23 × 23	8.1	*		137	A ₁	22 × 21	7.3	99D新巻位上	
102	A ₁	24 × 22	5.5	SK61		138	A ₁	25 × 23	7.9	SE17	
103	A ₁	26 × 22	8.8	*		139	A ₁	26 × 24	8.1	S9D	
104	A ₁	28 × 27	9.5	*		140	A ₁	23 × 20	8.3	*	
105	A ₁	32 × 30	12.8	*		141	A ₁	24 × 23	6.8	*	
106	A ₁	29 × 27	9.6	*		142	A ₁	28 × 26	9.6	*	
107	A ₁	34 × 24	14.3	SK74		143	A ₁	29 × 22	9.2	*	
108	A ₁	30 × 27	8.5	*		144	A ₁	30 × 27	10.9	*	



第38图 加工円盤 (2) 1/4

第21表 加工円盤一覧表 (3)

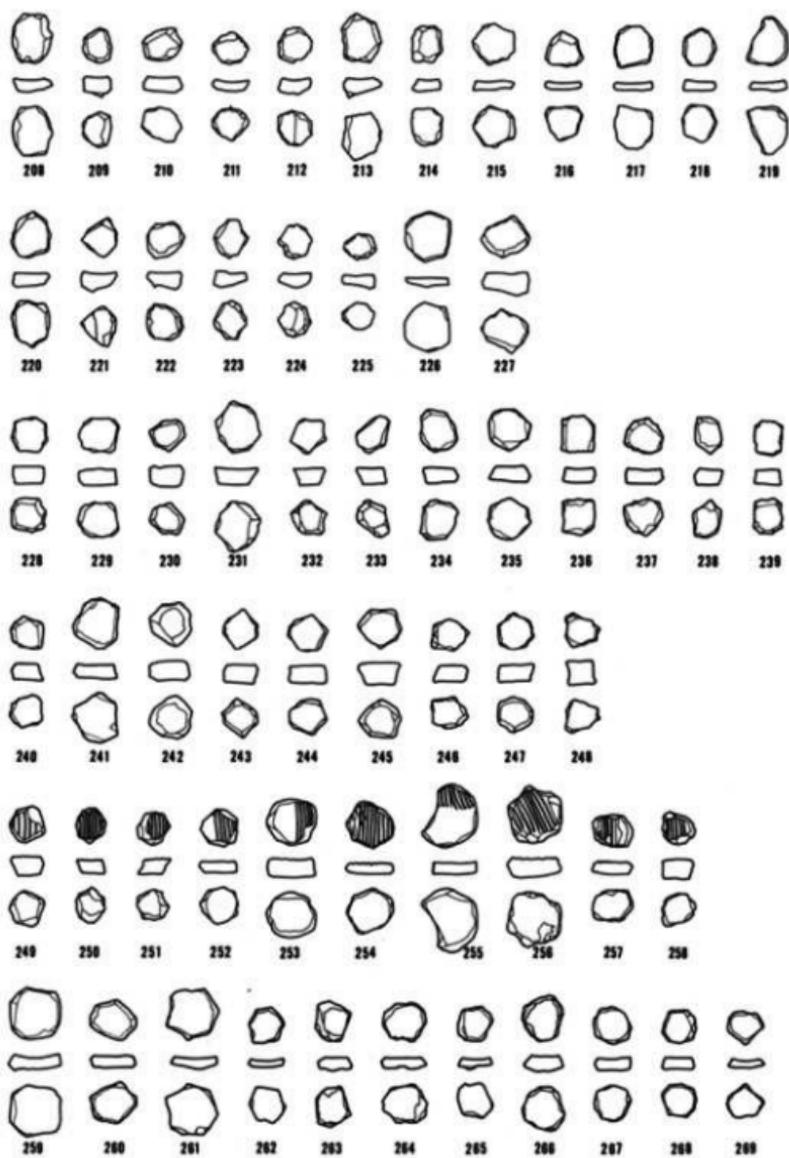
No.	分類	外径×内径 (mm)	厚さ (mm)	造機番号	備 考	No.	分類	外径×内径 (mm)	厚さ (mm)	造機番号	備 考
145	A ₁	24 × 22	7.0	59D		177	A ₂	18 × 18	3.9	*	
146	A ₂	26 × 26	9.8	*		178	A ₂	23 × 21	5.4	*	
147	A ₂	24 × 24	8.4	*		179	A ₂	30 × 25	6.3	*	
148	A ₂	23 × 18	7.2	*		180	A ₂	23 × 19	5.2	56	
149	A ₂	21 × 18	5.6	*		181	A ₂	20 × 17	4.1	*	
150	A ₂	21 × 19	6.0	*		182	A ₂	20 × 18	4.2	*	
151	A ₂	19 × 17	3.6	*		183	A ₂	30 × 28	7.7	59P	
152	A ₂	33 × 22	5.2	*		184	A ₂	24 × 24	5.3	*	
153	A ₂	29 × 35	23.8	*		185	A ₂	22 × 22	6.4	SD42	
154	A ₂	32 × 25	7.6	SD66		186	A ₂	26 × 23	7.6	*	
155	A ₂	30 × 25	10.9	*		187	A ₂	19 × 18	4.0	37A新造なし	
156	A ₂	27 × 26	7.6	SD67		188	A ₂	26 × 24	7.5	37CD	
157	A ₂	30 × 23	8.3	59E		189	A ₂	29 × 24	9.3	37AB	
158	A ₂	30 × 29	11.0	SZ06上層		190	A ₂	30 × 26	9.8	SD30上層	
159	A ₂	29 × 26	9.6	59G		191	A ₂	29 × 26	5.8	SK32	
160	A ₂	26 × 26	9.3	59HSX130		192	A ₂	24 × 19	4.2	*	
161	A ₂	26 × 26	7.8	60C		193	A ₂	29 × 21	8.9	SK23	
162	A ₂	34 × 28	12.4	SX58		194	A ₂	31 × 28	9.8	SE10	
163	A ₂	28 × 22	4.3	SD18・19		195	A ₂	22 × 22	4.2	*	
164	A ₂	29 × 29	11.3	SD27		196	A ₂	23 × 19	3.5	SE11	
165	A ₂	32 × 27	11.1	*		197	A ₂	30 × 26	10.5	*	
166	A ₂	31 × 26	4.1	*		198	A ₂	28 × 27	8.6	98A	
167	A ₂	26 × 24	7.4	SX60		199	A ₂	25 × 25	7.2	*	
168	A ₂	29 × 25	5.9	SE06		200	A ₂	28 × 24	8.9	SK61	
169	A ₂	25 × 24	6.9	*		201	A ₂	26 × 24	4.1	*	
170	A ₂	25 × 25	6.9	*		202	A ₂	28 × 24	5.4	*	
171	A ₂	24 × 21	7.3	SK69		203	A ₂	30 × 30	8.5	SK74	
172	A ₂	25 × 21	6.3	56A		204	A ₂	21 × 21	4.2	SK74・SX87	
173	A ₂	26 × 25	8.8	56C		205	A ₂	20 × 19	3.2	SX81	
174	A ₂	26 × 23	7.5	*		206	A ₂	28 × 25	8.4	59BC	
175	A ₂	34 × 24	5.0	*		207	A ₂	22 × 21	4.7	*	
176	A ₂	25 × 24	8.0	56E							



第39圖 加工円盤 (3) 1/4

第22表 加工円盤一覧表 (4)

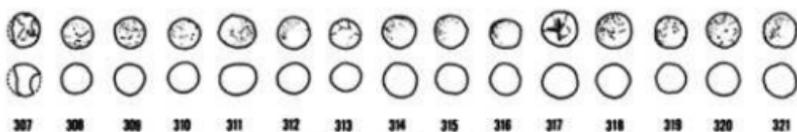
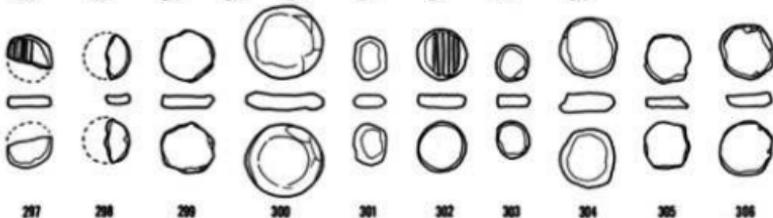
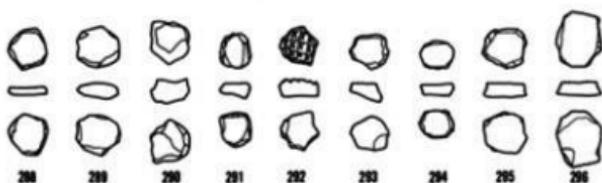
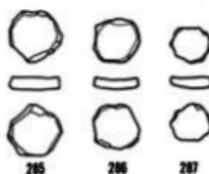
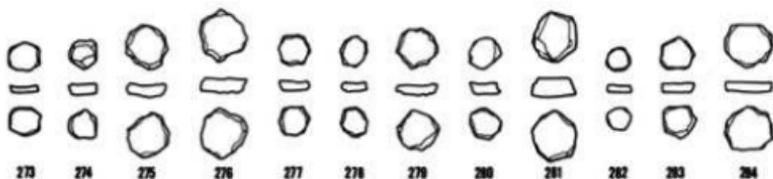
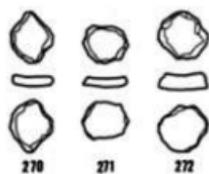
No.	分類	外径×内径 (mm)	厚さ (mm)	通孔番号	備 考	No.	分類	外径×内径 (mm)	厚さ (mm)	通孔番号	備 考
208	A ₁	32 × 22	8.5	SK46		239	B	23 × 19	6.5	*	
209	A ₁	23 × 19	6.4	SD46		240	B	22 × 22	6.2	SD42	
210	A ₁	26 × 22	5.4	SE17		241	B	32 × 29	12.5	57CD	
211	A ₁	24 × 21	3.2	*		242	B	28 × 28	11.0	SK32	
212	A ₁	22 × 22	6.2	SE18		243	B	27 × 24	8.2	SD41	
213	A ₁	32 × 21	9.1	59D		244	B	25 × 24	8.5	SK74	
214	A ₁	23 × 20	4.2	*		245	B	28 × 26	11.8	SK45	
215	A ₁	27 × 27	5.1	*		246	B	25 × 20	7.3	SD47	
216	A ₁	24 × 23	3.0	*		247	B	24 × 23	8.1	SD79	
217	A ₁	27 × 25	5.1	*		248	B	22 × 22	6.8	59D	
218	A ₁	25 × 23	4.3	*		249	C ₁	24 × 24	7.7	60C	
219	A ₁	32 × (27)	(5.3)	SD66	半分穴掘	250	C ₁	24 × 19	5.3	56	
220	A ₁	31 × 25	7.9	SD67・98・99共通		251	C ₁	22 × 20	5.1	SD29	
221	A ₁	27 × 24	6.2	SD67		252	C ₁	25 × 25	5.4	SK74	
222	A ₁	23 × 24	7.2	59E共通通孔		253	C ₁	32 × 30	16.1	*	
223	A ₁	25 × 22	5.8	SK64		254	C ₁	31 × 31	8.7	59D共通通孔	
224	A ₁	23 × 22	4.3	59E		255	C ₁	42 × (37)	(13E)	59D	一部穴掘
225	A ₁	22 × 18	3.2	*		256	C ₁	38 × 35	19.1	59G	
226	A ₁	33 × 30	6.8	59G		257	C ₁	26 × 21	5.6	59G	
227	A ₁	28 × 28	11.9	SX125		258	C ₁	22 × 22	6.7	59C	
228	B	23 × 22	8.6	60C		259	C ₁	34 × 33	13.8	56B共通通孔	
229	B	27 × 23	9.5	*		260	C ₁	32 × 27	8.2	56E	
230	B	23 × 21	8.8	SX61		261	C ₁	34 × 34	11.1	56C	
231	B	33 × 29	11.9	SD77		262	C ₁	25 × 23	4.0	*	
232	B	24 × 23	6.5	SX60		263	C ₁	26 × 24	5.8	59P	
233	B	25 × 22	5.9	*		264	C ₁	29 × 25	5.6	*	
234	B	27 × 25	9.3	56C		265	C ₁	23 × 23	4.5	*	
235	B	28 × 27	9.0	*		266	C ₁	30 × 22	9.7	59A	
236	B	24 × 21	8.4	*		267	C ₁	24 × 24	5.6	SK74	
237	B	25 × 24	8.7	56E		268	C ₁	22 × 22	5.6	598C	
238	B	25 × 18	6.8	56		269	C ₁	25 × 22	3.4	59D共通通孔	



第40回 加工円盤 (4) 1/4

第23表 加工円盤・陶丸一覧表 (5)

No.	分類	其幅×外径 (mm)	厚さ (mm)	通稱番号	備 考	No.	分類	其幅×外径 (mm)	厚さ (mm)	通稱番号	備 考
270	C ₁	34 × 28	7.0	59D		296	C ₁	36 × 29	11.5	*	
271	C ₁	30 × 25	6.4	*		297	C ₁	30 × 30	9.5	56C	半分欠損
272	C ₁	33 × 32	13.0	59G		298	C ₁	30 × 30	7.0	59P	*
273	C ₁	21 × 19	2.4	60C		299	C ₁	34 × 30	11.7	57AB	
274	C ₁	19 × 18	3.2	*		300	C ₁	51 × 49	29.4	SK74	
275	C ₁	29 × 28	7.3	SK69		301	C ₁	28 × 22	4.1	59BC	
276	C ₁	34 × 30	11.5	56C		302	C ₁	33 × 33	11.5	59D近世通稱	
277	C ₁	20 × 18	3.7	*		303	C ₁	24 × 22	5.7	*	
278	C ₁	19 × 17	2.5	*		304	C ₁	40 × 36	23.4	SD49	
279	C ₁	27 × 26	6.4	57CD		305	C ₁	32 × 29	7.9	58A近世通稱	
280	C ₁	21 × 21	4.3	SK74		306	C ₁	36 × 35	14.2	SD67	
281	C ₁	34 × 28	13.3	58A		307	陶丸	径 22	9.0	60C	一部欠損
282	C ₁	16 × 15	1.7	59D		308	*	20	8.3	*	
283	C ₁	22 × 21	3.1	*		309	*	20	13.1	*	
284	C ₁	32 × 28	7.3	*		310	*	20	10.0	SE01	
285	C ₁	36 × 34	14.0	*		311	*	24	11.9	56C	
286	C ₁	31 × 29	7.3	*		312	*	21	12.9	SE10	
287	C ₁	27 × 24	5.5	59L		313	*	20	10.2	56調査用	
288	C ₁	26 × 24	5.1	SZ05西南産瓦		314	*	22	8.8	SX90	
289	C ₁	29 × 27	7.1	*		315	*	21	9.1	57CD	
290	C ₁	28 × 25	13.8	*		316	*	20	8.8	*	
291	C ₁	23 × 20	4.6	56C		317	*	22	11.3	SK74	
292	C ₁	26 × 25	8.2	59A		318	*	23	9.0	59C	
293	C ₁	28 × 23	6.9	SK74・SK67		319	*	20	8.4	SD55	
294	C ₁	22 × 18	4.5	59D		320	*	23	10.9	SD64	
295	C ₁	29 × 26	9.2	*		321	*	24	12.9	SK63	



第41圖 加工円盤・陶丸 (5)

5 遺構の変遷

本調査区においては、2つの時期にわけて遺構群を考えることができた。ここではこれらAとB期とした時期について各々検討を加えてゆくことにし、土田遺跡全体の動向については第7節であらためて総合する。

1) 弥生時代末期～古墳時代(A期)の遺構

この時代の遺構としては墳丘墓とそれに付属する土坑群及び溝が存在する。墳丘墓はA・B・Cの3群に区分され、方形を呈するA・B群と円形を呈するC群に分類できた。

I期(弥生時代末期)

調査区内ではA群とB群と2つのグループが存在し、(第42図)その各々の構成を見てみる。A群が墳丘墓6基、土坑3基で、墳丘墓はある特定の溝の中央部に開口部を設定する形状に統一されている。その内SZ02はさらに開口部の溝が屈曲し、前方に拡大する形状を呈し、SZ06は開口部付近で溝幅を拡大する。B群は現状では3基の墳丘墓より構成され、開口部の有無、その状況に統一性が見られない。規模においては大(13～15m)、中(9～11m)、小(4～5m)型に区分すると、A群では大型2基(SZ05・SZ06)中型4基(SZ01～04)となり、B群では中型1基(SZ09)小型2基(SZ07・08)となる。A群とB群ではまず周溝の状況、次に規模において明確な差が認められる。また出土遺物からも(第13図)相対的にA群の方が器種及び量において豊さを保っており、A群とB群とは包摂関係をとるものと推測される。

A群について詳細に見てゆくと、まず全体の配置が弧状を呈し、中央に広場的な空間を設定すると同時に土坑が用いられている。大型墳と中型墳に大別され、中型墳はSZ01・02とSZ03・04と2分される。それは配置関係からも明白だが、開口部の位置、及び遺物において推定できる。(前者が広口壺と短頸壺をほぼ均等に使用しているのに比べ、後者は量の多さと各種器種を使用している。)短頸壺を見てみると、SZ01・SZ03がB類、SZ02とSZ04がA類を出土し、おそらくB類からA類の使用へ変化していくものと推測したい。広口壺Aは大型墳にその使用が限定され、広口壺AとCではその使用方法に歴然とした意味が付加されていたものと思われる。開口部の屈曲と拡大はその発展段階¹¹より、より新しい様相を表わすものと考えられる。以上をまとめてみると、A群はその内部に3つのまとまりが推定でき、各々2段階の変遷を経て、A群という墓域が形成されていることになる。(第42図)前段階から後段階へは第1に規模の拡大、第2に開口部の拡大、変化が生じたことになる。

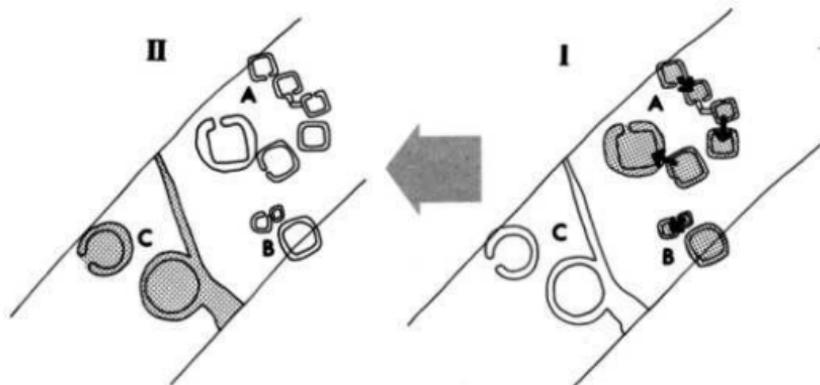
次にB群ではまず SZ07 と SZ08 の関係が注目される。第1に両者とも小型墳である。第2に直口壺Aはこれらの小型墳にのみ使用されている。直口壺Aの形状²⁾より SZ07 → SZ08 への移行を推定できよう。すると規模の拡大というA群で見た原則がここにもあてはまることになる。

以上を総合すると、A群とB群との関係及びA群内部での大型・中型墳の差異が存在し、これらはある集団内部での階層的關係を表示するものと考えられる。そしてそれは出土遺物の器種に明確に反映する關係が同時に存在したことになる。

II期（古墳時代後期）

溝 SD30 により区画された状況で SZ10・SZ11 が存在する。規模は径18～19mであり、SZ11 は開口部が一ヶ所に見られる。出土遺物は SZ10 で須恵器提瓶・甕・短頸壺が見られ、東海地方須恵器編年³⁾でII期後半に所属するものと考えられよう。提瓶は豊田大塚古墳⁴⁾と近似するが、口頸部の沈線はSZ10ではすでに欠損し、全体としてその次の段階のものと考えられる。甕は形状が若干異なるものの塩竈神社古墳⁵⁾のものとはほぼ同時期のものであろう。凡そ陶器田辺編年で TK10 に併行するようである。SZ11 より出土した杯も同様にII期の中に含まれるものであり、C群の成立は6世紀中葉を中心とすると考えて大過ないであろう。

以上I期は弥生時代末期の「欠山期」を中心に成立した墓域であり、II期は須恵器 TK10 型式を中心とする。するとその間凡そ2世紀半のひらきが存在することになる。C群の在り方は明らかにA・B群を意識し、その外縁部（敷高地外縁）に区域を設定し、墓域を確保している。この状況は古墳時代を通じて当地が一つの墓域として設定され、それを維持



第42図 A期遺構変遷図

してきた集団を想定しなければなるまい。その集団とはいかなるものかについては、なお周辺の調査をまたねばなるまい。

2) 平安時代末期～室町時代の遺構 (B期)

遺構の種類としては、溝・井戸・土坑(竈)・建物・柵等がある。その内溝と井戸に遺物の出土が集中している。前述したように後世の削平整地のため、遺構として検出しえたものは、掘削の深い溝・井戸が中心とならざるをえなかった。ここでは溝・井戸を中心に遺構の変遷を復原し、また特色的な在り方を示す土坑(SX)については次項でまとめて取り上げる。

投棄された遺物より、溝の掘削・存続・廃棄・埋没時期を考えることは困難であり、かつその遺構の使用年代を推定するのは危険が伴う。そこでここでは遺物によるⅠ～Ⅳ期の区分を基に、遺構全体の構成とその変遷を類推する中で、大きな流れを把握することにとめた。また建物等については削平をうけ、その存在が不安定であるが、溝・井戸・土器の投棄場所を中心に推定を試みた。以下井戸・区画する溝とその空間・建物・道・土坑の集中する空間の各要素を基本に、Ⅰ～Ⅳ期の変遷を復原する。ほぼ遺物によるⅠ～Ⅳ期の時期区分と一致するものとする。

なお遺物からみた遺構の存続期間については第24表にまとめておいた。

第24表 主要遺構存続期間

I	II	III	IV
SK05			
SE07		SE20	
SE01		SE02 SE08 SE10	SE21
SE11		SK67	
SE05	SE16	SD61	SD68
		SD65	SD64
	SD55		
	SD27		
SD41		SD42	
SX80			

第Ⅰ期（12世紀 平安時代末）

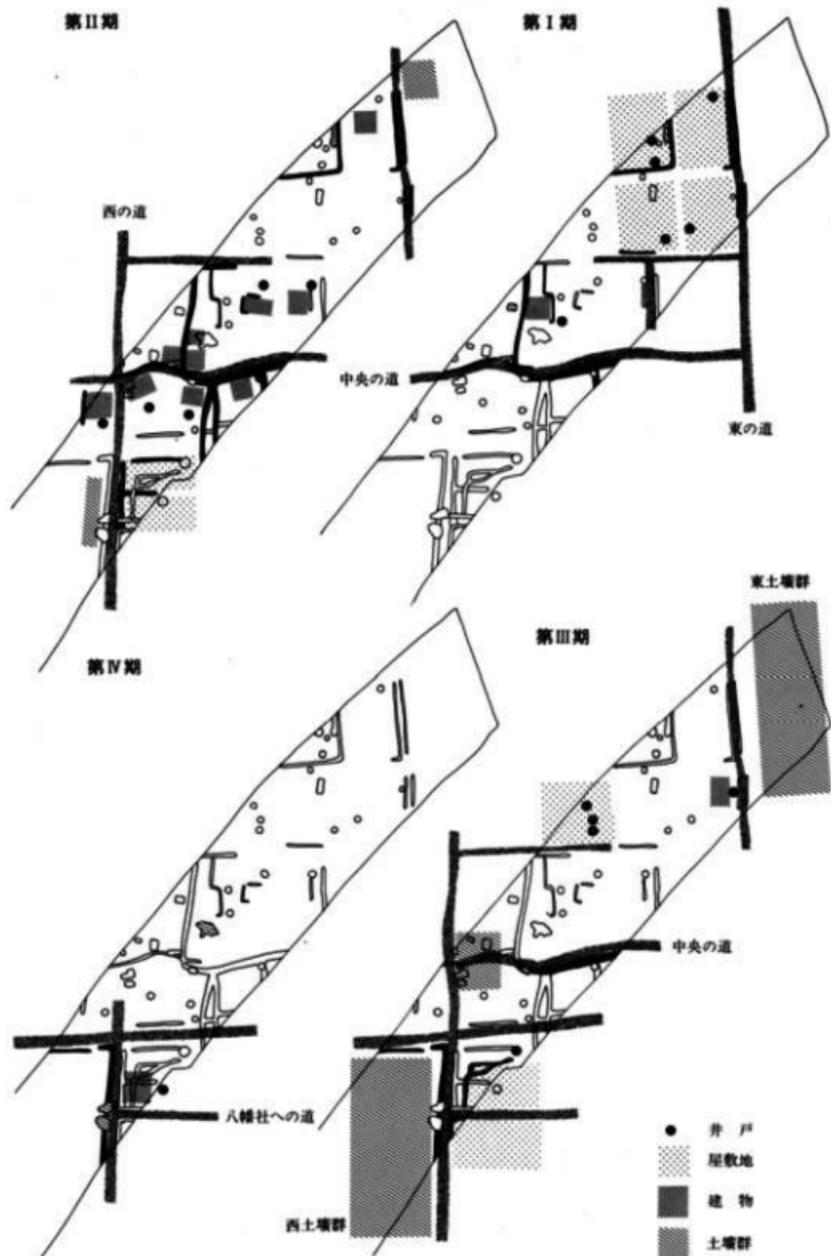
土田遺跡本調査区において遺構が掘削され始めた時期であり、ほぼ北側の遺構群を中心に人々が居住し始めたと考えられる。「東の道」とは土田遺跡が立地する自然堤防状の高まりの端に沿って中ば自然発生的に存在した「道」と推察され、この道を基軸に大規模な長方形区画（30×40m）が設定された。（SD27・SD20）そしてその一方の隅に井戸が設けられ、同様に区画内にSX80のような土壌（SX）が存在した可能性が考えられる。それは「中央の道」に近接するSD35とSE14により建物の存在が推定できる場において、その西側にSX81が存在することからも理解されよう。なお「中央の道」も前述したように自然発生的に生まれた蛇行する「道」と考えられる。第Ⅰ期は長方形の大規模区画とそれに付属する井戸・土壌（SX）を基本として、整然と居住域を設定していた。

第Ⅱ期（12世紀末～13世紀 鎌倉時代）

「東の道」沿いの大規模区画は、しだいに意味をなくし、SD20、SD27には多量の遺物が投棄される。これらとは対象的に「中央の道」沿いには井戸・建物群が推定でき、道にそって家々が軒を連ねていたものと思われる。自然堤防の西端には「西の道」が存在し、道沿いの調査区南端には大規模な区画が営まれ始める。（15×35m）、さらに注目すべき出来事は、北と南端に一定の土壌（SX）群が集中して営まれ始めたことである。これはⅠ期と比べると、区画内に存在していた土壌（SX）が、土壌自体の集中化をともなって特定の「場」を設定しはじめていることを物語る。Ⅱ期とは「中央の道」沿いの建物群と、調査区南端の大区画の成立、そして土壌の集中化に特色づけられる。

第Ⅲ期（13世紀末～14世紀 鎌倉時代末～南北朝時代）

「中央の道」に沿って掘削されたSD42より北上するSD41は、Ⅱ期後半にはすでに廃棄され、Ⅱ期で活発な活動が見られた「中央の道」沿いの建物群は消失し、変ってその地にやや大型の土壌（SX）群が営まれた。調査区南の区画は、内部的に変遷をたどりながら、SD56、SD61という特徴的な溝を掘削するとともに、SD68が出現する。SD68は調査区南西側に集中する土壌（SX）群を画する溝であり、同時に「東の道」調査区南西の土壌群が成立する。同様な土壌（SX）の集中が「西の道」調査区北東側で成立し、東西2つの大きな土壌群集中地区が出現した。調査区南端での遺構の在り方は、第1に大区画の存在、第2に西土壌群の成立という異様な場を形作り、特殊遺物（第16図）の出土から宗教関係の建物の可能性が考えられるかもしれない。「八幡社への道」⁶⁾は土田の本郷からこの特異な場へ向かう主要道路として位置づけられていく。



第43図 B期遺構変遷図

第Ⅳ期（14世紀末～15世紀 室町時代）

調査区ではほとんどの遺構が、その使用を停止し、わずかに SD68・SD64 を中心に井戸・建物の存在が推測されるにすぎない。東・西両土壌群はすでに空間的に飽和状態になり、その区画維持自体が不可能な状況を呈し、変って大型土坑 SK62・SK63 が掘削された。

その後当地は畑地荒地に変貌していったものと思われる。

以上の変遷を改めてまとめてみると、Ⅰ期は北側の区画群、大規模区画を中心とする整然とした屋敷地が存在した。Ⅱ期になると、その存在が消失し、「中央の道」沿いに小規模な建物群が連立する。そして南端には新たに大規模な区画がつくられ、土壌(SX)がしだいに特定の場へ集中しはじめる。Ⅲ期になると人々の動きが南端の大区画に集中し、東西の土壌(SX)群の成立と合まって、特異な空間を形成する。

遺構の変遷において注目される事項をまとめておく。

1. 整然とした大区画の配置は12世紀に成立する。2. 「道」・区画等の基本的配置は自然地形を利用し、これに規制される。3. 土壌(SX)は区画内から一定の場へ、そして集中するという変遷を歩む。4. 「建物」は、たえず荒地へ任意に設定し、一定の場に長期間留まることはない。

以上の諸点から特に興味深い問題として2つの点があげられよう。第1の点は土壌(SX)の在り方である。土壌の設定場所の変遷を居住との関係で捉え直してみると、まず最初は居住空間の一部に設けられていたものが、生活領域の「外」へ近接して営まれる方向に変化する。そしてやがて、生活とはかけはなれた特殊な場へ追いやられていく。この変化は何を意味するものであろうか。第2の点は「土地」の問題である。たえず任意の場へ建物を設定し、同一場所に留まることはない（土地所有権の不安定）という状況は、土地所有という意味において注目されよう。これはこの地に居住した住民の階層の問題なのであろうか。ところで上記の一般的傾向の中にあって、唯一例外的な場が認められる。それは調査区南端の区画であり、長期間の居住とともに、西土壌群と何らかの関係が想定できる。調査区全体がⅢ期以降南の区画を中心に人々の動向が認められるのであり、当地がしだいに特殊な場として位置づけられてゆくことが推定できる。それは日常生活と遊離した場の出現と、その思想的背景の確立を意味する。遺構の変遷はⅡ～Ⅲ期に大きく変化し、その時代は鎌倉末～南北朝の動乱の時代に相当するものと思われ、同時に土器における画期と基本的に一致を見る。

6 方形土 墳

方形土墳179基について分析を行なう。

規 定

第II章で述べたように、古代末～中世期に所属することは明らかであり、これら一連の土墳には共通する特色が認められる。それは大きく3つの要素から成り立っている。

第1の要素 遺構群の在り方に求められる。図版2～5を一見するとすぐ判明できることは、まず群集して土墳が築かれている点である。その大部分は図版2と前節で問題にした西と東の土墳群である。それ以外の場所においても認められようが、全体としてやはり居住区外（西・東の道以外）に営まれることは明白である。群集するとは、換言すれば特定の空間を設定するということにもなろう。

次に各土墳の特色として、全体に南北・東西という方位が意識されている点である。第44図から明らかなように、土墳の主軸が南北・東西に集中する。ただ南北方向では15度の方位ぶれが見られ、東西方向では東側にのみ10度のぶれが認められる。地区別では図版2の北端付近が西へ5～10度⁷⁾の傾きをもち、SD20に区画される周辺では東へ5～10度の傾きをもつ。SD20に区画される周辺では東へ5～10度の傾きを持つものが集中する。おおむね、住居域を規定する基本軸に強く影響されていることが窺れようが、この点を踏えても方向性の保有は認められよう。なお南北方向に主軸を置くものと東西方向に置くものの比は1:0.8の割合となり、若干南北方向に長軸を置くものが多くを占める。

以上第1の要素である在り方（関係）において、「群集性」と「方向性」という2つの特色が見い出された。

第2の要素

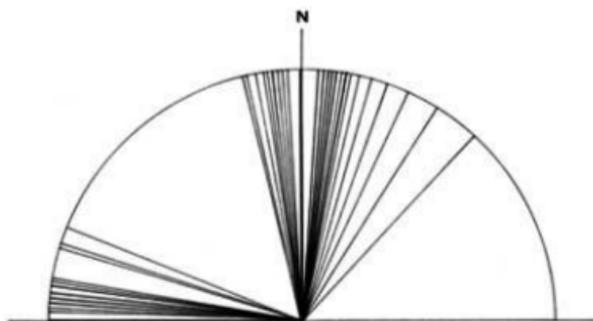
各々の土墳の形状に見られる特色として、平面形は隅丸の長方形を呈し（第9図）しかも第45図のように軸指数が1.0～0.17までであり、多くは短軸と長軸をもつ。そして軸指数0.5、つまり短軸と長軸の比が1:2の長方形を中心とする、相似形を有している。今一つ興味深いのは埋土の状況である。ほとんどブロック状の粘土塊を斑入する地山攪乱土で埋めつくされ、一般の層位堆積を示すものは存在し

ない。すなわち比較的短時間に「埋戻し」行為が伴う土壌と云ってよい。「掘削」→「内容物納入」→「埋戻し」が連続する土壌である。第2の要素である土壌自体の状況（存在）からプランに「長方形を基本とする相似形」をもち、「埋戻し作業が連続する」遺構という特色を指摘できる。

第3の要素

「内容物」について。現状ではその内容について言及しえる資料を持ち合せていない。断面観察においても内部の施設を考えさせる状況を見出しえていない⁸⁾。しかも「遺物」の出土がきわめて少なく、ほとんど存在しないと云ってもよい状況である。内部施設の問題と出土遺物に関しては否定的である。

以上まとめてみると、第1の要素（関係）において群集性と方向性を保有し、第2の要素（存在）において大きさに一定の規格をもち、掘削・内容物納入・埋戻し作業が連続する状況が見られる。第3の要素（内容物）では無構造・無遺物という特色を見出しえた。これらの特色をもつ土坑を一括して「方形土壌」として総合する。

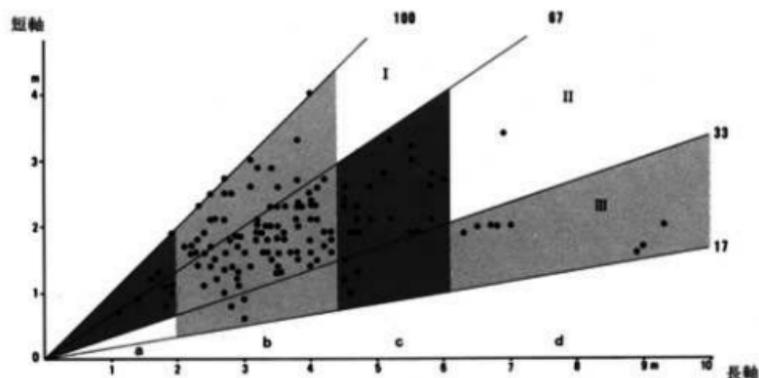


第44図 長軸の方位

分 類

平面形状の2つの要素を基に分類を行う。(第45図)まず長軸と短軸の比率である軸指数をもとに、1.0~0.67をI類。0.67~0.33までをII類。0.33~0.17をIII類とする。次に大きさを問題にし、相似形という特色から長軸の規模により4つに区分する。長軸2m未満をa類(小型)、2~4.5m未満をb類(中型)、4.5~6mまでをc類(大型)、6m以上をd類(超大型)とする。以上の2つの要素を組合せて9グループに区分した。(第45図) II類が最も多く(48%)次にI類(18%) IIc類(15%)となる。この3つの類で全体の約8割を占める。

- I類 正方形に近似するプランをもつもので、その大部分が長軸2~3.5mの間にある。なかでも長軸、短軸が2.5×2mの形状に集中する。大型が存在せず、ほぼ中型でもその内や小規模なものが多い。
- II類 長軸・短軸が2:1になる方形のプランをもつものが多い。その中心は長軸2.5~4mにあり、その内2.7mと3.6m付近に集中する傾向が認められる。また4.7m付近にも一つのまとまりが存在しそうである。
- III類 長軸と短軸が3:1未満の長細い形状のもので特に興味深い現象が認められる。まず規模として小型のものは存在せず、4.5m以上の大型が8割を占める。分布に著しい偏りが見られ、4ヶ所に集中する。長軸でいけば2.8m、4.6m、6.5m、9m付近に集中する。これらはある一定の規格とその相似を意味するものであろう。



第45図 規模分布と分類

配 置

上記した第1の要素（関係）で群集性を指摘できた。その群集性とは2つの意味をもっているものであり、各種遺構群全体の中での土壌群の群集という点と、その内部における特定のまとまりという点である。

群集性 当調査区では、4つの土壌群のまとまりが認められる。（第46図）北から図版2に見られる第I群、「西の道」沿いの第II群、「東の道」とSD68に区画される第III群、そして「中央の道」沿いに展開する第IV群である。

第I群は、大まかに東西と南北の土壌帯ともいうべきまとまりが存在する。土壌の分類でいうII_a類が主体を占め、b類、つまり中型規模の土壌に限定される。調査区北隅の一群は方位がずれ、むしろ廻間遺跡⁹⁾のもの一つのまとまりが想定できよう。

第II群は南北に土壌帯をもち、北辺ではIII_a類他はII_a類が主体をなし、全体に大規模な土壌が集中する。なおSX77～79はおそらく第5節で試みた屋敷地内土壌に相当するものと思われ、第II群から除外する。

第III群はI類、すなわち正方形に近似するものが比較的目立つ。またIII類の超大型土壌も点在する。土壌帯の存在はみられず、むしろ大規模な方形の単位が指摘できる。

第IV群はむしろI類、III類の存在が目立され、一般形態としたII_a類はほとんど用いられていない。また大型の土壌が比較的多い。

方形単位 土壌群の配置の中で興味深いのは、土壌のまとまりの中である種の空白域が存在する点である。特に方形の区画を設定するかのように空白域が東西、南北に長く存在している状況が窺える。土壌群の第III群において顕著で、第I群の中でも東西の土壌帯に見られる。おおむね25m×25mの方形単位、あるいは25m×15mの単位が存在するようである。

重複 3～6基の重複する土壌群から形成される一つのまとまりを意味する。土壌群の第I群では3ヶ所以上、第II群で1ヶ所、第III群で3ヶ所以上、第IV群で1ヶ所見られる。ほぼ方形単位を設定する場所を中心に存在するという一つの傾向が認められよう。

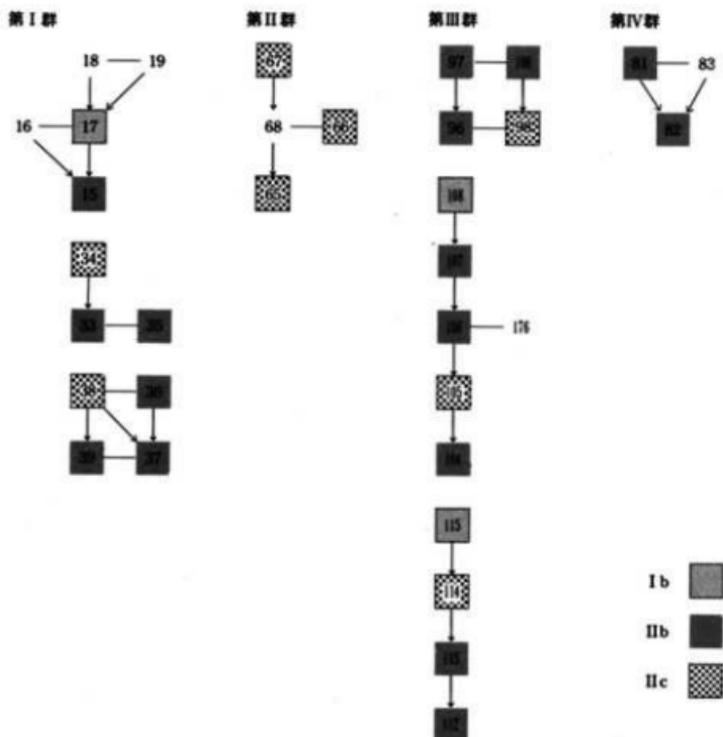
重複区の特徴をまとめておくと1、重複関係から類推される掘削時

期は2～5回。2. 一掘削時期に2基あるいは3基の土壌が設けられる場合が見られる。3. 途中に大型の土壌を掘削する場合がある。4. 最終段階はほぼ II_b 類、中型の土壌である。5. 小型の土壌が重複区の周囲に展開することが多い。

配置における特色をまとめてみると以下のようになる。

1. 集落構造として土壌が集中する場所が存在する。(第I～IV群)
2. 第I群と第III群には内部に小単位が見られる。(方形単位)
3. 第II群と第IV群は比較的大規模な土壌(同様な規模、相似形のもの)が集中する。
4. 方形単位は重複区を中心に形成されている可能性がみられる。

第25表 土壌の重複関係(重複区)



小 結

第5節による遺構の変遷で見てきたように、土壌(SX)の集中は第II期から開始され、第III期に最盛期を向える。これらの遺構の動向及び上記した分析結果を加え方形土壌をまとめてみることにする。なお遺物の出土が少ない土壌であるが、その中でも時期の決定できるものについて第26表にまとめておいた。

土壌の遺構配置の在り方から4つの段階に区分できる。

第1段階 屋敷地の内部に土壌が設けられる段階。この屋敷内土壌は例えばSX80のようにL字状に掘削された溝に近接する場合が認められ、同様なものにSD20により区画される、SX78, 79が存在する。いずれも、屋敷地の一方隅に偏って営まれる。また建物に近接する形ではSX81～83が存在する。SX81～83あるいはSX80のように整然として重複する(重複区)土壌が見られることは注目すべきであり、少なくとも両者3回の掘削が認められた。

第2段階 土壌の集中が開始されるが、今だ住居地に近接して営まれる状況を呈する。土壌群第II及びIII群が出現しはじめるが、多くは住居地に著しく近接する。

第3段階 土壌群の群集地区が設定され、日常的空間から離脱する。第I群は方形単位を基本に土壌群が展開し、第II群は大規模な土壌が「西の道」からやや間隔を置き、南北の土壌帯を形成する。第III群は、SD68, SD69が掘削され、視覚化された特殊区域が出現する。また第I群と同じく方形単位を基本にしだいに南方へ拡散する。第3段階では土壌群の周囲に建物群が存在せず、一搬居住域と確実に分離する。

第4段階 土壌群による各区分が飽和状態になり、さらに外側に拡散するとともに、第III群にはSK62, SK63が掘削され、「埋戻し」作業を前提とした土壌製作そのものへの矛盾が表面化してゆくものと考えられる。

第26表 方形土壌出土遺物

遺 構	罎	皿	その他	時 期	遺 構	罎	皿	その他	時 期
S X 85	2	2	加工円盤 2	I	S X 55	1	2		III
S X 80	6	3	表 2 中国陶磁 1 土師罎 1 加工円盤 1	I - II	S X 06	1	1		III
					S X 159	1			III
S X 81	1	3	土師罎 1 加工円盤 2	II前	S X 21	1			IV
S X 90	1		陶丸 1	II末	S X 44			土師罎 1	IV

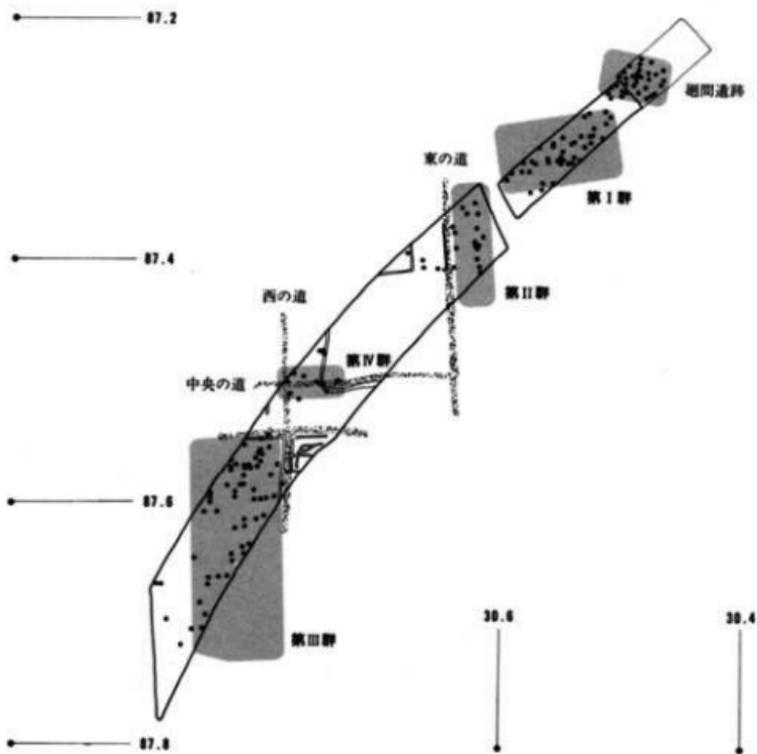
以上土壌は居住空間の一部として存在した段階（第1, 2段階）からそれらの集合が居住域と対峙する場として位置づけられ、やがて日常生活とはまったく異なる次元へ追いやられていった（第3, 4段階）段階へと変遷してゆくものと推察される。第2段階と第3段階の間に画期を設定できる。その時期は遺物による編年作業から鎌倉末～南北朝の動乱期に相当する。

ところでこれらの土壌の内容及び機能を説明することは困難であるが、第1段階でのSX80の遺物、及び石の集積（17頁）あるいは遺構の配置から推定すると、「人」「その他の動物」の埋葬空間、場であった可能性が高い。すると「埋戻し」への連続はこの埋葬、廃棄に基づく行動と理解とされよう。このように土壌を位置づけていくと、土壌群（I～IV群）方形単位、重複区は以下のような各々の意味合いをもってくる。各土壌群は一つの集落内行政区分、あるいは集落単位の「墓域」「廃棄空間」を意味している可能性が考えられる。方形単位は、その内の血縁関係を基にした集団を表示するものであるかもしれない。すると重複区はこれら同族内有力世帯の墓所を意味してくる。重複区の掘削関係は多くは2時期の重複関係が認められる。すると基本は2世代となるが、しかし第III群での重複区は4～5世代が推定できるのであり、この地区が他の土壌群と異なり特別な意味を持っていたことが推測できよう。

方形土壌を中世期を中心とする墓と規定すると、土壌の配置・重複関係を基本に、集団内部の構成員に言及できる資料を得たことになり、また土壌の群集化は「墓」に対する人々の基本的な考え方、思想背景の変化がそこから読みとれるのである。

〔注〕

- 1) 田中新史「市原市神門四号墳の出現とその系譜」（『古代』第63号1976）
当地域では中央に開口部を設定する墳丘墓はSK14（図版10）出土遺物の段階（欠山期）から広範囲に見られるようになる。
- 2) 直口壺A（図版10）のQ8とQ4は体部最大径の位置と底部の状況からQ4がより新しい様相をもつものと理解できよう。
- 3) 『須恵器展』愛知県陶磁資料館1982。
- 4) 『豊田大塚古墳発掘調査報告書』豊田市教育委員会 1966。
- 5) 『新編一宮市史』資料3 1963。
- 6) 現代の「土田」本郷は調査区西側の五条川自然堤防上に位置し、その北端に源頼朝ゆかりの「八幡社」が存在する。この八幡社の社前の道を東進すると「八幡社への道」に至る。
- 7) 廻間遺跡で検出した土壌群と連続するものと思われる。
- 8) SX81では最下部に遺物と石の集積が存在し注目される。（図版30）（第二章）
しかし第四章で見てきたようにリン・カルシウム分析では良好な結果を得ていない。
- 9) 「土田・廻間遺跡」（『年報昭和60年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1986）



第46図 土質分布

7 まとめにかえて

1) 画 期

遺物から見た画期

出土遺物の器種構成及びその比率をまず見てみると、(第27表)土師器では皿・鍋類に明白な変化が認められた。皿では第III期をもって胎土変化(輝石・角閃石の量比の増大)し、またロクロ成形品D・E類が消失する。鍋類では基本的な形態である鍋Aが第I～III期に見られ、第III期後半で急速にその使用が停止する。変わって鍋B・Cという新しいカタチがIII・IV期に登場する。また煮沸具全体に粗製から精製への変化が見られ、その萌芽的現象ともいえる胎土変化(雲母の量比が増加する半精製化)が第III期をもって開始される。なお完全な精製土器(胎土変化第3段階)の出現は第IV期、凡そ15世紀をまたねばならない。以上土師器の総合的(器種構成・技法・胎土)変換は第II期と第III期の間に存在する。

次に灰釉系陶器についてであるが、まず基本器種、碗・皿の場合、明らかに碗はA～C類という形態からD類へと大きく変化しており、E類の搬入を加えて第III期をもって画期を想定できた。口縁部による分類では第I～II期まで存在した各種の器形は殆んど姿を消し、その内のC₂類を母体として口縁端肥厚するD類が出現してくるのであり、碗形態の規範化が進行する。皿類では第I～II期に「皿の傾向変化」が認められるものの、皿C類の登場は特徴的である。口縁部分類で第II期にB類は多様化するものであり、その中でB₁類を母体として開始されてくる口縁端部肥厚、幅広い面をもち、底部が大きく、鋭く屈曲した短い口縁をもつC類への移行は注目せねばならない。碗と同様に一つのカタチへの規範化は第III期をもって出現し、加えてD類が搬入されてくる。碗・皿ともカタチの多様化から規格化(口縁肥厚志向)へ向かうのであって、精製品の登場も考慮すれば、第III期をもって一つの画期と考えることに異論はない。

その他鉢は鉢Aが碗・皿同様に第III期をもって口縁肥厚・体部直線化(B₂)を志向し、鉢Bは第III期をもって登場してくる。壺Aはほぼ第III期より口縁端部の面の拡張化が著しくなり、後半ではN字口縁に変化する。壺Bは第III期以降その姿を消す。釜も同様に第III期に残存するも、大部分は第II期に所属する。

施釉陶器は第III期をもって搬入され始め、第IV期にはその量を増加する。中国製陶磁器は第III期以降殆んど見られなくなる。加工円盤A₁類(灰釉系陶器碗・皿を素材としその高台部を使用する)は第I・II期にほぼ限定される使用を見せ、変わって第III期以降陶丸が出現する。

生産の隆盛が考えられるのではなかろうか⁶⁾。すると土田遺跡でみられる生産地・流通の転換は、基本的には生産地での生産体制の変動と呼応する現象と考えられるのである。第Ⅲ期といえば鎌倉時代末～南北朝の動乱期に相当し、その間に需給関係が大きく変化したことになると、その背景には「鎌倉」「京都」という支配構造の2極化とその変動が類推され、生産地での窯業経営の変動を考えねばならない。

因に墨書陶器に見られる10を単位とする「数を表示する記号」は第Ⅲ期以降に表現されはじめる。これは貨幣経済の浸透（13世紀後葉以降）を示すものとも考えることもできようが、流通配布手段の変化をしめす現象としても興味深いものといえよう。

遺構から見た画期

第4節「遺構の変遷」で見てきたように、第Ⅱ期と第Ⅲ期の間に画期を設定することができた。それは方形土壇の群集化による特定空間の設定（第3段階）に象徴される。また調査区内部で一般居住地が殆んど見られなくなる。

画期の意味するもの

遺物から、また遺構から、そのいずれにおいても第Ⅱ期～第Ⅲ期の間に最大の画期を設定できた。この画期は器種構成・技法・胎土に大きな変化をもたらし、それは生産地での変動と直接結びつく動きでもあった。また方形土壇の存り方から集落構造自体の変動を想定した。これらの歴史の変動の背景を見通す手掛りとして以下の2つの現象を上げておこう。まず井戸の廃棄層の存在と方形土壇の群集化。次に加工円盤 A₁ 類の消長。前者の土壇の群集化は居住地との分離、そして遊離という図式で進行する。井戸廃棄層は第Ⅱ期と第Ⅲ期の間で消失し、その中で思想的背景の変化を類推できよう。後者の加工円盤の突然ともいえる第Ⅲ期での消失は、それが「つぶて」というきわめて風俗的現象と解する限り、その消長は人間の内面的問題と深くかかわりをもつものと思われ、そこに大きな変化を推定できる。方形土壇の群集化に見られる居住区との分離・遊離は、廃棄・死における日常空間とのかかわりを表現するものと考えられ、そこに加工円盤の意味を考慮すると、非日常的なレベルが急速に居住地その空間から喪失してゆく過程をこれらは表現しているものと考えることができる。

南北朝の動乱を境に思想・風俗が一大画期をむかえるという指摘⁷⁾がある。土田遺跡の画期はまさにこれらの日常性の変動と呼応する動きとして、改めて捉え直すことができるものと考えられる。

2) 湿原の再開発

土田遺跡の溝の掘削は12世紀前葉に位置づけられる。L字状に屈曲する大溝、あるいは溝によって区画される居住区の存在は、古代末期、湿原を舞台に再び活発化する開発の幕あけである。五条川を狭んで東側に展開する自然堤防上では清洲町朝日西遺跡にみられるようにL字状に屈曲する大溝SD09の掘削と、その内部の建物群が突如出現する⁹⁾。朝日西遺跡の開発はSK13¹⁰⁾出土遺物から明らかなように11世紀末葉の時期と考えられる。その他稲沢市国府跡大宮地区SK131(美濃窯虎溪山1号窯式)¹⁰⁾の存在、また11～13世紀の溝が多く検出されており、三宅川、五条川の自然堤防上での開発の一端をこれらを通じ概観することができよう。ほぼ11世紀後葉を境に、人々が活発に活躍し始める様子を窺うことができ、その地に定着し、大溝を掘削、居住区を設定する動きは普遍的な動向として理解できるのかもしれない。それは凡そ11世紀末～12世紀にかけての時期と考えられ、まさに中世期への胎動といえる。

ところで溝の掘削については、今一つ活発化する時期が見られる。例えば一宮市山中遺跡¹²⁾、甚目寺町阿弥陀寺遺跡¹³⁾、同森南遺跡¹⁴⁾等であり、これらは土田第III期に相当するもので、美濃、瀬戸系縄・血類の搬入に特色づけられる動きである。13世紀末～14世紀初頭にかけて、再び大溝の掘削と居住区の設定が認められる時期のある点は留意する必要がある。また土田遺跡で見られた方形土壇の集中は、甚目寺町大洞遺跡¹⁵⁾清洲町朝日遺跡¹⁶⁾でも認められるのであり、土田遺跡第III期での普遍的な現象として捉え直すことができよう⁷⁾。

さて11世紀末葉といえば、濃尾平野においてまず神宮領としての所謂寄進地系荘園の増加が指摘されており、「御厨」「御園」¹⁸⁾の存在が各所に見られる。さらに富田荘が公認の荘園となり、鎌倉街道沿いには多くの人々の往來の足跡が認められるのもこの時期を境にしてである。また五条川の自然堤防が現在と同様な状況になったのも古代末期とされ¹⁹⁾、自然環境の安定化も加わって11世紀後葉以降、湿原の開発は再び歴史的命題となっていったものと推定し、土田遺跡の出現はまさにこの延長に位置づけられるものとする。

土田遺跡第III期の画期は、遺構の変化もさることながら、生活する人々の内面的状況での変動を強く主張することができた。13世紀末一過上人の甚目寺観音での彌念仏に象徴づけられるように、人々がこの時期、新しい思想、新しい体制(枠組)を求めて漂泊することが窺われ、旧来の集落の解体、新しい村の出現、人々の拡散がさかに行なわれたのではなかろうか。新しい村での溝の掘削はこれらの現象と呼応するものといえよう。

五条川水系中・下流域における再開発は、古代末(11世紀末葉～12世紀)期と中世、鎌倉末期(13世紀末葉～14世紀)の2回に大きな動向を見出すことができ、土田遺跡の出現は、前者に相当し、土田遺跡第III期の画期は後者によるところの影響と考える。

【注】

- 1) 朝日西遺跡においては13世紀以降「非ロクロ成形」のみが盛行するとしている。SD25は実測図を見る限り土田第II期に所属し皿の変化は土田遺跡の状況と大差ないものと考える。
佐藤公保「中世土師器研究ノート(1)」(『年報昭和60年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1986)。
- 2) 常滑窯製品については中野晴久氏より御教示をうけ、同時に実見する機会をえた。
- 3) 藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」(『研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館 1982)。
瀬戸窯製品については藤澤氏より御教示をいただいた。
- 4) 中野晴久「知多古窯址群における山茶碗の研究」(『研究紀要Ⅰ』常滑市民俗資料館 1983)。
- 5) 注3)に同じ。
- 6) 注3)に同じ。
- 7) 網野善彦「異形の王権」イメージ・リーディング叢書 1986。
- 8) 遠藤才文「尾張中世遺構の分析視角」(『中世尾張の遺構と遺物』第23回愛知考古学談話会資料 1984)。
「朝日西遺跡Ⅱ」(『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』財団法人愛知県教育サービスセンター 1985)。
SD09は土田第Ⅰ～Ⅱ期に比定でき、第Ⅲ期には埋没している。
- 9) 注1)に同じ。土師器鍋AのB₁類が共存する。なお他に単発的な遺構として11世紀前半まで遡る資料も見られる。
- 10) 『尾張国府跡発掘調査報告書』V稲沢市文化財調査報告XVIII 1983。
- 11) 注10)に同じ。
- 12) 『尾張病院山中遺跡発掘調査報告』一宮市文化財調査報告8 1982。
- 13) 「阿弥陀寺遺跡」(『年報昭和60年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1986)。
- 14) 長島広「甚目寺町森南遺跡について」(『中世尾張の遺構と遺物』第23回愛知考古学談話会資料 1984)。
遺物については長島氏より御教示。
- 15) 池本正明「大河遺跡に見る中世集落の一形態」(『年報昭和60年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1986)。
- 16) 七原恵史「中世土壇」(『朝日遺跡』1982)。
- 17) 土葬墓とすれば「地下式墳」の成立時期13^{世紀後半}～14^{世紀}という年代と、現象面的には一致する動きかもしれない。江崎武「中世地下式墳の研究」(『古代探叢Ⅱ』1985)。
- 18) 上村喜久子「一宮地方の荘園と尾張国衙領」(『新編一宮市史』本文編上 1977) p.373～380。
- 19) 井岡弘太郎「一宮の地形と地質」(『新編一宮市史』本文編上 1977)。p.26・p.27・p.32

別 表

主要遺構出土遺物計測値一覽

弥生土器

番号	口径	最大径	器高	分類
1	160	260		広口 A
2	190	270	300	" A
3	130	280	290	" B
4	170	300	290	" B
5	130	270		短頸 B
6	160	280	310	" C
7	140	230		" B
8	180	330	350	広口 B
9	150	280	300	短頸 A
10		300		" B
11	150	280		" C
12	160	270	290	広口 C
13	130			" C
14	150	240	230	" C
15	150	260	250	" C
16		300		" C
17		270		広口 C
21	120	140	180	直口 A
22	250		250	高杯 A
23	180	230		嬰
24	90	110	140	直口 A
28	150	180	260	直口 A

土器・陶器

番号	口径	器高	底径	分類
48	170	49	84	碗 B ₁
51	85	27	46	皿 A ₁
52	95	28	60	皿 A ₁
53	100	29	54	皿 A ₂
54	93	30	46	皿 A ₂
55	172	51	80	碗 C ₁
56	170	50	86	碗 C ₁
57	180	54	90	碗 C ₁
58	160	43	80	碗 C ₁
59	173	51	82	碗 B ₁
60	168	55	76	碗 B ₂
61	168	53	88	碗 B ₂
68	96	27	50	皿 A ₂
69	300	120	130	鉢A-A
70	310			鍋A-B ₂
104	172	50	79	碗 B ₁
105	162	46	76	碗 C ₂

番号	口径	器高	底径	分類
106	168	44	85	碗 C ₁
107	166	49	80	碗 C ₁
110	106	28	54	皿 A ₁
111	88	25	48	皿 A ₂
112	86	26	50	皿 A ₂
113	84	19	50	土師皿D
131	160	51	78	碗 B ₂
132	160	48	76	碗 B ₂
133	155	52	73	碗 B ₂
134	163	49	85	碗 B ₂
135	174	55	82	碗 C ₂
136	155	53	50	碗 C ₂
137	156	51	75	碗 B ₂
138	160	48	60	碗 C ₂
139	158	50	80	碗 B ₂
140	161	51	77	碗 B ₂
141	88	25	50	皿 B ₂
142	80	22	40	皿 B ₁
143	85	26	36	皿 B ₁
144	84	23	42	皿 B ₁
145	79	22	47	皿 B ₂
146	80	23	37	皿 B ₁
147	82	20	46	皿 B ₂
148	76	19	40	皿 B ₁
149	80	21	46	皿 B ₂
150	74	19	38	皿 B ₁
151	76	18	37	皿 B ₁
172	139	51	58	碗 D ₁
175	144	53	60	碗 D ₁
176	142	49	51	碗 D ₁
177	144	53	56	碗 D ₁
178	78	19	46	皿 C ₁
179	81	21	43	皿 B ₁
180	80	14	51	皿 C ₁
181	80	17	57	皿 C ₁
182	82	16	48	皿 D ₁
189	148	53	66	碗 C ₂
190	156	54	60	碗 C ₂
191	157	55	73	碗 C ₂
194	156	59	71	碗 C ₂
195	160	52	72	碗 C ₂
197	150	44	66	碗 B ₁
198	150	55	66	碗 B ₂
199	146	55	65	碗 B ₂
200	144	52	52	碗 C ₂
201	154	53	68	碗 B ₂

番号	口径	器高	底径	分類
202	152	53	70	碗 B ₂
206	82	23	38	皿 B ₂
207	81	22	44	皿 B ₂
208	84	18	42	皿 B ₂
216	140	51	60	碗 D ₂
217	142	50	58	碗 D ₂
219	140	55	50	碗 D ₂
220	133	60	57	碗 D ₂
221	132	50	58	碗 C ₂
226	138	58	49	碗 E
227	140	54	52	碗 E
228	140	61	52	碗 E
229	123	47	47	碗 E
232	280			鍋A-D
233	300			鉢A-B ₂
234	84	15	48	皿 C ₁
235	84	18	48	皿 C ₁
236	80	12	55	皿 C ₁
237	76	13	52	皿 C ₁
238	82	15	52	皿 C ₁
239	78	14	48	皿 B ₁
240	84	17	50	皿 C ₁
241	77	19	45	皿 C ₁
242	78	17	44	皿 C ₁
244	86	19	48	皿 D ₁
245	80	14	48	皿 C ₁
246	84	19	48	皿 C ₁
247	80	20	35	皿 B ₁
249	71	21	42	皿 B ₁
250	80	14	44	皿 D ₁
251	80	17	40	皿 D ₁
279	145	56	55	碗 E
280	150	55	58	碗 E
281	132	46	56	碗 D ₂
285	78	21	48	皿 B ₂
286	82			皿 C ₁
287	82	18	42	皿 B ₂
289	82	13	56	皿 D ₂
290	270			鍋A-E
291	330			鉢A-C
292	320			鉢B
304	145	61	62	碗 D ₂
305	144	53	64	碗 D ₁
306	142	60	60	碗 D ₂

番号	口径	器高	底径	分 類	番号	口径	器高	底径	分 類	番号	口径	器高	底径	分 類
308	86	10	60	皿 D ₁	388	146	44	66	碗 C ₂	466	158	46	68	碗 C ₂
309	148	51	57	碗 D ₂	390	145	50	65	碗 B ₂	469	150	51	74	碗 C ₂
310	142	48	55	碗 D ₂	392	143	53	62	碗 B ₂	470	143	53	63	碗 C ₂
311	128	49	53	碗 D ₂	393	142	48	57	碗 D ₁	471	148	51	66	碗 C ₂
312	145	47	59	碗 C ₂	394	86	22	44	皿 B ₁	472	140	57	56	碗 D ₂
313	146	56	55	碗 C ₂	395	92	21	49	皿 B ₁	473	138	48	58	碗 D ₁
316	78	17	44	皿 C ₁	396	75	17	40	皿 B ₁	474	144	50	62	碗 D ₂
317	74	15	50	皿 C ₁	397	83	20	45	皿 C ₁	479	154	55	70	碗 D ₁
327	126	24	30	碗 F ₂	403	154	24	100	土師皿A	480	133	52	56	碗 D ₁
330	122	36	38	碗 F ₁	414	162	51	80	碗 A	481	137	54	61	碗 D ₁
331	123	34	38	碗 F ₁	415	168	50	72	碗 A	482	140	55	62	碗 D ₂
332	123	42	44	碗 F ₁	416	166	52	74	碗 B ₁	483	140	61	64	碗 D ₁
333	76	9	50	皿 E	417	162	52	73	碗 B ₂	484	136	52	67	碗 D ₂
334	82	9	60	皿 E	419	164	53	69	碗 B ₂	495	94	24	52	皿 B ₂
345	310			鉢A—D	420	160	47	66	碗 B ₂	496	84	20	44	皿 B ₁
346	350			鉢B	421	159	52	69	碗 B ₂	497	80	19	41	皿 B ₂
348	120	36	45	碗 F ₂	422	167	47	75	碗 B ₂	498	86	21	40	皿 B ₁
349	122	35	44	碗 F ₁	424	158	51	78	碗 B ₂	499	86	21	48	皿 B ₂
350	145	56	72	碗 C ₂	425	160	51	70	碗 B ₂	500	80	15	46	皿 B ₂
351	151	55	68	碗 D ₁	426	160	53	78	碗 B ₂	501	85	20	48	皿 B ₁
355	150	59	70	碗 C ₂	427	158	47	80	碗 B ₂	504	83	15	55	皿 C ₂
356	150	51	76	碗 C ₂	428	157	47	78	碗 B ₁	507	82	28	48	皿 C ₁
357	154	58	70	碗 C ₂	429	162	44	80	碗 B ₂	509	79	14	40	皿 D ₂
358	145	51	62	碗 B ₂	430	152	47	70	碗 B ₂	510	78	17	45	皿 C ₂
359	145	50	74	碗 C ₂	434	166	50	78	碗 C ₂	511	80	16	39	皿 C ₁
360	153	51	65	碗 C ₁	435	166	52	82	碗 C ₂	512	86	16	48	皿 C ₁
361	145	53	68	碗 C ₂	436	160	55	78	碗 C ₂	513	85	21	48	皿 C ₁
362	164	56	74	碗 C ₂	437	160	48	78	碗 C ₂	514	81	21	42	皿 C ₁
363	70	27	35	皿 B ₂	440	150	51	69	碗 C ₂	515	84	20	50	皿 C ₁
364	76	27	35	皿 B ₂	441	167	51	74	碗 C ₂	516	82	17	59	皿 C ₂
365	70	18	40	皿 B ₁	442	162	51	84	碗 C ₂	518	86	20	42	皿 B ₂
366	80	14	46	皿 C ₁	444	94	28	45	皿 A ₁	519	82	17	49	皿 B ₁
367	81	15	48	皿 C ₁	445	96	26	55	皿 A ₁	520	73	20	39	皿 B ₁
368	82	16	40	皿 B ₂	446	94	28	45	皿 A ₁	521	85	17	44	皿 B ₂
369	81	11	50	皿 D ₂	447	90	23	42	皿 B ₂	522	85	20	51	皿 B ₂
370	81	19	46	皿 C ₁	448	80	20	42	皿 B ₂	523	74	23	38	皿 B ₁
371	78	17	42	皿 B ₂	449	83	24	38	皿 B ₁	526	74	16	43	皿 C ₂
372	82	20	44	皿 B ₂	450	84	21	39	皿 B ₂	527	80	14	50	皿 C ₂
373	85	20	46	皿 B ₂	451	90	21	44	皿 B ₂	528	100	18	52	
375	98	31	50	皿 A ₂	459	164	51	76	碗 B ₁	529	270			鉢A—E
376	85	24	42	皿 B ₂	460	153	48	70	碗 B ₂	530	133	23	83	土師皿B
377	80	18	44	土師皿D	461	154	53	80	碗 B ₂	534	330			鉢A—B ₂
387	156	50	75	碗 C ₁	465	167	52	76	碗 C ₂	535	350			鉢A—B ₂

主要遺構計測値一覽

S Z (墳丘墓)

番号	調査地区別・遺構番号	出土遺物	番号	調査地区別・遺構番号	出土遺物
1	56B S D002・S D003・S D009	壺2	7	59A S Z04	壺1
2	56E S D011・S D012・S D013	壺3	8	59A S Z03	壺2
3	56D S D030 59E S D010・S D018	壺4	9	56G S Z01	壺1
4	56D S D031・S D032	壺7・壺1	10	59A S Z01 59B C S Z01	壺瓶・埴・短頸壺 高杯・杯舟
5	56E S D017	壺3・高杯1	11	57D M29・30 59B C S Z02	須恵器・杯舟
6	56E S D030 57C M19・M20 59A S Z02	壺1			

S K (土坑)

番号	調査地区別・遺構番号	長・短・深・(m)	時期	番号	調査地区別・遺構番号	長・短・深・(m)	時期
1	60D S K10			40	59B C S K06	2.6・(1.8 ₁)>0.20	
2	56C S K023	1.8・1.6・0.84	Ⅱ-Ⅲ	41	59B C S K08	2.1・2.1・0.15	
3	59P S K02	2.2・1.6・0.33		42	59B C S K10	1.2・1.0・0.25	
4	59P S K01	1.0・1.0・0.63		43	59B C S K11	1.2・1.2・0.40	
5	56B S K003	2.4・2.3・0.47	I	44	59B C S K09	1.3・1.3・0.40	Ⅱ
6	56E S X005	3.6・2.2・0.33		45	60奥道 S K03	2.0・2.0・0.50	Ⅲ
7	56E S K017	1.2・2.1 ₁ >0.36	Ⅱ	46	60奥道 S K02	1.8・1.7・0.47	Ⅲ
8	56B S K005	1.1・1.1・0.20	Ⅱ	47	59D S K04	(1.3 ₁)>0.9・0.20	Ⅱ
9	56E S K016	2.1・2.0・0.25	Ⅱ	48	59D S K12	1.6・1.5・0.35	I
10	56E S K018	2.2・(2.2)>0.18	Ⅱ	49	59D S E02	2.2・2.0・0.36	
11	56E S K015	(1.2)>0.6・0.05		50	59D S K03	2.8・1.5・0.25	
12	56E S K010	1.4・1.4・0.38		51	59D S K07	1.5・1.2・0.11	
13	56E 番号なし	2.5・1.6・0.05		52	59D S D07	2.7・0.9・0.08	
14	56E S K012	(2.6 ₁)>0.8・0.10	弥生土層	53	59D S K17	1.8・1.8・0.40	
15	56E S K008	2.1・2.0・0.50		54	59D S K05	1.4・1.4・0.40	
16	56E S K009	1.9・1.9・0.36		55	59D S K11	1.4・1.3・0.48	
17	56E S K011	1.6・1.4・0.27		56	59D S E04	1.7・1.6・0.25	
18	56E S K019	1.6・1.5・0.23		57	59D S K01	2.1・1.8・0.50	Ⅱ
19	59P S K10	1.7・0.8・0.30		58	59D S K09	2.3・(1.5 ₁)>0.70	I-Ⅱ
20	59P S K11	1.2・1.2・0.21		59	57B M9	1.8・1.8・0.10	
21	59P S K12	1.5・0.7・0.13		60	57B M15	6.0・6.0・0.40	Ⅱ-Ⅲ
22	59A S K18	1.8・1.7・0.40		61	59B C S K01	9.6・5.5・0.70	Ⅱ-Ⅳ
23	59A S K07	3.5・2.8・0.14	Ⅲ	62	59H I S K31	(8.8 ₁)>4・0.60	Ⅳ
24	59A S X01	0.7・0.7・0.50	I-Ⅱ	63	59H I S K06	6.2・5.5・1.00	Ⅳ
25	57C P9	2.7・1.7・0.20	Ⅱ-Ⅲ	64	59E S K10	1.9・1.4・0.15	Ⅳ
26	57C P6	0.6・0.6・0.10	Ⅱ	65	59E S K09	1.5・1.1・0.32	Ⅱ
27	57C P10	1.4・1.4・0.10	Ⅱ	66	59E S K01	1.2・0.8・0.20	Ⅱ
28	59A S K12	3.4・2.5・0.10	Ⅲ	67	59E S D04	1.4・(1.3 ₁)>0.20	Ⅲ
29	59A S K06	4.8・2.9・0.20	Ⅲ	68	57調査区 S K06	3.18・1.62・0.11	
30	59A S K02	2.3・(1.9 ₁)>0.07		69	56E S X004	7.5・2.7・0.10	
31	59A S K03	2.5・1.3・0.18	Ⅲ	70	60奥道 S D01	3・(2.3 ₁)>0.20	
32	59A S K04	3.1・1.5・0.95	Ⅲ	71	57A M2		弥生土層
33	59A S K17 57C M24 57D M25	8.0・4.0・0.40	須恵器	72	56E S D016		弥生土層
34	56D S D033		須恵器	73	59D S K13	1.3・1.2・0.63	
35	59A S K10	1.6・1.6・0.17		74	59B C S K02	24・3・0.57	Ⅳ
36	59A S K11	1.1・0.8・0.20		75	56C S K020		Ⅱ
37	59A S K01	(2.8 ₁)>1.9・0.05	Ⅱ	76	60奥道 S K05	(2)	0.11
38	57A P5	2.2・2.2・0.40		77	59D S K07	1.4・1.2・0.11	須恵器
39	57A M8	(3.6)・(3.6)・0.80					

SE (井戸)

番号	調査地区別・遺構番号	長・短・深 (m)	時期	番号	調査地区別・遺構番号	長・短・深 (m)	時期
1	56A SE001・60E SE01	2.4・2.4・1	I~II	12	59A SK14	2.7・2.3・0.6	I~II
2	59P SE01	1.6・1.6・1	II~III	13	59BC SE02	2.0・2.8・	—
3	56D SE06	2.5・2.5・0.75	I	14	59BC SE01	2.4・2.4・	I
4	56B SE002	1.8・1.6・1.5	II~III	15	S56調査団II SE02	2.8・2.8・1.5	III
5	56B SE003 (SX001)	3.5・3.5・0.8	I	16	59D SK02	2.5・3.0・	II
6	56E SE004 (SX003)	2.7・2.7・1.5	II	17	59D SE01	2.4・2.7・	—
7	56E SE005	3.3・3.0・0.65	I	18	59D SE05	2.4・2.3・1.4	I~II
8	57C P11	2.8・2.8・0.6	III	19	59D SE03	1.4・1.6・1.1	—
9	59A SK05	3.3・2.3・0.6	III	20	S56調査団II SE01	4.8・4.8・1.5	III
10	59A SK13	2.5・2.2・1.2	III	21	S56調査団II 調査区外	不 明	IV
11	59A SE01	5.3・4.0・0.7	II				

SD (溝)

番号	調査地区別・遺構番号	時期	番号	調査地区別・遺構番号	時期	番号	調査地区別・遺構番号	時期
1	61 SD01		28	調査団		55	59E SD05	I~II
2	61 SD02		29	59A SD08	—	56	59E SD10	II~III
3	61 SD03		30	59A SD02	調査団	57	59E SD16	—
4	61 SD04		31	57A M3	—	58	59E SD15	III
5	61 SD05		32	59A SD06	—	59	59E SD14	III
6	61 SD06		33	59A SD04	—	60	59E SD12	III
7	61 SD07		34	57D M26 59B C S P13	II~III	61	59E SD08	III
8	61 SD08		35	57D M 59B C S D03	I~II	62	59E SD07	II
9	61 SD09		36	59B C S D09	—	63	59E SD19	—
10	61 SD10		37	59B C S D20	—	64	59E SD03	IV
11	61 SD11		38	59B C S D02 S D11	II	65	59E SD02	III
12	61 SD12		39	59B C S D06	—	66	59E SD01	III~IV
13	61 SD13		40	59B C S D05	—	67	59E SD17	III
14	61 SD14		41	59B C S D01	I~II	68	59F SD03 59H I S D02	III~IV
15	61 SD15		42	57A M7 59A 59B C S D10	I~III	69	59F SD01	—
16	61 SD16		43	59B C S D08	—	70	59H I S D01	—
17	56C S D028	—	44	59B C S D04	—	71	59J S D04	—
18	60E S D01		45	57D M33	III	72	59J S D03	—
19	56C S D023 60E S D02	—	46	59D S D02 60E溝 S D02	II~III	73	59J S D01	—
20	56C S D022 60E S D06	I~III	47	59D S D06 60E溝 S D03	II~III	74	59A S D03	—
21	56C S D27	—	48	59D S D03	II~III	75	59A S D10	—
22	56C S D25	—	49	S56調査団 59D SK16	—	76	59A S D11	—
23	59P S D05		50	56 調査団		77	59B C S D15	—
24	59P S D03		51	56A S D01	II	78	59D S D05	—
25	56D 番号なし		52	57B M11	—	79	59D S D09	—
26	56D *		53	57B M12	II			
27	56B S D001 S D005 56E S D001 S D005	I~III	54	59E S D18	II~III			

SX (土壤)

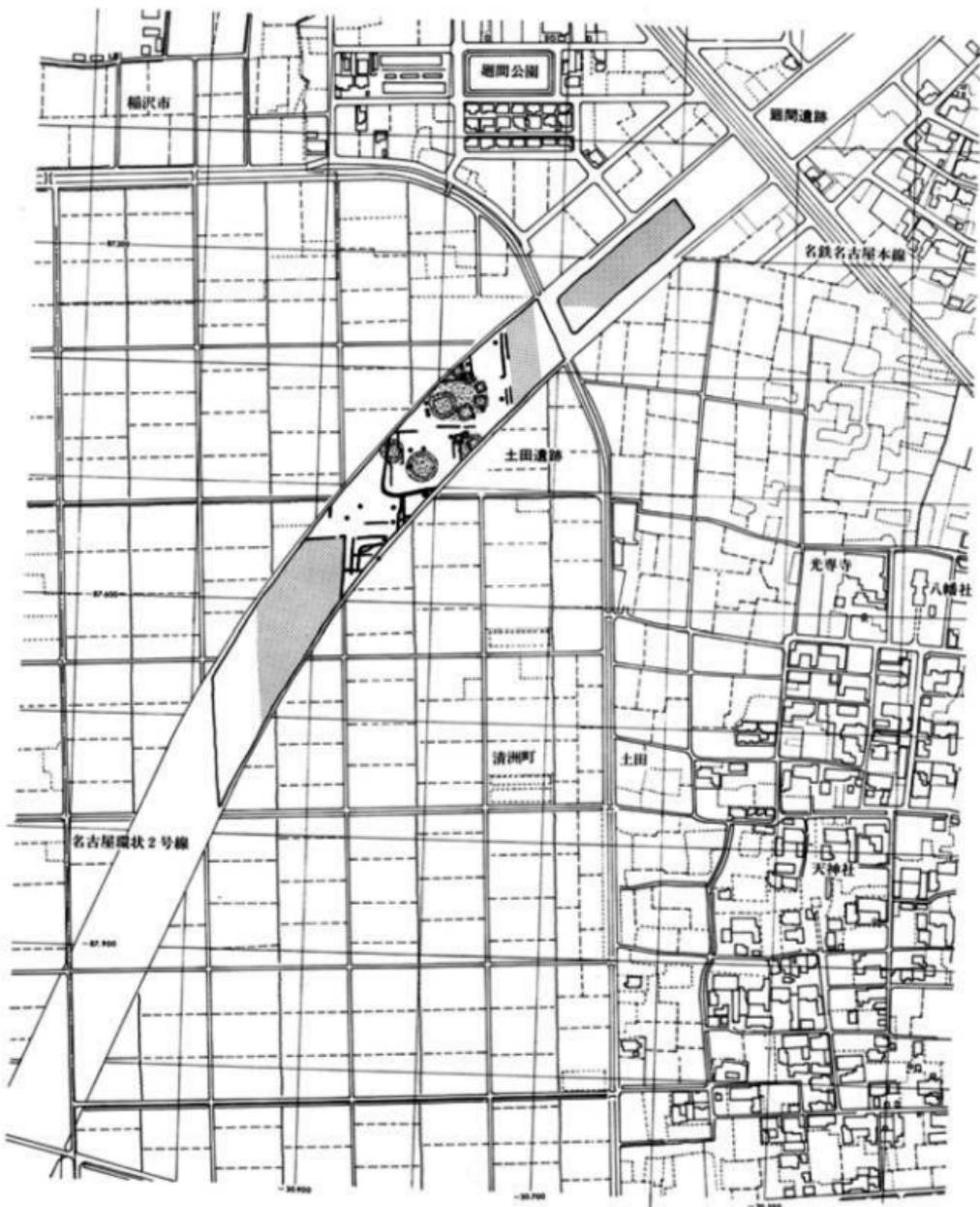
番号	調査地区別・識別番号	長・幅・厚 (m)	分類	番号	調査地区別・識別番号	長・幅・厚 (m)	分類
1	61 SK01	4.1・2.6・0.51	II b	46	60C SK08	(65 _{0.1})・1.8・1.00	II c
2	61 SK02	(1.4)・1.4・0.25	I a	47	60C SK02	4.0・2.1・1.25	II b
3	61 SK06	(3)・1.8・0.50	II b	48	60C SK11	2.9・1.3・0.40	II b
4	61 SK07	4.6・1.9・0.51	II c	49	60D SK12	(3.0)・3.0・0.65	I b
5	61 SK08	3.6・2.1・0.53	II b	50	60D SK11	(3.0)・2.9・0.69	I b
6	61 SK03	3.2・1.4・0.30	II b	51	60D SK13	4.9・(1.5)・0.62	II c
7	61 SK09	(3)・1.7・0.30	II b	52	60D SK15	3.8・1.5・0.56	II b
8	61 SK04	(3 _{0.1})・1.5・0.48	II b	53	60D SK14	1.8・0.8・0.10	II a
9	61 SK13	(3)・1.9・0.37	II b	54	60C SK01	3.6・1.9・1.00	II b
10	61 SK14	5.2・2.8・0.49	II c	55	60E SK02	8.9・1.6・0.77	III d
11	61 SK15	3.5・2.3・0.52	II b	56	60E SK04	6.8・2.0・0.85	III d
12	61 SK18	3.2・2.9・0.67	I b	57	60E SK05	6.9・3.4・1.00	III d
13	61 SK11	2.9・1.1・0.55	II b	58	59D SK01 60E SK03	6.5・2.0・0.52	III d
14	61 SK12	2.4・1.1・0.31	II b	59	60E SK06	2.3・1.8・0.49	I b
15	61 SK24	3.8・2.3・0.44	II b	60	60E SK07	4.7・2.1・0.62	II c
16	61 SK23	—・2.0・0.22		61	60E SK09	4.9・2.6・0.61	II c
17	61 SK25	3.8・3.3・0.82	I b	62	60E SK08	(2.6 _{0.1})・1.6・0.23	II b
18	61 SK26	—・2.8・0.46		63	60E SK10	5.8・2.1・0.73	II c
19	61 SK27	3.0・0.6・0.27	III b	64	60E SK12	(7.6 _{0.1})・2.3・0.62	III d
20	61 SK28	3.0・0.9・0.18	III b	65	56C SX011	4.5・2.4・0.85	II c
21	61 SK29	3.5・1.1・0.29	II b	66	56C SX011	4.6・1.9・0.66	II c
22	61 SK22	2.8・0.8・0.26	III b	67	56C SX011	5.6・1.9・0.50	II c
23	61 SK21	3.5・1.3・0.42	II b	68	56C SX011	—・—・0.54	
24	61 SK30	4.9・2.1・0.37	II c	69	56C SX010	2.2・1.6・0.61	I b
25	61 SK16	3.4・1.5・0.47	II b	70	56C SX009	5.8・2.6・0.60	II c
26	61 SK35	(3.5 _{0.1})・1.7・0.65	II b	71	56C SX008	3.8・2.3・1.00	II b
27	61 SK32	(3.5 _{0.1})・2.0・0.40	II b	72	59P SK06	(4.5)	II c
28	60C SK12	3.5・1.3・0.70	II b	73	59P SK07	(4.5)	II c
29	60D SK02	(3 _{0.1})・2.0・0.67	II b	74	59P SK08 56P SX016	(4.5)・2.6・0.60	II c
30	60C SK10	4.1・1.5・0.69	II b	75	56P SX017		
31	60C SK05	3.2・1.8・0.70	II b	76	56C SX006	2.6・1.5・0.60	II b
32	60C SK06	1.9・1.0・0.37	II a	77	56C SX007	1.7・1.3・0.47	I a
33	60D SK03	4.3・1.6・0.67	II b	78	56D 番号なし	2.1・1.7・0.47	I b
34	60D SK04	6.0・2.7・0.78	II c	79	56D SX014	2.9・1.7・0.10	II b
35	60D SK05	4.0・1.6・0.10	II b	80	56B SD009	(9.0 _{0.1})・1.7・0.9 0.68	III d
36	60D SK06	3.5・1.4・0.63	II b	81	57D M31 59B C SK15	(4.0 _{0.1})・3.0・0.60	II c
37	60D SK07	3.6・1.8・0.65	II b	82	59B C SK19	3.8・1.6・0.60	II b
38	60D SK08	5.2・2.1・0.59	II c	83	59B C SK16	4.6・1.0・0.53	III c
39	60D SK01	4.2・2.7・0.50	II b	84	59B C SK03	5.2・3.3・0.63	II c
40	60C SK13	4.1・2.1・1.00	II b	85	59B C SK12	7.0・2.0・0.43	III d
41	60C SK14 60D SP09	3.8・2.0・1.00	II b	86	59B C SK14	2.5・(2)・0.30	I b
42	60C SK07	(3.2 _{0.1})・1.6・0.70	II b	87	59B C SK04	3.5・2.6・0.60	I b
43	60C SK04	2.8・1.8・0.57	II b	88	59B C SK07	3.5・1.6・0.55	II b
44	60C SK03	2.5・1.7・1.00	II b	89	57D P18	3.1・2.6・0.50	I b
45	60C SK09	4.2・1.7・0.80	II b	90	57D P19	(3.9 _{0.1})・2.9・0.60	I b

番号	調査地区別・遺構番号	長・短・深 (m)	分類	番号	調査地区別・遺構番号	長・短・深 (m)	分類
91	59B C SK05	(6.0.0.1) - - (0.3.1.1)		136	59H I SK15	2.8 × 1.4 × 0.60	II b
92	60築道 SK01	4.3 × (1.8) × 0.30	II b	137	59G SK12 59H I SK16	(3) × 1.8 × 0.60	II b
93	59F SK33	2.5 × 2.5 × 0.20	I b	138	59H I SK17	2.8 × 2.5 × 0.10	I b
94	59F SK10	2.7 × 2.7 × 0.50	I b	139	59H I SK18	6.7 × 2.0 × 0.35	III d
95	59F SK7	4.5 × 1.5 × 0.31	II c	140	59H I SK20	3.3 × 2.0 × 0.50	II b
96	59F SK5	2.4 × 1.6 × 0.49	II b	141	59H I SK21	3.7 × 1.6 × 0.40	II b
97	59F SK20	2.7 × 1.6 × 0.62	II b	142	59H I SK22	(5) × 2.6 × 0.50	II c
98	59F SK23	5.5 × 3.0 × 0.50	II c	143	59H I SK29	(5) × 2.5 × 0.30	II c
99	59F SK11	2.9 × 1.2 × 0.30	II b	144	59H I SK24	1.8 × 1.1 × 0.30	II a
100	59F SK25	3.2 × 1.9 × 0.42	II b	145	58B SK01	(3.6) × (1.8) × 0.40	II b
101	58A SK06 59F SK17	5.5 × 1.9 × 0.40	II c	146	58B SP02	4.0 × 1.8 × 0.80	II b
102	59F SK13	3.8 × 2.7 × 0.40	I b	147	58B SK03	(2.1) × 1.4 × 0.80	II b
103	59F SK16	3.8 × 2.3 × 0.37	II b	148	59J SK06	4.7 × (1.8) × 0.26	II c
104	59F SK28	3.3 × 1.8 × 0.40	II b	149	58B SK04	3.5 × 1.8 × 0.40	II b
105	59F SK29	5.5 × 3.2 × 0.40	II c	150	59J SK02	4.7 × 1.9 × 0.58	II c
106	59F SK27	3.7 × 2.1 × 0.73	II b	151	59J SK01	4.2 × 1.9 × 0.55	II b
107	59F SK26	(4) × 2.5 × 0.30	II b	152	59J SK08	(2.5) × 1.6 × 0.28	II b
108	59F SK25	(2.5) × 2.4 × 0.30	I b	153	59J SP07	9.3 × 2.0 × 0.31	III d
109	59F SK30	3.4 × 2.8 × 0.60	I b	154	59K SK07	2.9 × 1.8 × 0.40	II b
110	58A SK07	- - - × 0.40		155	59K SK06	2.3 × 1.4 × 0.50	II b
111	58A SK10			156	59K SK05	4.5 × 1.2 × 0.50	III c
112	58A SK14	4.0 × 2.5 × 0.60	II b	157	59K SK04	2.3 × 2.3 × 0.34	I b
113	58A SK15	2.7 × 1.0 × 0.60	II b	158	59K SK03	6.3 × 1.9 × 0.60	III d
114	58A SK16	4.7 × 2.3 × 0.60	II c	159	58C SK03	2.4 × 1.9 × 0.40	I b
115	58A SK17	2.5 × 2.1 × 0.60	I b	160	58C SK02	(1.6) × 1.4 × 0.30	I a
116	59G SK08	2.2 × 1.6 × 0.60	I b	161	59K SK02	- × 1.9 × 0.50	
117	59G SK09	3.1 × 3.0 × 0.40	I b	162	59K SK01	3.6 × 2.3 × 0.70	II b
118	59G SK06	3.3 × 1.6 × 0.40	II b	163	59K SK08	- × 2.0 × 0.60	
119	59G SK05	3.0 × 1.6 × 0.70	II b	164	59K SK01	(4.0) × (2.3) × 0.30	II b
120	59G SK10	2.9 × 1.8 × 0.60	II b	165	59K SK09	4.3 × 1.8 × 0.60	II b
121	59G SK11	3.2 × 1.9 × 0.50	II b	166	59K SK10	3.3 × 2.0 × 0.60	II b
122	59F SK21	- × 2.6 × 0.80		167	59L SK01	3.5 × 2.0 × 0.60	II b
123	59F SK09 59H I SK03	5.8 × 2.8 × 0.40	II c	168	58A SK11	4.5 × 2.6 × 0.60	II c
124	59H I SK34	- × 1.8 × 0.30		169	58A SK03	1.4 × 0.9 × 0.10	II a
125	59H I SK07	4.0 × 2.3 × 0.30	II b	170	59H I SK02	4.7 × (1.3) × 0.12	III c
126	59H I SK42			171	59F SK32	2.7 × 2.1 × 0.40	I b
127	59H I SK09	4.5 × 2.3 × 0.60	II c	172	58A SK04	2.5 × 1.4 × 0.20	II b
128	59H I SK12	3.3 × 1.6 × 0.78	II b	173	58A SK05	1.6 × 1.2 × 0.50	I a
129	59H I SK36	- × 1.9 × 0.26		174	58A SK08	1.9 × 1.9 × 0.50	I a
130	59H I SK37	2.5 × 2.1 × 0.31	I b	175	58A SK09	2.2 × 1.7 × 0.70	I b
131	59H I SK10	4.0 × 4.0 × 0.80	I b	176	59F SK15	1.9 × 1.1 × 0.35	II a
132	59H I SK11	3.2 × 2.1 × 0.40	II b	177	欠番		
133	59H I SK13	3.2 × 2.0 × 0.60	II b	178	59H I SK40	2.6 × 1.2 × 0.25	II b
134	59G SK07	4.0 × 2.3 × 0.40	II b	179	59H I SK26	(4.0) × 1.4 × 0.20	II b
135	59H I SK15	2.7 × 2.5 × 0.30	I b	180	59K SK07	1.1 × (0.7) × 0.15	II a

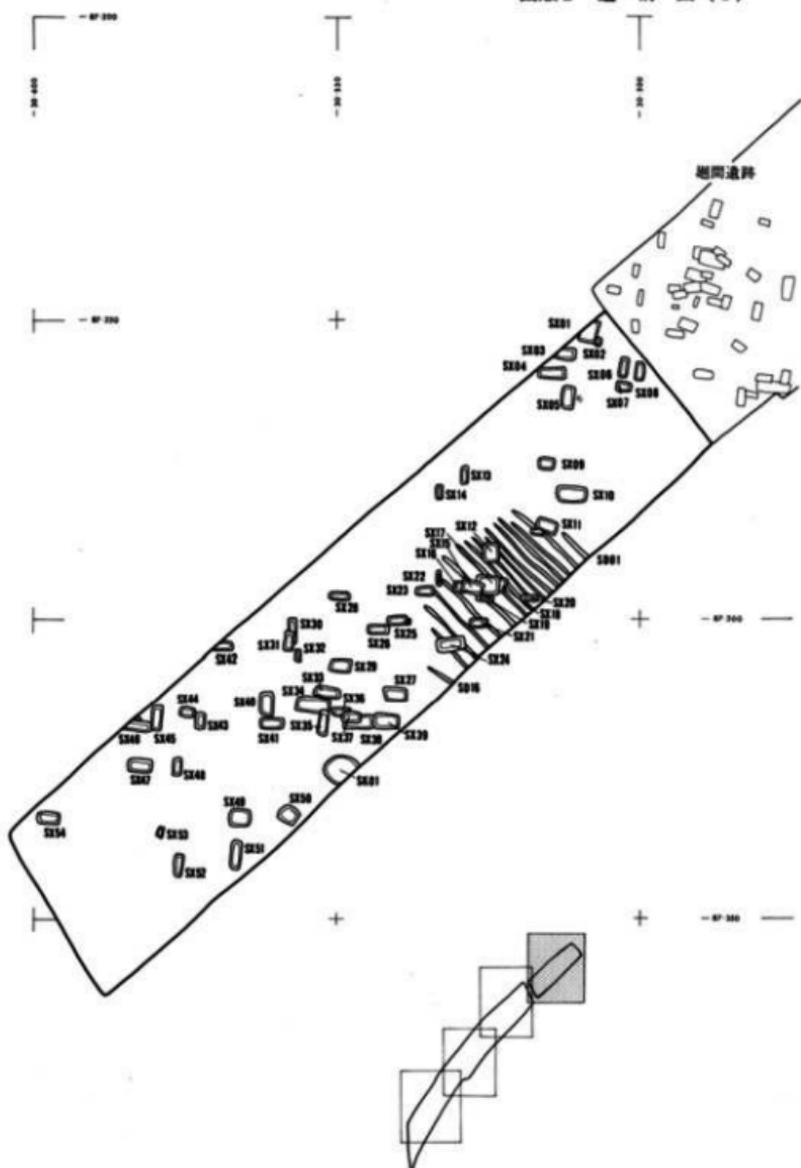
图 版

遗 构 图	1 : 1000
遗物实测图	1 : 4
遗 物 写 真	弥生土器 1 : 5
	灰釉系陶器 1 : 3

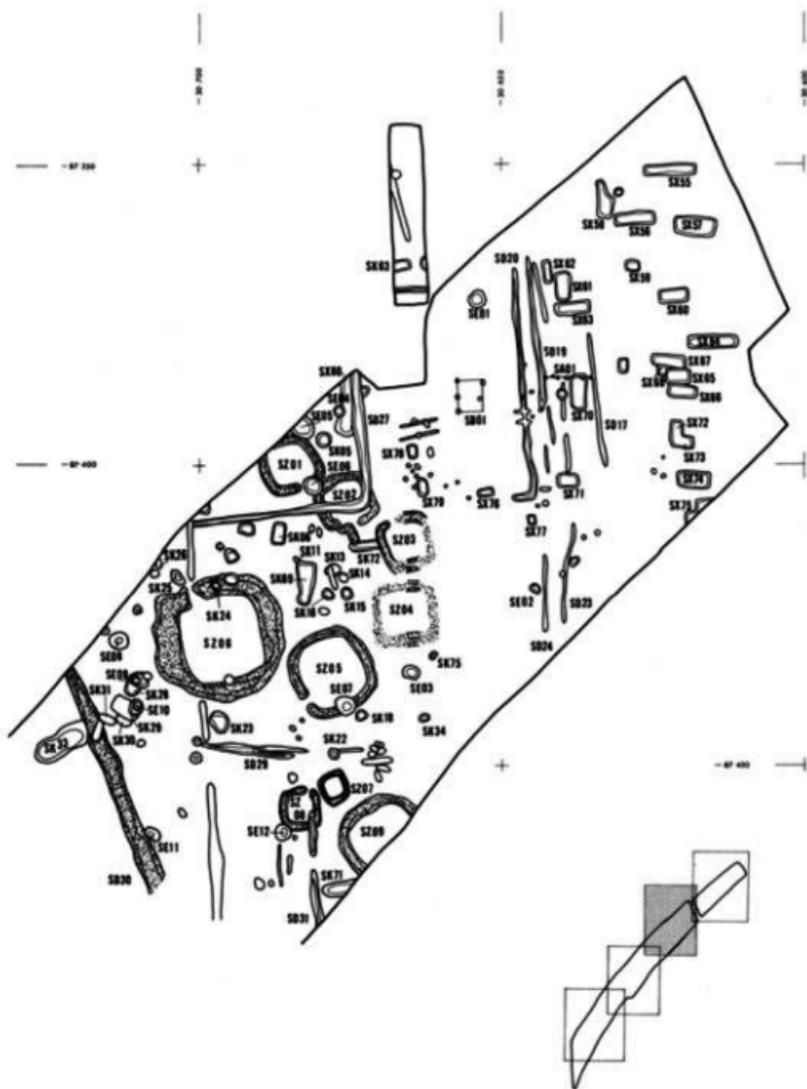
図版1 主要遺構と周辺地図



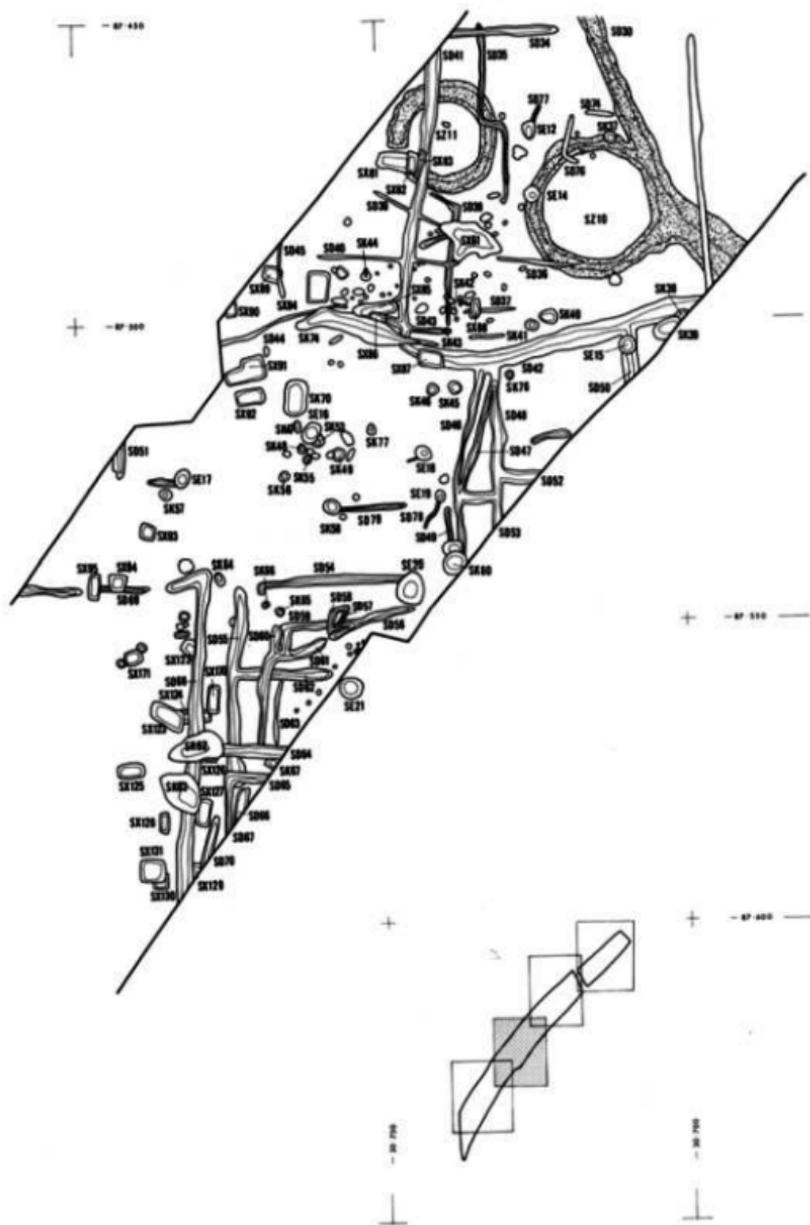
図版2 遺構図(1)



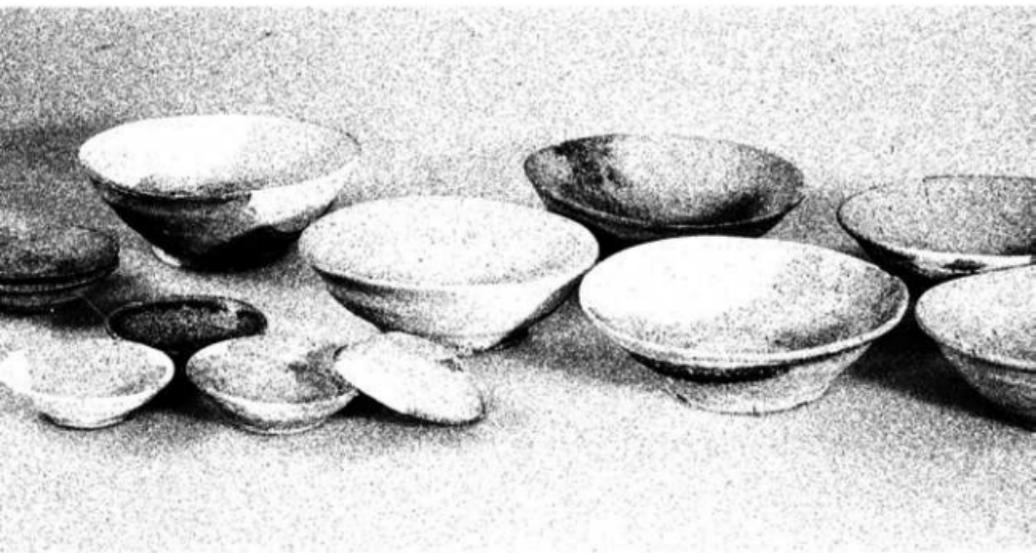
図版3 遺構図(2)



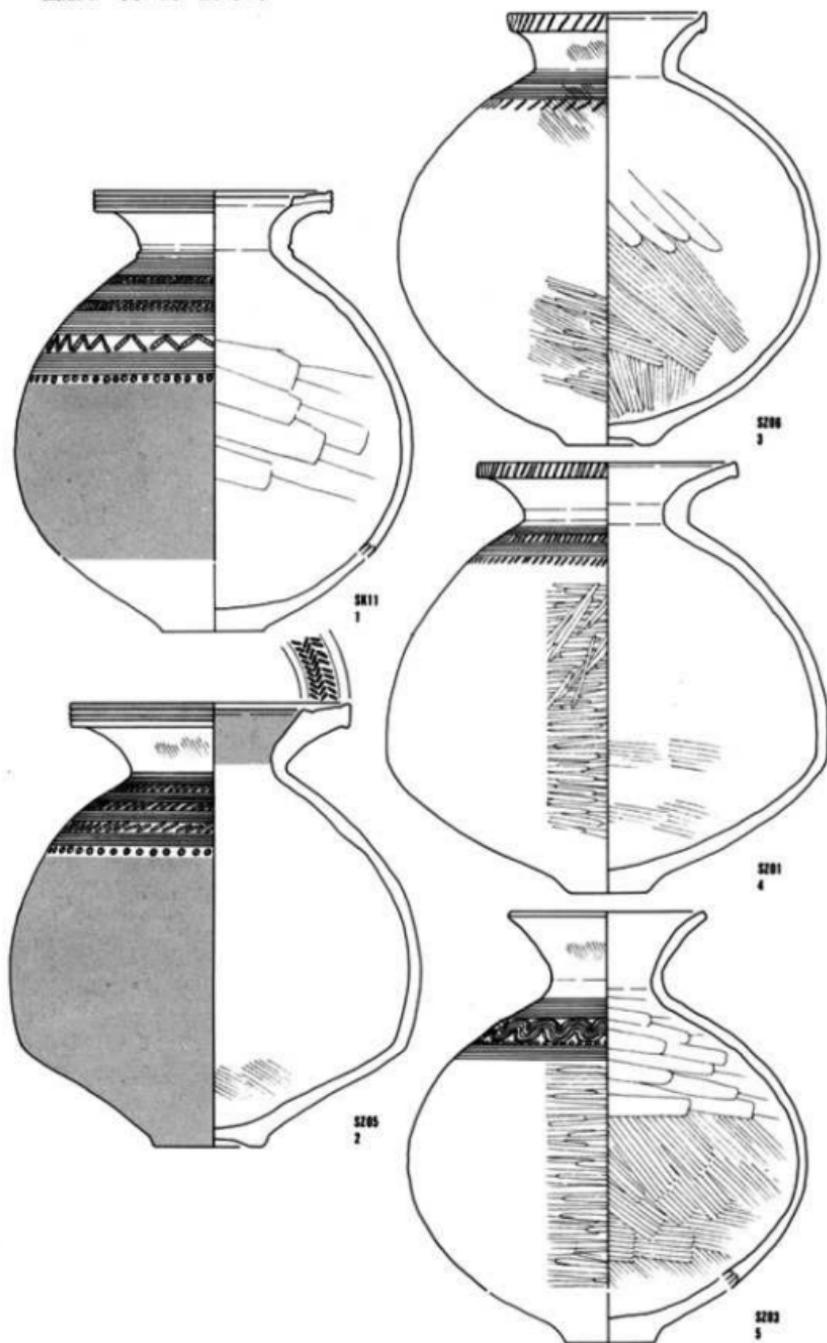
図版4 遺構図(3)



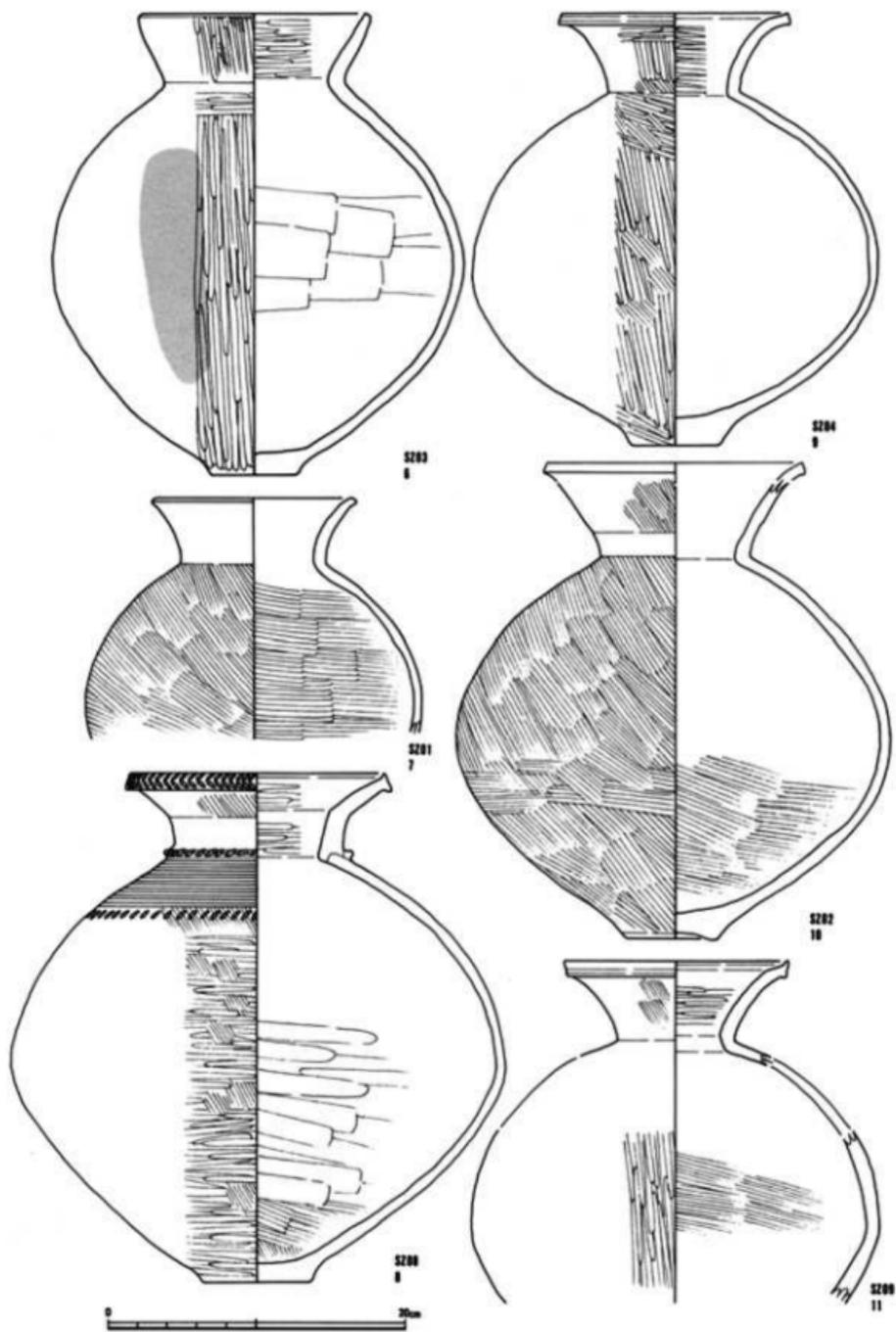
遺物実測図



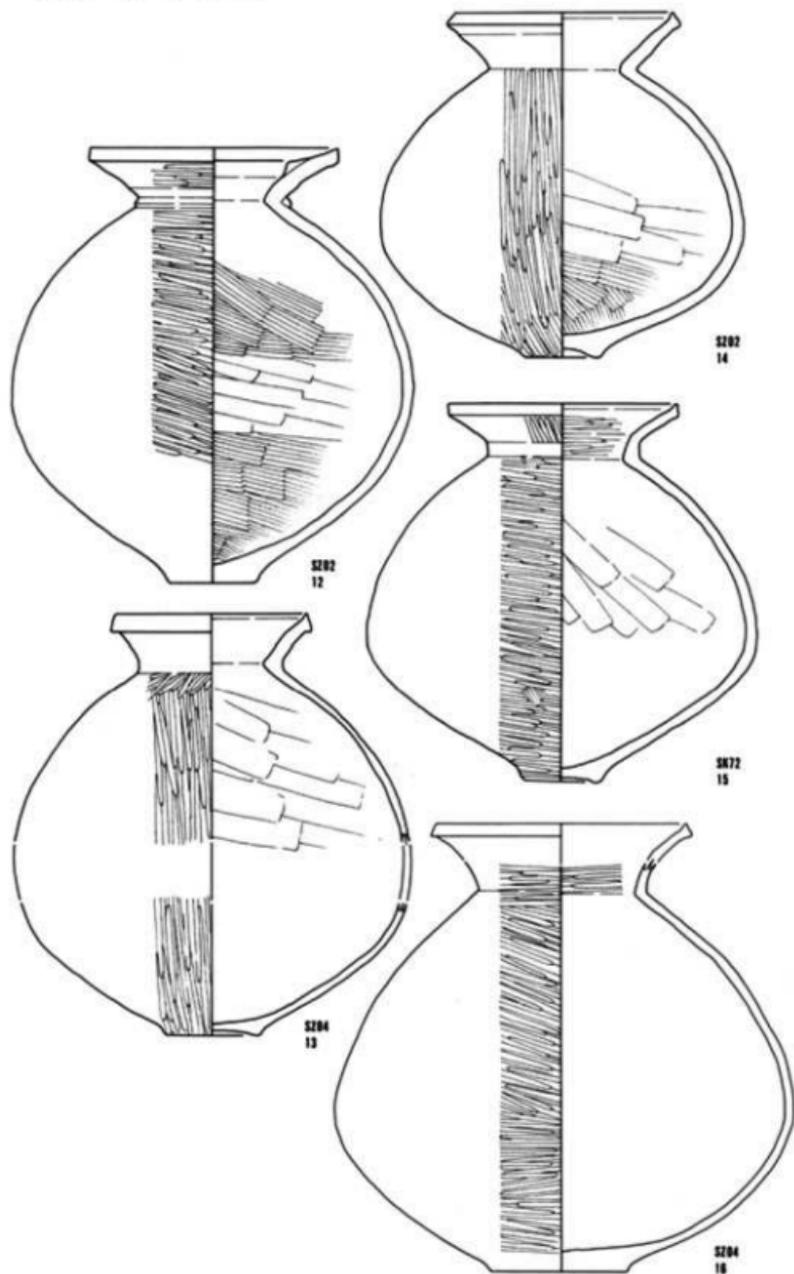
图版6 实测图(1)



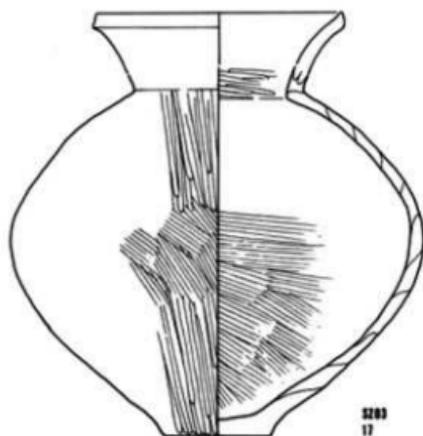
図版7 実測図(2)



图版8 实测图(3)



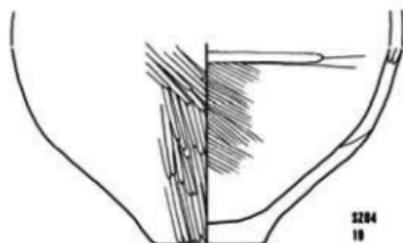
图版9 实测图(4)



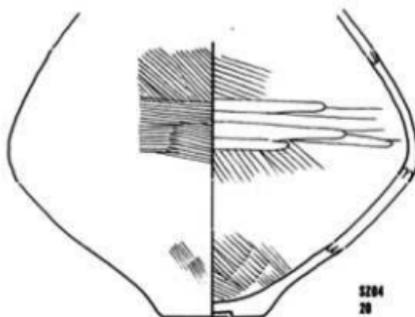
S203
17



S203
18



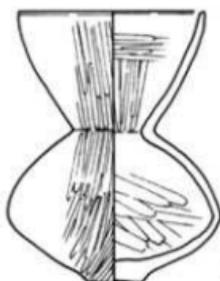
S204
19



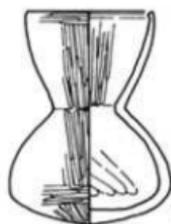
S204
20



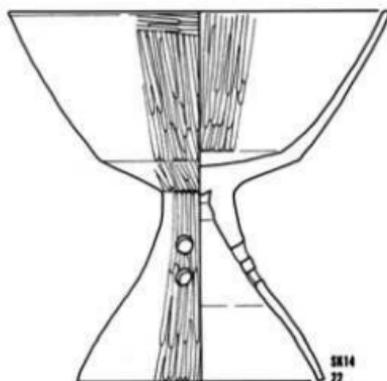
图版10 实测图(5)



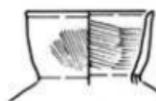
SK14
21



S206
24



SK14
22



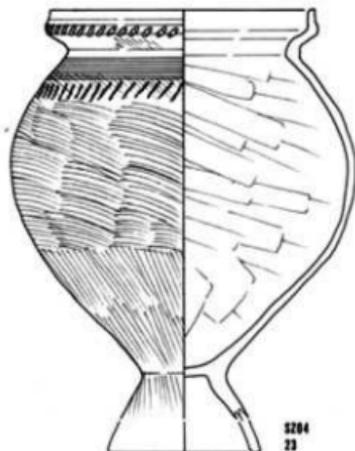
S204
23



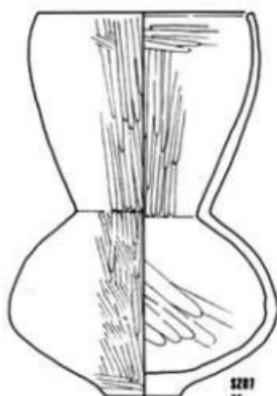
S205
26



S206
27

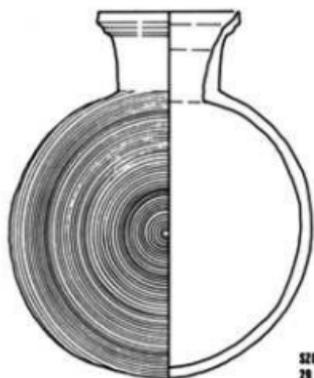


S204
23

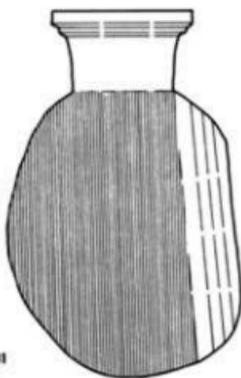


S207
28

图版11 实测图 (6)



S201
29



S201
30



S201
31



S201
32



34



S201
35



S201
36



37



38



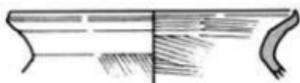
39



40



S201
33



41



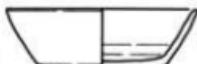
42



43



44



46



45



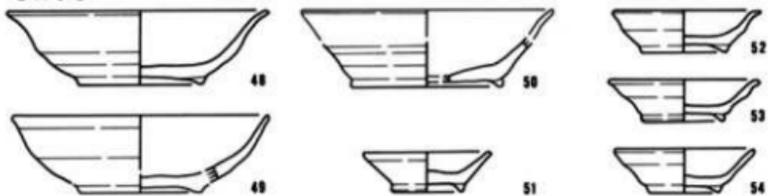
47

萬

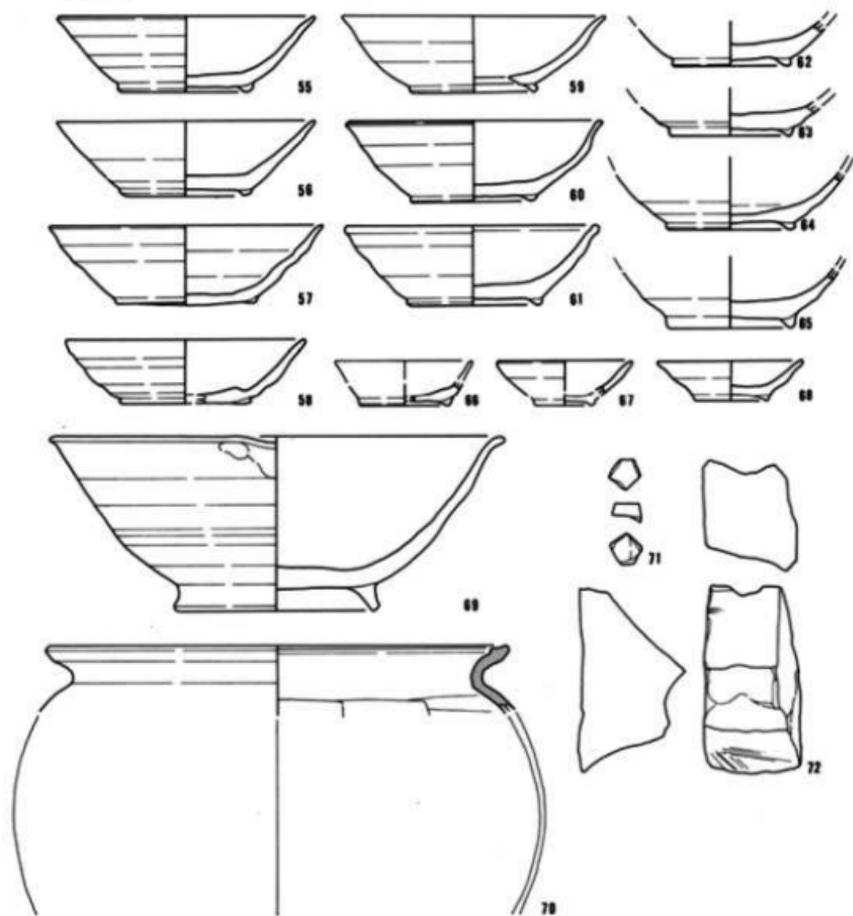


图版12 夹湖窑 (7)

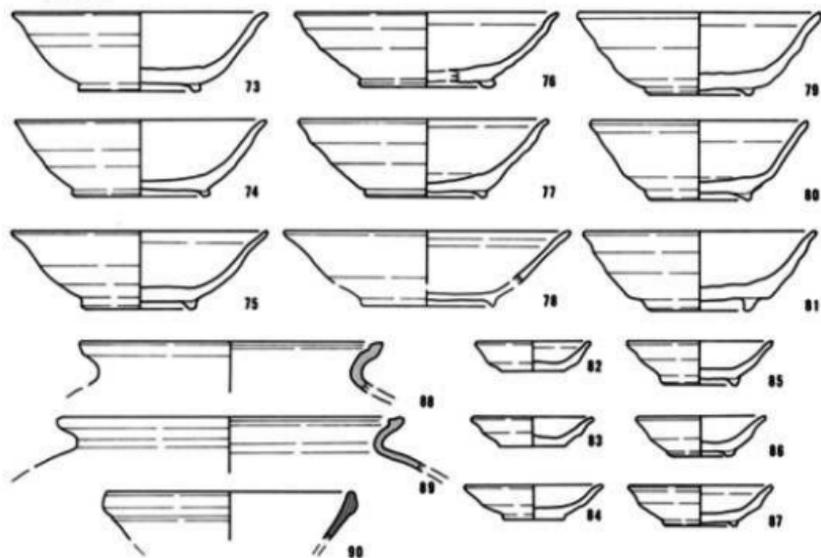
SK 05



SE 07



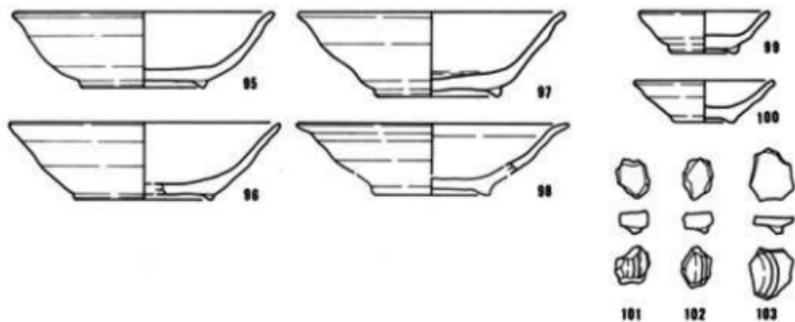
SE 01



SE 02

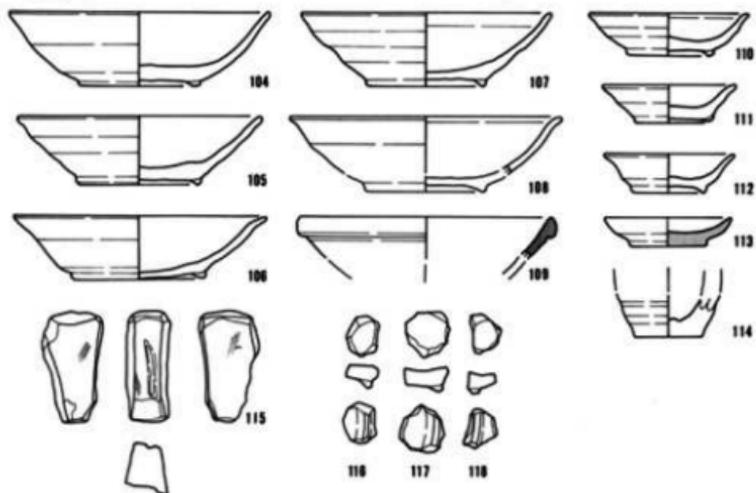


SE 03

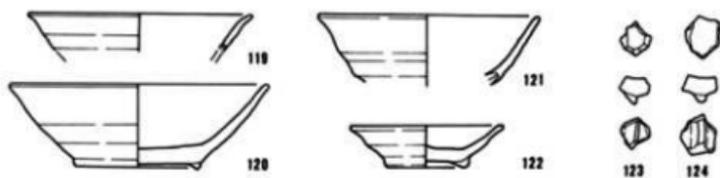


图版14 实测图(9)

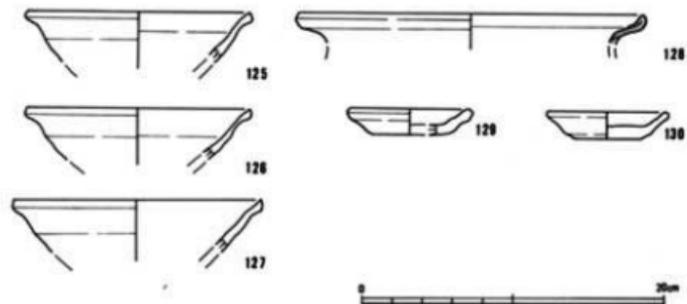
SE 05



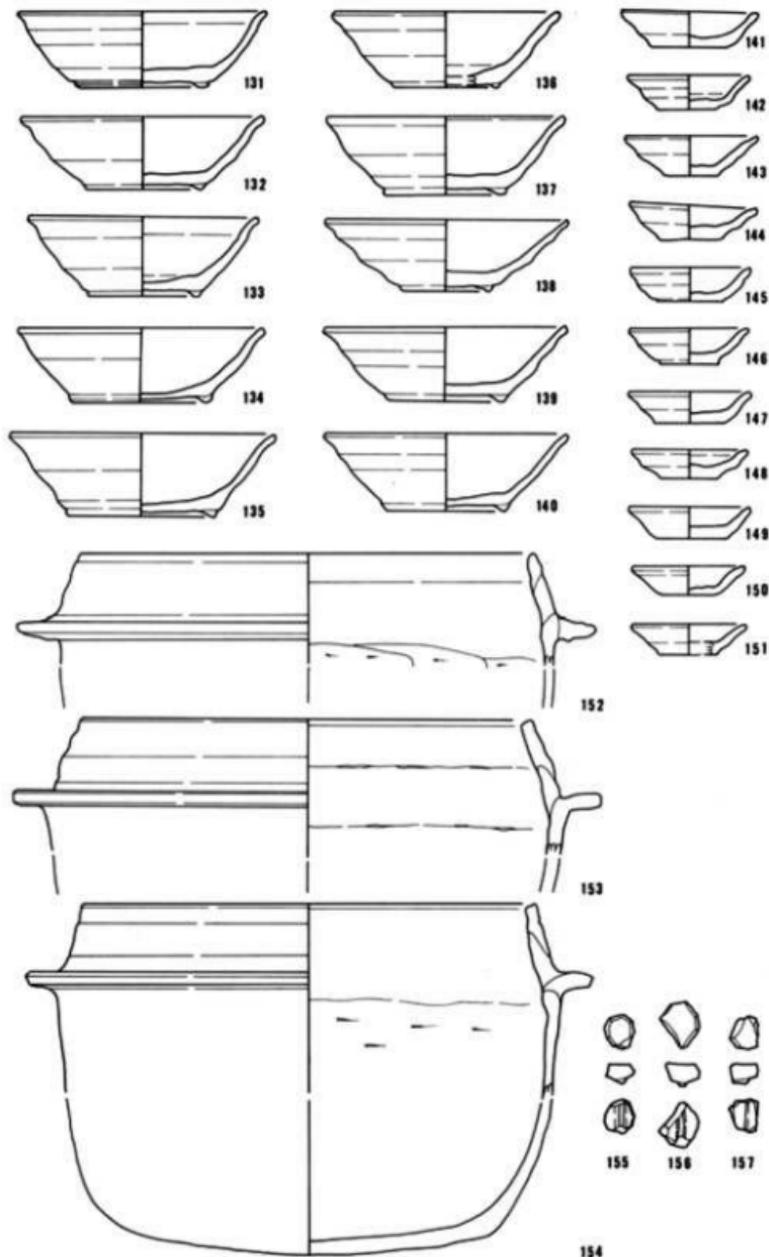
SE 14



SE 08

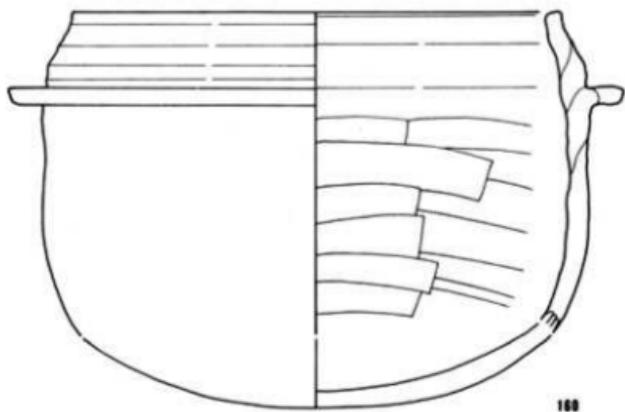
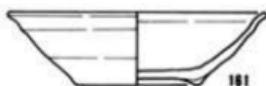
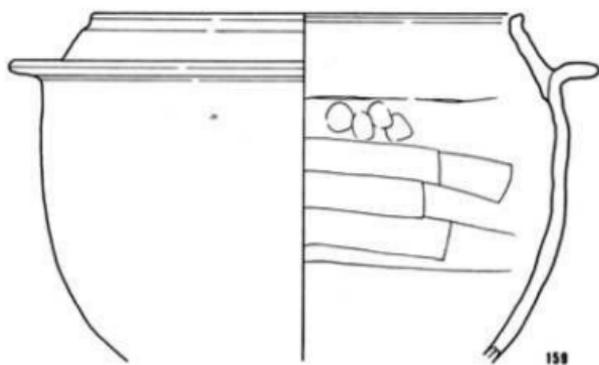
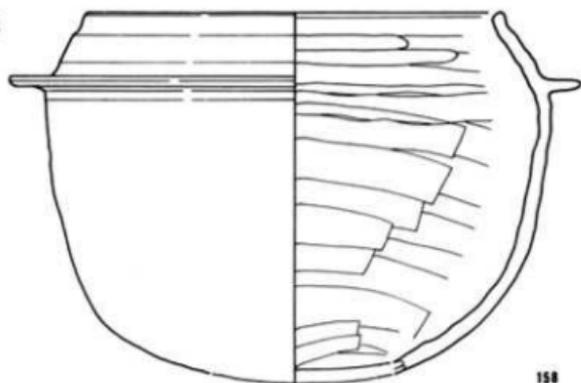


SE 11

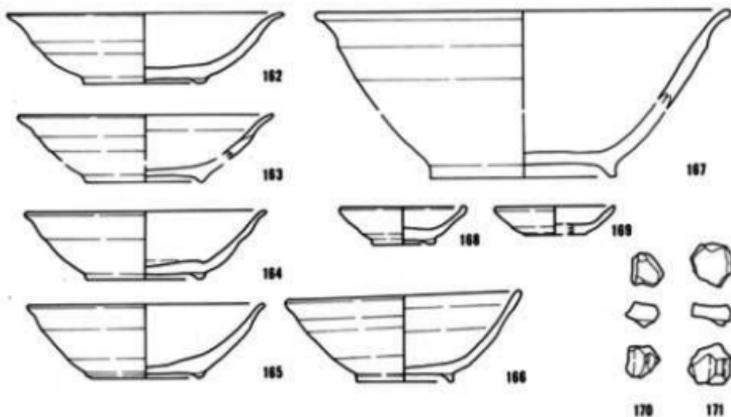


図版16 実測図 (11)

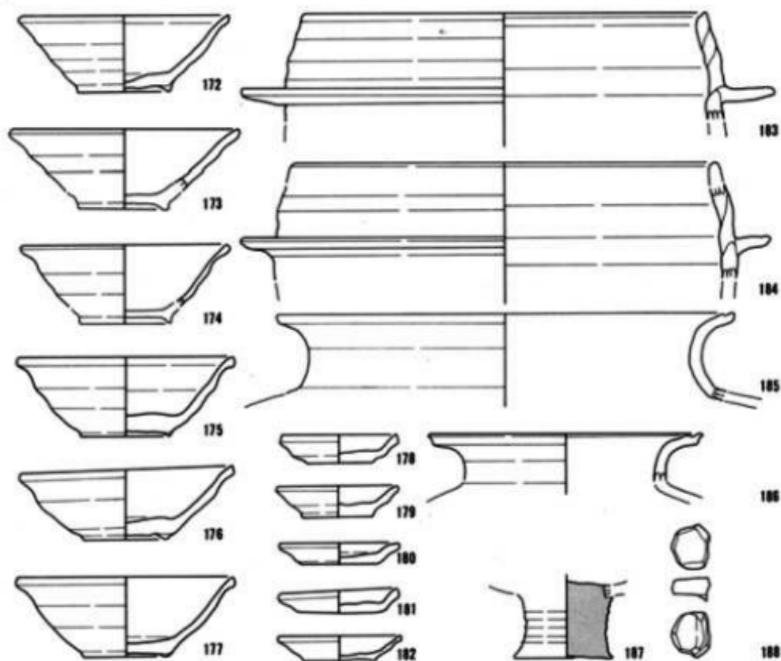
SK 24



SD 55

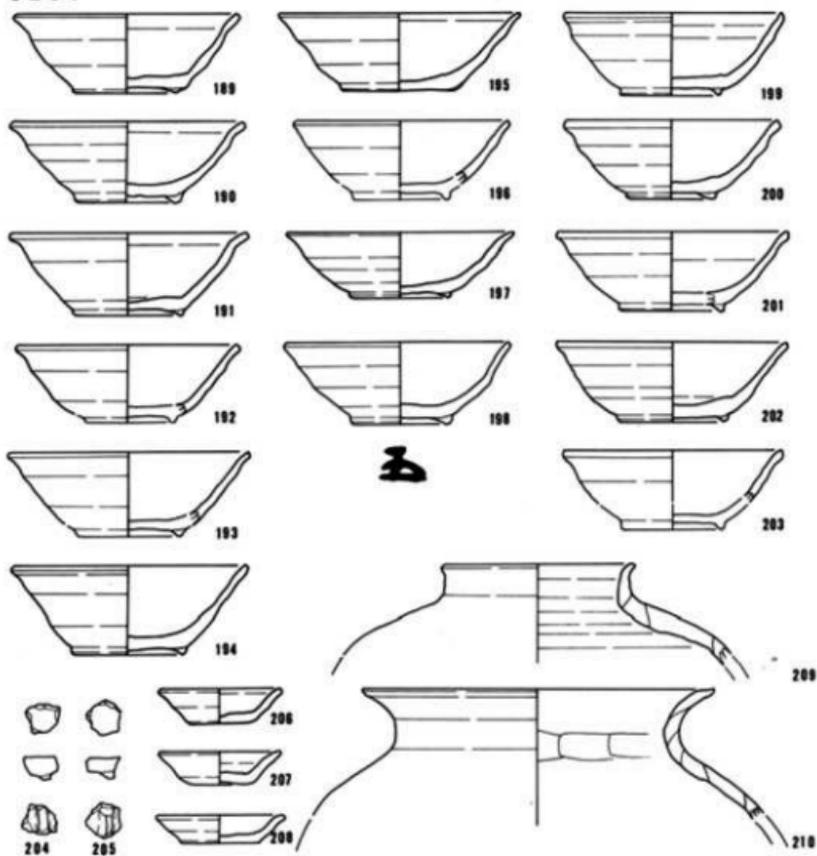


SD 61

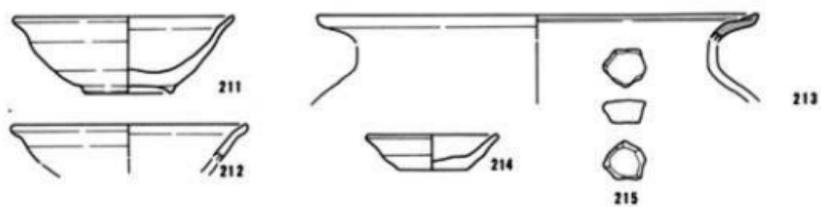


图版18 实测图 (13)

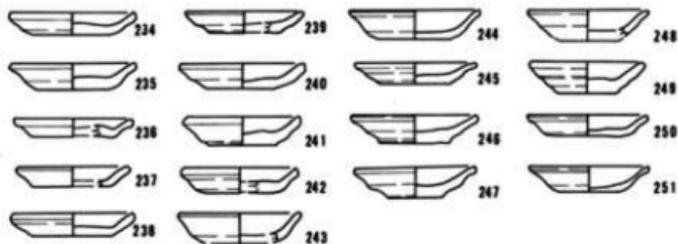
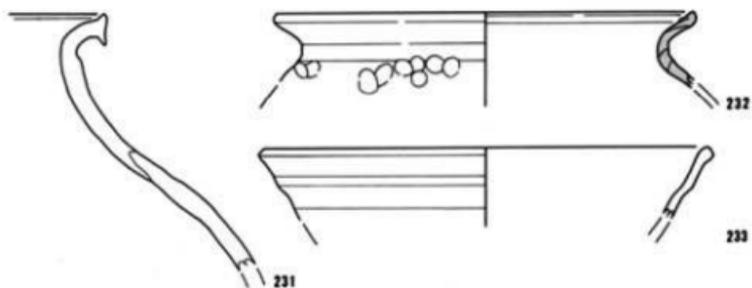
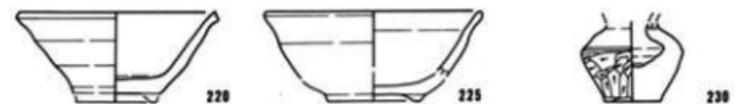
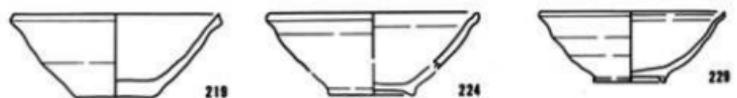
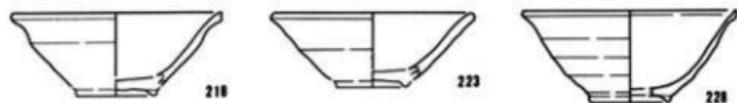
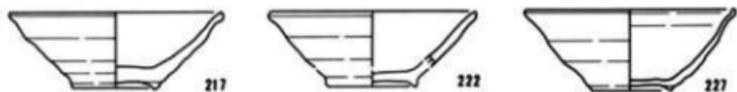
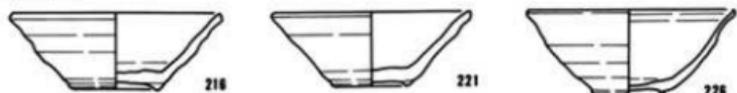
SE 1 6



SK 4 5

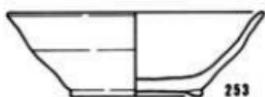


SE 20



图版20 实测图 (15)

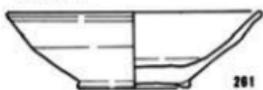
SE 1 2



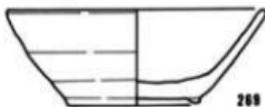
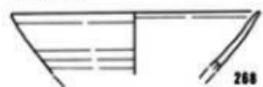
SB 0 1



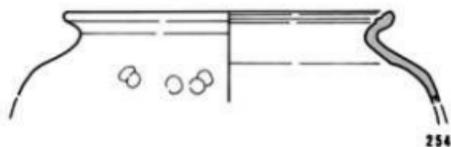
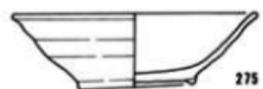
SX 8 1



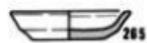
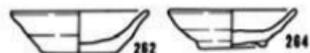
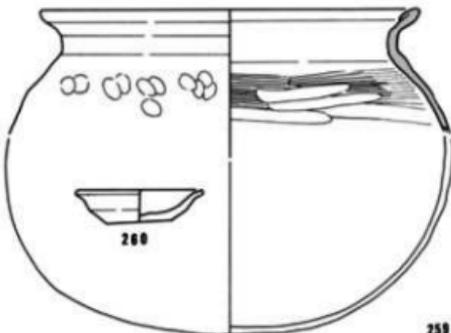
SX 8 5



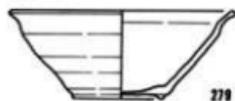
SK 4 4



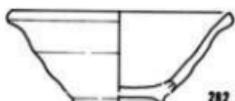
SK 7 5



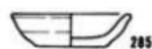
SE10



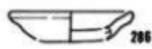
279



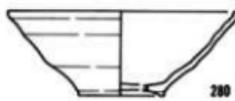
282



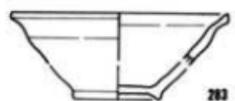
285



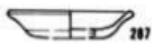
286



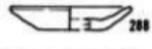
280



283



287



288



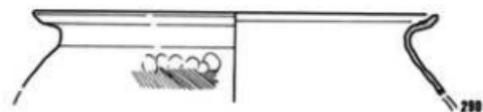
281



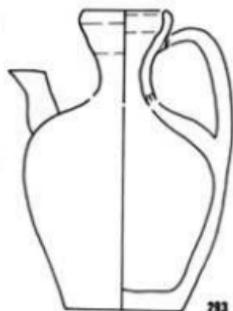
284



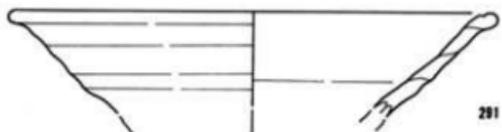
289



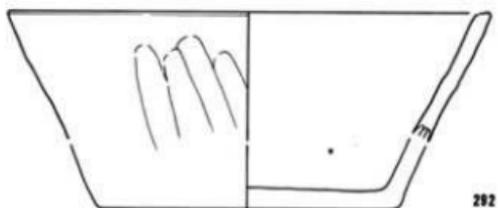
290



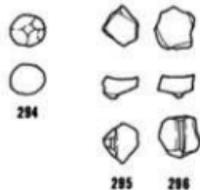
293



291



292



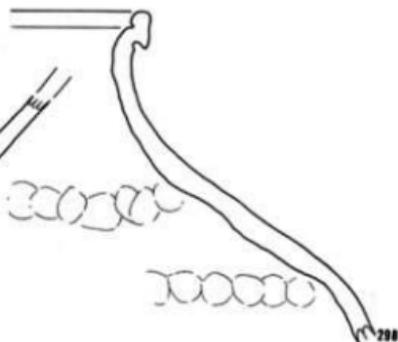
294

295

296



297

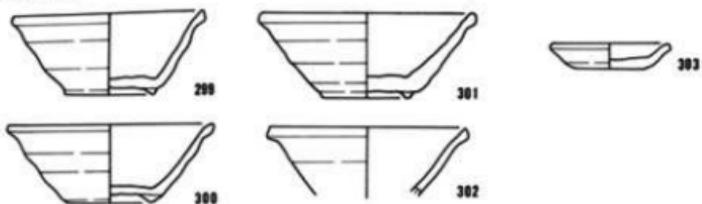


298

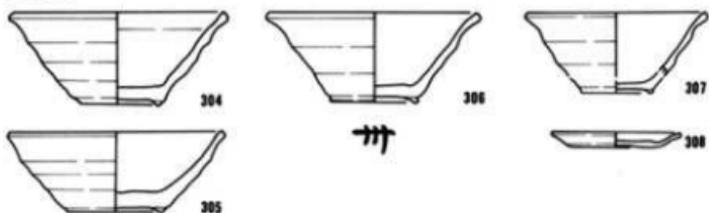


图版22 实测图 (17)

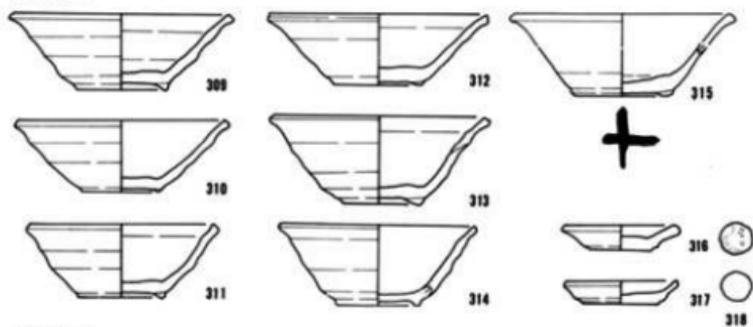
SK 3 1



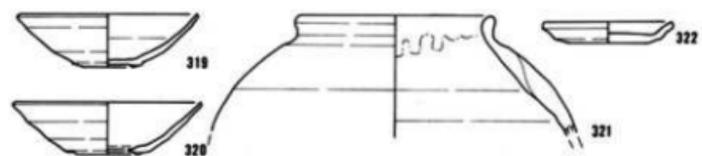
SK 6 7



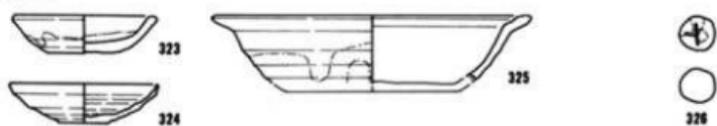
SD 6 5



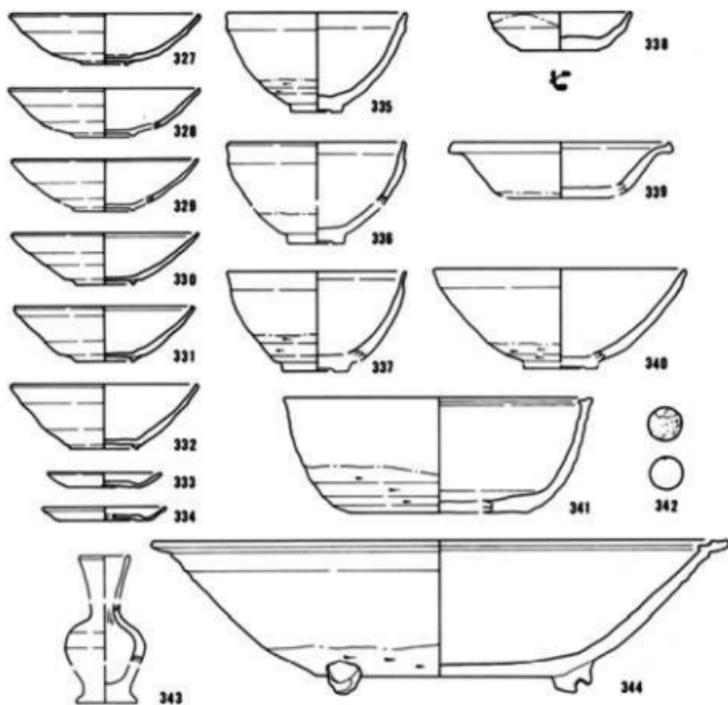
SD 6 8



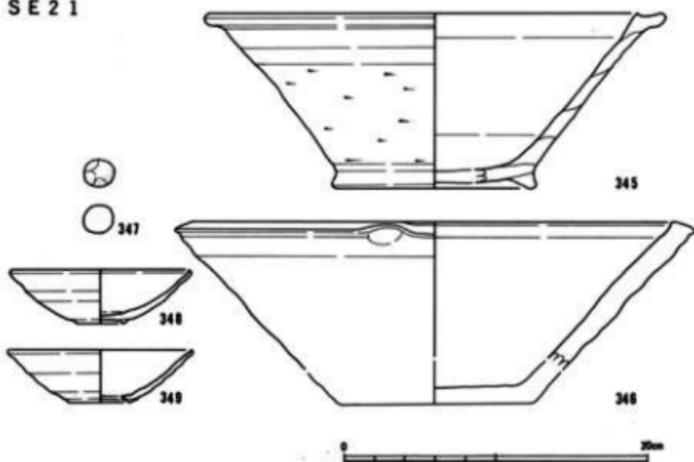
SK 6 3



SD 6 4

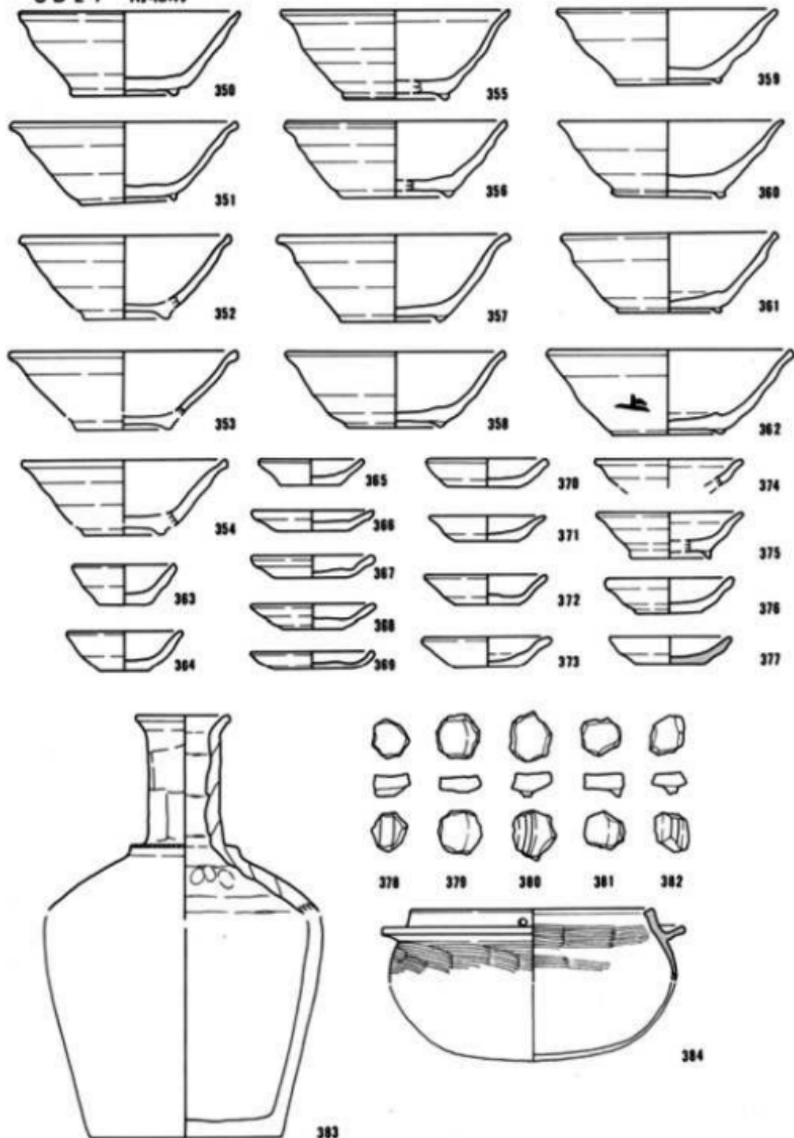


SE 2 1

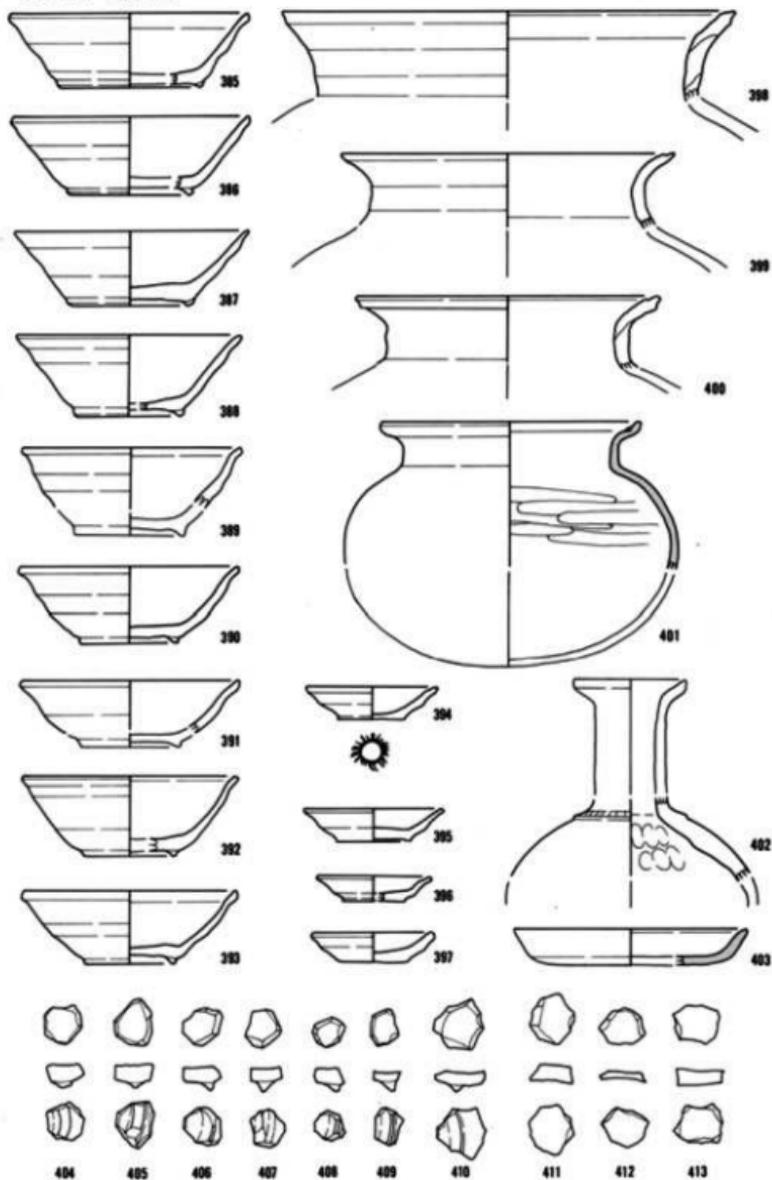


图版24 夹 洧 陶 (19)

SD 27 南北满

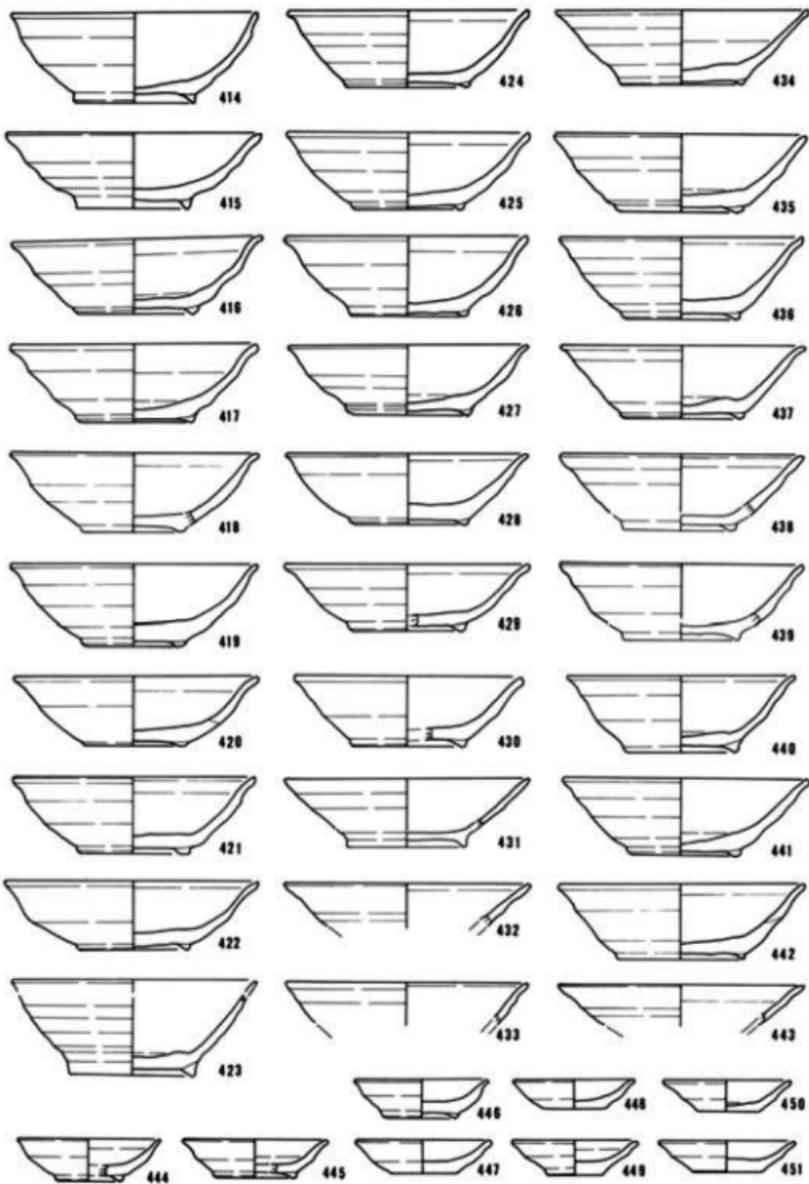


SD 27 東西溝

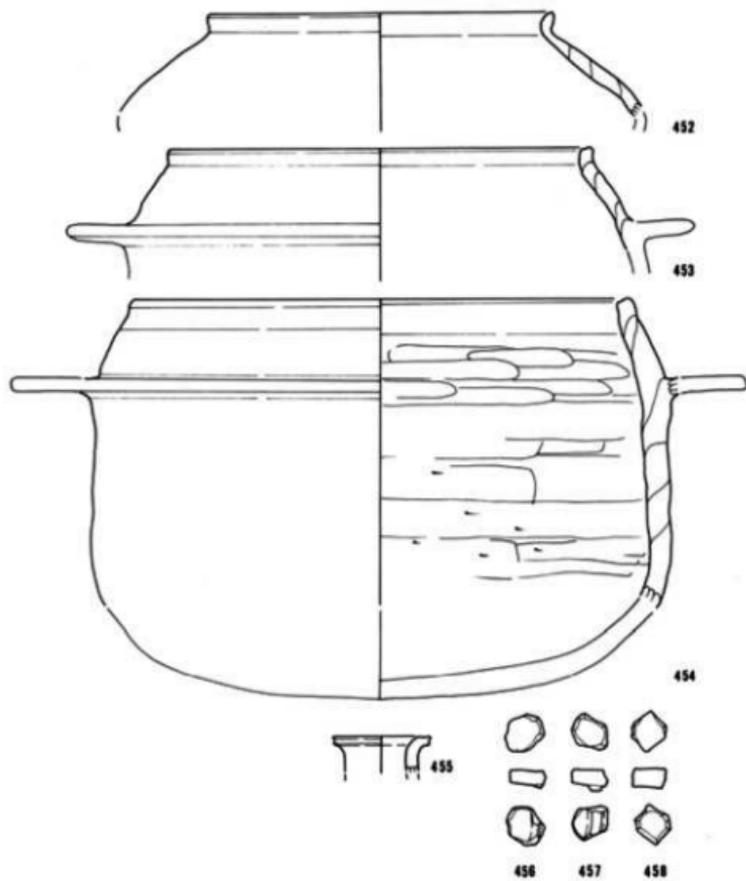


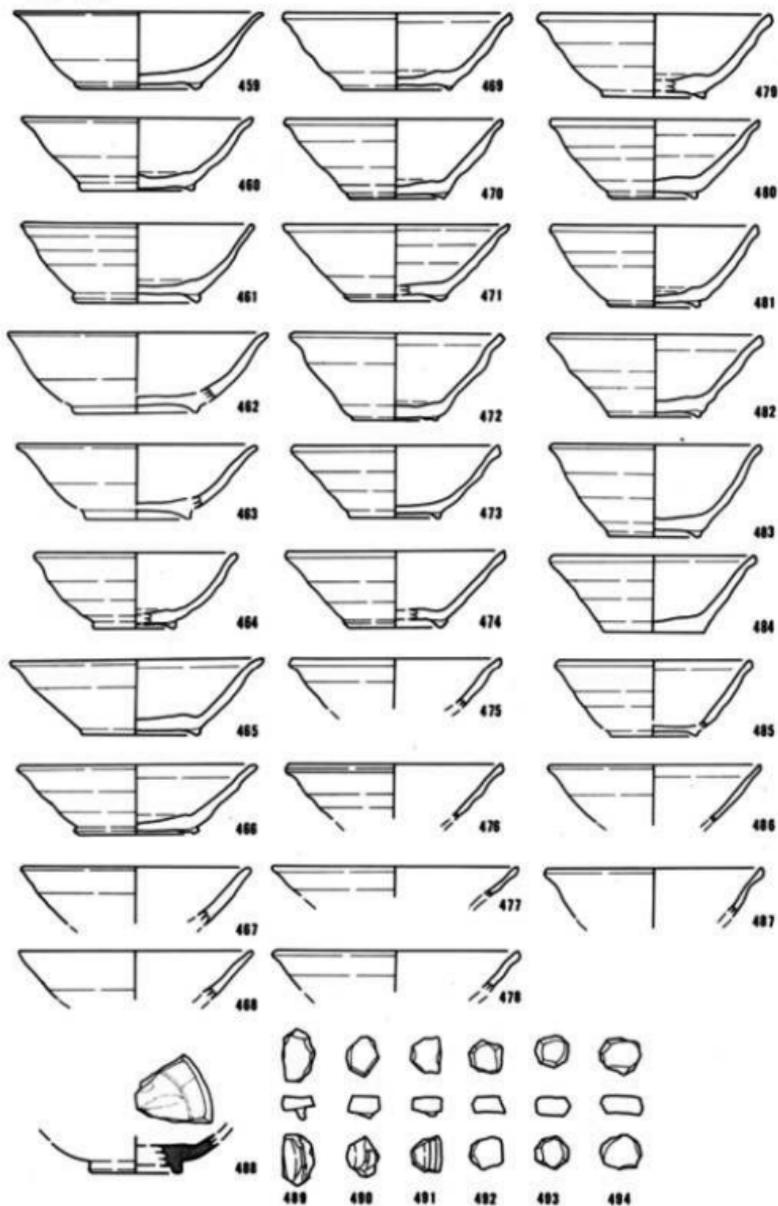
图版26 实测图 (21)

SD41

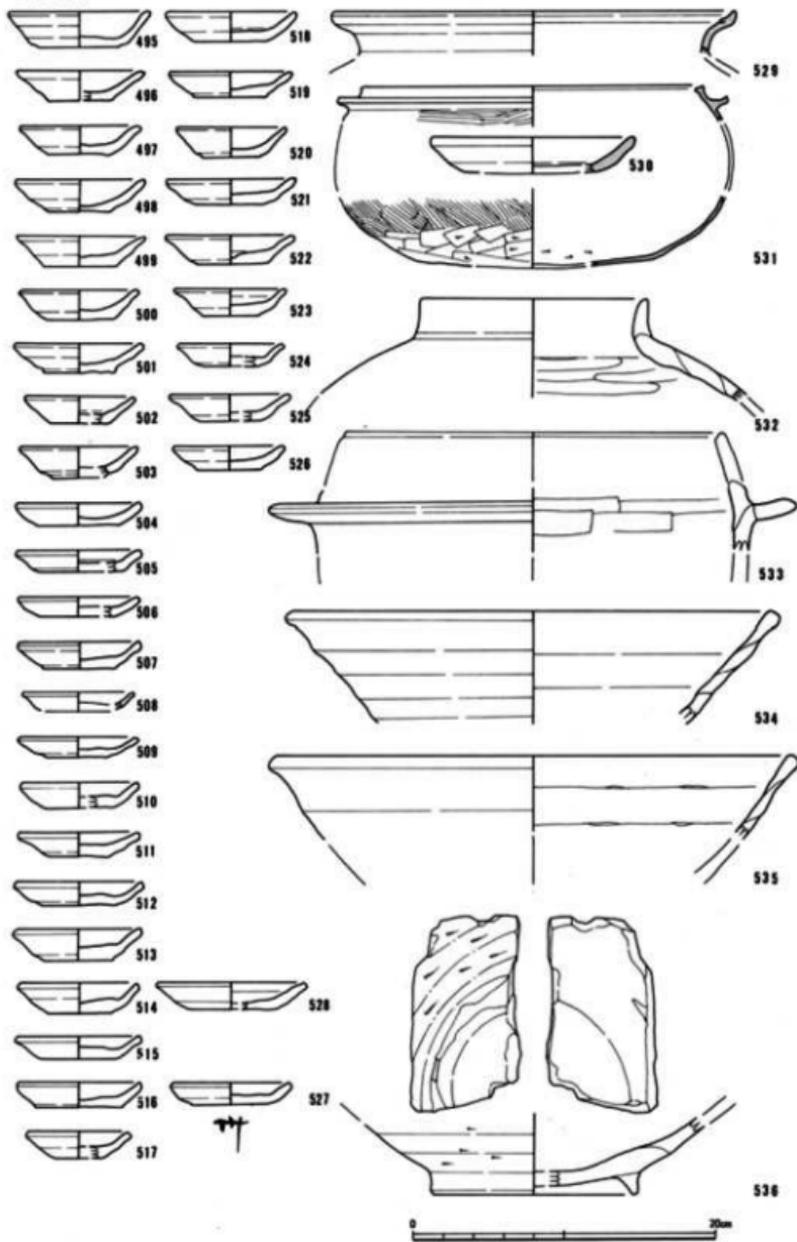


SD41



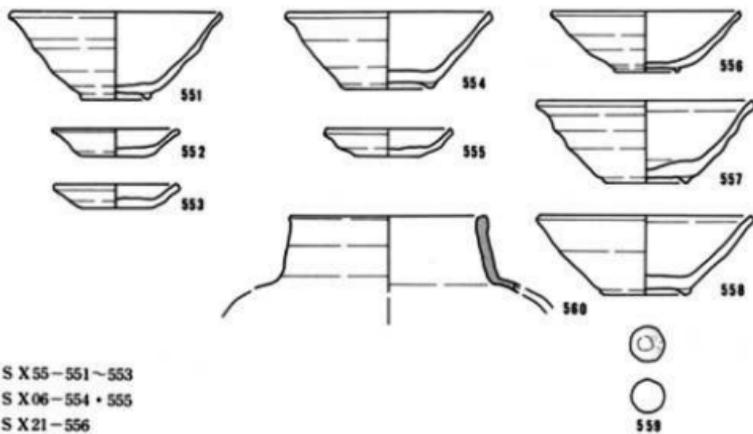
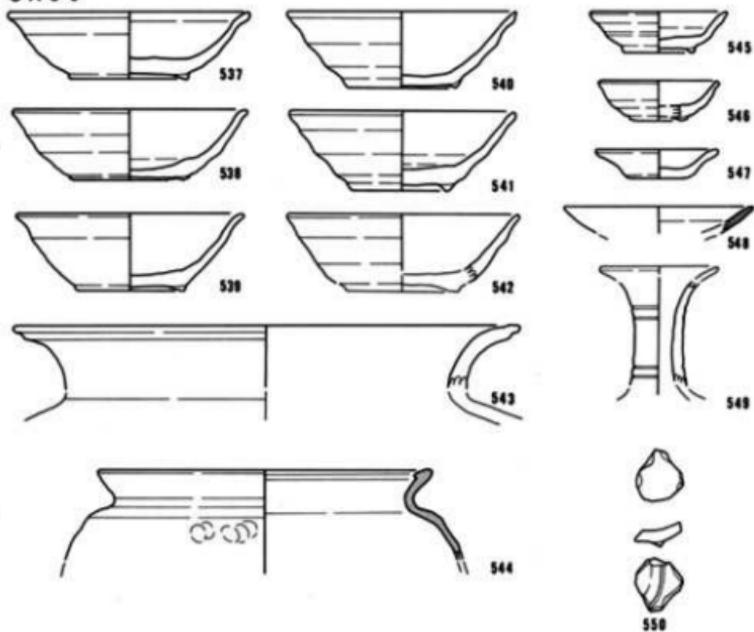


SD 4 2



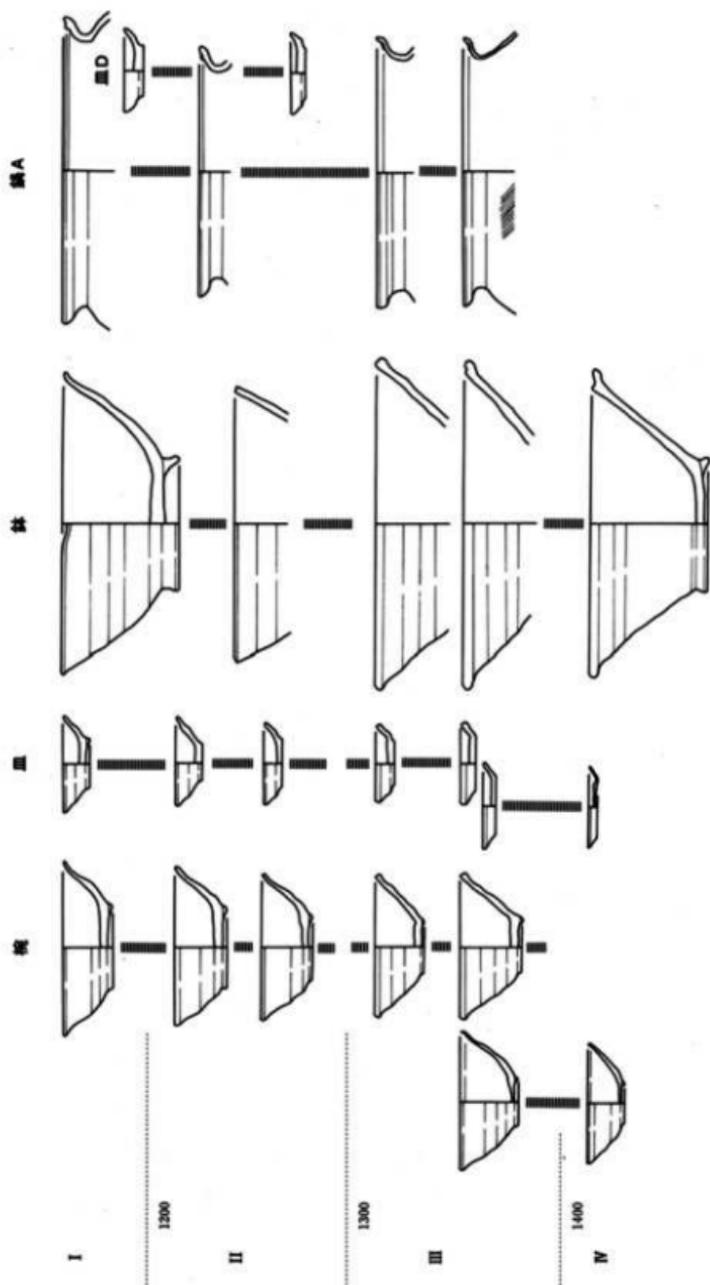
图版30 实测图(25)

S X 8 0



- S X 55—551~553
 S X 06—554 • 555
 S X 21—556
 S X 159—557
 S X 90—558 • 559
 S X 44—560

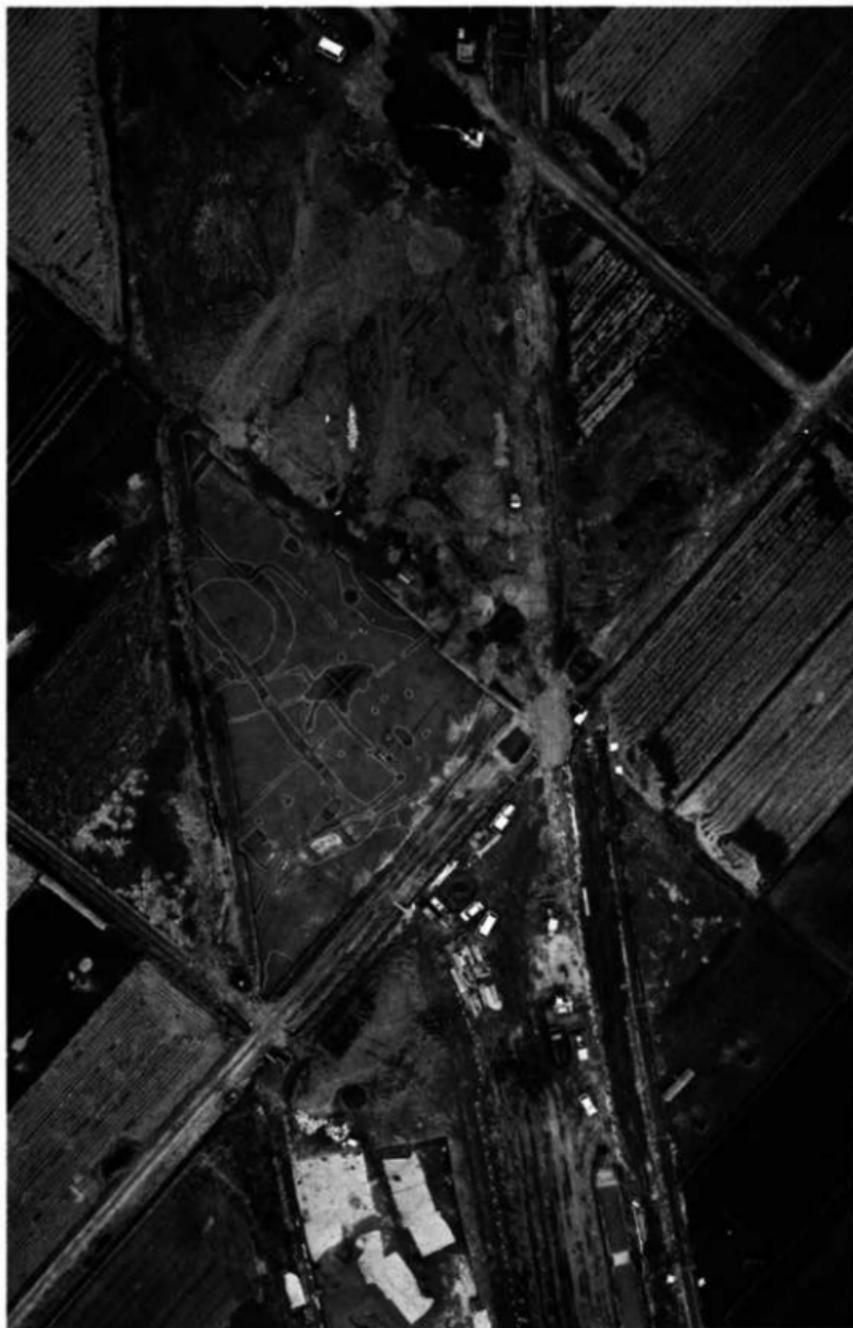
















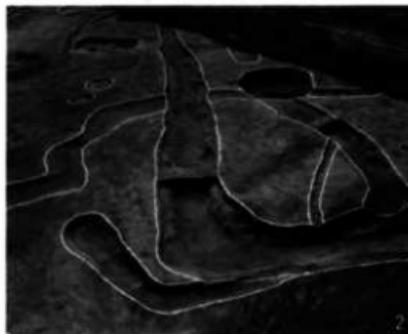




1



5



2



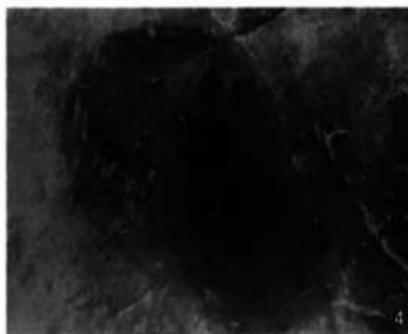
6



3



7



4



8

1 SZ05

3 SZ08南側

5 SZ07・SZ08

7 純瓶-29(SZ10)

2 SZ02・SD27

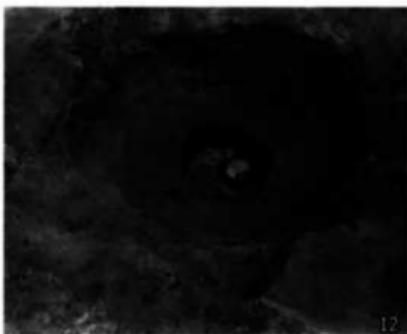
4 SK11

6 SZ07南側

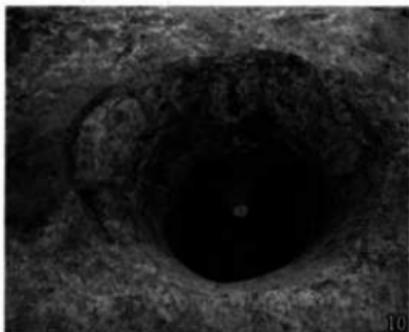
8 SZ01支溝



9



12



10



13



11



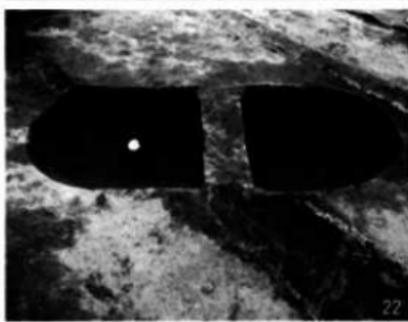
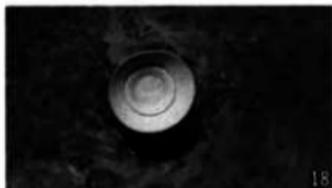
14



15

9 SE11
10 SE02
11 SE06

12 SE10
13 SE19
14 SE06
15 SE06

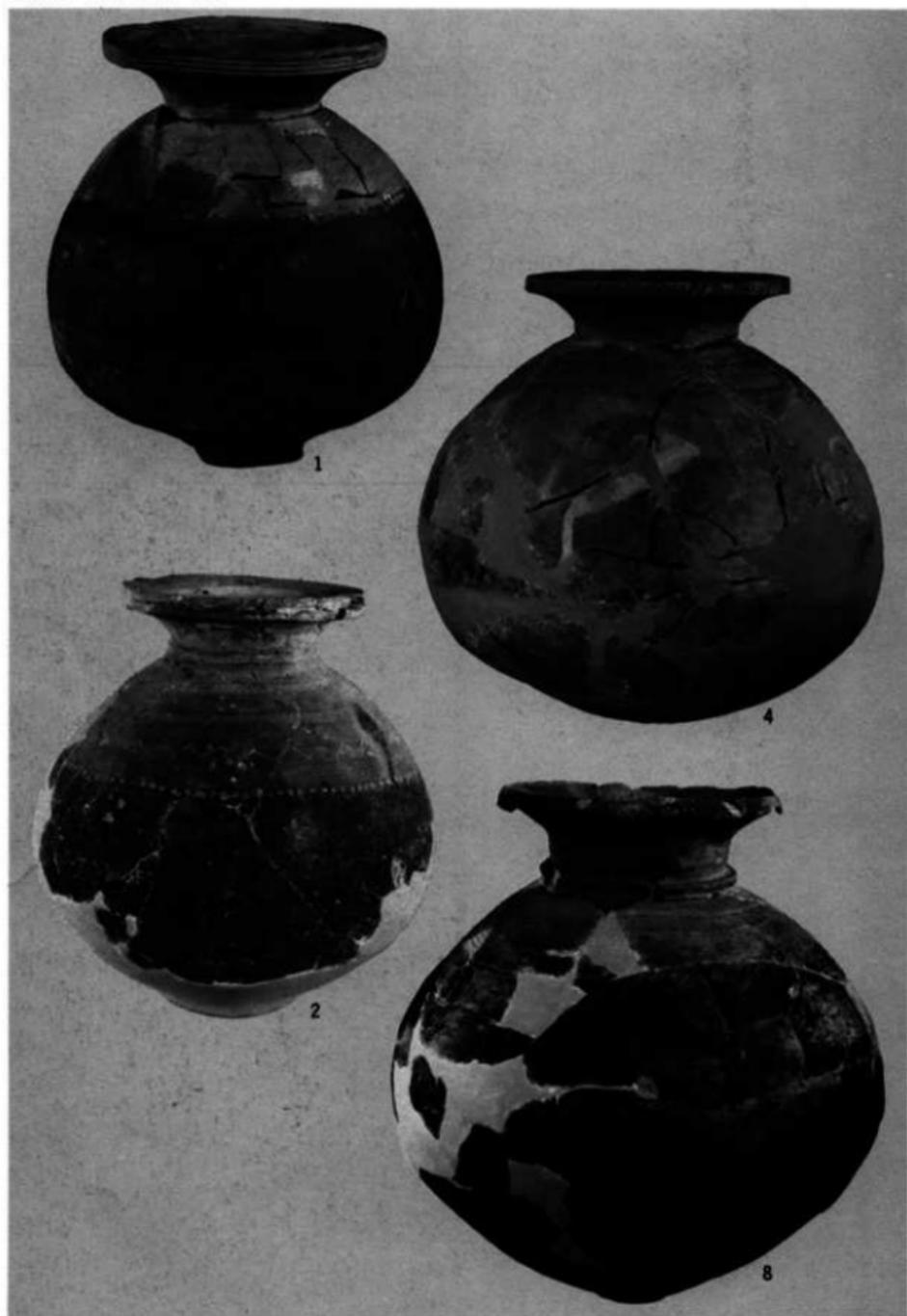


16 SD27・SX80 20 56C区(北0-6)

17 SX80 遺物集積 21 61調査区(南東0-5)

18 SX55 22 SX21

19 SX28 23 SX33~38







24



21



23



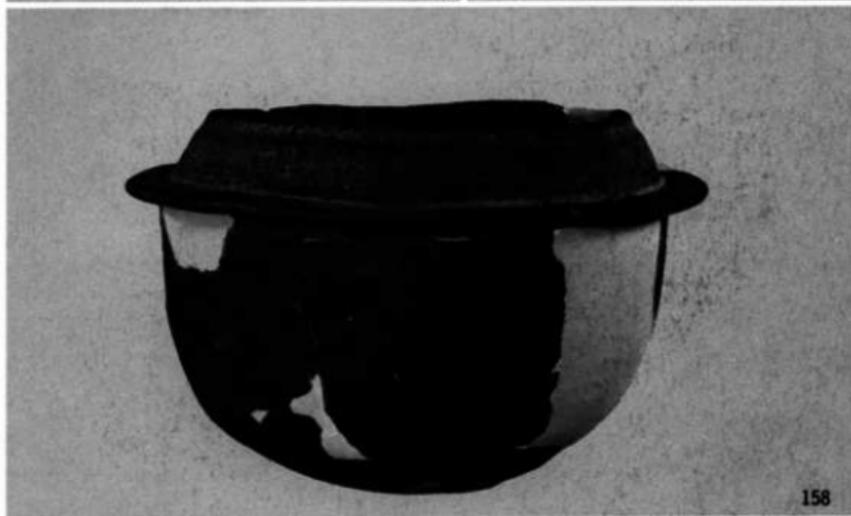
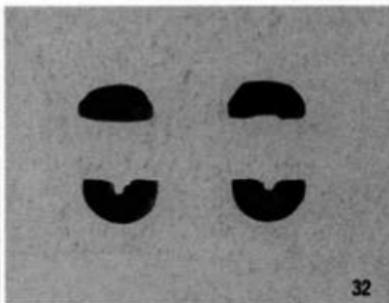
28

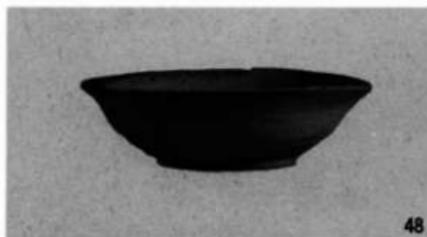


6

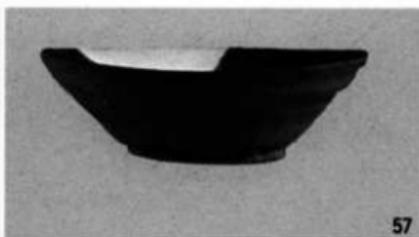


22





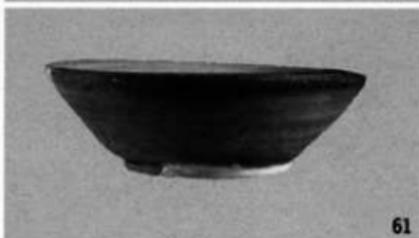
48



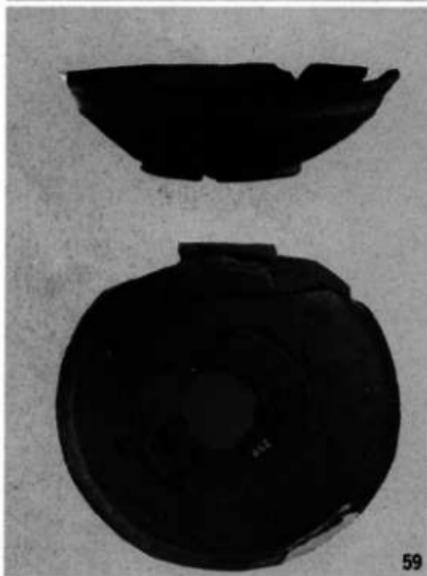
57



120



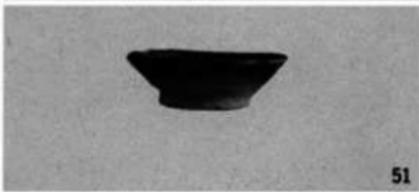
61



59



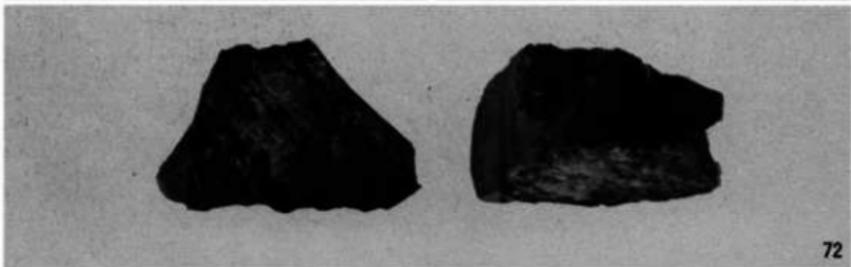
52



51



122



72



137



138



189



198



191



199



195



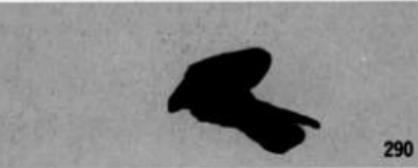
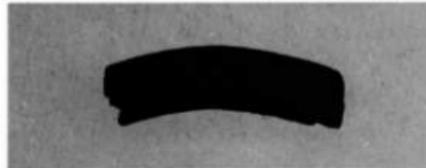
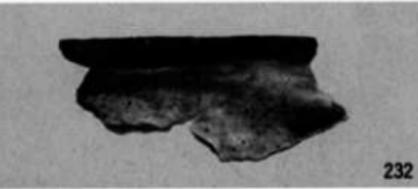
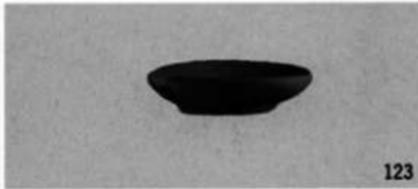
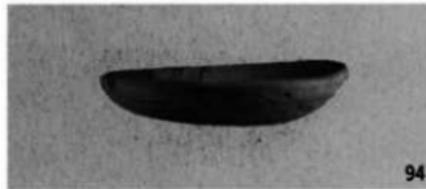
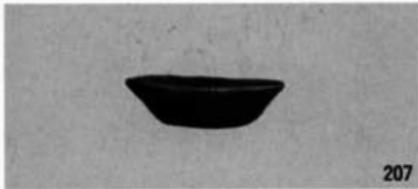
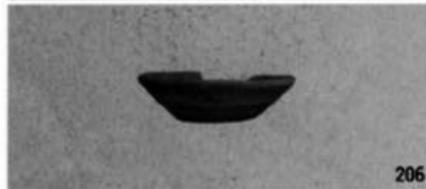
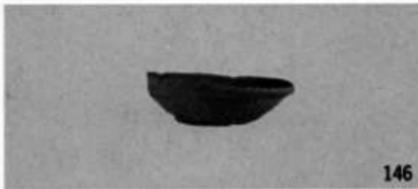
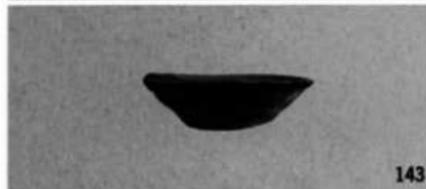
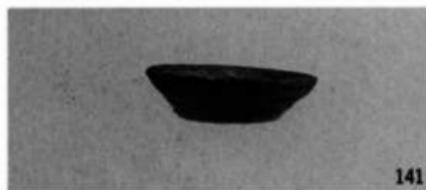
202

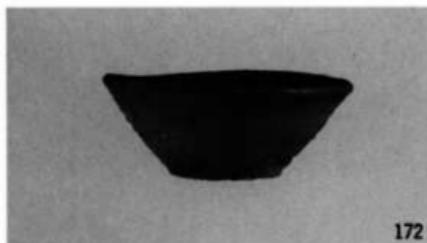


257

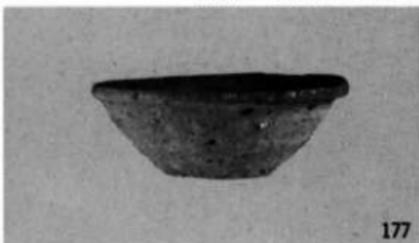


258

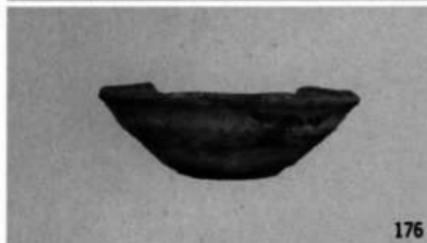




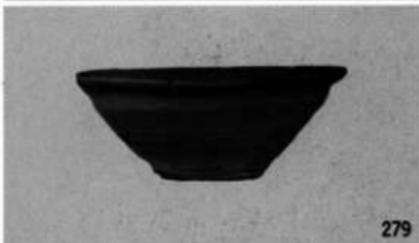
172



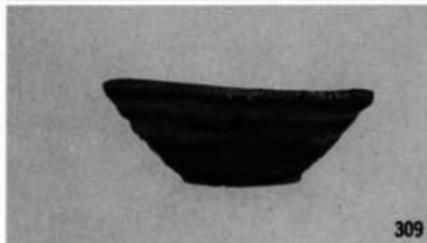
177



176



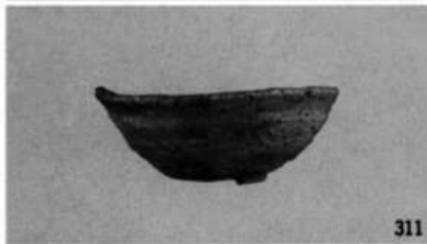
279



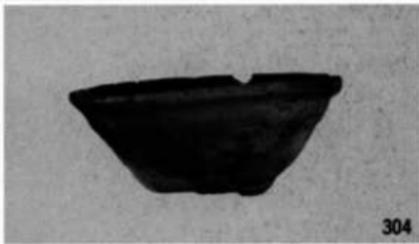
309



229



311



304



313



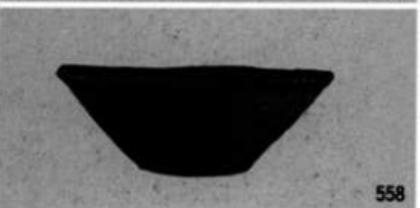
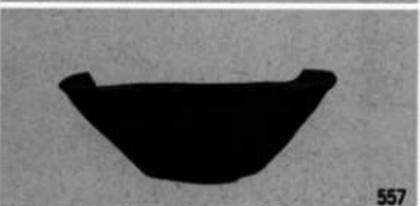
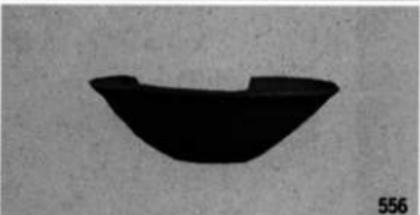
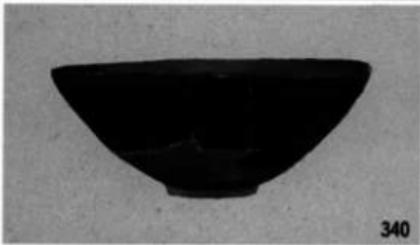
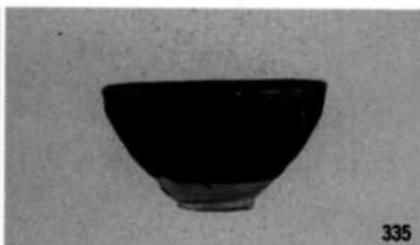
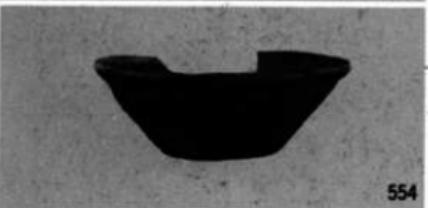
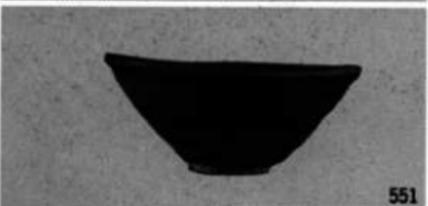
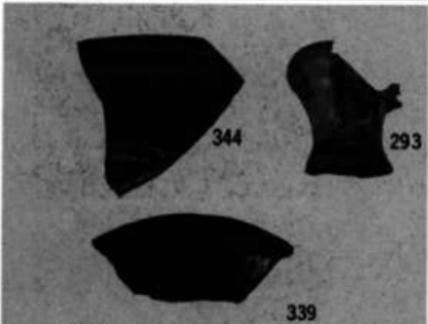
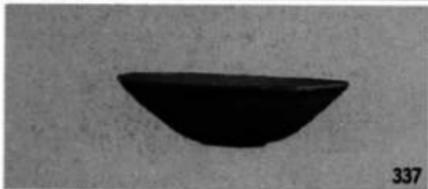
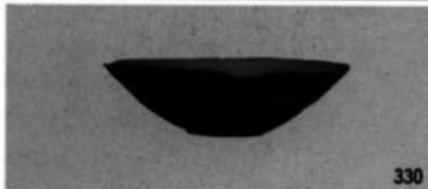
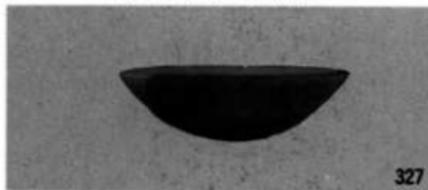
180

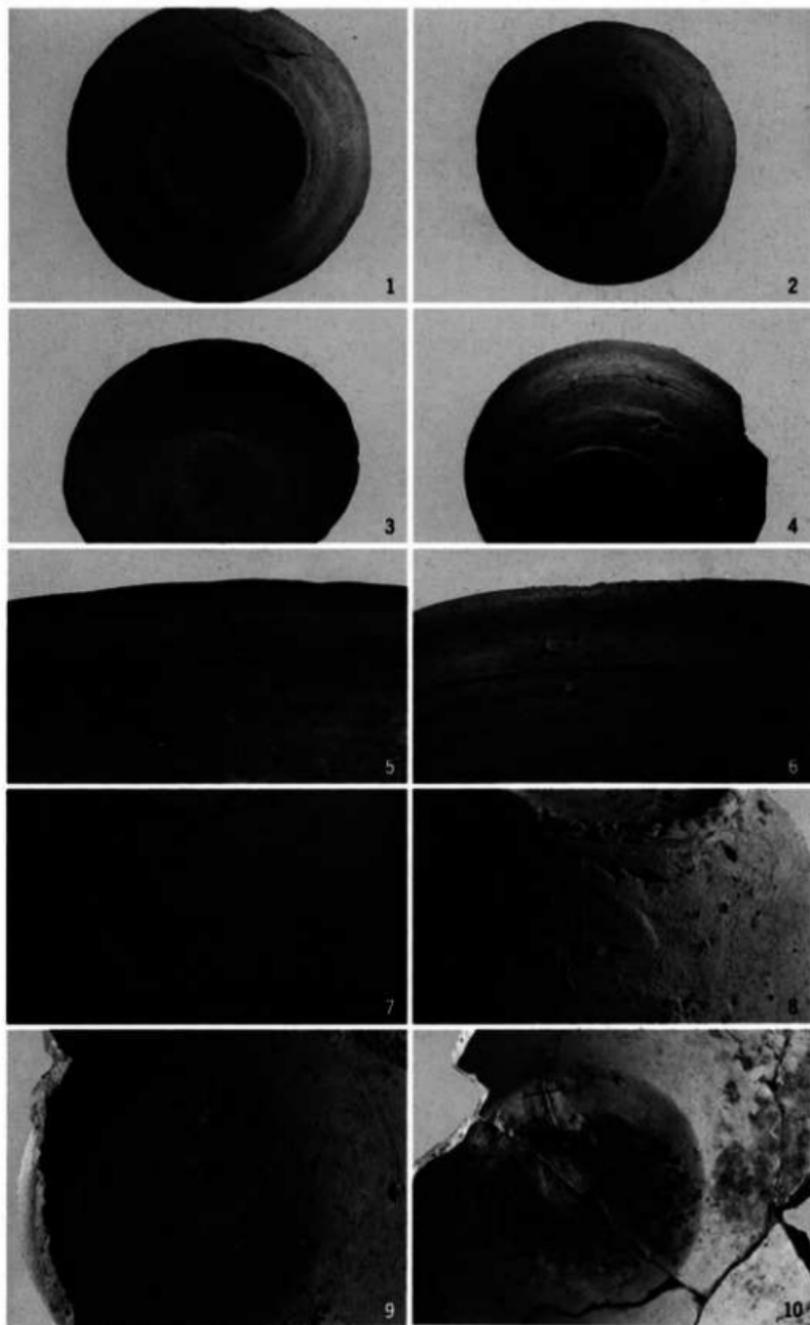


181

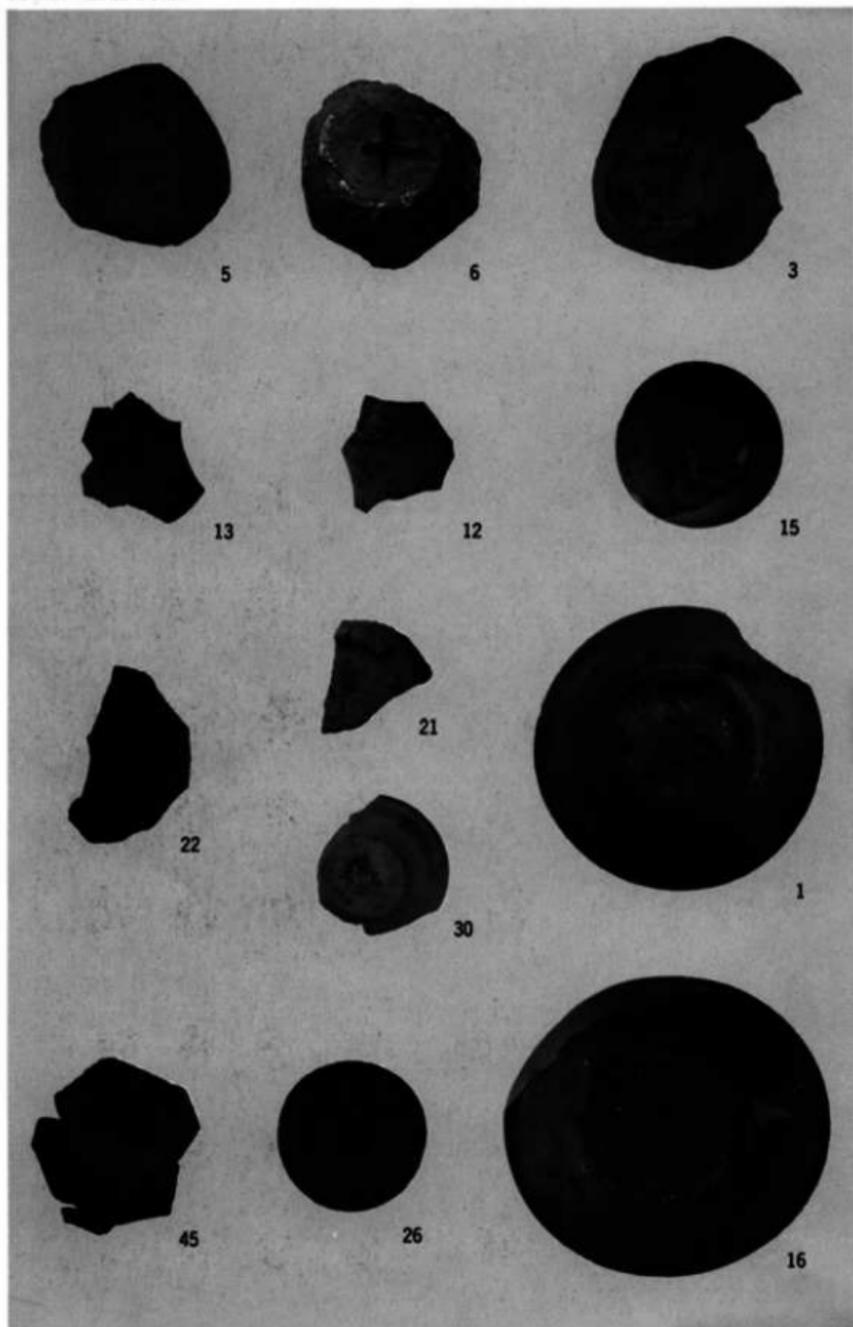


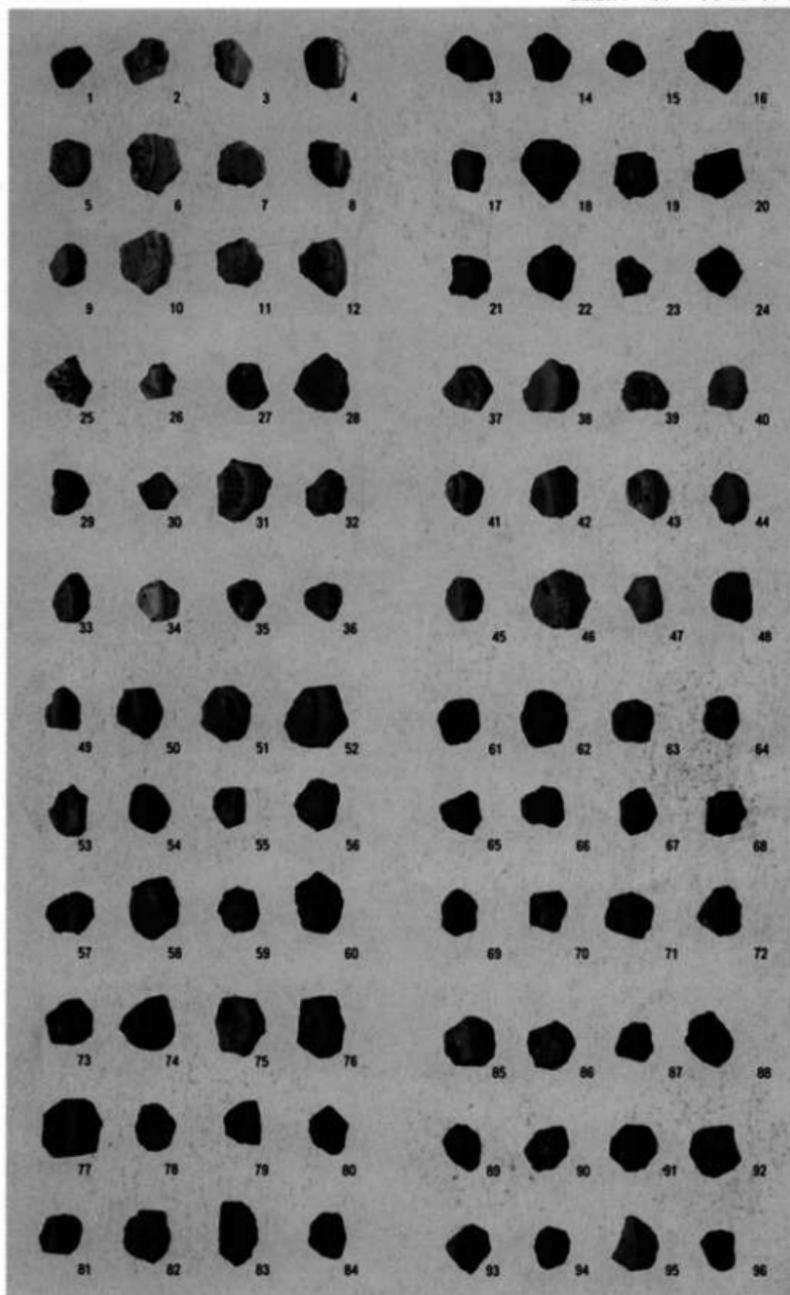
308



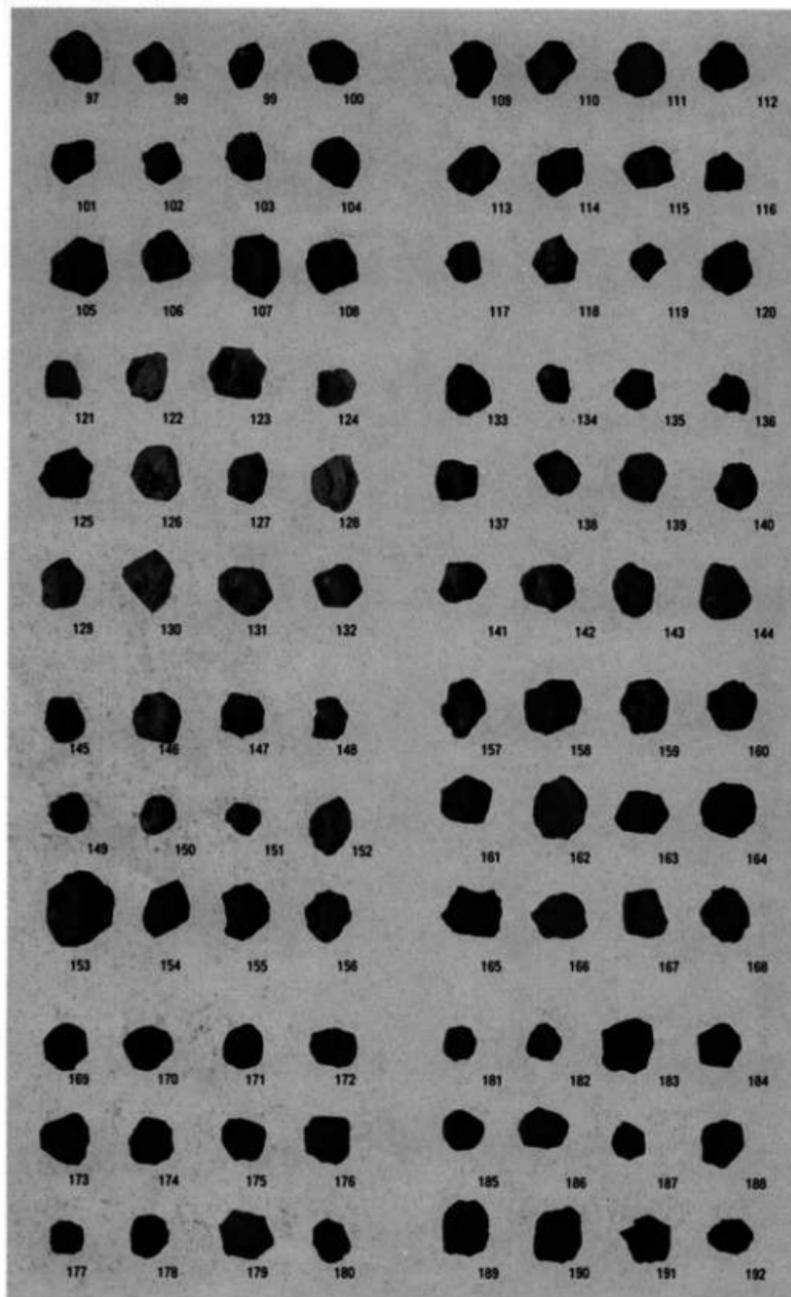


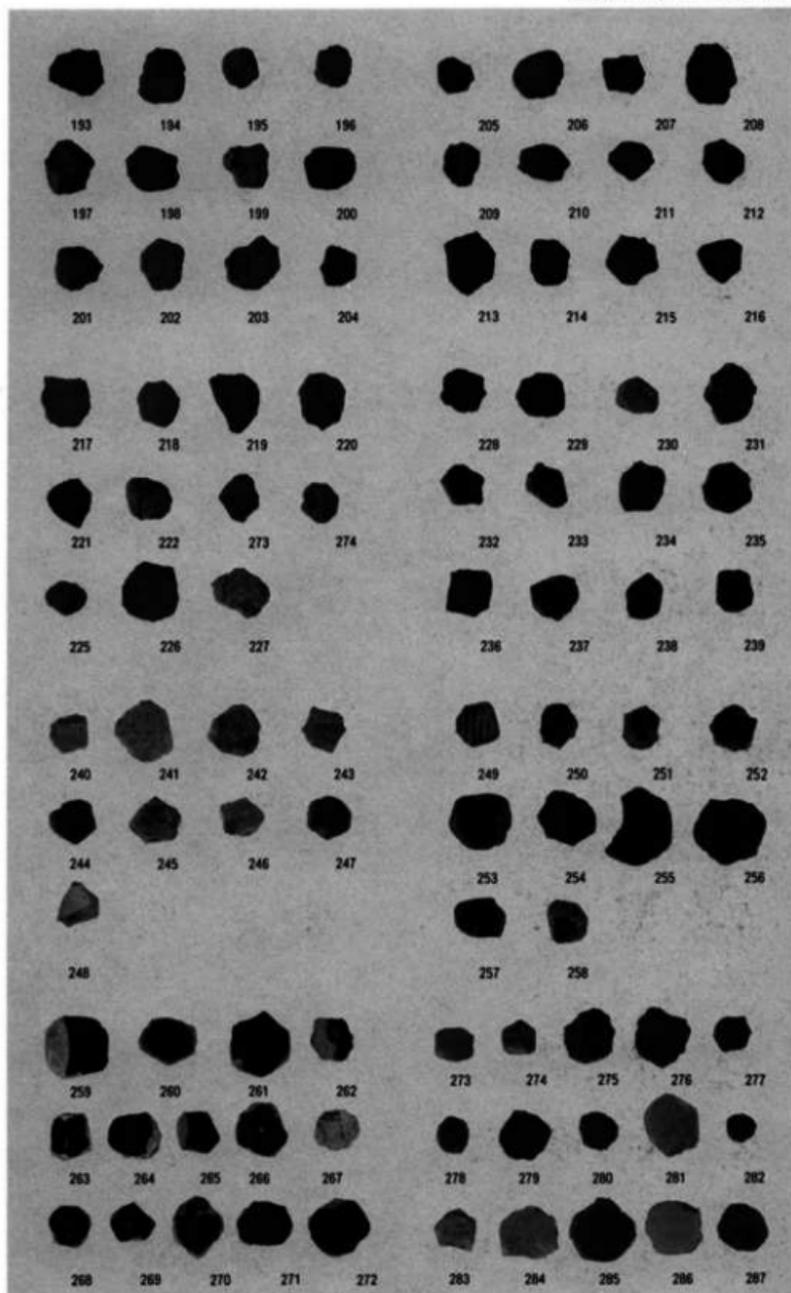
1 底部粗成 (137) 3 口縁部補修 5・6 ※コナダ 9・10 指頭調整
 2 高台剥落 (220) 4 粘土細積み上げ成 7・8 泥漿化



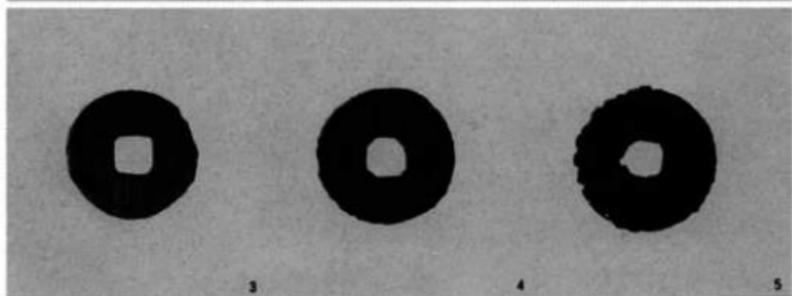
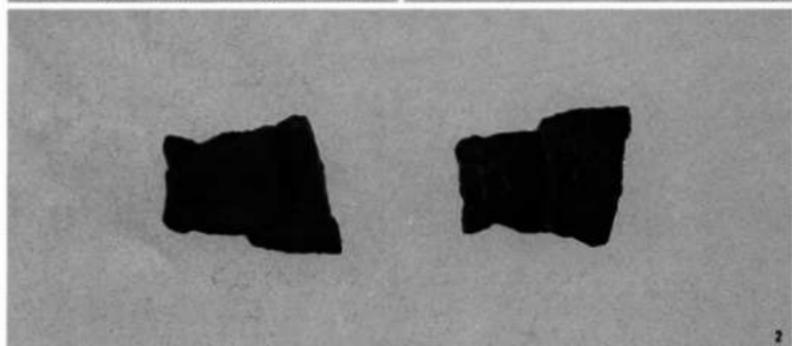
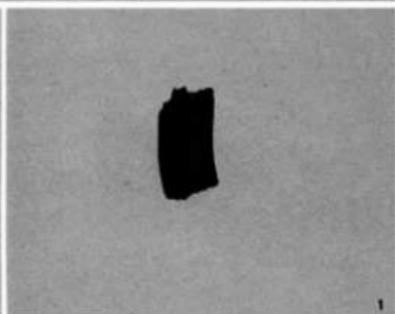
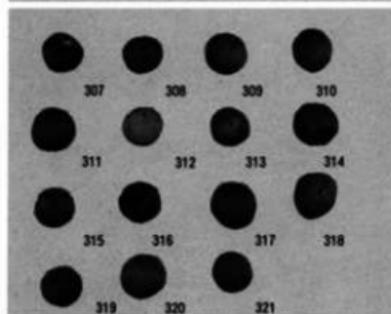
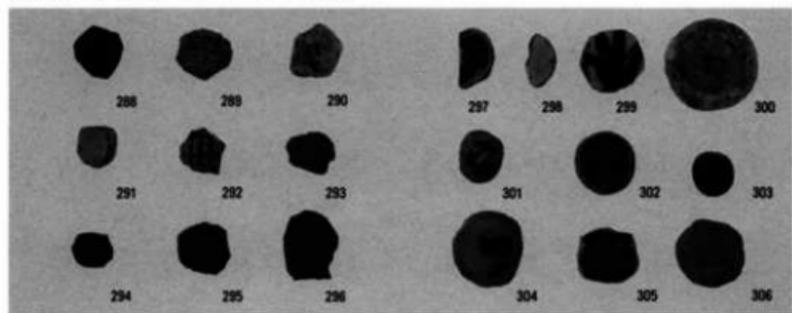


图版54 加工円盤(2)





A, 193-227 B, 228-248 C, 249-287



C.288~296 陶丸 307~321

C.297~306

1 馬歯(59P区) 3~5 銭貨(1:1)

2 玉縁付丸瓦

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集

土 田 遺 跡

1987年3月31日

編 集 財団法人
発 行 愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 西濃印刷株式会社